

# 戦後台湾英語教育の実証的研究

—高校英語教科書にみる「文学性」と「政治・社会性」—

2022 年 3 月

帝京大学大学院      外国語研究科

平 井 清 子



## 目 次

序章 問題の所在と研究方法.....	1
第 1 節 研究の目的.....	1
第 2 節 研究の背景と先行研究.....	1
1. 台湾英語教育の社会的位置づけと現状.....	1
2. 戦後台湾の教育史およびその研究.....	3
3. 戦後台湾の英語教育研究.....	7
4. 英語教科書研究.....	8
第 3 節 研究の方法.....	9
1. 研究の枠組みとアプローチ.....	9
2. 研究方法.....	10
第 4 節 本論文の構成.....	15
 第 1 章 戦後台湾英語教育史の概要.....	19
第 1 節 多言語社会としての台湾の歴史と現状.....	19
第 2 節 英語政策の変遷.....	20
1. 英語教育政策の概観—4 期に分けて.....	21
2. 帰台生の台湾社会への貢献.....	26
第 3 節 英語教科書と教授法.....	28
1. 1948 年～1980 年代.....	28
2. 1990 年代以降.....	30
第 4 節 大学入試と英語問題.....	31
第 5 節 ラジオ・テレビによる英語教育.....	33
第 6 節 第 3 期目以降の英語教育および政策についての評価と課題.....	34
第 7 節 台湾英語教育史—その特色.....	35
 第 2 章 高校英語「課程標準」「暫行綱要」「課程綱要」の変遷.....	38
第 1 節 1948 年（民国 37 年）「修訂高級中學英語課程標準」.....	38
第 2 節 1962 年（民国 51 年）「高級中學英文課程標準」.....	40
第 3 節 1971 年（民国 60 年）「高級中學外國文（英文）課程標準」.....	43
第 4 節 1983 年（民国 72 年）「高級中學外國文（英文）課程標準」.....	46
第 5 節 1995 年（民国 84 年）「高級中學英文課程標準」.....	50
第 6 節 2005 年（民国 94 年）「普通高級中學必修科目「英文」課程（暫行）綱要」.....	55
第 7 節 2008 年（民国 97 年）「普通高級中學必修科目「英文」課程綱要」.....	58

<b>第 3 章 高校英語教科書の題材内容調査</b> .....	<b>68</b>
<b>第 1 節 研究方法と背景</b> .....	<b>68</b>
1. 調査方法.....	68
2. 教科書審定制.....	68
<b>第 2 節 1948 年（民国 37 年）「修訂高級中學英語課程標準」準拠版教科書</b> .....	<b>69</b>
1. 調査教科書と調査対象課数.....	69
2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）.....	69
<b>第 3 節 1962 年（民国 51 年）「高級中學英文課程標準」準拠版教科書</b> .....	<b>73</b>
1. 調査対象教科書と対象課数.....	73
2. 教科書分析の結果と考察.....	74
3. 1962 年準拠版世界書局と正中書局の比較.....	78
<b>第 4 節 1971 年（民国 60 年）「高級中學外國文（英文）課程標準」準拠版教科書</b> .....	<b>79</b>
1. 調査教科書と調査対象課数.....	79
2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）.....	80
3. その他の教科書題材内容調査（正中書局）の結果.....	84
<b>第 5 節 1983 年（民国 72 年）「高級中學外國文（英文）課程標準」準拠版教科書</b> .....	<b>85</b>
1. 調査教科書と調査対象課数.....	85
2. 教科書分析の結果と考察（計量的分析と質的分析）.....	86
<b>第 6 節 1995 年（民国 84 年）「高級中學英文課程標準」準拠版教科書</b> .....	<b>89</b>
1. 調査教科書と対象課数.....	89
2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）.....	91
3. 1995 年準拠版教科書：考察とその特徴.....	95
<b>第 7 節 2005 年（民国 94 年）「普通高級中學必修科目「英文」課程（暫行）綱要」準拠版教科書</b> .....	<b>96</b>
1. 調査教科書と対象課数.....	96
2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）.....	98
<b>第 8 節 2008 年（民国 97 年）「普通高級中學必修科目「英文」課程綱要」準拠版教科書</b> 99	
1. 調査教科書と対象課数.....	99
2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）.....	101
3. 2008 年準拠版教科書：考察とその特徴.....	103
4. 1995 年「課程標準」と 2008 年「課程綱要」準拠版教科書との比較.....	104

## 第4章 英千里編『英氏高中英語』教科書研究—「文学性」と「政治・社会性」—109

第1節 初期における教科書とその背景.....	109
第2節 研究方法.....	110
1. 英千里編 1962 年（民国 51 年）「課程標準」準拠版の対象教科書と調査課数.....	110
2. 英千里の教科書編纂とその背景.....	111
第3節 教科書分析の結果と考察.....	111
1. 計量的分析.....	111
2. 各課の質的分析.....	112
第4節 英千里人物像と『英氏高中英語』.....	120
1. その略歴.....	120
2. 英千里の世界観と人物像.....	120
第5節 『英氏高中英語』と編纂の基本方針.....	127
第6節 戦後台湾の英語教育者たち.....	128
第7節 『英氏高中英語』と英千里が戦後台湾英語教育に与える影響.....	131

## 第5章 高校英語教科書の分析と考察

### —「文学教材重視」の観点から— .....133

第1節 「文学」の特徴をとらえて .....	133
1. 英語教育における「文学」の扱い.....	134
2. 1948 年～2008 年の「課程標準」および「課程綱要」 .....	134
3. 英語教科書における題材内容の特徴.....	136
4. 台湾の教科書で取り扱われる文学教材に影響する要因分析.....	142
5. 台湾の高校英語教科書の題材内容「文学」に影響する要因.....	148
第2節 台湾の英語教科書で取り扱われる文学教材が培う学力	
—1995 年「課程標準」、2008 年「課程綱要」準拠版教科書研究から—.....	150
1. 1995 年「課程標準」および 2008 年「課程綱要」:	
「論理的思考・判断力および創造力」と「4 技能統合」 .....	150
2. 研究方法.....	151
3. 文学教材が培う学力.....	153
4. 「文学教材」が培う学力とその指導法.....	165

## 第6章 高校英語教科書の分析と考察

—「社会・政治的題材重視」の観点から—	170
第1節 戒厳令下の英語教科書における政治的影響の考察	
—「課程標準」(1971年) 準拠版英語教科書の題材内容研究から—	170
1. 戒厳令下の英語教育とその背景	171
2. 1971年 「課程標準」	171
3. 1971年「課程標準」 準拠版教科書: 調査対象教科書と調査課数	171
4. 英語教科書2シリーズの題材内容の質的特色	173
5. 1971年「課程標準」 準拠版教科書に見られる二つの特徴	178
第2節 戒厳令解除後の教科書題材内容の変化	180
1. 研究の背景	181
2. 本研究の目的と方法	182
3. 「中国」化, 「本土化」「民主化」の観点における「課程標準」と「課程綱要」	183
4. 教科書の「編纂大意」記載の変化	185
5. 1995年「課程標準」, 2008年「課程綱要」 準拠版教科書の題材内容調査	188
第3節 台湾の英語教科書における指導法と培う学力—社会的題材内容を例に上げて	194
1. 思考力を育成する「発問」	195
2. 研究の方法, および分析ツール	196
3. 台湾の高校英語教科書のリーディング活動の分析	197
4. 結果と考察	199
5. 台湾と日本の検定教科書の発問—タスクの特徴と日本の検定教科書への提案	208
終章: 台湾の英語教科書が示唆するもの—「文学性」と「政治・社会性」—	212
第1節 英語教科書における題材内容と指導法が意味するもの	212
第2節 二つの柱の所在と英千里	215
第3節 台湾の英語教科書から日本の高等学校英語教科書への示唆	216
第4節 今後の課題	217
参考文献	221

## 参考資料

参考資料 1: アジア 4 か国の TOEFL スコアの推移 (2007-2019) .....	237
参考資料 2: 日本十進分類法 (NDC) 第 3 次分類まで.....	237
参考資料 3-1: 1948 年 (民国 37 年) 版 「課程標準」の「目的」と「教材の概要」 .....	239
参考資料 3-2: 1962 年 (民国 51 年) 版 「課程標準」の「目的」と「教材の概要」 .....	240
参考資料 3-3: 1971 年 (民国 60 年) 版 「課程標準」の「目的」と「教材の概要」 .....	241
参考資料 3-4: 1983 年 (民国 72 年) 版 「課程標準」の「目的」と「教材の概要」 .....	242
参考資料 3-5: 1995 年 (民国 84 年) 版 「課程標準」の「目的」と「教材の概要」 .....	243
参考資料 3-6: 2005 年 (民国 94 年) 版 「暫行綱要」の「目的」と「教材の概要」 .....	245
参考資料 3-7: 2008 年 (民国 97 年) 版 「課程綱要」の「目的」と「教材の概要」 .....	247
参考資料 4-1: 1948 年 (民国 37 年) 版 教科書の写真 (復興書局) .....	250
参考資料 4-2: 1962 年 (民国 51 年) 版 教科書の写真 (世界書局, 正中書局) .....	250
参考資料 4-3: 1971 年 (民国 60 年) 版 教科書の写真 (遠東図書, 正中書局, 東華書局, 環球書局) .....	251
参考資料 4-4: 1983 年 (民国 72 年) 版 教科書の写真 (国立編譯館) .....	252
参考資料 4-5: 1995 年 (民国 84 年) 版 教科書の写真 (遠東図書, 三民書局, 龍騰文化) .....	252
参考資料 4-6: 2005 年 (民国 94 年) 版 教科書の写真 (遠東図書) .....	253
参考資料 4-7: 2008 年 (民国 97 年) 版 教科書の写真 (遠東図書, 三民書局, 龍騰文化) .....	254
参考資料 5: 1962 年 (民国 51 年) 「課程標準」準拠版教科書.....	255
参考資料 5-1: 『英氏高中英語』 Book 1 1963 年 (初版) (表紙と奥付け) 写真.....	255
参考資料 5-2: 『英氏高中英語』より Baggy Pants の本文①②.....	256
参考資料 5-3: 『英氏高中英語』より A Historical Kidnaping の本文①②.....	257
参考資料 5-4: 『英氏高中英語』と大学書林教科書の共通 (引用・転用) 箇所の写真.....	258
参考資料 5-4-1: 1962 年準拠版 英氏高中英語 Book 1 (1963).....	258
参考資料 5-4-2: 大学書林 <i>High School English Readers</i> Book1(1956) “Our Vision of Things” .....	258
参考資料 5-4-3: 1962 年準拠版 英氏高中英語 Book 1 (1963) L8.....	259
参考資料 5-4-4: ①② 大学書林 <i>New English for High Schools</i> Book 1 (1953).....	259

参考資料 6-1: <i>King's English</i> (三省堂) 写真.....	260
参考資料 6-2: 台湾教科書タスクの写真.....	260
参考資料 6-3: 台湾教科書タスクの写真.....	261
参考資料 6-4: 台湾教科書タスクの写真.....	261
参考資料 6-5: 台湾教科書タスクの写真.....	262
参考資料 6-6: 台湾教科書タスクの写真.....	262
参考資料 6-7: 台湾教科書タスクの写真.....	263
参考資料 7-1: 1948 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」(復興書局) .....	264
参考資料 7-2: 1962 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」 (世界書局/英千里編・正中書局/趙蓮).....	264
参考資料 7-3: 1971 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」(遠東図書・正中書局) .....	267
参考資料 7-4: 1983 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」(国立編譯館主編).....	268
参考資料 7-5: 1995 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」(遠東図書) .....	269
参考資料 7-6: 2005 年「課程綱要」準拠版教科書「編纂大意」(遠東図書) .....	272
参考資料 7-7: 2008 年「課程綱要」準拠版教科書「編纂大意」(三民書局) .....	275
参考資料 8: 実態調査報告書.....	280
参考資料 8-1: 2014 年台北市実態調査(学校訪問と授業観察) .....	280
参考資料 8-2: 2004 年台北市実態調査(学校訪問と授業観察) .....	284
参考資料 8-3: 2014 年教員への質問紙調査および聞き取り調査.....	284
参考資料 8-4: 2004 年教員への質問紙調査および聞き取り調査.....	287
参考資料 8-5: 教科書編纂に携わった教育者との質問紙調査および 聞き取り調査.....	289



## 序章 問題の所在と研究方法

### 第1節 研究の目的

台湾<sup>1)</sup>は日本と同じ英語を外国語として学ぶ（EFL）環境である。戦後、高い経済成長と国際化を成し遂げ、国際基準の英語運用能力試験では常に日本を上回るほどである（参考資料1参照）。その英語教育は、2008年改訂の高校「課程綱要（日本の学習指導要領に相当）」の「英語」に「論理的思考・分析・判断力の育成」が盛り込まれ、早くもこれらの課題に取り組むばかりでなく、生徒の自然・文化への感性や情緒を育て、同時に公民としての意識を育てる内容の豊かさを有している。

本研究の目的は、教科書研究を中心とした歴史的視座による総合的な研究を行い、目覚ましい経済成長と国際化を達成した戦後台湾の英語教育がいかに形成され変容してきたのか、そこにはどのような要因があるのかを実証的に明らかにすることである。教育の基盤となるのは教科書であるが、同時にその教科書の教材をいかに使うかが重要なことは言うまでもない。本研究は、戦後から70年間の教科書研究を、題材内容選択を中心に進め、優れた台湾の英語教育の核心的部分を探るものである。台湾は、中国、アメリカ、そして日本との間の複雑な立ち位置の中で、何を生徒に教え、生きる力を養成しようとしてきたのかを教科書の題材内容に加えて、さらに指導法を分析し明らかにする。台湾の英語教材は小説や詩を多く扱い、生徒の人間の豊かさを育て、かつ、自らの社会への関心と責任を育むように政治・社会的題材を取り入れていることは注目できる点である。これはどのような変遷の中で培われてきたのであろうか。

戦後台湾の教育に関する先行研究においては、国民教育課程の「公民と道徳」といった社会、国語教育や教科書における研究はあるが、英語教育や教科書については現在の英語教育を実践面で研究したもの（教員研修、小学校英語教育、入試制度など）に多くが限られる現状である。英語教科書に関しての長期にわたる学際的研究はほとんどなされていない。これらを明確にすることは、今後の台湾地域研究を進め、日本の英語教科書への示唆を得る上で的一步となりうる。

### 第2節 研究の背景と先行研究

#### 1. 台湾英語教育の社会的位置づけと現状

台湾における英語の社会的な位置は非常に高い。国際的に孤立した立場を、教育を充実させることで国民の生活水準を高め、経済成長を促すという政府の姿勢から、政府の教育にかかる予算規模は常に大きい。1998年の「教育改革行動法案」に代表されるように、教育に

多大な予算を組み込み組織的に教育改革が行われている（相川，2004，p.99）。台湾は 1980 年代後半から，経済の自由化と国際化政策を積極的に進めてきた。台湾経済が貿易に中心をおくことから，英語教育はあらゆる分野で重要視されている。また，2001 年に台湾が WTO（世界貿易機関）に加盟を決定したことを機に，政府は翌年「英語生活環境建設批准計画」を打ち立て，国際的に活躍できる人材の育成を目的とし，英語教育推進に積極的に取り組んだ。

台湾では 1960 年代後半から急速に成長した輸出志向工業化による経済発展と，それに伴う国際化時代を迎えた（伊藤，1993）。教育の充実には常に配慮がなされており，現在では大学進学率は非常に高く，世界でも有数の高学歴社会となっている。台湾は強い学歴社会で，大学入試の受験と合格は人生の大事とされ，学習者の英語学習の最大の動機は，入学試験にあると言われている。1954 年に開始された「大学連招考試（大学連合試験）」，いわゆる統一大学入学試験（Joint College Entrance Examination：JCEE）が，2001 年 7 月の実施まで続けられてきた。これはいわゆる日本のセンター試験にあたるものであるが，この試験を志願者は国立，私立の別なく共通して受ける。1980 年代の経済成長と国際化の影響を受けて，統一大学入学試験の英語問題はすでに 1981 年に大幅な改革があり，従来の選択式問題のうち 30%ないし 40%を英作文にし，長文のトピックも実用的な内容，もしくは科学技術に関する題材を取り入れる傾向へと変化した。この試験の改革と 1983 年に改訂した「課程標準」のガイドラインに沿って，高校の教科書の内容が変化した。このように，大学入学試験の改革に高校までの教育が左右される図式となる。

かつての入試制度では，日本のように私立の各大学が独自の試験を課すことはなく，また国立でも，日本でいう二次試験のような独自の試験は実施されなかった。従って，すべての合否は年に一回のこの統一大学入学試験の結果のみで判定されることとなり，この試験の重要性はきわめて大きかった。しかし同時に，これが熾烈な受験戦争の要因となり，歪んだ社会構造をつくる要因ともなっていた（中川 2009）。さらに大学希望者の増大に伴って大学も急激に増設され，大学は多元化，自由化，国際化の流れの中で，個性や特色をそれぞれ發揮していく時代となった（河添 2005）。従って，2001 学年度（2001 年 8 月～2002 年 7 月）からは多元的な入試制度が導入されることとなったのである。

この入試制度では，学科試験も何回か実施され複雑となっているが，大きく 2 月と 7 月に行われ，その種類も基礎科目試験と専門科目試験からなっている。2004 年には，大学入試作成委員会が改革され，委員会の名称も College Entrance Examination Center (CEEC) と改名された。実施から 10 年を過ぎた頃から，ようやく 2 月と 7 月の受験者のバランスもとれ，その成果が見られるようになってきている。英語についてはリスニング試験の導入が 2015 年に決定され，実用英語の習得とコミュニケーション力の養成は 1980 年代からの「課程標準」における重要事項であった。これに 2008 年「課程綱要」からは，論理的思考，判断力，創造力の養成が他の科目同様に加えられ，英語は新しい知識を得る道具として，また，英語での自己表現に重きが置かれるようになるのである。英語教育は，日本，韓国，中国

などと同様に「外国語教育」である。また、国際標準テストの一つである TOEFL では、求められる英語力のすべてを測れるわけでないにしろ、その得点では台湾は常に日本を凌いでおり、近年、台湾のスコアが中国を抜き韓国に迫いついたのも事実である<sup>2)</sup>。

台湾では 1987 年の戒厳令解除後から、「本土化（台湾化）」<sup>3)</sup> の政策が始まり、1990 年代半ばに本格化した「本土化（台湾化）」教育が開始された。これは、「いわば教育されるナショナル・アイデンティティの再定義というべき動きであり、民主化・自由化後の教育改革の主要なベクトルをなしている」（山崎, 2009, p.176）というように、「本土化（台湾化）」が言語教育や外国語教育に少なからぬ影響を与えていることは明らかである。また、1990 年代後半よりグローバル化の波がおこり、台湾ではこの頃から、小中一貫教育を念頭に小中高の順に「課程標準」の改訂が行われた。

台湾の英語教育に関して見逃せないもう一つの特徴は早期英語教育についてである。台湾では、全国民の英語力の向上を国家施策の主軸に組み込んだほか、英語教育の低年齢化を積極的に進めてきた。早期英語教育に関しては、大多数の親は英語を学ぶことが子供の将来に大きなプラスの影響を及ぼすと捉え、「英語学習は早ければ早いほどいい」と考える傾向にある。そのため、台湾全土の多くの幼稚園でも英語を教え始めるようになり、中には幼児期から子供にすべて英語で行う教育を受けさせるものも出てきた。これに対し、幼児への早すぎる英語学習は、国や文化的なアイデンティティの問題を引き起こす懸念があるとの警鐘も出されており、その開始時期を含め、英語学習は既に大きな社会問題の一つとなっている。

小学校では、2005 年 9 月から正式に国民小学校 3 年生から英語教育が必修化された。日本で小学校 5, 6 年生に「外国語活動」が必修化されたのは、2011 年からである。台湾では小学校での英語学習の必修化に先立って、国民小学校、中学校の「課程綱要」の改訂（「國民中小學九年一貫課程綱要」）が行われた。これを受け、高級中学の「課程綱要」も 2003 年にはその草案が発表され、2006 年には暫定版である「暫行綱要」が発表された。その後、数年間の試行期間を経て、2008 年には正式の「課程綱要」が公布された。しかしながら、2000 年以降の数々の英語教育改革に対する評価においては、まだまだ十分でないという判断であった。理由は、高校教育における二極化問題、都市部と地方の教育格差、そして早期英語教育問題などが指摘されている。これらの検証を踏まえ、新たに 2018 年に改訂された「十二年國民教育課程綱要」における英語教育に関しては、小中高の連携した英語教育が行われ、「課程綱要」も小中高の内容が同ページに記載されている。このように、現在もなお、積極的に英語教育改善に取り組んでいる現状である。

## 2. 戦後台湾の教育史およびその研究

戦後台湾の教育における国家観と国民観の変化と不変について詳細に論じた一連の研究（山崎, 2001 ; 2004 ; 2009 ; 2011 ; 2013 ; 2016）がある。加えて戒厳令解除後の教育については篠原 (2017) の研究をはじめ、山ノ内 (2008), 小川佳万 (2014), そして、何 (2019)

など「課程標準」や教科書の研究がなされている。ここでは、それらの先行研究を中心に、戦後台湾の教育史を概観する。

日本の無条件降伏により、台湾は中華民国の一つの省である台湾省として「光復」されるべき土地となった。台湾の各級学校は、「台湾接管計画要綱」に基づき台湾省行政長官公署により接收・管理されることとなった（山崎，2001）。制度面では、日本統治時代の教育法令を廃止して、中国大陆で公布された「中学法」に依拠して3・3制（初級中学3年，高級中学3年）を採用するなどした。内容面では、国民党政権によるアイデンティティの同化（「中国意識」の注入）の主要な経路の役割りを教育が担うことになった（若林，2001，pp.109-112）。これによって日本統治時代の「皇民化教育」は一掃され，教える科目が一新された。新たに科目化されたのが「三民主義」で，「国語」は日本語から標準中国語になり，約半世紀にわたり切り離されていた中国の地理，歴史が教えられることとなった。

1947年「中華民国憲法」が公布され，「人民が国民教育を受ける権利と義務を有する」ことが明記され，これにより，6歳から12歳までの学童がすべて基本教育を受けることが義務付けられ，台湾において義務教育が成立することとなった。当初の学校教育の受け皿の問題は，戦後の混乱期であったため就学率にさほどの変化はなかったが，1950年代初頭以降は急速に児童数と進学率が高まってきた。これが，国民学校（初等教育）を終えた生徒が初級中学および初級職業学校への進学希望者と受け入れ人数との大きな隔たりを生み，過度な学力偏重教育を生み出した。具体的には「体育」や「公民」の授業が「国語」，「数学」の授業に振り替えられ，放課後も3～4時間に及ぶ補習が行われた。このような「悪性補習」は児童の健康をむしろ，自主的な思考の発展を著しく損なうとまで案じられることとなる（山崎，2001）。この潮流は英語教育にも無論影響を与えている。

さらに，中国大陆の文化大革命（1966-1976）に対抗して中華文化を復興する動きが国民党政権下に現れ始めた。経済面からの要求，そして，国力を増強するには教育水準を上げるという国際的影響からも，これまでの義務教育期間の年限延長をし，国民中学までの3年間を義務教育化する「九年国民教育政策」の実施へと進んでいくのである。山崎（2001，2009）は，この1968年の「九年国民教育政策」が，戦後台湾の教育史にとって極めて大きな意味を持つものとして捉え，それに関連した先行研究からその重要性を論じている。この「九年国民教育政策」により，「英語」は必須科目として国民中学1年生（日本の中学1年生に相当）から3年間すべての国民が学ぶこととなり，台湾の英語教育に大きな意味を成すものでもあるので，その政策のコアとなった，国民党政権の政治的主張を内面化させるものとしての「党化政策」を論ずる。

まず，戦後台湾教育の主要な研究の一つ（林玉体，1987）から，戦後台湾の教育は，反共を基本的国策とする既定方針のものとで党化教育を前提としていたことが指摘されている。さらに，林玉体（1987，2003）と陳伯璋（1988）をはじめとする多くの研究が，戦後台湾教育の発展過程においての「量」と「質」の不均衡を認識していることを挙げ，これが戦後台湾の教育における大きな特徴の一つであると示唆している。教育の「量」という観点から

は国民への教育の普及が目覚ましく進んだことを挙げる一方、教育の「質」の点では解決すべき問題が山積状態にあると述べている。その一つの大きな問題は、行政の中央集権性と制度の一元性、そして、国家/党イデオロギー色の強さであることが指摘されている。山崎（2009）は、台湾の公民教育の内容を他国との比較の中で論じた張秀雄（1998）の研究から、台湾の公民教育に影響を与え、その内容を形成してきたものとして「四つの要素」、すなわち、伝統的中華思想、三民主義思想、反共教育、そして民主的な憲政の推進と発展を挙げている。伝統的中華思想は、徳行と「天下は公のもの」という政治思想を強調する儒教思想を指す。三民主義思想は、中華民国の「国父」である孫文の三民主義のイデオロギーのことで、公教育の中で一貫して重要な位置を占めてきた。三民主義には西洋のデモクラシーの理念に近い要素も含まれていたが、孫文の想いとは裏腹に中華民国建国以来、複雑な政治状況の中でこの理念が現実化することはなかった。反共教育は、台湾海峡を隔てる中国共産党と対峙する形で公教育のなかで行われてきたものである。最後の要素である民主的な憲政の推進と発展とは、1987年に戒厳令が解除された後の民主政治の発展によって、民主・法治の素養とグローバル的思考の育成が公民教育の主要な役割となってきたことを指す。これら「四つの要素」が英語教科書の中ではどのように反映されているかは、極めて重要な課題である。

一方、1968年の「九年国民教育政策」の調査（山崎, 2001）から、この政策が教育の「量」と「質」の二面性を決定的にしたものであり、1968年の教育改革は、国家による教育の一元化を促進し、教育のイデオロギー化を促すものであったことが指摘されている。続いて、山崎（2009）は1968年制定の「國民中学暫行課程標準」から1985年の「國民中学課程標準」までの四つの「課程標準」とそれらに準拠する30冊の『公民と道徳』の教科書の綿密な調査を行い、その結果、「愛国」と「[中華] 民族」という表裏をなす二つの概念が「公民と道徳」を含む各教科（「国文」、「歴史」、「地理」などで「英文」は入っていない）と、カリキュラム全体を通して、時代を超えて強調され続けてきたことを示している。「民族」は中華民族を意味するものであり、権威主義体制下における「愛国」の教育とは生徒を「中国人」として社会化する過程であったと述べている（山崎, 2009）。「量」と「質」の議論が英語教科書の分析において、重要な検討事項の一つであることは言うまでもない。

以上により、「九年国民教育政策」によって、台湾は中等教育の大衆化と国民の知的水準の総体的向上を成し遂げた一方、中立性と自由を無視した教育を行うことにより、教育の本義である児童の自主的な思考能力の育成をおろそかにしてしまったことが指摘されている。そして、当然のことながらこれらに対して国民の中にあつた不満は、1990年代の戒厳令解除後に、大きなうねりとなって「多元化」、「分権化」、「脱イデオロギー化」への道へ進ませるエネルギーとなるのである。

1990年代の教育改革の中でも注目に値するのは1994年4月に5万人を超える市民が教育改革を求めて台北市街に集まったことである。ここでは、教育問題においては四大アピール（1. 少人数制クラスと学校の小規模化 2. 高校・大学の（地域的に）偏らない設置

3. 教育の「現代化」の促進 4. 教育基本法の制定) がなされた。この中でも「教育基本法」の制定は、教育の民主化の「法化」を意味するものとして最も重要なものであった(篠原, 2017)。そして、ついに 1999 年 6 月に「教育基本法」が制定されるにいたる。これを機に台湾の教育を巡る環境は急速にこれまでの「中華民族・中華国家」, 「三民主義」, 「反共」といったことから, 「自由化」, 「民主化」の流れをたどる(赤松・若松, 2016)。1994 年に改訂された「国民中学課程標準」を公布し, 続いて「高級中学課程標準」が 1995 年に公布された。これらの改訂でとりわけ注目できるのは, 「民主化」が改訂の方針とされていたことである(何, 2019)。この時点において英語教育は, 国際化, グローバル化の波により, 政府でも最大の重点項目の一つとなっており, 英語教科書に具体的にどのように反映しているのかは注目すべき点である。

この中で最も大きな変化は「台湾は中国の一部である」という政治的主張の後退であった(山崎, 2009)。そして代わりに, 台湾の歴史, 地理, 言語, 文化(先住民)がナショナルカリキュラムに組み入れられていき, いわゆる教育の「本土化(台湾化)」がなされていく。すなわち, 戒厳令解除後の「課程標準」と下の「課程標準」との最大の相違点は, 前者が, 民主化原則, 郷土課程, 台湾の歴史, 地理, 社会を学ぶ「認識台湾」が取り上げられ, 「分権化」, 「本土化(台湾化)」が顕著であることといわれる。

上記の教育改革の「本丸」といえるものが「国民中小学九年一貫課程綱要」の制定である。これまでの「課程標準」は国民小学校と国民中学校が別々に分かれていたが, 新たな「国民中小学九年一貫課程綱要」はこの二つが統合された。まずは暫定綱要として 2001 年に試行実施され, 2003 年より台湾全国で完全実施が行われている。これまでの「課程標準」もナショナルカリキュラムとして法的拘束力を有していた点(王, 石崎, 2003)は日本の学習指導要領と同じである。そして 2008 年に改訂される高級中学(日本の高等学校に相当)の「課程綱要」に繋がるわけであるが, 「課程標準」がカリキュラムスタンダードであったのに対し, 「課程綱要」はカリキュラムガイドラインとなり, 中央政府の縛りは弱くなったものの, 依然として民間出版社が審定(検定)教科書を編纂する主要な拠りどころとなっている(何, 2019)。

「国民小中九年一貫課程綱要」の理念と主な内容は以下となる。まず多元的で自由かつ民主的な社会の価値観を共有する「教育目標」となっており, 「健全な人格」, 「民主的な素質」, 「法治の観念」, 「人文修養, 精神と思考能力」, 「判断力と創造能力」を育成することが挙げられている(山ノ口, 2008)。これらは高級中学の「課程綱要」でも反映されている。台湾教育部は国民が備える基本能力育成のために「個人の発展」, 「社会文化」, 「自然環境」の 3 つの方向性を提示している。「国民小中九年一貫課程綱要」では教科から学習領域へと変化し, 七大学習領域から成り立つとした。「言語」, 「健康と体育」, 「数学」, 「社会」, 「芸術と人文」, 「自然と生活科技」, 「総合活動」学習領域である。

言語教育を見ると, 2001 年小学校での英語教育開始と同時に台湾語, 地域の先住民語の教育が開始される。このように「国語」, 「社会」の教科内容と教科書は変化していく中

で、英語教育ではどうであろうか。この観点からも研究を進めたい。

海外でも台湾の教育に関する研究はあり、Richard W. Wilson (1970) を筆頭に、Appleton (1997)、そして S. Harrell & Huang, Chün-chieh (1994) などがある。これらは、教育による政治的・社会化の影響や、飛躍的な経済発展を遂げた戦後台湾の教育において、その歴史的経緯を考察したもの、儒教など伝統文化の側面を考慮したものなどがある。各研究の視点は様々であるが、どれも台湾の教育システムやカリキュラムに焦点を充て、紐解き、分析するものである。

### 3. 戦後台湾の英語教育研究

戦前の台湾においては、日本統治下の 1895 年～1945 年には、日本の学校制に基づき英語教育が中等学校以上で行われていた。しかし、本格的な台湾の英語教育政策の始まりは事実上、第二次世界大戦後の遷移後であるとの見方が大きい（李，2012）。台湾の英語教育史については、戴浩一（2011）の「我國外語政策之檢討與展望・政策建議書」と李振清（2012）の「台灣英語教育的演進與前瞻思維」がある。戴浩一（2011）の方は、その名称が語る通り、戦後台湾の英語政策について、4 期に分けての報告になる。李振清のものは、戦後からの台湾の英語教育史の観点から総合的に論じたものである。戦中、それ以前からの他国との繋がりに始まり、米国やヨーロッパ諸国との関係、貢献した英語教育者と使用された英語教科書や指導法の流れ、そして、ラジオ・テレビの放送教育におよび、英語教育が台湾社会の中でどのように発展してきたかを分析している。

英語教育に関わるものとしては、代表的なものに、張武昌主編（2009）『臺灣英語教育政策之檢視』がある。これは、1990 年代終わりから開始された「挑戦 2008 國家發展重點計畫」（2002-2007; 2008）に代表される様々な英語教育改革を整理し、それに伴う英語教育の変化を初等教育から中等教育、そして高等教育に至るまでを段階的に調査分析し、現状と問題点を論じたものである。さらに同様のものに、Chen, Su-chiao (2003) の *The Spread of English in Taiwan* がある。こちらは言語学的観点から、指導法や授業分析を通して台湾の英語教育の現状と問題点を論じている。その他、游毓玲（2008）の「英語教育政策對於後期中等教育英語教學影響之調查研究——『95 暫綱』對於高級與高職英語教學之影響」は、様々な政策が高級中学の英語教育にもたらした影響やその実態を教員への調査を基に行ったものである。林照真（2002; 2003）は、「学英语熱潮中的全方位思索（上）」と「全球化浪潮下台灣英語教學之批判性解讀」で、グローバル化に伴う英語教育改革やその実施、それに伴う肯定的・否定的影響を論じており、その分析には社会学的側面も加わり興味深いものがある。

早期英語教育に早くから乗り出した台湾では、小学校英語についてのカリキュラムや授業内容について（施他，1999；施他，2000）の研究も進んでいる。また、小学校への英語導入に伴う教員養成についての研究が進んでおり（Shih, 2001）、それについては日本でも紹介されている。

教科書研究については、スキルベースのものが多く、題材内容にフォーカスした研究では、「文学教材」についてのものとして、Chen Hong-Wen (2003) がある。文学教材を現場の教員がどのように使用しているかにまでおよぶ興味深いものであった。

日本における台湾英語教育に関する研究も近年多く行われている。英語教育のシステムや概要など (相川・林, 2004)、中等教育について (相川, 2005) や早期英語教育 (河添, 2005)、大学入試システム関係 (日暮・石井, 2015)、そして教員養成についてもの (相川, 2015) などが挙げられる。教科書研究については、日本・中国・台湾についての比較研究 (小川他, 2007) や、戦後台湾の英語教育の変遷とその特徴を教科書研究によって捕捉することを試みた一連の研究 (平井, 2017a ; 2017b ; 2019a ; 2019b ; 2019c ; 2021) がある。しかしながら、日本での台湾英語教育に関する研究、とりわけ教科書研究はこれからさらなる発展が期待される分野である。

#### 4. 英語教科書研究

教科書研究においては、言語材料の研究と並び重要視されているのが題材内容の研究である。文法、構文、語彙などの言語材料や言語スキルと同様に、教科書で扱う題材内容 (いかなる分野の、いかなる内容の題材を扱うか) もまた、生徒の文化的教養、国際理解、さらには人間形成の一環として影響することは言うまでもなく、どのような観点での英語教育を目指すかを測るための重要な要素となる。

数多くの英語教科書の編集を手掛けてきた峯村はその書 (中村・峯村, 2004) で「英語教科書の題材内容は、(中略) 言語について考える題材を中心に、日常生活や社会生活、異文化の問題や人間一般の問題、国際的な課題としての平和や人権の問題 (中略) など、多様な話題が子どもの生活や生活感覚と結びつけて教材化される。また、その題材内容は子供の思考力を伸ばし、思想形成に寄与するものでなければならない」と説く。青木 (1991) は、何を教育するか理念と切り離して考えることはできないと題材内容の重要性を指摘している。例えば、授業で扱う題材内容 (哲学、社会科学、自然科学など) の頻度を分類して調査すると、標準的な授業で扱われる題材内容が適切な割合かどうか、または特定の領域が教科書で強調されているかどうかを識別できる可能性がある。このような分析は、教科書やその教科書が準拠する学習指導要領、そして当該政府の意向の間接的な指標を意味する可能性がある。

学校教育において、教科書を実際に「どう」使用するかは非常に重要な研究課題ではあるとはいえ、教科書が教育を支える礎であることは誰もが認めるところであろう。英語教科書研究の歴史はそれほど長いものではないが、近時の先行研究においては多くの研究が進められている (Gray, 2010; Mikulas & Mikulasova 2016)。日本の英語教育における教科書研究では、日本の英語教科書史の概観を論じた『英語教育史資料・第3巻・英語教科書の変遷』 (大村・高梨・出来, 1980) を筆頭に、『明治・大正・昭和初期の英語教科書に関する研究』 (小篠・中村, 2001) など、題材内容も含めた研究がなされている。その他、多くの優れ



た研究（青木，1991；南，1993；笠谷，1994；小篠・馬本・松岡・本岡，2002；小篠・江利川，2004；江利川，2006b；2008）がある。

なかでも、英語教育を社会文化史的視座で深めた江利川の研究（2004；2006a；2006b；2008）では、社会経済的要因と教科書の題材内容との相関関係が示唆されている。具体的には、第二次世界大戦直後より、日本における世論調査で米国が最も賞賛する国となっていた頃の教科書の主要なトピックが、アメリカ文化であったことに始まり、1990年代に、日本企業がアフリカ・アジアに参入していくと、多文化主義と環境問題に関するトピックが取り扱われるなど、社会経済的要因の影響を受け、教科書のトピックが変化していくことが指摘されている。リサーチ・デザインや教科書分析方法など、本研究を進める上で学ぶべき点が多い研究である。

近隣アジア諸国においても研究は広まり、日本と韓国との比較の中で教科書を論じたもの（河合，2004）や日本・中国・韓国の教科書比較研究（Ogawa et al. 2005）、日本・中国・台湾の高校英語教科書比較研究（小川他，2007）などがあるが、同時期の教科書を扱っているものに限られ、台湾の英語教科書に関して、社会・経済的・政治的な学際的観点からの長期（戦後から現在）にわたる歴史的視座での研究は、筆者の知る限り見受けられない。

### 第3節 研究の方法

#### 1. 研究の枠組みとアプローチ

本研究は、英語教育研究における教科書分析を主体にしながら、比較・国際教育学（Comparative and International Education）の観点から、さらにその中の一分野である地域研究の研究として、一国（地域）をアウトサイダーの立場から掘り下げ、総体的に分析する。

教科書分析による実証的研究からその特徴を明確にし、さらにその要因分析を比較・国際教育学の観点から進めるものである。英語教科書分析は、英語教授法とその歴史的流れと具体的な応用を、理論を踏まえて考察し、第二言語習得理論と認知の枠組（研究の方法参照）を使用し、これを分析ツールとして研究を進める。

要因分析の基礎となる比較・国際教育学とは、「世界の国や文化圏における教育を、歴史的、現代的な視点から、比較し、また、それぞれの間のさまざまな関係や、国、文化圏を超える世界（地球）的な関係などを明らかにし、教育の本質的なありかたを究めようとする学問」（石附，2005 p.4）であり、対象となる複数のものの相互的関連を分析するものである。グローバル社会の中で、教育の国際化と情報の高度な流動化の中で、国境や国の壁を越えて世界の中で教育を考える必要性は増すであろう。この意味においてこの学問分野は今後ますます重要な領域となろう（石附，2005；馬越，2007）。

比較教育学の理論と方法については、各国の教育がなぜそのようなになっているのか、どの

ように形成されてきたかを歴史的に研究する「歴史的アプローチ」が主たるものとして重視されてきた。また、方法論として最初の理論となるのが、「要因分析法」と呼ばれるもので、諸外国の教育制度や教育の実際をその背景にある諸要因に着目し解明することで、それらをより深く理解する事を狙いとするものである。1980年代にかけて、他の学問分野の研究理論や方法を取り入れる動きが出始め、社会学的アプローチ、人類学的アプローチなども加わった。現在の研究では、「唯一の正当方法 (single orthodox method)」は存在しなくなり、いわば「折衷的 (eclectic)」(Paulston,1993)、すなわち、研究者は一つの理論・アプローチを使用するのではなく、適宜適切な方法論を使用しながら研究をしているようである(長島, 2014)。本研究もこれにならい、地域研究的視座から教科書研究を主軸にした実証的研究に、歴史的アプローチと要因分析を加え研究を進める。本研究では、教育、社会・文化的、政治・経済的な複数のレベルにまたがる議論を取り入れ、中国、アメリカ、日本との関係性や相互関係もその考察に含めて進めていく。

## 2. 研究方法

本研究が対象とする年代は 1945 年から 2017 年となる。2018 年には「十二年国民基本教育課程綱要」が改訂され、それに準じた新しい教科書も出版されていくこととなるが、これらは本研究の対象とはしなかった。

本研究では以下のような観点から分析を行った。

教育を統括する「課程標準(綱要)」の「英語」について、「目標」と「教材の概要」の項目が改訂版ごとにどのように記載されているかを確認する。教育省の方向性を知り、「課程標準(綱要)」の記載事項が準拠版教科書の題材内容選択にどのように反映しているかを明らかにするため、1945 年から 2017 年までに公布された 5 つの「課程標準」, 「課程暫行綱要」, そして「課程綱要」を調査した。

次に、各準拠版教科書が量的にどの分野の題材を重視しているのか、どの分野に時代により変化が認められるかなどを調査するため、各準拠版高級中学(日本の高等学校に相当)英語教科書の扱われている題材内容(全80巻1038課)<sup>4)</sup>を客観的分類法である日本十進分類法(NDC)に基づき第3区分まで分類した。さらに、質的にどのような内容を扱っているか、文章のスタンスやメッセージは何かなど、量的調査では拾いきれない部分を確認するため、「本文」の内容を調査し、その裏付けを得るため各教科書の冒頭部分の「編纂大意」を調査した。

台湾の教科書と日本・中国のとの教科書題材内容の類似点・相違点を明らかにし、同じ作品の使用や転用がなされていないかを調べ、その要因を把握するため、日本で1926年～2017年までに出版された高校英語教科書の題材内容を調査分析した。文学作品の相違点については戦前の中国で出版された英語教科書調査を行い、これを比較分析した。

最後に、教科書が教室内で実際にどう使われているかを確認するため、調査対象教科書を使用している台北市内の高校授業観察をし、担当教員には使用方法で留意する点や困難

な点、教科書に対する評価などを質問紙・聞き取り調査を行った。また、「課程標準」改訂、教科書編纂の仕組みを知るため、教科書編纂に関わった第一人者の方々へ聞き取り調査をした。

## (1) 計量的研究

### 1) 題材内容の量的研究: 題材内容の分類と日本十進分類法 (NDC)

本研究では、教科書の題材内容を分野別に分類する方法として日本十進分類法 (NDC) を用いた。この基準を用いた目的は、個人やグループで分類をする場合に発生しがちな、分類者の判断と分け方に個人差が出ることを最大限回避するためである。日本十進分類法 (以下、本稿では単に NDC と称する) は、図書館で扱うすべての蔵書の分類法として、現在、日本で広く利用されている。森 清が 1929 年に考案したのが原編で、新訂 6 版からは、日本図書館協会の分類委員会が増補改訂を行っている。現在 10 版まで改訂されている。NDC は日本の英語の教科書の題材内容における先行研究 (小川・高橋 2003) や、韓国、中国の教科書研究 (Ogawa et al.2005) でも用いられている。本調査では、1995 年版準拠の教科書には新訂 9 版 (2003) を、その他には新訂 10 版 (2015) を用いた。これは筆者が研究を進めた時期と一致する。なお、10 版には 9 版には収められていない新たな用語 (例えば情報や IT 関係環境など) が加わっている。以下、この NDC を説明し、分類の実際に関しての若干の点を示すと、次のとおりとなる。

NDC はその名称のとおり十進法で、まず、すべての知識を、哲学 (1)、歴史 (2)、社会科学 (3)、自然科学 (4)、技術 (5)、産業 (6)、芸術 (7)、言語 (8)、文学 (9) の 9 個の区分に分類する。そして、それらのどの区分にも属さないもの、例えば、図書館学、新聞、ジャーナリズムなどや、または全般的なもの、例えば、百科事典や一般論文集などは、0 を用いて区分する。つまり全体を総合し、10 個の第 1 次区分(類)に分類する方法である(図 1 参照)。さらにそれぞれの第 1 次区分に、再び 9 個の区分肢を用意し、それらに総記を加えた 10 個ずつの第 2 次区分(綱)が用意される。そして、さらにそれぞれの第 2 次区分の各分類項目について、同様に 10 個の第 3 次区分(要)を用い、さらに細分化していく。例えば、まず、第 1 次区分 (類) で「社会科学」に分類し、次に第 2 次区分 (綱) で〈政治〉に分類し、さらに第 3 次区分(要)で《政治学・政治思想》というように分類していくわけである。

詳細は、次に掲げる図 0-1 を参照していただきたい。このように、合計すると  $10 \times 10 \times 10 = 1000$  の区分ができる。この区分はさらに、第四次区分、第五次区分と必要に応じて展開することが可能であるが、本稿では 1000 区分 (第 3 次区分) までを利用し、分類した。

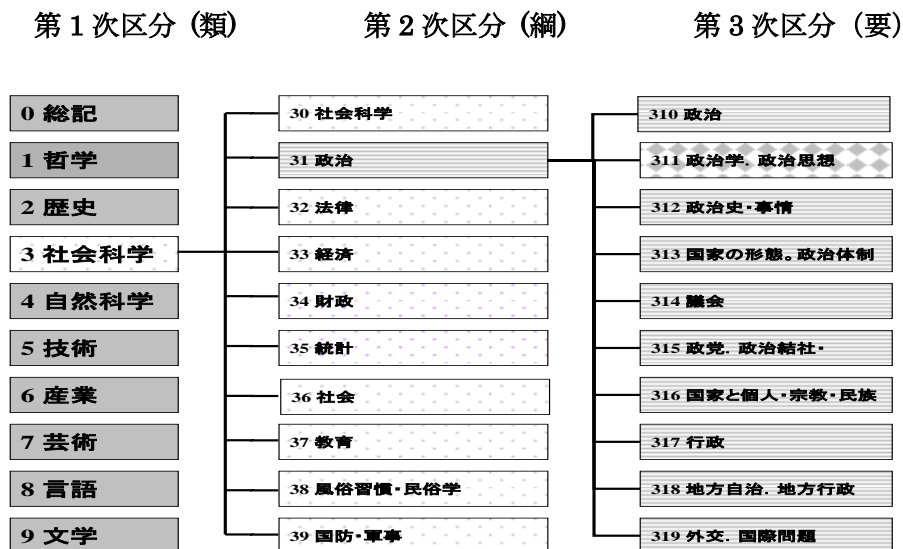


図 0-1 NDC 分類図

NDC の区分には特異な点もあり、例えば、〈伝記〉は「歴史」の中の第2次区分に分類されているのであるが、取り上げられる人物が哲学者、宗教家、芸術家、スポーツマン、文学者の場合は、その思想、作品と不可分の関係にあるとのことから、その主題の下に収めるという指示により<sup>5)</sup>、それぞれの分野に収められている。そしてさらに複雑なことに、それ以外の区分においては、内容が人物に焦点を当てているのか、それとも主題そのものに焦点を当てているのかによって分類は異なってくる。例えば、同じヘレン・ケラーを扱った章でも、ヘレン・ケラーの生い立ち、その人生でかかわった人や生き方が中心に描かれているものは「歴史」のなかの〈伝記〉に分類される。一方、ヘレン・ケラーの行った社会福祉活動を中心に描かれているものは「社会科学」に分類される。つまり、伝記という項目としてすべてをまとめることができないが、今回はすべて NDC の分類法に従った。

また、今回の調査では、取り扱った教科書の各章の本文 (Reading) の部分を調査の対象としており、練習問題やその他の部分で扱われる英文などは含めなかった。なお、一章の本文の内容は全て一つの区分 (類, 綱, 要) に区分され、本研究の場合、一章のなかで複数の区分が必要とされる場合はなかった。この区分の方法もまた、先行研究 (Ogawa et al. 2005; 小川他, 2007) に準ずるものである。

なお、本研究では、第1次区分 (類) については「 」, 第2次区分 (綱) については〈 〉, 第3次区分 (要) については《 》を表記として用いた。

分析の手順としては、まず、教科書別に各課の本文についてその題材内容を NDC で第1次区分、第2次区分、第3次区分に分け、表に整理した (表 0-1 参照)。国別など分析上のコメントがある場合は各課に書き入れた。

表 0-1 : 1962 年「課程標準」準拠版教科書（英千里編 *Book 5*）NDC 区分例

題 5 冊	民国57年 Schools タイトル	1968年 New Standard English Readers for Senior Middle	第1次区分	第2次区分	第3次区分	番号
1課	Of Studies		社会科学	教育	教育学	371
2課	A Sacred Mountain (I)		歴史	地理	アジア 中国 泰山	292
3課	A Sacred Mountain (II)		歴史	地理	アジア 中国 泰山	292
4課	A Psalm of Life		文学	英米文学	詩 アメリカ	931
5課	The Story of the Hung Lou Meng (I)		文学	中国	中国 長編 紅樓夢	920
6課	The Story of the Hung Lou Meng (II)		文学	中国	中国 長編 紅樓夢	920
7課	Falling in Love		哲学	心理学	恋愛	141
8課	The Nativity of Jesus Christ		哲学	宗教	キリスト教	190
9課	The Treasure of Robert Louis Stevenson(I)		文学	英米文学	短編 イギリス	933
10課	The Treasure of Robert Louis Stevenson(II)		文学	英米文学	短編 イギリス	933
11課	The Declaration of Independence(I)		歴史	アメリカ	独立戦争	253
12課	The Declaration of Independence(II)		歴史	アメリカ	独立戦争	253
13課	My Watch (I)		文学	英米文学	短編 アメリカ	933
14課	My Watch (II)		文学	英米文学	短編 アメリカ	933

## 2) 練習問題の分析：改訂版ブルームのタキソノミー

6章では「本文」以外の「発問」、「タスク」などの練習問題について、どのような内容、タイプの問がなされているかを分析するため、共通した分析ツールが必要となった。「発問」と「タスク」がどの認知レベルのものかを客観的に分析するために、学習活動の認知的負荷 (cognitive demand) を分類、評価する尺度として、改訂版ブルームのタキソノミー（以降、改訂版タキソノミーと記す）（Anderson & Krathwohl, 2001）を使用した。

これはブルーム（Bloom, Engelhart, Furst, Hill, & Krathwohl, 1956）のタキソノミーをアンダーソンらが改訂したものであり、Content and Language Integrated Learning (CLIL) や国際バカロレアなどのプログラムの理論的裏付けともなっている。この改訂版タキソノミーは、認知領域を「知識」“the Knowledge Dimension”と「認知的プロセス」“the Cognitive Dimension”という二つの軸からとらえている。「認知的プロセス」については、「記憶する(Remember)」、「理解する(Understand)」、「応用する(Apply)」、「分析する(Analyze)」、「評価する(Evaluate)」、「創造する(Create)」の6段階に分け、「認知度」の低いものから順に1から6までを設定し、これらを「6 カテゴリー：6 categories」と称している。

本研究では、「本文」の読解力ばかりではなく、タスクも調査の対象とし、思考力の関わりにより焦点を充てることから、この改訂版タキソノミーを使用することにした。詳細については6章で述べる。

## (2) 質的研究：分析ツール

題材内容については、対象教科書のすべての課の「本文」を読み、内容、スタンス、メッセージ、その他、対象の国・地域、人物、作家・作品などを調べ、シリーズ毎に表で整理した。これらを、時代別に計量的研究で明らかとなった分野別や国別などで比較検討した。

「本文」以外の「発問」、「タスク」などの練習問題については、各課の構成とともに、どのような内容、タイプの間がなされているかを分析するため、共通した分析ツールが必要となった。「発問」に関しては、近年、教科書のリーディング指導において深い読みを促す「発問」が着目されている（深澤，2010；田中・辻，2015）。そこで本稿 5 章では、Been (1975) の読解発問を事実発問、推論発問、評価発問の 3 つのタイプに分ける方法を用いた。詳細については 5 章で述べる。

## (3) 実態調査

教科書が実際に教室でどのように教えられているかは、教科書研究でも重要な側面である。授業観察と並行して、戦後台湾の英語教育を牽引し、教科書作成に携わり、教科書編纂や「課程綱要」作成に関わった教授陣、さらには現役の高等学校教員の方々への質問紙・聞き取り調査を行い、題材内容の選択に関わる要因を社会文化的・歴史的側面から探った。これは、量的な調査分析での限界を埋めるために必要な調査であると考ええる。

以下のように、実態調査（授業観察、質問紙・聞き取り調査）を行った。

授業観察：

各調査対象の教科書を使用している台北市周辺の高級中学を 2004 年と 2014 年の二回にわたり、5 校を訪問し、5 クラスの授業観察をした。

高級中学教員の方々への調査：

授業観察で授業を行った教員に使用教科書について、授業での工夫や問題点も含め、その評価などを質問紙、聞き取り調査で調査した。

国立台湾大学、国立台湾師範大学の教員への調査：

「課程標準（綱要）」と教科書との関連性、「課程標準」から「課程綱要」への変革の大きな軸は何か、など量的調査や文献資料調査での限界を埋めるために、台湾英語教育で「課程綱要」の作成、教科書編纂などの関係者へ質問紙、聞き取り調査を行った。

## 第4節 本論文の構成

以上の研究目的と研究方法に基づく本研究は、以下のように構成される。

**第1章**では、台湾の戦後から現在までの英語教育を概観し、次に続く実証的研究の礎となる理論的・概念的問題を考察する。具体的には、英語教育政策、教科書の編纂・審正制・出版のシステム、代表的教科書・指導法の変遷を整理するとともに、英語教育の台湾社会での立ち位置を明らかにする。英語教育は事実上、1950年代から開始され、以降は常に国の政策に積極的に取り組まれ発展してきた。戦後台湾において、英語教育が世界と繋がり、経済発展を進める上でどのような役割を果たしてきたかを検討する。また、政府や教育者側が、どのように教育カリキュラム、教育体制などに関わってきたかを論ずる。

**第2章**では、戦後改訂された7つの「課程標準（綱要）」の「目標」と「教材の概要」の2つの項目を中心にそれぞれを歴史的な文脈の中で比較検討する。戒厳令下では「目標」が「(中華) 民族文化」と「三民主義」などを重視した内容となっているが、戒厳令解除後は、「民主主義」、「人権」、「福祉」、「環境保全」、「台湾の文化」などの記載が出てくるなど、時代を反映したキーワードの存在を明らかにする。

**第3章**では、各「課程標準（綱要）」準拠版教科書の題材内容を計量的、質的に調査し、それぞれの特徴を抽出する。まず、大きな特徴として文学教材の重視と政治・社会性のある題材の使用が指摘できる。そこで、使用されている文学教材のジャンルやどんな作品が扱われているかをその特徴とともに明らかにする。その一方で、政治・社会性のある題材については、戒厳令下と戒厳令解除後の題材内容の選択にどのような変化がみられるかを検証する。そこで、計量的研究から、時代によって扱われる題材内容の特徴を捉え、質的研究からは、テーマのみならず、「本文」の書き方のスタンスやメッセージなど教科書編著者の意向を考察する。

それぞれを歴史的視座により比較検討することから、出版社や編著者の意向が時代背景と重なりどのように反映されたかなど、全体的特徴を捕捉する。

**第4章**では、初期の英語教科書の礎を作った一つといわれる1962年「課程標準」準拠版英千里編の教科書分析を行う。戦後から1970年代にかけて英語の教科書を編纂していたのは、大陸から1949年以降に台湾に来た教養人、文化人たちによってであった。

その一人である英千里の編纂した『英氏高中英語』は、文学教材と政治・社会的題材が多く取り扱われており、また、「本文」のみならず、それに続く語彙や文法の説明と「本文」についての練習問題などにおいて、現在の台湾の教科書との共通点も認められた。そこで、『英氏高中英語』の題材内容と同時に練習問題を、同時期、そしてその前後の教科書と比較することでその特徴を論じる。

その一方で、英千里の人となりを知ることができる英千里自身や教え子たちの書いた文献、回顧録から『英氏高中英語』の様々な特徴の要因を明らかにすることを試みる。これにより英千里編『高中英語』に見られる「文学性」と「政治・社会性」の要因とその背景を検



討し、それが台湾英語教育に与える影響を論じる。

**第5章**では、第3章で明らかとなった台湾の教科書にある「文学重視の傾向」に焦点を当て、その要因を探り、文学作品が実際にどのように指導され、生徒のいかなる学力を培っているかを検証する。

まず**1節**では、戒厳令下では文学教材は小説・詩がほぼ同じ比率で、英米の作品を中心に扱われていることについて論じる。解除後は、小説・詩のバランスは大きく変わらないものの、台湾の作品やヨーロッパ、アジア・南米も含め幅広く扱われるようになっている。詩を重視する理由、および文学作品とその作者の選択にはどのような要因があるのかを、英国の英語教育、戦前戦後の日本、中国からの影響、そして1970年代からの米国からの影響を踏まえ、実証的調査を歴史的、社会的な学際的視野で分析し、明らかにすることを試みる。中でも、1980年代までの日本の英語教科書で扱われていた小説・詩における多くの作品が共通していること、転用されていることはいかなる原因によるものかを、「課定標準」や教科書の比較分析にその裏付けを探りつつ、台北での実態調査を取り入れ、これらの要因に直接・間接的に関与するものを検討する。

**第2節**では、「文学教材」が培う学力という点において、教科書の活動の中で具体的にどのように指導されているかを調査分析する。さらに教科書全体の指導法を探り、どのような理論的裏付けにおいて、1995年「課程標準」準拠版以降の教科書で指導されている「論理的思考、批判力、創造力養成」に働きかける言語活動に繋がっているかを明らかにする。具体的には「論理的・批判的思考力」、「文章構成力」、「創造力」、そして「修辞の知識と技能」に分け実証的に分析をし、「課程標準」とそれら準拠版教科書の「編纂大意」の記述をあわせて総合的な分析を試みる。

台湾の教科書で取り上げられている文学教材は青少年に必要かつ興味をそそる文学作品である。古典的名作を扱う意義とその理論的裏付けについて論ずる。戒厳令解除後には、英語教育をとおして、生徒の自ら考える力を養う「発問」やタスクが増加する。これに関わる要因と教科書全体のスタンスを「課程標準」をはじめ各教科書の「編纂大意」の分析を加え、社会・政治的・歴史的背景から明らかにする。

**第6章**では、次の柱である「政治・社会的題材の重視」について、時代的な観点から検証を進め、それらの教材が育成を目指す学力について分析する。

まず**1節**では、戒厳令下の状況として、1971年「課程標準」準拠版教科書を取り上げ、複数の主編者・教科書会社のものを検証する。台湾の内・外の情勢がとりわけ不安定な1970年代後半から1980年代の教科書における政治性がいかに扱われ変容しているか、それはどのような要因によるものかを調査分析する。これにより、台湾におけるこの時代の社会系教科の教科書に見られる思想統一を目的とする「国民化」<sup>6)</sup>教育が、英語の教科書に現れているか、また、政治・経済上の関係が色濃くなる米国との関係にも着目する。同時に、戒厳令下の台湾の教科書に見える「政治・社会性」と編纂者による属人的側面について論じる。



**第2節**では、戒厳令解除後の教科書題材内容が、いかに変化しているかを明らかにすることを試みる。戒厳令解除間近の1983年「課程標準」準拠版教科書からその変化の兆しを検討し、台湾のこの時代の社会系教科の教科書に見られる「民主化」、「本土化（台湾化）」が、英語の教科書に現れているか、現れているならそれは教科書の題材内容においてどのような特徴を呈するか検証する。

とりわけ、1995年「課程標準」、2008年「課程綱要」準拠版に共通することとして、環境問題が数・内容ともに充実することから、台湾社会における環境問題の背景に着目する。これがいかなる要因によって教科書の題材内容として維持されてきたのかを、台湾の権威主義体制下での急激な経済・産業発展との関係、そして、民主化の過程で環境保全運動がどのような立ち位置にあったかを中心に論じる。これらを踏まえ、戒厳令解除後の教科書で扱われる人権、福祉、生命などの題材内容を考察し、「本土化（台湾化）」と「民主化」の所在、そして、教科書の中立性や教育の脱政治化について検証する。

**第3節**では教授法とそれによって培われる学力に着目する。第2節で論じた「政治・社会的題材」もまた「文学教材」と同様に、1995年「課程標準」準拠版教科書からは、教授法としてはTask-basedの活動を取り入れ、4技能統合型のコミュニケーション力を養成し、かつ論理的思考力、批判力、そして創造力を養成している。

そこで本節では、2008年「課程綱要」準拠版教科書の各課の「本文」に対する発問とタスクを、ブルーム改訂版タキソノミーを使用し、認知レベルの分析をする。質的調査としては、「社会的題材」を取り上げ、その課の構成を分析し、論理的・批判的思考力などをどのように育成する指導法になっているかを「本文」の提示方法やコミュニケーション力との関係から論じる。本論において「論理的・批判的思考力」が意味するものは、英語教育においてこれらの用語が用いられる。

次に、台湾の教科書における以上の調査・分析を、日本の高校英語教科書における同様の先行研究と比較することで、教科書においてはどのような発問とタスクが必要となるかを考察し、日本の英語教育において応用できる点を明らかにすることを試みる。

**終章**では、本研究で扱った戦後台湾の英語教科書における二本の柱である「文学教材重視」と「政治・社会的題材重視」の関係性を論じる。そしてその観点から各章での議論を総括し、あわせて日本の英語教科書へ本研究からの提案を示す。戦後台湾の教科書研究という実証的研究を学際的なアプローチで分析した本研究の意義と今後の展望を提示したい。

#### 〈注〉

- 1) 日本における台湾の領有権・主権問題の第一人者である尾崎重義は「今日政治実体としての台湾を客観的にみるときは明らかに国家である」と明言している（尾崎，2009）。1971年に国際連合で中華人民共和国が承認され、中華民国政府の存在が否定されてから、台湾は形式上、公式上、主権国家として認められていない。しかし、台湾は中華人民共和国の主権に服せず、その政治的支配を受けていない。それは議会制民主

主義に基づく統治機構を持った事実上の独立国家的存在である。従って、以上の実態に即して、本章では台湾を自国の名称として使用することにした。

尾崎重義（2009）．台湾の国際法上の地位 再論（その2）『国際政治経済学研究』第23号．

- 2) **Test and Score Data Summary for the TOEFL iBT Test 2007-2019** 各HPの各国得点表より筆者が分析。表については（参考資料1）参照のこと。
- 3) 日本語では「中国本土」のように、「本土」という言葉が中国大陆を含意するが、台湾では「本土」は台湾を含意する。教育の「本土化」とは、すなわち、台湾を教育内容の中心とすることを意味する。本論文ではこの意味で「本土化（台湾化）」と記述する。
- 4) この数字は、1年生から3年生で使用する全6巻がすべて揃った教科書調査をした巻数と課数である。実際にNDCで調査した巻数、課数は巻末の「参考文献 III 教科書」で示す通り、これより多い。
- 5) 「哲学者、宗教家、芸術家、スポーツマン、諸芸に携わる者および文学者（文学研究者を除く）の伝記は、その思想、作品、技能などと不可分の関係があるので、その主題下に収める。」（NDC, p.110）
- 6) 「個人を国民にする過程」としての国民化の概念には多面的側面があるが、国共内戦の結果、台湾に移転した中華民国政府が長年志向してきた「中国」化とはほぼ同義語として使用する。ここで言う「中国」化とは、個人に中国の言葉、歴史、文化、価値規範などを内面化させ、「正々堂々たる中国人」として社会化することであり、学校教育はその要の役割を果たすものであった。

## 第 1 章 戦後台湾英語教育史の概要

近隣アジアの英語教育については、日本と同じく英語が外国語である韓国、中国などにおいては幅広い研究がなされている（河合, 2004; 新保, 2010）。近年、台湾の研究も進められてはいるものの（相川, 2015; 日暮, 2015）、いまだ決して多くはなく、包括的な歴史的流れを主軸とした研究は、筆者の知る限りほとんど見受けられない。本章では、戦後から現在（1945-2017）までの台湾英語教育の改革と発展過程を概観した。

戦後台湾が教育の質や人的資源の向上に力を注ぎ、それによって 1960 年代から 70 年代にかけて「台湾の奇跡」といわれる経済成長を遂げる。質の高い教育の基盤には、政府が打ち出してきた教育政策における英語を媒介とした国際化の推進と関係が深いことが推察される。本章の目的は、英語教育の変遷と歴史を鑑み、同時にそれが台湾社会の中でどのように位置づけられ発展してきたのかを考察することである。

台湾は多言語国家である。この社会的背景が言語政策、言語教育におよぶ影響の大きさは計り知れないものがある。公用語としての「北京語」、母語としての「エスニック語（台湾語）」教育と英語教育の位置づけには留意すべきものがある。本章では、このような多言語国家である台湾の複雑な言語的背景を考慮し、外国語政策や他の言語政策との関係も議論に含みながら、戦後台湾の英語教育史を考察した。

### 第 1 節 多言語社会としての台湾の歴史と現状

台湾は移民の国である。16 世紀のオランダ占領時代から歴史にその軌跡を残すようになったといわれるが、「台湾 400 年の歴史」という表現が示すように、明の末裔の鄭成功が台湾支配をした 17 世紀が台湾の歴史にとって重要な転機となるのである。すなわち、これにより中国大陆を統治する政権によっての統治の歴史が始まり、対岸の漢族の移住・開拓により、今日の台湾社会の基本的性格である「少数民族を内に含む漢族優勢の社会」が形成されるのである（若林, 2001）。その社会を形成するのは、「四大族群」と呼ばれるもので、オランダ占領時代以前からここに住んでいた、現在（1989 年現在）の人口の 1.7%を占めている先住民族、その後、福建省から台湾にやってきた、人口の 73.3%を占める「閩南（びんなん）」系漢民族、そして、広東省北部から台湾に渡ってきた人口の 12%を占める「客家（はっか）」系漢民族、さらに、第二次世界大戦後に国民党とともに台湾にやってきた、人口の 13%を占める「外省人」と呼ばれる人々である（若林, 2001）。そのため、台湾の使用言語は複雑で、先住民族の言語、台湾語といわれている「閩南語」、少数派の「客家語」、そして戦後、国語として普及した北京語（マンダリン）、日本統治下の 1895 年～1945 年に使用されていた日本語などがある。

戦後台湾のこれまでの外国語政策を振り返ると、その中心は常に英語に置かれており、1950年代に入ってから本格的な英語政策が打ち出されたのがその始まりとなる。それ以前は国語普及政策や台湾語の発展に限る議論となるようである。第二外国語教育については1945年以降、わずかな高等教育の外国語学部、技術・職業教育の外国語学科、および一部の民間機関に担われてきた。実際に明確な英語以外の外国語普及政策が出されたのは、1980年代に台湾経済が飛躍的に伸びた後のことである（戴,2011）。教育部では1983年から高等学校の標準カリキュラムに第二外国語を選択履修科目として正式に取入れた。2000年に「國民中小學九年一貫課程暫行綱要」を公布後、小学校では、相次ぎ郷土言語カリキュラムが取り入れられ、「エスニック語（台湾語）」教育が開始された。

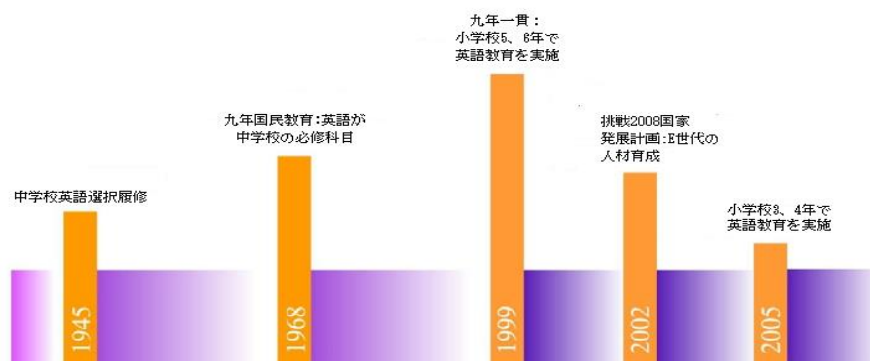
## 第2節 英語政策の変遷

戦前の英語教育においては、日本統治下の1895年～1945年には、日本の学校制に基づき英語教育が中等学校以上で行われていた。光復（国府が台湾入りを果たしたことを台湾ではこう称した）後における台湾では、国府が台湾に遷移した直後の戦後混乱期を経て、1950年代に入ると米国冷戦時代の戦略的政策の影響を受けるようになった。台湾は米国の傘に護られ、同時に米軍の支援を行うようになった。その結果、台湾国府からの米国への留学生派遣が始まり、留学生たちは帰国後政府機関や学術機関で活躍した。このように英語は、エリート教育として最も重要な言語として取り扱われるようになるのである。続く1960年代後半からの経済の発展により、英語は社会の中で徐々に定着することとなり、1968年からは英語は国民中学3年間の必修科目となった。

2000年には「國民中小學九年一貫課程暫行綱要」が公布され、これにより2001年には小学校5年生から英語が必修化され、2005年には小学校3年生からに早まった。2001年に実施、2003年には正式版に改訂された「國民中小學九年一貫課程綱要」（「課程綱要」は日本の学習指導要領に相当）によって、小中一貫教育が開始された。その後、小中学校から高校までの英語教育の接続を考慮した高級中学（日本の高等学校に相当）の「普通高級中学課程綱要」が2008年に公布され、小学校3年生から高校3年生までの一貫した英語教育が始まることとなる。教科書も高校においては1995年の「高級中学課程標準」（「課程標準」は「課程綱要」と同様に日本の学習指導要領に相当；以降は「課程標準」とする）の準拠版より、国民中学では2002年より、教育部編本の統一教科書から審定（検定）制の複数種類に開放されるようになった。また近年の情報ネットワークの台頭やグローバル化の影響により、英語政策の改訂が政府の正式な施政プロジェクトに組み込まれ、行政院では2002年に「挑戰2008 國家發展重點計畫」の中で英語学習を全面的に推進することを明確に定めるようになった。

下記のように、台湾における英語政策の歴史は主に4つの段階に分けられる（戴, 2011）（図

1-1 参照)。まず、第1期は1945年から1967年までの「国語普及運動の時期」における英語が教科としては選択制であった「英語選択履修」の時代。第2期は1968年の九年国民教育の開始により小中学校が義務教育となり、それに伴い、英語が中学校の必修科目となったことに始まる30年あまりの期間。第3期は1999年に始まる小学校英語教育導入の時代である。同時に言語科目の中に「国語」や「英語」が含まれるようになった。第3期は、図1-1で1999年とあるが、1998年5月に教育部が「国民中小学九年一貫課程綱要総綱」を公布し、「語文學習領域」の一部として、小学校段階に英語科目を新設することが決定した。本節では第3期を戴浩一（2011）の文献に則して述べていくものとする。最後の第4期は2002年の行政院が実施した「挑戦2008 國家發展重點計畫」に基づく時代から現在に至るまでの期間である。



← 第一期 → ← 第二期 → ← 第三期 → ← 第四期 → \*

図1-1：台湾における英語政策の主な変遷（出典：戴浩一，2011）

\*期の区分のみ筆者加筆，日本語訳は筆者による

## 1. 英語教育政策の概観－4期に分けて

### (1) 第1期（1945年～1967年）

台湾で戦後初めて「修訂中学課程標準」が公布されたのは1948年である。この中には「英語」教科の記載もある。しかしながら、この時期は戦後の混乱期であり、台湾国内では台湾語、日本語、北京語が使用されており、人々の意思疎通もままならなかった。国府はまず、住民の共通するコミュニケーションの手段として北京語の普及にその重点を置いた。国府にとってこの時期の北京語の普及は急務であり、他の外国語は検討する余地はなく、すなわち英語に対しても明確な政策を打ち出すことができなかった（戴，2011）。

1950年代に入ると、朝鮮戦争の勃発により、台湾は米国との関係が深まり、米国の援助を大きく受けることとなる。具体的には米国支援プロジェクトに伴い、これに参加する留学生に英語の集中研修を提供することを目的に、台湾の米国支援運用委員会と米国支援機構は1951年に「英語研修センター」を設立し、台湾大学医学部の教室で開始した。学校教育

においては、正式には 1955 年から英語は中学校では選択履修科目、高校では必修科目となった。

その後、米国への留学生の数が減ってきたため、1965 年に「英語研修センター」は台湾大学の配下に直接置かれるようになった。またこの時期、国府は経費を投じて海外に研修生を送り込むことも検討していたが、欧州や日本などの国に派遣を増やす必要があったため、「英語研修センター」を「言語センター」に改名し、日本語やフランス語、ドイツ語、などの研修カリキュラムや試験項目を増やした。1950 年、60 年代以降、台湾は英米両国の協力を得て、相前後して英国文化協会 (British Council)、米国フルブライト基金 (Fulbright Foundation)、東西センター奨学金 (East-West Center Grants)、アジア協会 (Asia Society) 教育基金と提携を結んだ。これらの団体および米国各大学の潤沢な奨学金等を通して、数多くの留学生を米国、欧州諸国に送り、その結果、数多くの近代的なエリートと将来の英語教育を支える人材を生み出すことに成功した (李, 2012)。このような国際協力は、今もなお続いており、台湾の英語教育と教育のグローバル化の発展に多角的で重要な影響を及ぼしている。

## (2) 第 2 期 (1968 年～1998 年)

1968 年には国民の教育水準を高め、国家建設の需要にこたえるため、九年国民教育が開始され、小中学校が義務教育となった。同時に英語が国民中学 1 年生からの必修科目となった。これは中学校から少なくとも 3 年間の英語教育を受けるという外国語 (英語) 政策における大きな変革であった。台湾では 1960 年代から輸出主導型経済政策によって未曾有の高度経済成長を遂げる「台湾の奇跡」の時代に入る (井尻, 2013 p15)。それと同時に 80 年代にかけて、台湾経済は米国経済に連動しており、言い換えれば米国のマーケットに大きく依存するようになった (伊藤, 1993)。農業社会としてはもともと高かった教育の普及は、工業化とそれによる所得の向上とともに一層進められた (若林, 1992)。1980 年代後半からは、経済の自由化と国際化政策を進めており、台湾経済が貿易に中心をおくことから、英語教育は多くの分野で重要視されるようになった。

一方、台湾が米国によって経済的支援を受けたことは「第 1 期」で述べたとおりであるが、その後も米国経済との関係は上記のように親密に進展してきた。これ以来、米国の出版物や映画、ポップソングなど米国の思想や文化が輸入されたものが、台湾の重要なサブカルチャーの一つとなり、英語学習は当時台湾が世界とつながるための唯一のルートであったという見方がある (林, 2003)。言い換えれば、米国の支援という特別な歴史的経緯が、台湾に米国に対するある種の心理的、文化的依存関係を生じさせているとの説である (林, 2003)。さらに徐代徳 (1990) は、「文化的側面では、留学政策、財団の設立、共同研究プログラムなど様々な米国派遣研修計画を通して、長年、親米、反共産主義、保守的なインテリエリートたちを育成した。」 (p. 9) と述べている。すなわち、高い英語力を持つことは台湾社会での成功へのパスポートを意味するものであったことが示唆される。

英語以外の外国語教育に関しては、早くも 1983 年から高等学校の標準カリキュラムに第二外国語を選択履修科目として正式に取入れた。すなわち、普通高校では「英語」の他に選択ではあるが、「フランス語」、「ドイツ語」、「日本語」などの第二外国語学習を開始し、これは今日に至っている。

### (3) 第 3 期 (1999 年～2001 年)

台湾の教育改革は 1990 年代から本格的に始まった。特筆すべき出来事は 1994 年 4 月に 5 万人を超える市民が教育改革を求めて台北市街に集まったことである。彼らは、教育問題において四大アピール (1. 少人数制クラスと学校の小規模化, 2. 高校・大学の偏らない設置, 3. 教育の「現代化」の促進, 4. 教育基本法の制定) を打ち出した。そして、1999 年 6 月には、教育発展を保障する国会の大原則を定めた「教育基本法」が制定された。これを機に、台湾の教育を巡る環境は急速に自由化、民主化の流れをたどることとなる。以上のように、ここに始まる教育改革とそれに伴う英語教育政策は国民の意向を強く反映するものとなっていく。

折しも 1990 年以降、情報科学技術時代の到来とともに、英語能力が、次世代のネットワークを介した新しい情報化社会においても必要となるであろうという認識を台湾政府が持つこととなった (戴, 2011)。そして、英語教育の低年齢化が新たな政策となってきた。英語の重要性がますます重視される中、台湾政府は政治・経済、文化等のグローバル政策に加え、「國民中小學九年一貫課程暫行綱要」の中に語学学習分野 (英語) 項目を組み入れ、2001 年からは正式に小学校 5 年から英語教育を実施している。第 3 期は小学校に英語教育が導入される時代である。

一方、教授法にも変化がみられる。この時期の英語カリキュラムは、従来の英語教授法からの本格的な脱皮を図り、英語によるコミュニケーション能力の基盤を整えることに重きが置かれる。加えて、英語学習への動機と興味を高め、グローバルな感覚と文化的リテラシーを養うこと、さらには、科学または世界に関する新しい知識を取得するように促すことを趣旨とした (戴, 2011)。

これらの政策には英語を主な媒体としたグローバル教育と密接な関連がある。次項で紹介する「挑戦 2008 國家發展重點計畫」においては、「国際的な生活環境を作り、国民全体の英語能力を向上させるプロジェクトを実行に移すために、2009 年から 2011 年までに總統府、行政院、教育部、人事行政局など関係省庁では、延べ 30 回もの会議が開かれたことが記録されている (李, 2012)。以上から、英語教育により、グローバル化に対応した国民の感覚と理解能力を高め、国際競争力を備えるためのこれらの政策は、国民全体への教育の均等をはじめとする様々な政策に結び付いていくのである。これは同時に、英語教育が、社会の国際化のみならず、民主化、そして、教育の充実を促す役割を果たしたことを示唆するものである。

高校での第二外国語教育においては、1999 年に公布された「推動高級中學第二外國語教

育五年計画」により、「フランス語」、「ドイツ語」、「スペイン語」、「日本語」などの非常勤講師を雇い、効率的な学習ができるように補助金制度を設立した（相川，2004）。しかしながら、「英語」以外の外国語学習へ資金を投じたこの計画は、重ねて設定されたにもかかわらず、人々の英語学習への強い関心を動かすにはいまだ十分ではないうであった。

### 早期英語教育および小学校英語教育

台湾では、全国民の英語力の向上を国家施策の主軸に組み込んだほか、英語教育の低年齢化を積極的に進めていた。2005年には、教育部国教司（前教育部国民および学齢前教育署）では前述した英語教育の実施年度を小学校 3 年にまで引き下げた。またこれに合わせ、同年小学校および中学校における英語教員の国家資格についても明確に定めた。しかし、都市部と地方の教育の隔たりは前述したように大きく、これは「表向き」の開始学年にすぎず、台北や高雄では、すでにそれ以前から公立小学校 1 年生から英語教育が始まっていた。すなわち、台湾の小学校の半数以上が教育部より先を行っていたことになる。一部の学校では一週間に 1, 2 回英語の授業を行っているが、また一部の学校では生徒の英語力を強化するために、英語の授業時間数がすでに国語を上回っているのである（林，2003）。これは台湾では教育改革が、民意を反映させながら比較的自由に、地方の教育機関やそれぞれの学校の裁量にゆだねられている部分が多いことに所以する（河添，2005）。

早期英語教育に関しては、大多数の親は英語を学ぶことが子供の将来に大きな影響を及ぼすと捉え、「英語学習は早ければ早いほどいい」と考える傾向にある。そのため、台湾全土のほとんどの幼稚園でも英語を教え始めるようになり、親の中には幼児期から子供に、「No Chinese」というように、すべて英語で行う教育を受けさせ、母国語よりも英語学習を先に取り入れるような状況にある（林，2002，チャイナタイムズ）。これに対し、幼児への早すぎる英語学習は、国や文化的なアイデンティティの問題を引き起こす懸念があるのではないかと（呂他，2002），との警鐘も出されており、その開始時期を含め、英語学習は既に大きな社会問題の一つとなっている。

小学校での英語教育においては、英語教育と同時に始まった「エスニック語（台湾語）」教育にも留意すべき点であろう。2000年に「國民中小學九年一貫課程暫行綱要」を公布後、相次ぎ郷土言語と小学校英語カリキュラムが取り入れられた。これは、もともとは英語教育を国語（公用語としての北京語）および母語としての台湾語（エスニック語）の教育との相互関係において構想するという方向性であった（文科省，「台湾の学校教育制度など」）。このような経緯を経て、小学校では「エスニック語（台湾語）」と「英語」が教えられるようになったのである。これは多民族・多言語社会を反映した、柔軟性のある言語教育政策の一つとしてとらえることができよう。しかしながら、この構想はグローバル化の急速な進展に伴い、均等であるべき比重が、郷土言語より英語に移行するという問題をはらんできていることもまた事実である（林，2003）。



#### (4) 第4期 (2002 年～)

2001 年に台湾が WTO (世界貿易機関) に加盟を決定したことを機に、政府は 2002 年に「挑戦 2008 國家發展重點計畫 (英語生活環境建設批准計畫)」を推進し、国際的に活躍できる人材の育成を目的として英語教育に積極的に取り組んだ。この計画は以下の 5 つの方向性に分けることができる。すなわち、(1) 英語による生活環境作り (2) 英語およびグローバル文化学習の推進 (3) 公務員の英語能力の向上 (4) 高等教育機関における教育のグローバル化 (5) 都市と地方における英語教育の実施における均衡化である。以下詳細は、戴 (2011, pp.10-11) による。

(1) 「英語による生活環境作り」の面においての主な目標は、公共標識を二カ国語で表示し、二カ国語による環境を整えることであった。(2) 「英語およびグローバル文化学習の推進」とは国民全員の英語学習プログラムを推進し、教育プログラムや教材を関係団体に提供し、国民のグローバル感覚と外国文化への理解を深めることを指す。同様に (3) 「公務員の一般的英語能力の向上」を加え、政府の効率と国際競争力を高めるための英語プログラムを実施し、公務員全体の英語能力を強化するよう努めた。一方で教育の面においては、まず (4) 「高等教育機関における教育のグローバル化」、そして、高等教育機関の教師が英語で授業を行うことを推奨するほか、海外の留学生が台湾で学ぶことを奨励した。

最後に (5) 「都市と地方における英語教育実施における均衡化」とは、都市部と地方での英語教育の隔たりへの是正対策である。例えば、都市部に集まりがちな優秀な外国人の教師が地方都市で教えることを奨励したり、英語レベルの高い大学生が地方都市で放課後の英語指導を行ったり、または夏休み期間中に英語キャンプを開催したりするなどの呼びかけをすることである。この「国家發展計畫」に続き、教育部は相次いでさまざまな政策を打ち出した。2003 年には 400 名の外国人教師を採用し、英語教育の質を高めるための協力を仰いだ (戴, 2011)。したがって、前項で述べたように、同時にこのような英語推進政策が、教育全体の機会均等を向上させていったのである。

#### 1) 小中高の英語教育

小中高の英語教育については、小中一貫の「國民中學九年一貫課程綱要」施行 (2003 年に正式改訂) の後、高級中学の「普通高級中學課程綱要」の施行をもって小学校 3 年生から高校 3 年生までの一貫した英語教育が 2008 年に始まることとなる。教育全体に照合すると、2003 年にはこれまでの「詰め込み教育」から「ゆとり教育」の方針が打ち出され、年間の授業時間が大幅に削減された。年間授業日数はこれまでの 220 日から 200 日へと減少した。そして、「國民中小學校九年一貫課程暫行綱要」には「個の時代」にふさわしい基本能力として、自己の発見と潜在能力の開発、主体的問題の発見と研究能力の育成、コミュニケーション能力の育成などが挙げられており、これらは、高校「英語」の「普通高級中學必修科目「英文」課程綱要」にも反映されている。

後期中等教育に限っても、近年、政府の英語教育政策は多くの項目について公表されてい

る。例えば、「英語教師研修の多元化」、「英語教科書の多様化」、「英語学科センター（高校）／一般科目群学科センター（高級職業学校）の設立」、「デジタル学習環境の整備—高校・職業学校の英語学科カリキュラムにおける IT の活用計画」などがある（游，2009）。これらにより，英語教員の研修を充実させ，英語教育の向上を図り，IT 技術を学習成果に結びつける計画を立てている。

## 2) 大学英語教育

これまで中等英語教育，および，早期英語教育について論じてきたが，大学英語教育についてはどうであろうか。「挑戦 2008 國家發展計畫」が施行される以前に，すでに国内のいくつかの大学が英語検定を卒業条件に組み入れた。これに伴い，大学生は専門科目だけでなく，関連の英語能力検定試験基準を卒業前にクリアしなければ卒業資格を満たさないことが規定された。これは徐々に定着しているようである。すなわち，中正大学では 2002 年に率先して学部生の英語能力卒業資格規定を進め，一方，台湾大学では 2006 年度の卒業生からこれを実施した。教育部もまた 2006 年から各大学に英語能力卒業基準を設けるように促しており，外国語学科・学部の評価指標の一つとして明確に規定し，また，上記のような教育卓越計画実施大学はいずれも，関連データを添付して報告することが義務付けられた（李，2012）。さらに，前述の「挑戦 2008 國家發展重點計畫」では，大学，専門学校において英語で講義を行う専門科目をさらに拡大し，博士，修士論文も学生の英語力を向上させる目的により英語で書くように求めるべきだとしている。

## 2. 帰台生の台湾社会への貢献

1950 年以來，台湾ではいわゆる「人材の流出」が問題となっている。大学卒業後渡米して造詣を深める人は，国内高等教育の発展に伴い，1950 年代からは毎年 2, 3 百人ずつ次第に増えていき，1960 年代には 2, 3 千人にまで達するようになった。1970 年代および 80 年代になると，毎年 5, 6 千人，ひいては 7 千人を上回るまでとなった。帰台する者もいれば，留学先に長く滞在し帰国に踏み切らない者もあり，これが深刻な懸念の一つとなったのである（李，2012）。滞在先は圧倒的に米国が多く，1951 年から 1965 年まで米国支援の技術協力プログラム下で米国に派遣された人は出国研修生全体の 65%を占めている。米国が台湾から毎年 80%の流出人材を吸収しているとのデータもある（文，1989,124-125）。しかし大学の卒業段階で出国して勉学に励むことは，「人材の流出」（Brain drain）のレベルにまで達したと判断するにはまだ時期早尚で，むしろ一種の人材資本の流動（Human capital flow）と見なすほうが妥当という見方もある（李，2012）。

一方，国民の英語能力向上のために取り組まれたこれら留学支援を中心とした政策は，台湾社会の民主化，近代化に寄与することとなる。すなわち，英米で英語教育のみならず，農業や技術工学，政治，経済の領域で造詣を深めた人材が帰台し，台湾の民主化・近代化を担うこととなる。とりわけ 1960 年代から 1990 年代にかけて多くのエリート学生が台湾から

米国・欧州に留学し、帰国した者は、台湾のために開放・改革と近代化の思潮を巻き起こした。英語教育を支援する政策は 1970 年代に台湾経済の飛躍を担った中間層の技術人材、人的資源の基礎を築いたといえる（李，2012）。これは早期の英語教育の発展のなかで、台湾社会の成熟に貢献したものにほかならない。留学からの帰国者がおよぼした台湾社会への影響については、さらにさかのぼり、1872 年の清の時代から始まった米国留学や「庚子賠款」によって 1908 年後に米国に留学した学生たちの帰台後の活躍によるところも大きい。彼らは渡米後、大学や専門学校で文学、機械工学、鉄道工学、法律、政治・経済を学び、後に中国と台湾の英語教育の発展は言うまでもなく、近代学術文化界に多大な影響を与えた（李，2012；容，2017）。

これらのうちの代表的人物として李登輝が挙げられる。台湾の民主化に影響を先導した李登輝は、日本の京都帝国大学農学部農業経済科在学を経て、戦後は台湾大学を卒業した。1952 年から 2 年間米国アイオワ州立大学に留学し、農学修士を取得した。さらに 1965 年から米国コーネル大学に留学し、農学博士号を取得した。博士論文の「台湾における農業と工業間の資本の流れ」は李登輝の政治家への道の布石となっている。帰国後の 1971 年に蔣経国に台湾農業問題を報告し、それが深い印象を残し、国民党入党への契機となったからである（伊藤，1993）。米国留学中にキング牧師の暗殺事件に遭遇し、民主主義人権問題への深い影響を受けたといわれている。

その他、政治分野では、前総統の馬英九（米国ニューヨーク大学ロースクールで修士、ハーバード大学ロースクールで博士の学位取得）、現総統の蔡英文（米国コーネル大学で法学修士、英国スクールオブエコノミクスで法学博士の学位を取得）がいる。教育分野への貢献では、李遠哲（米国カリフォルニア大学バークレー校にて博士の学位を取得、後にノーベル化学賞受賞、中央研究院院長）、龍応台（米国カンザス州立大学で文学博士取得、後に文化局長、文化大臣）が挙げられる。経済発展への貢献では、陳敏薰（米国南カリフォルニア大学財務金融学部卒、米国クレアモント大学経営修士の学位を取得、台北国際金融ビル（台北 101）代表理事）、張忠謀（米国ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学を経て、スタンフォード大学で電気工学博士を取得、世界有数の半導体企業の台湾セミコンダクター社（TSMC）創業者など、枚挙にいとまがない）。

最近では海外の大学（院）を卒業後、帰台するケースが増えてきている。台湾は現在、日本と同様に少子化時代を迎え、豊かな経済に後押しされる形で進学、そして、留学は増加傾向にある。台湾の博士号取得者はアジアの中でも日本を押して高く、国内のみならず海外留学をして学位を取得する動きは増加傾向にある。留学先はアメリカへの留学者が 1950 年代以来首位を占めている（林，2003）。

以上のように、台湾で重要な地位を占めている人々の学歴をたどれば、その多くに米国・英国留学を見つけることができる。このように、米国・英国に留学し帰台した人々の、その後の台湾社会への貢献はあらゆる分野に至る。すなわち、台湾の行った英語教育推進政策は、その人的資源を得ることにより、台湾社会の民主化、近代化に貢献したこととなるのである。

### 第3節 英語教科書と教授法

#### 1. 1948年～1980年代

台湾の英語教育における使用教科書と教授法の変遷については、李振清（2012）に詳しい。李振清は初期の変遷においては鍾榮富の「英語教学法的歴史」を引用し、以下のように論じている。台湾では1955年ごろまではまだ固定した教科書はなく、使用していた教授法は、文法訳読教授法（Grammar-translation method）であった。この時期はまだ英語の教師や教材が不足し、教育設備もほとんどないに等しい時代であったといえる。1955年頃からようやく中学での選択英語の授業のための教科書作りを、各出版会社が競うようになった。中でも遠東、世界、環球、正中、復興、海国および開明から出版されたものが比較的多く使用されていた。この時期、教授法はオーディオ・リンガル法（Audio-lingual approach）が流行した。初期の学習方法は先の文法訳読教授法やパターン・プラクティスの暗記中心の指導が主流で、中学校から高校まで、生徒は授業ごとに英語の本文を暗唱することも珍しくはなかった（李，2012）。

以下、李振清（2012）の記述に基づいて教科書と教授法の変遷について論じる。戦後台湾英語教育の初期に当たる1950年、60年代前後に、沈亦珍や英千里、そして梁実秋ら英語教育界の先駆者たちが編纂した教科書は、台湾近代における正規英語教育の草分け的存在であった。沈亦珍と程璟が編著し、1951年から復興書局が出版し、早期に広く使用された英語教科書、加えて、世界書局が1964年に出版した英千里の編著による英語教科書はその例といえる。沈亦珍は、1933年に渡米してミシガン大学に進学し、教育学修士号を取得、さらにコロンビア大学教育学院に転校して、1936年には博士号を取得した。1949年以降には、国立台湾大学外国語学部教授、そして台湾師範大学英語学系教授に相次いで就任した。英千里はオランダ、ベルギー、英国、アイルランドなどの国に留学して、フランス語と英語を専攻した。1924年にロンドン大学を卒業した後、中国に戻った。1949年に台湾に渡り、その後は台湾大学と輔仁大学で英語学系の主任を務めた。

1966年になると、梁実秋と傅一勤、そして、張在賢が共同で編纂した「遠東英語教科書」が現れ、初めて台湾各地の中学校、高校で広く使われるようになった。その後、梁実秋が主編を務めた「遠東英語教科書」、および「遠東英語辞典」が多くの人に評価され使用された時期があった。1960年代および1970年代になると、前述の沈亦珍らが編纂し復興書局から出版した教材は、英千里、梁実秋が主編を務めた新しい英語教科書に完全に入れ替わるようになった（李，2012）。梁実秋は1923年に米国に留学し、ハーバード大学の大学院で西洋文学と文学理論を専攻し、英語学科の博士号を取得した。

台湾の経済、そして社会は次第に繁栄していき、国府は1968年に義務教育を小学校の6年間から中学までの9年間に延長する教育措置を打ち出した。英語教科書が専門性を備えた学者や専門家らによって編纂され、広く普及しはじめたのもこの頃である。

梁実秋は後にまた台湾師範大学文學院の院長も務め、台湾における現代英語教育と英語

教員育成計画を推進した人物である。1946年に設立された国立台湾師範大学の英語学科が、台湾における英語教育の人材の育成に大きく寄与してきたのは、梁実秋の功績が大きい。師範大学の英語学科は早くも1955年に英語教授法に関連する試行や改善に着手し、学生の語学研修を強化してきた。1950年代末および1960年代初期に台湾師範大学（当時は省立台湾師範学院）の英語科ではミシガン大学で学んだ教授陣が米国アジア協会の賛助のもと、英語教育センターを設立し、台湾初のランゲージ・ラボラトリー（Language laboratory）を立ち上げた。さらに、初めて米国構造学派によって発展してきたオーラル・アプローチ（Oral approach）を、英語教員育成の教育面に導入した。英語教授センターでは新しい方式の直接（教授）法（Direct method）を採用し、台湾の1960年代から1970年代までの英語教育および英語教員の育成に大きな影響を及ぼしている。1980年代および1990年代になって、教育部の采配による教員養成のための「中学校英語教育在職研修計画（中學英文教師在職進修計画）」が大々的に実施されるようになった。国内での在職者用クラスのほか、海外で学ぶ研修クラスも設けられ、在職中の英語教員の英語能力向上と効果的な教授法修得に向けて積極的な養成をおこなった（李, 2012）。

このほか、1970年代台湾師範大学で設立された「試聴教育館」も初期の「マルチメディア」を推進し、現代のデジタルやオンラインによる英語教授の先駆けとなったものである。この点からも当時の台湾の英語教員育成研修が、台湾師範大学を中心になされ、それはすでに多元的で実務的な方向で推進されていたことがうかがわれる（李, 2012）。

初期の頃の教科書は「総合英語」と「文法」の二種類に分かれているものもあったが、多くは「総合英語」を扱うものであった。「総合英語」の教科書の構成は、概して「本文」とそれに前後する新出語彙・イディオムの説明（これは中国語でなされている）、文法事項の説明、そして、簡単な練習問題があるというのが通例である。題材内容は、英米の著名人の文章を主に使用したものであった。1948年「課程標準」準拠版は英米の文芸・文学作品を中心に、欧米の社会・文化を紹介するものが多い。1971年、1983年「課程標準」準拠版と進むと、次第に伝記や人生訓的なもの、自然科学、社会科学（異文化理解）、芸術などが増えてくる。これら教材選択等は各時期の「課程標準」、「課程綱要」に準じている。

米国・欧州での外国語・英語教授法は絶えず新しいものが生み出され発表されており、台湾の英語教員研修学府（台湾英語師資培訓学府）にも相次いで導入されてきた。例えば国立台湾師範大学、および後の国立高雄師範大学、国立彰化師範大学と政治大学等がその代表例として挙げられる。台湾の英語教育の変遷の中で1970年代以降に取り入れられてきたものには以下のものがある。すなわち、直接（教授）法（Direct method）、サイレント・メソッド（Silent method）、コミュニカティブ言語教育（Communicative language teaching）、認知的アプローチ（Cognitive approach）、協同学習（Co-operative learning）、タスク中心教授法（Task-based instruction）、内容重視の教授法（Content-based instruction）ジャンル・アプローチ（Genre-based approach）などである（李, 2012）。

## 2. 1990 年代以降

台湾の国民中学と高級中学の1学年で使用される英語教科書は基本的に1種類にまとめられており、1年で2巻、3年間で6巻を学習する構成となっている。国民中学においては2000年に「國民中小學九年一貫課程暫行綱要」が公布されたことにより、2002年より国定教科書から審定制に切り替えられた。

ここでは高等学校の教科書と教授法について論じる。高校の教科書については1983年「課程標準」準拠版のみが国民中学との関係から国立編訳館主編の国定教科書となり、1995年「課程標準」準拠版からは再び審定制となった。こうして国立編訳館により審定を経た教科書が使用されるようになり、民間会社が再び教科書出版に参入し、しのぎを削り始めた。この頃からトップのシェア率で、他の教科書会社の先導をしていたのが遠東図書公司印行の *Far East English Readers (FEER)* であった<sup>1)</sup>。次に龍騰文化事業公司の *Lung Teng English Readers (LTER)* と三民書局の *San Min English Readers (SMER)* が続いている。遠東図書公司印行(以降は遠東図書と記す)の *FEER* は施玉恵他主編のもので、国立台湾師範大学の教授陣が中心となっている。龍騰文化事業公司(以降は龍騰文化と記す)の *LTER* は田維新監修、林素我主編で、国立中央大学、国立台湾大学、国立台湾師範大学等の教授陣が中心に編纂されている。三民書局の *SMER* は陳凌霞主編で、国立台湾大学、国立成功大学、国立台湾師範大学、国立政治大学等の教授陣中心に編纂されている。このように、依然、国立台湾師範大学、そして国立台湾大学が英語教育の先導をしているとはいえ、他大学にも教育者が広まっていることが分かる。

教科書は1995年「課程標準」、2005年「普通高級中学課程暫行綱要」(以降は「暫行綱要」とする)、そして2008年「課程綱要」の変革に沿って変化していながらも、3社はそれぞれに扱う題材内容のバランスなど、各特徴を打ち出したものとなっている。2005年「暫行綱要」の基本精神は英語の「言語能力」を効果的に育成することにあった。すなわち、英語の聴く、話す、読む、書く、四つの能力のほかに、「聴く・話す・読む・書くの総合応用能力」が第5項目として追加され、また各項目における能力もさらに「基礎能力」と「上級能力」に細分化された。これらが教科書の構成、題材内容に影響を与える大きな要因になっていることは言うまでもない。

1995年「課程標準」準拠版以降の高級中学の英語教科書の構成は多少の違いはあるもののどの教科書も似ており、その特徴は指示文なども中国語を介さず英語であること、新出の語彙やイディオムなどは英英辞典のごとく英語で説明されており、その語(句)を使用した用例が必ず載せられていることである。その他の特徴については第3章に詳しい。題材内容については1995年から2008年「課程綱要」準拠版に至るまで「社会科学」、「文学」が多く扱われている。「文学」では小説の他、詩の扱いが多いことも大きな特徴である。しかしながら、2008年「課程綱要」で「英語」については「目標」に、「英語による論理的思考、分析、判断および整合・創造力の育成」が盛り込まれたことにより、難解な詩を扱うことは敬遠されはじめ、2010年代以降、新刊ではその扱いが減っている<sup>2)</sup>。事実、最近

シェア率を伸ばしている三民書局のものでは詩の扱いが減ってきている。2008 年「課程綱要」の「多様化」、「本土化（台湾化）」の方向転換に伴い、題材内容も自然科学、言語、芸術、産業など分野のバランスが取れており、扱う国々も欧米ばかりでなく、アジアの国々、アフリカ諸国、そして台湾の先住民や文化という台湾におけるものが増えるなどの変化を示している（平井、2017a）。

授業ではコミュニカティブ・アプローチ（Communicative language teaching）、内容重視の教授法（Content-based instruction）が用いられており、訳読ではなく、ポイントを掴ませていくクリティカル・リーディングが行われている。本文の内容とそれに付随した読み物を中心にして、その後はタスクを使いながらディスカッションやライティング、プレゼンテーションなどの活動につなげるのが基本のようである<sup>3)</sup>。

台湾のグローバル化と自由化の発展に伴い、国立編訳館は 2004 年からすでに小学校、中学校の教科書編纂から完全に退き、九年一貫課程の審議機関としての役割だけ留まっており、英語教科書の市場は全面的に開放された。2005 年「高級中学英文科課程暫行綱要」の実施もまた、英語教科書の自由市場の開放と競争に拍車をかけた。教科書も普通高校用と職業高校用の二種類が出版されるようになった。この「暫行綱要」は直接英語教科書の自由市場の開放、競争、および内容の向上を促している。

1990 年代以降は、経済発達や生涯学習の到来によって、教育分野でもこれまでの伝統的なものから新しい学習方式への変革が始まった。英語教育では、視聴覚教材の活用やコンピュータ補助教育（Computer Assisted Language Learning : CALL）が重視されるようになった。2000 年に入ると、デジタル化英語学習の台頭がおこり、学校教育においても教師や生徒の情報活動や英語能力の向上など、積極的に応用されていった。台北市内の多くの高等学校では、各教室にコンピュータ、プロジェクター、そして、マイクロフォンが備えられており、パワーポイントを使用した授業や生徒のプレゼンテーションが日常的に行われている（2014 年現在）<sup>4)</sup>。

#### 第 4 節 大学入試と英語問題

次に大学入試と高校の英語教育の変遷について簡単に触れる。台湾は日本と同様に基本的に 6-3-3 年制の教育制度がとられている。一年は二学期制で一学期は 9 月初め～翌年 1 月末まで、二学期は 2 月中頃～7 月末までとなっている。義務教育については、1968 年から国民教育と呼ばれる国民小学校 6 年間と国民中学校 3 年間の 9 年間がその期間となっていたが、2014 学年より高級中学 3 年間が国民教育となった。就学率はほぼ 100%である。台湾は強い学歴社会で、大学入試の受験と合格は人生の大事とされ、学習者の英語学習の最大の動機も、入学試験にあると言われている。学歴社会となった理由は、台湾人のルーツの一つである漢民族が長い科挙の歴史を持つこと、また、領台時代に日本が学校制度を整え、勉



学奨励の意識が戦後も衰えず、高度成長に伴ってさらに高学歴、高偏差値といった意識へと高まったとの説がある(河添,2005)。十二年国民教育制度の延長も義務教育になると入試が免除となることから、高校入試の圧力からの解放という見方も強い。

台湾では 1956 年に「大学連招考試(大学連合試験)」,いわゆる統一大学入学試験 (Joint College Entrance Examination : JCEE)が開始された。この制度は 2001 年 7 月の実施まで続けられてきた。これはいわゆる日本のセンター試験にあたるもので、この試験を、国立、私立の別なく共通して受けた。およそ半世紀の間はこの制度により、すべての合否は年に一回のこの統一大学入学試験の結果のみで判定されることとなり、この試験の重要性はきわめて大きかった。しかし同時に、これが熾烈な受験戦争の要因となり、歪んだ社会構造をつくる要因ともなり(中川,2009)、社会的な変革が求められるようになった。さらに大学希望者の増大に伴って急激に大学も増設され、大学は多元化、自由化、国際化の流れの中で、個性や特色をそれぞれ発揮していく時代となった(河添,2005)。この流れの中で、2001 年度(2001 年 8 月～2002 年 7 月)からは多元的な入試制度が導入されることとなったのである。

2002 年から導入された新しい入試制度は、試験実施の回数や選抜方法が多様化し、この意味で「多元的入学」と称されている。従来の試験とは違い、学科試験も何回か実施され複雑となっているが、時期的には大きく 1 月下旬と 7 月に行われ、その種類も基礎科目試験と専門科目試験からなっている。現行の「多元的入学方式」は大きく 2 つに大別される。一つは、従来の統一試験の流れを汲んだ「試験配分入学」で、いま一つは、各大学が独自の方法と基準で入学者を選抜する「独自選抜入学」である。この「独自選抜入学」には「繁星推薦入学」と「個人申請入学」がある(日暮他, 2015)。新しい入試制度が始まって 5 年後の 2007 年には、「試験配分入学」が依然全体の入学者の約 7 割占めており、新制度がなかなか浸透しないとの印象も強かったが、10 年が過ぎた 2012 年頃には、「独自選抜入学」を経て入学する学生は、全体の入学者の約半数を占めるまでに拡大し(日暮他, 2015)、台湾の大学入試における試験の多元化・多様化が進んでいることが示唆される。

英語に限って大学入試問題の変遷を見ていくと以下のようなになる。まず、大きな変革は 1981 年に行われた。「英語作文」と「翻訳」が加わったことである。これらの部分は記述式で全体の 30%を占めることになる。この変革は台湾の英語教育内容と大学入試制度への改革において大きな一歩を踏み出したものといえよう。これによって、高校、中学校の英語教育が「書くこと」をおざなりにしない、学習内容となったことは言うまでもないことである。

大学入試問題に 2011 年にリスニングテストが試験的に取り入れられ成功を収めた(李, 2012)。2015 年からは「英語リスニング試験(原語: 高中英語聴力測驗)」が正式導入が決定された。この出題範囲は高級中学 1～2 年必修「英語」の内容である。試験は年 2 回 10 月と 12 月に実施され、試験時間は 60 分(説明 20 分、試験 40 分)である。成績は等級制(A,B,C,F の 4 段階)で採点される(日暮他, 2015)。

現在の英語教育における重要な課題の一つには、高級職業学校の英語教育がある。1986 年、1987 年に公表された高級職業学校の英語カリキュラムから変革は行われてきているも



の、高級職業学校の生徒の英語能力を向上させ、いかに進学できるようにするかは大きな課題である。これについては、後の「第6章」にて引き続き論じる。

高級中学の教育課程基準の変更が現在進行中である。この動きに伴い、試験制度にも調整が求められており、これは3段階を踏んで行われる予定である。英語に関係した動きは、第2段階の2017年以降に予定されており、「学科能力試験」の英語の出題範囲が、生徒の学習意欲の継続を図るために現行の高級中学1～2年生から1～3年生前期までに拡大される予定である。

## 第5節 ラジオ・テレビによる英語教育

これまで学校教育を中心に英語教育の変遷を見てきたが、ラジオ・テレビによる英語教育もまた台湾社会に影響を与えてきた。1950年代60年代の台湾では、ラジオ・テレビを通して英語を学ぶことが広まった。李振清（2012）が以下のように時代を追っての変遷を述べている。台湾では、1960年代から「米軍ラジオ放送局」（Armed Forces Network Taipei : AFNT）だけに頼った英語放送が提供されていた。しかしながら、1979年の台湾と米国の国交断絶後、AFNTは改編され、その名称も（International Community Radio Taipei : ICRT）「台北コミュニティラジオ放送局」になった。ICRTはこれまでと機能は同じままだったが、内容はこれまでのものよりさらに充実したものとなった。しかも、デジタル化した豊かで高品質な映像と音声の番組を通して、英語のリスニング練習を目指す聴者にとっては、最も優れかつ便利な選択肢として提供されることとなった。テレビ放送では、1970年代の「空中商行専」英語テレビ講座は当時の人々の人気を博し、台湾社会で大衆が英語を学ぶ門戸を広げた。1980年代になると中華テレビ局が「超高周波」で放送を開始した「空中大学英语講座番組」は、台湾全土で英語学習のブームを引き起こした（李，2012 p.37）。その他、趙麗蓮が1972年に開始した子供向けの「マザーグース・ティチングイングリッシュ」によって子供たちにも英語ブームが起こった。彼女の熱心な放送教育への取り組みは英語教育の大衆化と質の向上を図り、その意義は大きい。

このように、ラジオ放送に始まり、後のテレビ英語講座の出現は、現代の台湾のテレビ放送の進歩とビデオ教材およびデジタル化英語教育の先駆けとなり、現在ではオンラインによる英語教授にまで発展している。これらはまた、国民の中に広く浸透していった。

## 第6節 第3期目以降の英語教育および政策についての評価と課題

1950年代より本格的に始まった英語教育政策はいくつか（4期）の節目を経て、台湾の経済・政治的状况に応じながら改革・発展してきた。ここでは、第3期目（1999年～2001年）、そして第4期目（2002年以降）に政府が主導となって多額の資金や人的リソースなど各種資源を投入して取り組んだ政策について、第4期目開始以降10年以上が経過した2010年現在、どのような評価がなされているかについて論じる。

政策については、1990年後半からの改革に及ぶが、いまだ改革を掲げ続けなければならない状況にある（Chen, Su-chiao, 2003）という評価や「WTO加盟よりおよそ20年間、官民が一体となって台湾国内で英語推進にどれだけ力を注いでも、明らかに「英語能力」の不足への不安を払拭することはできなかった」（林, 2003）という厳しい批評に始まり、とりわけ高等教育での問題がいまだ多く残されているとの見方が強い（張, 2009）。

大きな問題点としては2つ挙げられ、一つは教育内容で、高等学校でなされている授業内容が4技能育成とはいまだ距離があり、依然として大学入試に着眼が置かれているのが現状のようである。現場の英語教員は「カリキュラム概要の改訂は従来の教育目標と指導内容にさほどの影響を及ぼさない」と述べている（游, 2008）。いま一つは学習者のレベルの二極化の問題である。これについても改革がなされてきたとはいえ、いまだ深刻な問題であり、都会試験区（台北一・二区、基隆区、桃園区、中投区、台南区、および高雄区）の生徒がそれ以外の生徒に比べ、英語科目の試験の平均点が高い（張, 2003）ことをはじめ、地域格差が広がっているとの見方が強い（游玲, 2009）。

2009年現在、5割を超える中学生は卒業後、普通高校にあたる高級中学に進学する。現状では、国民中学で二極化曲線の間から左よりの生徒の多くが高校に進学し学ぶことになるのである。これらの生徒の能力向上の問題もまた深刻である。高級職業学校の英語教育の問題もまた大きく、高等職業教育は就職志向から進学志向へと転換する傾向の中で、高級職業学校における英語能力が一般の技術学院や科学技術大学が求めるレベルには達しないという問題を抱えている（游, 2009）。

游毓玲（2009）はさらに自らが行った現職教員への各政策に関するアンケート調査の結果から重要な点を指摘している。すなわち、現在、高級中学と高級職業学校の教員はこれらの後期中等教育における現行の主要英語教育関連政策の内容について、知っている者からは、それが英語教育に有益なものであるとの回答が多いにもかかわらず、一般的に良く知られていない。教員に最も重要な影響を与えている要因はおそらくは依然として大学入試試験であると指摘している。言い換えれば、教師がこれらの英語教育関連政策を知り、それに積極的に協力して実施に移す必要がある。そして、それらの政策の実施効果を視覚化すべきであることが指摘されている。

国際基準の英語能力試験であるTOEFLやTOEIC, IELTSについては、台湾全体の成績がいまだ不十分であることが嘆かれており、その例として2010年において、台湾のTOEFL

成績が韓国（81 点）や中国大陆（77 点）に比較するといまだ依然進歩しておらず、76 点にとどまっていることが挙げられている（李，2012）。その大きな原因は大学入試を意識した中学・高校の文法・単語の丸暗記にあり（游，2009；李，2012），現在の優れたソフトやハード，デジタル学習設備や英語教育資源などに見合わないものであると指摘している（李，2012）。

## 第 7 節 台湾英語教育史—その特色

台湾の英語教育史の流れと特色をまとめると以下のようなになる。戦後 1950 年代から米国へ優秀な留学生を送り出すことを目的に英語学習が進められ，帰国した留学生は，当時の社会を政治・経済面を支える中心人物となったばかりでなく，英語教育界を支える重鎮となり，英語教育学府や研究機関を通して後の英語教育を支える人材を輩出してきた。1968 年の「九年国民教育」開始から英語教育は中学 1 年生から必修となり，広く学ばれるようになる。1990 年代までの台湾の英語教育は，受験を念頭に置いた文法訳読教授法に出発する「読み・書き」を中心としたものであった。社会が豊かになり家庭にテレビが普及するのと同時に，学校以外の英語学習の機会がラジオ放送からテレビ放送の英会話番組に代わり，一躍大衆に受け入れられていく。

グローバル化社会と情報化社会の到来とともに，従来の英語教育では不足していた「聴く・話す」英語能力の養成が深刻化してきた。台湾の経済発展と国際社会の中で国として強化するためには，国際語としての英語を身につけた人材が必須で，このような流れの中，1990 年代後半以降に，次々と国際社会に対応できる英語能力のある人材育成を目的とした政策が打ち出され，入試改革とともに英語学習の開始時期の低年齢化を含めた多くの英語教育改革が進められてきている。一方，経済や生活が豊かになると同時に，国際的な競争力を考慮する動きは高まり，早期英語教育は過熱化し，これは大きな社会問題ともなっている。

台湾の英語教育の変遷に以上のように鑑みると，戦後から 1990 年代を通し，英語教育は台湾が世界と繋がり，高度な知識や情報を入手し，教育の質や人的資源，人文リテラシー，そして，経済発展・技術発展を進めることの媒体としてなされてきたことがわかる。1990 年代後半以降はグローバル化を進め国際競争力を高めるために重要視されてきた。このことは，台湾の外国語政策が「いかなる言語政策の実行や制定も，政治的な力量と権力の軋轢を反映するものである」（黄，1993；呉，2002）という現象を物語るものであろう。同時に台湾社会の場合，英語教育における大きな特色といえるものは，戦後直後から 1970 年までは政治的影響が色濃く反映しているが，戒厳令が解かれ民主化が進められた 1980 年代後半から，とりわけ 2000 年に入ってから，社会の変遷や人々の価値観といった民意を反映するものに移行していったことである。さらには，英語教育を支援する政策は台湾の飛躍を担

った人的資源の基礎を築いたといえる。そして、国民の英語能力向上のため取り組まれた上記の政策は、国民全体の生活レベルや教育の機会均等におよび、また、テレビ番組やコンピュータ技術の発展を促進した。このように、英語教育は台湾の社会的・文化的な価値観を反映し発展してきた。そして同時に、その発展過程が台湾社会の民主化と近代化に大きな影響を及ぼしてきたことが示唆された。

最後に加えたい特色は以下の点である。台湾は先に述べたように多民族国家である。グローバル化の経済機構へ向けて、英語の重要性は一致して実感されているものの、台湾が英語と母語である中国語、そしてエスニック語（台湾語）との相互関係を明確にしていくことが今後は必要であろう。すなわち、前述したように、小学校教育において、もともとはエスニック語と英語教育は同じバランスで置かれたものが、英語教育への比重がますます重くなる現実がある。早期英語教育による中国語である母語発達の問題もある。これらの言語間の不平等を意識していくことは、言語と教育、そして文化的社会の発展において、今後の大きな課題であることもまた明らかとなってきた。

## 本章の小結

本章では、台湾の戦後から現在までの英語教育を概観し、英語教育政策、英語教科書と教授法、早期英語教育、大学入試と英語問題の変遷を確認した他、英語教育の台湾社会での立ち位置を探った。英語教育は事実上、1950年代から開始され、以降は常に国の政策に積極的に取り組まれ発展してきた。英語教育は台湾が欧米と繋がり、教育の向上、そして人的資源を育て、経済発展を進める上での重要な媒体となっていたことが明らかとなった。戒厳令解除後は、教育カリキュラムにおいて革新的な計画を組み込むことの価値について政府や教育者側の一致がうかがえる。

台湾の英語教育の改革と発展の歴史に鑑みると、日本と同様の特徴が垣間見られる。第6節で述べた TOEFL の 2010 年の台湾の平均は 76 点であったが、このとき、日本は 70 点である（参考資料 1 参照）。常に英語教育を推進し、組織的・計画的に政策を打ち立て、国民の英語語力も順調に向上しているように見える一方、教育者間では、幼稚園や小学校と、中学・高校とのリエゾンや、大学入学試験との兼ね合いなどが課題として上るところは、長らく日本が抱えている課題と共通するものであり、とりわけ台湾の第 3 期、第 4 期の政策から教えられるものは多い。

### 〈注〉

- 1) 2005 年「暫行綱要」および 2008 年「課程綱要」作成に携わった教授との聞き取り調査による。2004 年 3 月に台湾師範大学で聞き取り調査をさせていただいたときと、主に

2006 年～2007 年にかけての複数回のメールでの質問と回答による。

2) 注 1) に同じ。

2017 年 1 月 3 日～5 日に筆者が行った国立台湾師範大学英語学系の元教授を含む教員との聞き取り調査による。事前事後のメールによる質問紙調査を含める。

3) 2014 年 3 月の台北市内の高級中学 3 校（国立台湾師範大学附属高級中学，台北市立中山女子高級中学，台北市立成功高級中学）の学校訪問と授業観察による。また，このときの高級中学教員各校 1 名計 3 名の方々への聞き取り調査，およびその後のメールでの質問と回答による。

4) 注 3) に同じ。

## 第2章 高校英語「課程標準」「暫行綱要」「課程綱要」の変遷

本章では、教育を統括する「課程標準」と「課程綱要」の「英語」について、その「目標」と「教材の概要」の項目に、改訂されるごとにどのような変化が現れるかを確認した。台湾では、戦後70年間（1945年～2015年）に「修訂中學課程標準」（1948年，1962年），「高級中學課程標準」（1971年，1983年，1995年）（以降「課程標準」），「普通高級中學課程暫行綱要」（2005年）（以降「暫行綱要」），そして「普通高級中學課程綱要」（2008年）（以降「課程綱要」）が公布された。教育省の方向性を知り、「課程標準（綱要）」の記載事項が準拠版教科書の題材内容選択にどのように反映しているかを明らかにするため、上記の「目標」と「教材の概要」の2つの項目を中心に、その他特徴的記載事項を確認する。

### 第1節 1948年（民国37年）「修訂高級中學英語課程標準」

1948年（民国37年）版の「修訂中學課程標準」は第二次世界大戦後、初めて公布されたものである。当時はまだ終戦から3年しかたっておらず、1947年には二二八事件が起こるなど世相は混乱しており、蒋介石が国民党とともに台湾に渡ったのが1948年5月である。そのような中ではあるが、1946年3月には台湾省編譯館が成立し、その4つの班の一つが「教材班」として初級中学と高級中学の教科書の編纂をしていた。しかし、第1章でも明らかのように、英語教科書についてはまだ定まったものがあつたわけではない（李，2012）。

1948年「修訂中學英語課程標準」の全体の構成は、はじめに「目標」，「時間配分」が述べられ、次に各学年の「教材概要」が述べられており、最後に「実施方法」が記されている。

第一「目標」は以下のように5点述べられている（訳は筆者による）。

- （一） 実用的な一般英語の練習や応用に徹する。
- （二） 英文の詩や散文で英語の語学トレーニングを増進する。
- （三） 英語面においては西洋文化への関心を高める。
- （四） 言語の中から英語圏の国々の風習について概ね理解する。
- （五） 英米民族史跡の記載の中から愛国思想を誘発し、国際理解を促進する。

以上のように、英文の詩や散文の理解を学習の中心とし、それによって、西洋文化の理解、自国の愛国心や国際理解に重きを置いていることがわかる。「時間配分」については、週に5，6時間の学習が定められている。

次に学年ごとにまとめられた「第三 教材概要」（第一学年）については、特徴的な項を抜粋すると以下のようなになる。

(壹)、第一学年：

- (一) 短編文の選択：原則として英米作家の近代文を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味関連の叙述描写を採用して、それぞれの文章に対して説明や議論を行い、国家民族の面において参考に十分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う。散文を主とする。詩で使われる言葉は、必ず散文の慣用により近いものでなければならない（口頭で精読するか筆記で内容に関する問答をして、要点をまとめ、言外の意味も補足する）。
- (二) 一般的な応用文書：手紙、規則に関する報告書などの種類（読んで真似をする）。
- (三) 一般的な応用挨拶：挨拶言葉、事務用語などの種類（聴解や口頭による応用練習）。
- (六) 第一、第二、第三項の教材資料に類似した教材選び：長編、短編、短文または一冊の書籍など適切な教材を使用する。
- (九) 外国語文化の実際の意味：特に英語民族に関するもので、わが民族の精神を育むことに有益なもの。各教科書内で指摘しやすいもの（理解）。
- (十) 各種よく見られる一時的な教科書（特殊な学習動機に基づいて使い方を勘案する）。

(貳)、第二学年： 第一学年と同様。

(参)、第三学年： 第一学年と同様。

学年ごとにまとめられているとはいえ、その内容はほぼ第一学年に準ずるものである。特徴としては、教材としては、英米作家の近代文学を取り扱うことが中心となっており、文学的な意味合い、そして科学系のもの、さらに趣味的なものも付け加えられている。具体的な教材としては、散文、詩、手紙、報告文があげられている。詩についても言及されており、重視されていることがわかる。特に注意を引くのは、英語教材のなかで「愛国心」に重きを置き、生徒の民族としての精神教育に有益なものを使用するように説いている部分である。民族とは中華民族のことである。これについては後述する。3年間に学習する新語彙数は4000語で中学校のもの2000語と合わせ6000語と定めている。

最後に「第四 実施方法」であるが、特徴的な部分を抜粋すると以下のようなになる。

二、聞く・話す・見る・書くことの平均的な発達範囲内で、特に読書に注意して、黙読を主に朗読を行い、最も普通に一般生徒に適した用途になるようにする。さらに読書の速度と興味を促進させやすいようにする。

六、授業中はできるだけ中国語よりも英語を使うようにして、特に新しい教科書に現れる言葉の意味は中国語で解釈せざるを得ない場合を除き、なるべく英語を使って説明する。それによって英語の練習が比較的に純粋な英語で学べられるようにし、またより早い段階で英語で思考するレベルにまで達するようにする。

以上のように、4技能のうち特に、「読む」ことに重きを置いていることがわかる。その

反面、講義をなるべく英語で行い、英語によって新項目を説明し、英語による思考を促すように説いている。

このように、1948年度版の「課程標準」では、英米の近代文学の散文や詩を教材として用い、科学的、趣味的な要素も含めることが示されている。英語教育の中で、西洋文化を中心とした国際理解と（中華）民族的な精神を啓発すること説き、4技能では特に「読む」能力に重きいていることがわかる。

この意味では日本の戦後間もない英語教育とその「目標」、「内容」に類似点が見受けられる（これについては後述する。）

## 第2節 1962年（民国51年）「高級中學英文課程標準」

次に「課程標準」が改訂されたのは14年後の1962年（民国51年）である。その間、英語以外の科目における改訂が1956年（民国45年）になされているが、英語については改訂がなされなかった。

1962年（民国51年）「高級中學英文課程標準」は、全体の構成では1948年版とほぼ同様で、「目標」、「時間配分」、そして、学年別の「教材概要」となっており、最後に「実施方法」が記されている。大きな変化の一つは、この「課程標準」から次に改訂のある1971年（民国62年）の2回については「自然科学系」と「社会科学系」に指導内容を分けていることであろう。具体的には、第一学年は共通教科書を使い、第二学年、第三学年においては、それぞれ専用の教科書を用いる教科書会社もある。「課程標準」においては、英語の学習時間配などに違いが出てきている。

「第一 目標」については以下の4点に定められている。

- 壹、実際の生活における英語の練習や応用に徹する。
- 貳、英文図書を読むための準備を強化する。
- 參、英語で作文を書いたり翻訳する力を培う。
- 肆、英語の民族文化を学ぶ関心を啓発する。

1948年の「目標」と比較すると、壹についてはおおむね同様である。新たに、參「英語で書いたり、翻訳する力を養う」が加えられた。1948年版の（三）～（五）にある、「西洋文化への関心を高めたり、理解したり、国際理解を促進する」という項目は、1962年版では「肆、英語の民族文化を学ぶ関心を啓発する。」に集約されたといえよう。したがって1962年版では、国際理解に重きが置いてあった1948年版に比較すると、英語そのものの書く力、翻訳能力の育成に重点を移行したことがわかる。また、英語の学習や目標教材を「詩・散文」に特定せず、「英文図書」となっていることも注意できる点であろう。



「時間配分」については、「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」とともに、一学年では週に 5～6 時間の学習が定められており、二・三学年については「自然科学系生徒」では週 5 時間、「社会科学系生徒」では週 6 時間が定められている。

次に学年ごとにまとめられた「第三 教材概要」（第一学年）については、特徴的な項を抜粋すると以下ようになる。第二学年、第三学年については第一学年と同様と記されている。

#### 壹、第一学年：

- 一、短編文の選択—原則として英米作家の近代文を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味に関する叙述、描写を採用して、それぞれの文章に対して説明や議論を行い、国家民族の面において参考に十分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う。散文を主とする。
- 二、一般的な応用文書：手紙、報告などの種類。
- 三、一般的な応用挨拶の復習：挨拶言葉、事務用語などの種類。
- 四、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した語彙や熟語、文型（応用理解）。
- 五、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した文法（品詞や文型の区別変化を含む）（応用理解）。
- 六、参考図書の使い方：様々な字典、辞典の使い方。
- 七、各種相当する臨時教材。

以上のように、説明は簡潔になっているが、1948 年版とほぼ変わりはないであろう。「目標」では「詩・散文」の文言がなくなったが、ここでは、明らかに英米作家の近代文を取り扱うことが 1948 年版と同様に明記されており、文学的意味合い、科学的、そして趣味関連の叙述描写を採用するという文言に変わりはない。1962 年版では、四、「体系化した文型」五、「体系化した文法」という文言が加わり、文法に重点が置かれる指導が始まることがわかる。

3 年間に学習する新語彙数は 3200 語（応用単語 1200 語、認識単語 2000 語）と定められている。ここでは応用単語と認識単語に分かれて新語数が書かれるようになる。

最後に「第四 実施方法」であるが、特徴的な部分を抜粋すると以下ようになる。

- 壹、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの 4 つの練習法は、必ず個別および組み合わせで運用しなければならない。
- 貳、聞く・話す・見る・書くことの平均的な発達範囲内で、特に読書に注意して、黙読をメイン、朗読をサブとし、最も普通に一般生徒に適した用途になるようにする。さらに

読書の速度と興味を促進させやすいようにする。

陸、授業ではできるだけ中国語よりも英語を使うようにして、特に新しい教材に現れる言葉の意味は中国語で解釈せざるを得ない場合を除き、なるべく英語を使用して説明する。それによって比較的に純粋な英語で練習できるようにする。

捌、随時、生徒の成績に注意を払って、予定の計画に沿って進行順を調整できるようにし、特に生徒が自分の上達に気づくようにして、興味を刺激し、学ぶ意欲を抱くようにしなければならない。

玖、徐々に生徒がこれまで見たことのない新しい素材を授業の前に自習するようにする。

第二学年から各課では一部分を自習にし、第三学年からは大部分を自習にする。

拾、スピーキング練習では、各部分の正確性だけでなく、強弱のテンポ、抑揚、頓挫、流暢、貫徹性など全体部分の調和にも注意を払いながら、自然な言葉が成り立つことができるようにしなければならない。

拾肆、作文は必ず思考の筋道がはっきりし、文章が簡単且つ適切で一般用に適しており、題材面では学習済みの素材と関連づけ、生徒がその拠り所を失わないように注意しなければならない。

拾陸、第三学年では必ず常に生徒に英語と中国語双方間の翻訳練習をさせ、表現の違いに注意できるようにしなければならない。

拾柒、体系化した文法（今まで文法と称するもの）を説明する素材は必ず実際に応用する文章に基づいてそれらをまとめて整理したものでなければならず、伝統的に抽象的な文法規則を採用することは望ましくない。

以上のように、1962年度版の「課程標準」では、英米の近代文学を教材として用い、科学的、趣味的な要素も含めることが示されている。英語学習を4技能の育成に心がけるとともに、体系的な語彙、熟語、文型、文法の指導が開始されている。作文指導や、高学年では翻訳を重視している。スピーキングでは発音のみならず、抑揚や流暢性などの指導も加えられてはいるものも、「読み」が中心の訳読式教授法に重きを置いていることがうかがわれる。また、「第四、実施方法」については1948年のものより、具体的に記載されたのが特徴といえよう。授業中の英語の使用を推薦している点などは1948年「課程標準」と共通しており、文法訳読教授法(Grammar-translation method)とオーディオ・リンガル法(Audio-lingual approach)の併用がうかがわれる。「拾柒、文法の教授法」については、「体系化した文法（今まで文法と称するもの）を説明する素材は必ず実際に応用する文章に基づいてそれらをまとめて整理したものでなければならず、…」とあるように、文法を各課の「本文」の中や例文を通して指導することを勧めていることが注目できる。

### 第3節 1971年（民国60年）「高級中學外國文（英文）課程標準」

全体の構成は1962年版（民国51年）とはじめはほぼ同様に、「目標」、「時間配分」学年別の「教材概要」、そして「実施方法」と続く。しかし1971年「課程標準」では、「実施方法」が「指導原則」、「指導課程」、「指導ポイント」、「成績評価」、「教材編集補足および各課との関連付け」の項目に分かれ、細かく記載されている。1962年版（民国60年）と同様に二学年からは「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」に学習時間や教科書が別に定められている。

「第一 目標」は以下の3点が述べられている。

壹、実際の生活における英語の学習や応用に徹する。

貳、英語の読み書き能力を強化し、学術研究の基礎を確立する。

参、英語の民族文化を学ぶ関心を啓発する。

1962年度版（民国51年）と比較すると、「貳、英文図書を読むための準備を強化する」の項目がなくなり、代わって「貳、英語の読み書き能力を強化し、学術研究の基礎を確立する」とある。つまり、将来、英文図書を読むための学習というよりは、実用的な将来のための英語の読み書き能力を育成することに重点が置かれている。

「第二 時間配分」については、「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」とともに、1962年度版（民国51年）より若干増えており、一学年では週に5～6時間から6時間に、二・三学年については「自然科学系生徒」では週5時間のままであるが、「社会科学系生徒」では週6時間が7時間に増加している。

学年ごとにまとめられた「第三 教材概要」（第一学年）については、特徴的な項を抜粋すると以下ようになる。第二学年、第三学年については第一学年と同様と記されている。

壹、第一学年：

- 一、短編文の選択は、原則として英米作家の近代文を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味に関する叙述、描写を採用して、それぞれの文章に対して説明や議論を行い、国家民族の面において参考に十分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う。散文を主とする。
- 二、手紙、通告などの種類の一般的な応用文体。
- 三、挨拶言葉、事務用語などの種類の一般的な応用挨拶の復習。
- 四、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した語彙や熟語、文型（応用理解）。

五、第一，第二，第三項の教材を展開して得られた体系化した文法（品詞や文型の区別変化を含む）（応用理解）。

六、参考図書の使い方：様々な字典，辞典の使い方。

七、上記の各種教材は，総合教科書に組み込むことを原則とする。

上記のように，1962 年版（民国 51 年）とほとんど内容に変わりはなく，教材としては，英米作家の近代文を扱い，文学的な意味合い，科学系や趣味に関する記述を奨励している。また，体系化した語彙，熟語，文型，そして，文法指導に重きを置いており，これは「第一目標」の特に「貳」とも一致していることが確認される。

3 年間に学習する新語彙数も 1962 年版（民国 51 年）と変わりなく，3200 語（応用単語 1200 語，認識単語 2000 語）と定められている。

次に「第四 実施方法」であるが，1971 年度版（民国 60 年）では，「壹、指導原則」と「貳、指導過程」，そして「参、指導ポイント」に分けて記載されている。その後，「肆、成績評価」，「伍、教材編集補足および各課との関連付け」が追加された形となる。基本的には，1962 年度版と同様の記載が多い中，特徴的な部分は以下になる。

「指導原則」については 1962 年版の中にあるものと同様で新しく加えられた項目はないが，「指導過程」については，1962 年版の内容に新しく追加された項があり，さらに記載も細かくなっていることが認められる。

#### 「貳、指導過程」

- 二、新旧教材間で授業と授業の間には相当なレベルで関連性が保てるように努め，生徒が学習体験を勉強の中で応用できるようにする。
- 三、質問回答やロールプレイなどの方法で前の授業で学習した内容を，新しい素材として少しずつ授業に取り入れる。
- 五、授業中に新しい文型が出てきた場合は，すぐその新しい文型の練習を始める一方，文の流れと構造との間の関係を明確にしなければならない。
- 六、毎回授業が終わる前には，必ず授業中に教えた内容に対して体系的に復習を行わなければならない。
- 七、全ての宿題は，まずやり方をはっきり説明するとともに，簡単に例を示して，生徒がその必要性を確実に理解するようにし，相当な学習モチベーションを養わなければならない。

「参、指導ポイント」についても細かな記載があるが，1962 年度版と重なる部分も多い。特徴的な項は以下になる。

### 「参、指導ポイント」

二、聞く・話す・見る・書く力がバランスよく発達するようにしなければならない。

「貳、指導過程」,「参、指導ポイント」からは、これまでの「読む」ことの重視から 4 技能をバランスよく指導することに重点が移行してきたことがうかがわれる。加えて、教員の指導への細かな支持が記載されるようになってきたことが大きな特徴といえよう。新しく追加された「成績評価」についての特徴的な項は以下のようになる。

### 「肆、成績評価」

- 一、成績評価は聞く・話す・見る・書く の 4 項目を同様に重んじることを原則とする。
- 二、宿題の書き方については、生徒がきちんときれいに書くように促し、徐々に進歩できるようにしなければならない。
- 三、評価方法はテスト、質問に答える問題、ディクテーションなどをメインにして、添削方法はできるだけ避けるようにしなければならない。
- 四、常に生徒の成績に注意を払って、予定の計画に沿って進行順を調整できるようにし、特に生徒が自分の上達に気づくようにして、興味を刺激し、学ぶ意欲を抱くようにしなければならない。

「伍、教材編集原則および各課との関連付け」については、教科書各課の実証的研究が核となる本研究と結びつきが強い項目である。1971 年版にて初めて「教材編集原則および各課との関連付け」が加えられ、大変細かな記載がされている。その多くは、現在に至るまで継続されており、現在でも教科書は 3 年間で全 6 巻使用し、各学年の前期後期で一巻ずつ使用している。各課の学習時間が 4, 5 時間であること、1 巻が 12 課から 14 課であることも現在も継続されている。当該「課程標準」に則り、教科書編纂がなされたことが認められる。特徴的な項目を抜粋すると以下のようになる。

### 「伍、教材編集原則および各課との関連付け」

- 一、全ての教材は 6 巻に編集することを原則とし、高校 3 年間 6 学期にわたって使用する。一巻は 14 課からなっており、1 学期に使用する。
- 二、全ての教材は応用単語 1200, 認識単語 2000 を含め、均等に 6 巻の中に盛り込まなければならない。

四、第三学年の教材で指摘すべき学びは、例えば Unity, Coherence, Clearness, Emphasis などの理解および応用でなければならない。

五、各課のメインテーマは、イラストで表示することが望ましい。

六、各課に含まれる単語、読み物、文型、練習、宿題などの部分は、4～5 時間で教え終わられることを原則とする。

七、各テキストの題材が高校の他の課目と関連があるものについては、できるだけそれらを組み合わせるようにしなければならない。

九、単語の発音表記は D. Jones の万国音標を基準として採用し、中学校英語の音標に合わせる。

以上のように、1971 年度版の「課程標準」は、英語の 4 技能のバランスよい指導を重視しはじめ、「指導過程」、「指導のポイント」などの記載を新たに加え、教員が授業をする上での細かな指導を示している。さらに、「成績評価」、「教材編集原則および各課との関連付け」の項目が追加され、これらは現代も継続されている内容である。とりわけ注意できるのは、「教材編集原則および各課との関連付け」の七、「英語の題材が他の課目と関連がある場合は、それらを組み合わせる」というのは、Content-based instruction (CBI) や Content and Language Integrated Learning (CLIL) に引き継がれるもので、早くも 1971 年「課程標準」に記載されていることは注目される点である。

#### 第 4 節 1983 年（民国 72 年）「高級中學外國文（英文）課程標準」

1983 年（民国 72 年）改訂「課程標準」で挙げられる大きな特徴は、1962 年版（民国 51 年）と 1971 年（民国 60 年）改訂「課程標準」の 2 度にわたって継続された、「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」に分ける体制、およびそれぞれに学習時間や教科書を定める記載がなくなったことである。その他「教材概要」では、これまでにみられないほど、各学年で扱う「本文」の語彙数や進出語彙数などを細かく定めていることが挙げられる。「教材編集原則および各課との関連付け」の項では、教科書についての規定も細かく定められている。最後に、「授業評価および指導」という項が追加された。

まず、「第一 目標」は以下のようになる。

壹、聴く、話す、読む、書く、ことから、生徒が実際の生活の中で正しい英語を応用する力を養う。

- 一、 教師の話す英語が理解できる。
- 二、 英語で教師の質問に答えられる。

三、 流暢に教科書本文を朗読し、その意味が正確に理解できる。

四、 勉強した単語、慣用句、文型、生活習慣、文化背景などを利用して簡潔に口頭と筆記で自分の意思を表現できる。

貳、現代英文読書と鑑賞を指導し、生徒が自主的に課外読書を行うことによって今後研究の基礎を培うように励ます。

参、短文作りや翻訳（中国語を英語に翻訳）などの方法を利用して、生徒が簡単な英語で作文を書く練習を行う。

肆、生徒の国際業務や科学技術を学ぶ興味を啓発し、民族文化の交流を促進し、理想の世界を発展させる。

以上のように 4 技能に重点を置く点が明記されており、これまで「目標」ではおおむね「読む」、「書く」に重きが置かれていたものに変化が見られる。また最後の項では、これまでは「英語圏の民族文化の理解」と書かれていたものが、「国際業務や科学技術を学ぶ興味を啓発し、民族文化の交流を促進する」というように変化していることが注目される。これは、1970 年代 80 年代初頭の台湾における急速な国際化と高度経済成長の影響がうかがわれる。

「第二 時間配分」は、1962 年版、1971 年版のように「自然科学系」、「社会科学系」に分かれなくなったため、第一、第二学年では週 5 時間、第三学年では週 6 時間と定められた。

「第三 教材概要」については、冒頭部分にはこれまでのものと共通する事柄も多いが、新しく加わった文言もある。特徴的な項の抜粋は以下になる。

#### 壹、第一学年：

一、短編文の選択は、原則としてわかりやすい現代英・米作品を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味関連の各文体を採用する。散文をメインとして、対話や物語、短編小説、詩歌、演劇などをサブ内容として取り扱う。内容においては生徒の生活背景や心身の成長段階を考慮し、特に人生の意義を導いたり、民族意識を喚起したり、民主的な風土および科学探求精神を養わなければならない。

二、本文の単語数は各授業では 600 語を超えてはならず、初めて接する知らない語は 30 語を超えないことを原則とする。知らない語の選択は常用率の高い 5000 語以内のものであることが望ましい。

大きな特徴は、これまで「民族意識」という文言があったものが、ここでは、「民族意識」

の他、新たに「民主的な風土」が加わったことである。民族意識はすなわち「(中華) 民族意識」のことであり、戒厳令下の公教育の「課程標準」でも使われていた「中国」化教育に代表されるものである。「民主的な風土」が、戒厳令解除前の 1983 年改訂「課程標準」に現れたことは注目すべき点である。具体的な教材についてはこれまで同様、教材としては英米作家の近代文を扱い、文学的な意味合い、科学系や趣味に関する記述を奨励している。また「散文をメインとして対話、物語、短編小説、詩歌、演劇などをサブ内容として取り入れる」というような細かな指定も加わった。さらに、その内容についても「人生の意義を導いたり、民族意識を喚起したり、民主的な風土および科学探求精神を養わなければならない」という記載が加わったことも特徴であろう。台湾の民主化以降の教育に「人文主義」の理念に重きが置かれていることが指摘されるが(篠原, 2017) 、英語も例外ではないようである。

ここで本文の単語数の記載もあり、各学年ごとに、各授業で 600 語(第一年)、800 語(第二学年)、1000 語(第三学年)を超えず、進出は 30 語(第一年)、40 語(第二学年)、50 語(第三学年)を超えないようにという記載がある。学年ごとの記載も細かな記載があり、学年ごとに段階的に学習が進むように定められている。

三年間に学習する新語彙数も 1962 年版(民国 51 年)、1971 年版(民国 60 年)の 3200 語(応用単語 1200 語、認識単語 2000 語)より若干増え、3600 語となっているが学年ごとに第一学年で 900 語、第二学年で 1200 語、第三学年で 1500 語と定められている。

次に「実施方法」であるが、1971 年度版(民国 60 年)同様、「指導原則」と「指導過程」、そして「指導ポイント」に分けて記載されている。基本的には、1971 年度版と同様の記載にいくつかのものが追加された。その中でも特徴的なものは以下になる。

#### 「第四 実施方法」

##### 壹、指導原則

三、 授業ではできるだけ中国語よりも英語を使うようにして、生徒が英語に触れたり英語を使う機会を増やすことが望ましい。

五、 授業やテストでは文章全体の活用に重点を置き、細かい単語の丸暗記を避けることが望ましい。

##### 貳、指導過程

六、 教科書本文の解説では、句と句、段落と段落との間の文章の流れ、構造や理論上の関係に焦点を当て、過度に些細なことや冗長で不必要な説明は取り上げるべきでない。

以上のように、より実用的な英語教育を目指し、文法事項への過度なこだわりより、英語に慣れて、発信できることを目指していることがうかがわれる。「指導ポイント」について



も同様に、4 技能の育成と実用英語に重きを置いた記載事項が加えられている。

「成績評価と生徒の指導」についても同様に、これまでのものにさらに追加事項がいくつかある。中でも特徴的なものは以下である。

「肆、成績評価と生徒の指導」

- 七、 レベルが少し低い生徒にはなるべく個別指導を行い、成績が優秀な生徒が他の生徒の学習に協力してあげるように励ましてあげなければならない。

個別学習を奨励している点は 1983 年改訂「課程標準」から認められる。以上のように、1983 年改訂「課程標準」は、英語の 4 技能のバランスのとれた指導を重視しはじめ、「指導過程」、「指導のポイント」の項に教員の細かな指導についての記載がある。さらに、「成績評価と生徒の指導」、「教材編集原則および各課との関連付け」の項目もさらに記載が増えている。

次は本研究と最も関係性の強い、「教材編集原則および各課との関連付け」である。他の項と同様に細かな記載が多く、本文については、「目標」に記載されていたことと重なる内容もあり、現代英米作品を使い、内容は「実際の生活や新しい科学知識をメインとして、文学鑑賞を補助的」と記載されており、これまでは三者が併記されていたものが、重きが最初の二者におかれたことが特徴といえよう。しかしながら、物語、短編小説、対話、詩歌および演劇というようなものをサブ内容として取り扱うこともまた、明記されている。

「伍、教材編集原則および各課との関連付け」

- 二、 教材の文の選択は、原則としてわかりやすい現代英米作品を取り扱い、選んだ文の内容は実際の生活や新しい科学知識をメインにし、文学鑑賞を補助的に取り入れることが望ましい。選んだ文の体裁は散文のほか、物語、短編小説、対話、詩歌および演劇などをサブ内容として取り扱うことが望ましい。本文の語数は第一学年では授業ごとに 600 語を超えてはならず、第二学年では 800 語、第三学年では 1,000 語を超えないことを原則とする。

- 八、 単語解釈 (glossary) の中で新しい単語の中国語英語の注釈のほか、その単語と関係のある品詞の変化、類似語、反対語などは、生徒が認識単語を増やす手助けをする。単語とイディオムの英文注釈は、知らない単語で新しい単語を説明しないようにしなければならない。

「その単語と関係のある品詞の変化、類似語」などを示すという記載には、1962 年改訂「課程標準」英千里編準拋版教科書で「編纂大意」で述べられていることがそのまま記載されており、興味深いところである。また、新出単語が、英英辞書のように説明されているの

が現在まで続いている台湾高等学校の教科書の一つの特徴であるが、これは、1983 年度版の「課程標準」で初めて定められている。その他第五巻目の教材と第六巻目の教材について組み込むべき内容・項目を定めたものなど、学年を追うごとに学習内容が高まるように教科書の編纂について細かく定められている。

最後は本「課程標準」で新しく加えられた「授業評価および指導」についてである。これについては、高校教育内容が大学入試問題へつながっていることや教員研修やその指導などについての記載がある。大学入試についての記載はこれまでにはなかったものである。

「陸、授業評価および指導」

- 一、英語教育の評価や指導は、高校英語教育カリキュラム基準の規定に従って専門家が行う。
- 二、各地域の高校では、定期的に当地域での英語教育参観を開催して、毎年少なくとも一回行い、師範高等学校など教育指導委員会および当地域大学関連学科をお願いをして英語教育専門家を派遣して指導を行うようにする。
- 三、大学および三年制専門学校・短期大学の入学試験の英語入試問題は、内容的に高校英語カリキュラム基準に基づいて、高校英語の実際の教育内容を参考にしなければならない。

以上のように、1983 年度版（民国 72 年）ものは、4 技能重視と実用的な英語教育に主眼が置かれ、目標としては、文学鑑賞の指導も含まれるが、国際業務、科学技術を学ぶ興味を啓発し、民族文化の交流を促進することに幅を持たせ、その教材の内容も人生の意義を導くもの、民族意識、科学探求に重きを置き、文学作品は補助的という文言も「教材編集原則および各課との関連付け」では記載されている。「人生の意義を導く」という文言はこれ以降、現在に続くものとして注目できる。「指導方法」や「評価」そして「教科書編纂」についても細かな記載が見られる。

## 第 5 節 1995 年（民国 84 年）「高級中學英文課程標準」

1995 年に改訂された「高級中學英文課程標準」の大きな特徴として挙げられるのは、前回の 1983 年版で顕著になった、教科書編纂や教科書指導についての詳細な説明が一層明確になり、教科書重視の立場が打ち出されている点であろう。

構成は、これまで一元的であった「目標」が「総目標」と「各項目標」の二つに分かれ、さらに「各項目標」は「言語能力」、「学習方法と態度」、「学習の興味」、そして「文化教養と世界観」の 4 つに分けたものと多元的になった。次に「時間配分」、「教材概要」と続く。「教材概要」は、「編纂の原則」、「編纂の方式」、そして「学習の資料」に分かれる。「実施

方法」もまた、多元的となり、「教育指導（授業）の原則」、「教育指導（授業）の方法」、「教育指導（授業）の評価」に分かれている。以上のように、「教科書」について、その編纂と指導内容についての記載の占める割合が大変多いものとなっている。1983年版に追加された「授業評価および指導」の項目は本「課程標準」では削除され、代わりに「教育資源」が追加されている。

まず、「目標」では、「総目標」の前に前書きとして「言語能力の上達の他に、本課程の目標はさらに正確な学習方法と思考様式の訓練の両方を含み、さらに文化の理解を通して視野の広い世界観を育成することである」との文言がある。ここで注目できるのは、「思考様式の訓練の両方を含み…」と、初めて、英語学習を通して「思考力」の育成に関する文言が加わったことである。これは1994年改訂「國民中学課程標準」の全教科における基本理念に「創造力・論理的思考・価値判断の能力を啓発し、…」(山崎, 2009, p.159)が明記されたことから、次の段階である高校英語に組み込まれたと判断できる。1995年改訂版では、1983年改訂版で記載された「国際化」がさらに強調され、これまであった「民族意識」という文言が消えたことは大きな変化である。

「総目標」は以下のように記載されている（訳ならびに下線は筆者による、以下同様）。

#### 壹、総目標

高校における英語課程は、以下の教育目標を達成すべきである。

- 一、正しく英語を聴く・話す・読む・書く能力を育成し、しかも日常生活の中で実際に応用する。
- 二、効果的な英語学習方法と積極的な学習態度を育成し、将来の独学の基礎を定める。
- 三、英語学習への興味を育て、さらに英語の文学・芸能活動を鑑賞したり、あるいはこれに参加できるようにする。
- 四、国際情勢、新しい科学技術の知識および外国文化に対する理解を促進し、自国と外国の文化および世界の趨勢を熟知することを期待する。

基本的にはこれまで同様に、英語学習の目標は、4技能育成を重視しながら、文学・芸能活動の鑑賞と国際情勢、新しい科学技術の知識と外国文化への理解が大きな柱となる。前述した「教科書」重視の姿勢を如実に表すように「第一 目標」のうち「貳、各項目目標」では、「教科書」という言葉が頻出している。例えば、「目標 貳、各項目目標 一、言語能力（二）話す」の項目では、「教科書本文の内容についての問答と討論ができる」とあり、同じく「（四）書く」の項目では、「教科書本文の概要を書くことができる」などがある。その他の特徴として挙げられるものは、「目標 壹、総目標 二、効果的な英語学習方法と積極的な学習態度を育成し、将来の独学の基礎を固める」とあるように、「課程標準」全体を通して、授業以外での学習や、さらに進んだ自学自習を奨励していることである。さらに、「話す」指導として創作をあげ、また「書く」項目として作文について詳しく述べているが、これについ

ては統一大学入学試験の内容とも一致している。すなわち、1981 年より従来の読解問題に加えてライティングの問題も 30%加わり、それが定着していったことが背景として挙げられる。

「時間配分」は第一，第二，第三学年を通して週 5 時間と指定されている。これは、1983 年版より若干少ないものとなる。

### 第三 教材概要

#### 壹、編纂の原則

高校の英語教科書は総合的な教材であり、4 種類の言語能力を育てるよう配慮し、聴く・話す・読む・書くという個別の訓練以外に、さらに言語能力の総合的な応用を重視すべきである。漸進、累積、反復という教材の編纂原則に従うため、教材は学年によって順を追って進み、中学校の教材に続くべきである。教材の全体は 6 巻に分かれ、高校の 3 学年に使われる。編纂の方法はコミュニケーション型教授法の課程設定を原則とし、教材は活気に満ち、しかも実際の生活での応用と結びつけることを重視する。第一学年は聴く・話す・読む・書くことをいずれも重視する総合的な過程であり、第二，三学年は聴く・話す・読む・書く訓練を続ける以外に、特に読書力の養成を高める。

教材の本文の数、本文の長さ、語彙、文法、本文の内容、練習活動および作文練習は以下の原則に従うべきである。

「第三 教材の概要」では、まず「壹、編纂の原則」で、「教科書は 6 巻に分かれ、高校の 3 年間に使われる」など、その体裁も明記され、1983 年版を踏襲するものである。4 技能を重視し、その総合的な指導に目を向けていることも注目される。「編纂の方法はコミュニケーション型教授法」というように、「コミュニケーション」という文言が出てくるのもこのころからである。「コミュニケーション力」の育成に重点が置かれるようになった。また、「壹、編纂の原則」は「一、本文の数」、「二、本文の長さ」、「三、語彙」、「四、文法」、「五、教科書本文の内容」に分けて記載されている。同じく「教材の要綱 貳、編纂の方式」を含めた両項目では、語彙数、新語の表記の仕方、教科書本文の内容、そして言語活動にいたるまで、事細かに説明されている。これは、日本の「学習指導要領」では見られないものである。このように台湾では「課程標準」において教科書編纂のガイドラインを明確に設定しており、均一な指導を目標としていることがうかがわれる。また、このように「課程標準」において教科書が重視されていることから、台湾の場合は教科書の内容の調査が、英語教育の実態を知る上できわめて大きな手がかりとなるのである。その他「教材の概要」で特徴的な項を以下に抜粋する。

## 壹、編纂の原則

### 五、教科書本文の内容

教科書本文の材料選びは多様化させるべきで、趣味性、実用性および生活性に依拠する。内容は生徒の生活背景と心理知能の発展に配慮すべきで、さらに人生の意義を啓発し、民主的な風格および科学を探究する精神を育成することを特に重視すべきである。

## 貳、編纂の方式

### 二、教科書本文

教科書本文の材料選びは多様化させるべきで、温かな小品、ユーモラスな短文、文学名著、自国および外国の文化・風俗・習慣の紹介、科学技術、環境保護および生態保護、自らを励ます短文、運動、休閑娯楽、社交儀礼、旅行、食事、衣服、住居、交通、物語、手紙、使用説明書、詩歌、寸劇、英語ニュース、広告などを含むことができる。3 学年の教科書本文の内容の重点は以下のように分けて述べる。

#### 第一学年：

教科書本文は二つの部分に分ける。第 1 部分は短文を読むことであり、文章選びは温かく面白い小品文を主とする。第 2 部分は会話であり、その主題はできるだけ短文に歩調を合わせ、また日常生活と関連する会話を主題にすることもできる。例えば、挨拶、紹介、謝礼、お詫び、お祝い、招待、道を尋ねる、旅行、買物、注文、電話での交流などである。

#### 第二、三学年：

教科書本文は一般の知的、趣味的、実用的な文章を主とし、また文学作品と新しい科学知識を取り入れることができる。閲読および創作の技法の紹介に歩調を合わせるために、一部分の本文に対しては主題が明確で、構造が整い、脈絡が鮮明であることを求めるべきである。生徒にある問題について広くかつ深く検討する機会を持たせるため、2、3 課を一つのユニットにすることができる。

教科書本文の内容について言及している部分では、まず、「壹、編纂の原則 五、教科書本文の内容」では、「教科書の本文の材料選びは多様化させるべきで、趣味性、実用性および生活性に依拠する。内容は生徒の生活背景と心理知能の発展に配慮すべきで、さらに人生の意義を啓発し、民主的な風格および科学を探究する精神を育成することを特に重視すべきである」と明記されている。また、「貳、編纂の方式 二、教科書本文」においては、「教科書本文の材料選びは多様化させるべきであり、心温まる小作品、ユーモラスな短文、文学・名著、自国および外国の文化・風俗・習慣の紹介、科学技術、環境保護および生態保護、自らを励ます短文、スポーツ、娯楽、社交儀礼、旅行、食事、衣服、住居、交通、物語、手紙、

使用説明書、詩歌、寸劇、英語ニュース、広告などを含むことができる」と詳しく書かれている。このように、趣味と実用性の両側面から幅広い題材内容を取り扱うことを奨励していることがわかる。また、「文学と科学技術への知識を取り入れる」、「人生の意義を啓発し、民主的な風格および科学を探究する精神を育成する」という文言には「人間教育」の意図が指摘できる。さらに、「民主的な風格のある」ものを取り上げるようにと明記され、そこにはもはや「民族主義」の文言は見られない。列挙された具体的な項目も、自国および外国の文化・風俗・習慣の紹介、科学技術、環境保護および生態保護のように、「民主化」を表すものとなっている。

これらの題材内容についての明確な指針が、実際の教科書編纂にどのように反映されているかは、後の教科書分析のなかで検討すべき重要な項目である。

次に本研究に関わる題材内容の分野について言及している部分を検討したい。まず「壹、総目標」において、「三、英語学習への興味を育て、さらに英語の文学・芸能活動を鑑賞したり、あるいはこれに参加できるようにする」、「四、国際情勢、新しい科学技術や知識および外国文化に対する理解を促進し、台湾と外国の文化および世界の情勢を熟知することを期待する」と記されている。また、「第一目標 貳、各項目標 三、学習の興味」では、「(一)、簡単な英語の物語、小説、雑誌など課外読本を積極的に読むことができる」とあり、「四、文化教養と世界観」では、「(一)、国際情勢を理解し、また、現代の新しい知識を吸収することができる」と書かれている。このように台湾の「課程標準」では、文学に比重が置かれていることが特色で、これは文学的教養とも言うべきであろう。加えて広く世界の情勢を知る国際理解、そして科学的な新知識の3項目に重点が置かれている。「民主化」にかかわるトピックが提示されている点も注目される。

「教育指導（授業）の評価」については評価が多様化したものであるように、また、「言語基本部分」の評価のみではなく「言語応用力」を評価すべきことなどが説かれている。以下、関係部分の抜粋である。

#### 「参、教育指導（授業）の評価」

三、評価は多様化させるべきであり、筆記、口頭および聞き取りテストあるいは報告など異なる形を併用すべきである。

四、評価は言語の部分（発音、語彙、文法）および言語応用能力（聴く・話す・読む・書く）を含めるべきであり、しかも後者が前者より重要である。

以上のように、1995年版(民国84年)の「課程標準」は、4技能重視、コミュニケーション力重視を開始したものであり、改めて民間教科書の審定制となったことを踏まえ、教科書編纂と教科書内容と指導方法について、細かな記載がされているところにその特徴がある。

## 第6節 2005年（民国94年）

### 「普通高級中學必修科目「英文」課程（暫行）綱要」

2003年には正式版に改訂された「国民中小学九年一貫課程暫行綱要」によって、小中一貫教育が開始された。この動きを受けて、高校の「課程標準」も「課程綱要」に代ったものが2008年に改訂される。その間に準備段階として一旦暫定版が2005年に公布される。これが2005年「普通高級中学課程暫行綱要」である。ここでは2008年「普通高級中学課程綱要」へ続くものとして、その大まかな概要を述べ、2008年「課程綱要」でさらに詳しくその特徴を述べる。

台湾で英語教育が小学校5年生から必修化されたのが2001年、そして2005年には小学校3年生からに早まった。その後、小中学校から高校までの英語教育の接続を考慮した高等学校の「普通高級中学必修科目『英文』課程綱要」が2008年に発布され、小学校3年生から高校3年生までの一貫した英語教育が始まることとなる。以上のことから、この「普通高級中學必修科目「英文」課程（暫行）綱要」はこれまでの1995年「課程標準」とは異なる試みがなされている。

まず、構成については、「壹、目標」、「貳、主な能力」、「參、時間」、「肆、教材の概要」、「伍、実施方法」となっている。「教材の概要」は、「編纂の原則」、「編纂の方式」、「教学の資料」とあり、1995年版と同様となる。「実施方法」は、「教材の選別編集」、「授業の方法」、「授業の評価」、「教育資源」の4部からなる。「壹、目標」では、「普通高校の必修科目である「英語」カリキュラムは、小中学校九年一貫カリキュラムの英語教育の延長線上にあるが、その目標は生徒の英語力を向上させ、将来の進学や就職に備えるためである。カリキュラムの目標においても、効果的な読書方法と論理的思考のトレーニングを含んでおり、文化的理解を通して広い世界観を育てることを目標としている」と記載され、論理的思考のトレーニング（邏輯思考的訓練）という文言が組み込まれていることが大きな特徴である。1995年「課程標準」の「目標」の項で記載された「思考様式の訓練」（思考方式的訓練）がより具体化され、強く打ち出されている。

壹、「目標」の詳細は以下のようになる。

普通高校の必修科目である「英語」カリキュラムは、小中学校九年一貫カリキュラムの英語教育の延長線上にあるが、その目標は生徒の英語力を向上させ、将来の進学や就職に備えるためである。カリキュラムの目標においても、効果的な読書方法と論理的思考のトレーニングを含んでおり、文化的理解を通して広い世界観を育てることを目標としている。

- 一、実生活のコミュニケーションに生かせる正しい英語を聴く、話す、読む、書く、能力を高める。
- 二、効果的な英語の学習方法と正しい学習姿勢を育て、生涯学習の基礎となる自己学習能力を強化する。

- 三、英語学習への興味を促し、人文社会や科学技術に関する知性を高める。
- 四、国際問題や異文化への理解を深め、尊い命と持続可能な地球の発展への思いを心に奥深く根付かせる。

貳、「言語能力」については「～ができる」という表現の「can-do statements」での記載になった。「主な能力」は基礎レベル上級レベルの二つに分かれ、これ以降、各能力（4技能+統合）について別に記載されている。ここで注目できるのは、4技能の他、最後に「聴く、話す、読む、書く、の統合応用能力」の項が設けられたことである。この記載は2008年「課程綱要」にそのまま続く。「主な能力」の中では、三、「学習への興味と人文教養」（一）基礎レベルでは、「2. 自ら進んで英語の映画や歌、放送などに接する。3. 物語や雑誌、ほかの課外読物を読もうとする」など、これまで通り、人文教養重視の傾向がみられる。言語能力については「～ができる」という表現の「can-do statements」での記載になった。

参、「時間配分」は 今までの週6回ではなく、週4コマの4回に削減されている。これはゆとり教育の影響によるものである（第1章第2節参照）。

肆、「教材の概要」では、一巻の教科書で4技能とそれを統合した活動を入れて指導するように進められている。その中の 一、「編纂の原則」では以下のような記載がある。

#### 肆、「教材の概要」

##### 一、「編纂の原則」

「高校の英語教科書は包括的な教材として、聴く、話す、読む、書く、4つの言語能力を同時に育て、これらの能力を総合的に活用することに重点を置くべきである。また漸進式、蓄積式、反復式を重んじる教材編集の基本要件を満たすには、学年ごとに徐々に教材の難易度を上げ、小中学校九年一貫カリキュラムの教材と整合性を持たせる必要がある。教材は全6巻で構成され、高校3年間にわたって使用する。内容の編集にあたっては多様なテーマを取り入れ、生き生きとした活発なアクティビティの設計を通して、リアルな生活シーンでの応用と整合性を持たせるべきである。第一学年は、ヒアリング、スピーキング、リーディング、ライティングを同時に重視した総合的なカリキュラムとなっている。第二学年、第三学年は継続してヒアリング、スピーキング、リーディング、ライティングの練習に加え、さらに読書と作文能力の育成に力を入れなければならない」

以上のように、4技能の統合した能力の向上に留意すること、小学校・中学校からの連携を考慮し、徐々に難度を上げて指導すること、多様な題材テーマと活動を扱うことなどがなげられている。最後に、読書と作文能力の育成に重点が置かれていることがわかる。

一、「編纂の原則」の（五）各課本文の内容 には以下の記載がある。

##### （五）各課本文の内容

各課本文の題材を選定するにあたっては、知識度や面白さ、実用性、啓発性を同時



に考慮すべきである。内容は生徒の生活背景や心の発達度合いに応じて、倫理教育や男女平等教育、法治教育、人権教育、環境教育、消費者保護、生涯プランニングなどの関連テーマを各課本文の中に取り入れ、生徒の人文教養を高めるだけでなく、尊い命と持続可能な地球の発展への思いを心に奥深く根付かせなければならない。

以上のように、「民主化」のトピックが題材内容として挙げられている。

二、「編集方法」では、「(二) 語彙やフレーズ、文法・文型は、各課本文に合わせて紹介した後、テキストや練習の中で繰り返し教え、生徒が温故知新を実践できるようにしなければならない」との記載があり、文法事項を各課の「本文」を通して指導することが書かれているのは、1962年「課程標準」より続いている。

三、「教育指導教材」には、教科書などの教材の編纂はこと細かに書かれており、教科書が6巻の構成であること、各巻の課数が10課から12課というのも1948年「課程標準」以来大きく変わりはない。

また、「伍、実施方法」では以下の記載が注目できる。

#### 一、教材選びと編集

- (一) 教材選びと編集にあたっては、小中学校カリキュラム九年一貫制と整合性を保ち、教材の内容も時代や将来を見据えたものにしなければならない。
- (二) 高校の英語教材は、各学校が査定を通った英語教科書の中から一番優れているものを選んで使うか自ら編集した教材を使うことができる。教科書の選択にあたっては、各学校生徒のレベルに合わせ、多様な題材やスタイル、多文化要素を取り入れながら選ぶほか、倫理教育、男女平等教育、法治教育、人権教育、環境教育、世界の永遠の発展、消費者保護、生涯プランニングなどのテーマをテキストの中で広く取り扱った教科書を選び、生徒の人文、社会、科学技術への知性を高め、国際問題や外国文化への理解を育まなければならない。

以上のように、各学校が主体的に教科書を選択でき、かつ自ら編集した教材も使用できるようになった。また、小中学校とのカリキュラムに整合性を持たせることが重要な点であることは言うまでもなく、教科書の題材についても倫理教育男女平等、法治・人権教育、環境教育など、民主的な内容が書かれていることが示唆される。その他、日本では20年たった現在、高校教育の中で使用されるようになった環境保護などが記載されていることなどが着目できる。グローバルな地球環境へ一歩進んだ題材テーマが掲げられているといえよう。二、「指導方法」では、生徒の練習や活動を授業の中心にするように明記され、「評価」も授業内の活動を重視したものとなる。

「伍、実施方法」の中の、三、教育指導（授業）に関する評価

「...特にファイルに基づく評価方式をより多く取り入れ、さまざまな学習アクティビテ

ィにおける生徒の成績を詳細に記録するとともに、関連作品をまとめて個人ファイルとして整理、保存し、評価する際の参考にすべきである」という記載からはポートフォリオの概念が早くも取り入れられていることがわかる。さらに、「評価基準」の項では、「(三) ペンと紙を併用するほか、スピーキングやヒヤリングテストまたはレポートなどの異なる方式を採用する多様な評価スタイルを取り入れると同時に、インターネットを利用して生徒に対する教育指導（授業）の評価を行うことができるようにしなければならない」、「(四) 評価は、言語分野（発音、語彙、文法）と言語应用能力（聴く・話す・読む・書く言語能力）をカバーすべきであり、前者より後者の方を重視しなければならない」など、授業内外での生徒の活動を重視した「評価」、そして、ポートフォリオの作成を指示していることが注目できる。また、教員の自由度が増していることも大きな特徴である。

## 第7節 2008年（民国97年）「普通高級中學必修科目「英文」課程綱要」

第6節で述べた「暫行綱要」（2005）を基に教科書が編纂・出版された。その教科書の3年間の試行期間を経て、さらに改訂の後、公布されたものが2008年「課程綱要」である。両者の間には共通点が極めて多い。2008年改訂の「普通高級中學必修科目「英文」課程綱要」は、小学校の正式な英語教育の導入による小学校からの一貫した英語教育を見据えて大きく改訂されたものである。さらに、普通高校と職業高校に分けて英語の「課程綱要」が作成されたのも大きな特徴の一つである。

まず2008年の「課程綱要」は「暫行綱要」と同様に、言語能力については「～ができる」という表現の「can-do statements」で記載された。また、「基本能力（普通レベル）」と「進級能力（上級レベル）」に分けての記載は「暫行綱要」から継続された。

「can-do statement」は Common European Framework Reference (CEFR) で使用されている。台湾の「課程綱要」で、この can-do statement が使用されたのは、この表示方法を採用することによって、より明確に能力を表すことを考慮し、同時に国際的に通用する標準を目指すものと考えられる。また、「基本能力（普通レベル）」と「進級能力（上級レベル）」に分けての記載は、個々の生徒の能力にあわせた指導を配慮したものである。1990年代以降、台湾の英語教育の課題の一つである「教育格差」の是正策の一つとして出された（1章参照）。

構成においても2005年「暫行綱要」に準じている。まず、「課程目標」が記載されたのち、「中核的能力」の項があり、「中核的能力」とは「基本能力」と「進級能力」の両方を含むと書かれており、二つに分けて4技能別に記載されている。「基本能力」には高等学校（高等学校と高級職業学校、および5年生専門学校の前期3年間）の共通した課程で備えるべき英語能力に相当し、高校1年生では「基本能力」のみとなり、「進級能力」は高校2年生、3年生で追加して備えるべき英語能力に相当するとの記載がある。「暫行綱要」に比べ、よ

り詳しい記載となっている。以下、「言語能力」、「論理的思考、判断および想像力」、「学習方法」、「学習の興味および態度」、「文化教養と世界観」をそれぞれに分けて記載している。次に「時間配分」、そして、「教材の概要」と続く。「教材の概要」では、「編纂の原則」、「編纂の方式」、「教学の資料」とあり、1995年版以来同様となる。次は「実施要点」で「教材の選別編集」、「教育の方法」、「教育の評価」、「教育資源」の4部からなるのも「暫行綱要」と同様である。

まず、「課程目標」については以下のようになる。

#### 壹、課程目標

普通高校における必修科目である英語課程は、一貫した小学校・中学校の英語教育に続いて、生徒の英語能力を高め、将来の進学あるいは就職に備えるためのものである。課程の目標は学習方法と論理的思考訓練および興味を持たせることを含み、さらに文化の理解を通して視野の広い世界観を育成することである。

普通高校における英語課程は、以下の教育目標を達成すべきである。

- 一、英語を聴く・話す・読む・書く能力を高め、実生活での交流に応用する。
- 二、英語による論理的な思考、分析、判断および整合・創造の能力を育成する。
- 三、効果的な英語学習方法を構築し、生徒の独学能力を高め、生涯学習の基礎を定める。
- 四、英語学習への興味と積極的な学習態度を育て、各領域の知識を積極的に吸収し、人文社会・科学技術の知識と才能を高める。
- 五、多元的な文化に対する理解と尊重を促進し、国際的視野および世界の永遠の発展という観念を養成する。

2008年改訂「課程綱要」の大きな特徴は「目標」に表れている。まず、「一貫した小・中学校の英語教育に続いて、生徒の英語力を高め、将来の進学あるいは就職に備えるためのものである」という項目があり、一貫し継続した英語教育を目指していることが「暫定綱要」より増して明確に記されている。「暫行綱要」では4つに分かれていた目標が、「課程綱要」では「二、英語による論理的な思考、分析、判断力および整合・創造の能力を育成する」という項目が加わった。これは後述する「基盤となる教授法」などの教科書作成に大きな影響を与える要因となってきた。

次に本研究に直接関わる題材内容については、「課程目標」に「四、英語学習への興味と積極的な学習態度を育て、各領域の知識を積極的に吸収し、人文社会・科学技術の知識と才能を高める。」「五、多元的な文化に対する理解と尊重を促進し、国際的視野および世界の永遠の発展という観念を養成する。」と書かれており、英語学習を通して、人文社会・科学技術の知識を高めることが明記されている。さらに、国際理解が文化を中心に行うことが図られ、世界の発展という観念からは平和や環境問題が意味されているものと思われる。すな

わち、文学的教養に加えて広く世界の情勢を知る国際理解、そして科学的な新知識の 3 項目に重点が置かれている。英語を通して各領域の学習をする CBI, CLIL の指導法への繋がりもまた明確である。

続く「中核的な能力」について検討する。特徴的なものは以下になる。

## 貳、「中核的な能力」

### 一、言語能力

#### (五) 聴く・話す・読む・書く総合应用能力

#### 1、基本能力

- (1) 英語で短文や物語などを正確かつ流暢に朗読できる。
- (2) 学んだ語彙と文型をマスターし、授業および日常生活の中で適切に応用できる。
- (3) よく使う表を読み取れ、また書くことができる。

#### 2、進級能力

- (1) 聴く・話す・読む・書くという各項目の言語能力を身につけ、各交流場面で適切に応用できる。
- (2) 日常生活の会話, 簡単な物語あるいは放送を聞き取り, しかもその要点を簡単に話し, あるいは記録することができる。
- (3) 物語や短文を読み取れる。さらにその大意を短い文章で話し, あるいは書くことができる。
- (4) 日常交流の手紙, e メール, 伝言, 祝賀カード, 招待カードなどを読み取れる。さらに口語あるいは書面で応答できる。
- (5) 口語あるいは筆記の形で中国語, 英語の文章あるいは段落を訳すことができる。
- (6) 英語で要点を簡単に話せ, あるいは書ける。

## 二、論理的思考, 判断および創造力

### 1、基本能力

- (1) 各種類の情報を比較, 分類, 整理できる。
- (2) 文の前後の意味に基づいて異なる情報間の因果関係を整理できる。
- (3) 客観的な事実と主観的な意見を分別できる。

### 2、進級能力

- (1) 幾つかの情報の共通点或いは結論を分析し, まとめることができる。
- (2) 習得した原則を類推し, 新しい場面で問題を解決できる。
- (3) 現在持っている情報をまとめ, 可能な発展を予測できる。
- (4) 異なる資料の情報を評価し, 合理的な判断あるいは建設的な意見を出せる。
- (5) 資料の情報および資源を整理、統合し, しかも創意を発揮できる。

#### 四、学習の興味および態度

##### 1、基本能力

- (2) 授業以外の英語の多角的な素材，例えば小説・新聞・雑誌・映画，歌，放送・インターネットなどに接触するのが好きである。
- (4) 物語，雑誌およびその他の課外読本を読んでみるのが好きである。

##### 2、進級能力

- (1) 授業以外の英語の多角的な素材，例えば小説・新聞・雑誌・放送・テレビ・映画，歌，インターネットなどに積極的に接触するのが好きである。

#### 五、文化教養と世界観

##### 1、基本能力

- (1) 外国の主な祭日，風俗習慣および風土・習慣を認識することができる。
- (2) 異なる文化や風俗習慣を理解，尊重することができる。
- (3) 我が国の主な祭日の英語での言い方を知ることができる。
- (4) 簡単な英語で自国と外国の風土・習慣を紹介することができる。
- (5) 基本的な世界観を持つことができる。

##### 2、進級能力

- (1) 外国の風土・習慣を理解，鑑賞することができる。
- (2) 国際社会の基本的な生活作法を理解することができる。
- (3) 自国と外国との文化の異同を比較し，またその源を理解することができる。
- (4) 英語で我国の風土・習慣を紹介することができる。
- (5) 国際情勢を理解し，国際的視野を持つことができる。
- (6) 知識と語学力をいかし，生活の中で生じた実際の問題を解決することができる。
- (7) 地球村の観念および生命を尊重し，世界が永遠に発展していくという観念を養成できる。

まず「一 言語能力」については、「4 技能の総合運用能力の養成（聴く，話す，読む，書く）」という項目が加わり，4 技能を個々のものではなく，統合することの重要さに力点を置いていることが，「暫行綱要」と同様に指摘される。次に，「一 言語能力」の「(5) 聴く・話す・読む・書く総合応用能力」項では，「進級能力（上級レベル）では，「日常の交流の手紙，eメール，伝言，祝賀カード，招待カードを読み，これに対応できる。」とあり，様々な形での英語の文章を扱うことが書かれていることが特徴であろう。また，「四 学習の興味および態度」の項では，基本能力（基礎レベル），進級レベル（上級能力）ともに，「授業以外の英語の多角的な素材，例えば小説・新聞・雑誌・映画，歌，放送・映画，歌，インター

ネットなどに接触するのが好きである。」、「物語、雑誌およびその他の課外読本を読んでみるのが好きである。」との記載があり、いろいろな形態の題材内容が奨励されており、中でも小説、読書が重視されていることが指摘できる。全体的に「暫行綱要」より詳細な記載になっている。

次の二、「論理的思考、判断および創造力」の育成については、「基礎レベル（1）各種類の情報を比較、分類、整理できる。（2）文の前後の意味に基づいて異なる情報間の因果関係を整理できる。（3）客観的な事実と主観的な意見を分別できる」、「上級レベル（2）習得した原則を類推し、新しい場面で問題を解決できる。（3）現在持っている情報をまとめ、可能な発展を予測できる」など、タスクベースの問題解決型の指導で習得でき得る能力が記載されており、改訂版ブルームのタキソノミー（Anderson & Krathwohl, 2001）による認知力の分類との類似点があることが指摘される。すなわち、「証拠に基づく論理的で偏りのない思考」という「批判的思考（critical thinking）の意味合いも含有されていることが示唆される。

最も題材内容に関係していると思われるのは「五、文化教養と世界観」で、「基本能力（基礎レベル）」、「進級レベル（上級能力）」ともに、「（1）外国の主な祭日、風俗習慣および風土・習慣を認識することができる。（3）自国と外国との文化の異同を比較し、またその源を理解することができる。（4）英語で我国の風土・習慣を紹介することができる。（5）国際情勢を理解し、国際的視野を持つことができる。（7）地球村の観念および生命を尊重し、世界が永遠に発展していくという観念を養成できる。」と記載されており、異文化理解、国際理解、自国の文化の理解と表現、平和、環境問題が重視されている。この題材内容の選定にも「民主化」の流れが色濃く反映されている。

台湾の「課程綱要」では、「目標」で明確なように、文学的教養に加えて広く世界の情勢を知る国際理解、そして科学的な新知識の3項目に重点が置かれている。これに対して日本の2009年改訂「高等学校学習指導要領」外国語には、「文学」という文言は見当たらず、「物語」という表現がいくつかあるに過ぎない（文部科学省）。この点については、本研究の調査結果とも深く結びついており、第5章第1章の検討事項としたい。

参、「時間配分」については、週4コマ（時間）となり、「暫行綱要」と同様、1995年以前より少なくなった。

肆、「教材の概要」については、教科書の編纂、内容、そして指導について事細かに記載のあった2005年「暫行綱要」と同様に、1995年版に比べ、全体的な規制がゆるくなっていることが指摘できる。「教材については教師が自ら編纂する」という文言が加わっているのが特徴である。これはこれまで以上に教師への権限を与えているといえるであろう。さらに、教科書で扱う本文については、基礎教材では常用率が最も高い4500語を優先的に選ぶこと、進級教材では4500語から7000語までのものを選べるようになった。このように、幅を持たせ、学習者に合わせた指導ができる傾向になったといえよう。「編纂の原則」については特徴的な部分を以下に抜粋する。

## 肆、「教材の概要」

### 一、編纂の原則

#### 5. 本文の内容

本文の材料選びは多様化すべきであり、知識性、趣味性、実用性および啓発性に配慮を加えるべきである。内容は生徒のその他の領域における学習と結びつけて、科学の発展、社会の変動および世界情勢に合わせて、各種の新しい知識を紹介することによって、生徒の知能を高める。また、生徒の生活背景と心理知能の発展に合わせるべきであり、生命教育、男女平等の教育、法治教育、人権教育、環境保護の教育、海洋教育、多元的文化、消費者保護の教育、生涯計画などと関連する話題を取り入れ、生徒の人文教養を高め、生命の尊重および世界の永遠の発展という観念を深く取り入れることを期待する。

以上のように、生徒の生活背景と心理知能の発展にあった題材内容を選ぶべきであり、特に、生命教育、男女平等の教育、法治教育、人権教育、環境保護の教育、海洋教育、多元的文化、消費者保護の教育、生涯計画に関係するものを選ぶように細かな指定があることも2008年版の特徴である。全体的には、人文教養に加えて生命の尊重、広く科学の発展や社会や世界の情勢を知る国際理解に重点が置かれている。さらに、生命教育、男女平等、人権教育など、具体的な項目が挙げられ、民主化に関係した人権や法治国家など、多元的な題材を取り上げており、大きな変化といえる。

また、「論理的思考を運用」という文言が「目標」、「言語能力」のみならず、随所に加わり、単に覚えるだけではなく、「判断力や分析力を養う」ことに重きが置かれるようになったことは大きな変革といえよう。加えて、「教育の内容、教え方、評価の方法など」において「多元化」の表現が見られ、扱う内容、教材、主題も広範囲で多元的な扱いを促している。

「実施要点」については、1995年版と違いとしては以下があげられる。「教える際、課題を中心としたタスクベースの活動を行い、生徒が学んだ語彙、短文および文法を上手に運用し、それにより日常生活の交流に応用するように導く」という文言が加わり、タスクベースであり、同時に「生徒主体の教育活動」が重視されている。タスクベースな活動は **communicative language teaching (CLT)** から派生したアプローチの一つであり、コミュニケーション重視の指導が明確に打ち出されている。タスクベースという文言は「暫定綱要」では記載されていない。この教授法と「活動」についての議論は第5章第2節に続く。

「聞き取りと会話の教育は適当な状況で各種の活動を設ける」など、会話に重点が置かれる記載が多く見られるようになった。さらに、「作文教育は学年に従って進み、…作文の内容の構築、企画、文の構成、文章の校正などを含む作文を書く過程の重要性を強調するべきである」という記載でもわかるように、「書くこと」へのさらなる重視が指摘できる。また、発音指導に関する記載がなくなったことも大きな違いであろう。この点については第5章第2節と第6章第3節で後述するが、教科書にも反映している点で、検討に値するものである。

特徴的な項は以下に抜粋する。

#### 「伍、実施要点」

#### 二、教育指導（授業）の方法

- (一) 聴く・話す・読む・書くという四項目の能力の訓練および整合，運用に配慮を加える。教える際，課題を中心とした (task - based) 活動を行ない，生徒が学んだ語彙，短文および文法を上手に運用し，それにより日常生活の交流に応用するよう導く。

「三、教育指導（授業）の評価」については，改訂後では細かな記載が減っているのが特徴である。新たに加わったこととしては，「生徒の能力に応じて異なった方法で試験をする」，「教育評価の質を検証するために，信頼性のある英語検定試験を柔軟に利用する」という記載が加わっている。これは，GEPT (General English Proficiency Test) などの英語検定を意味するものと思われる。GEPT とは，2002 年から実施された台湾独自の英語検定として，近年，その開発に力が入れられてきたものである。Common European Framework Reference (CEFR) の骨組みに則って作られたものであるが，そのほかの英語検定試験も含め，「課程綱要」では，積極的に教育の中に取り入れる方針が示されている。

以上のように，2008 年版「課程綱要」は小学校の正式な英語教育の導入による小学校からの一貫した英語教育を見据えて様々な点が改訂された。「目標」でも明確なように，人文教養に加えて生命の尊重，広く科学の発展や社会や世界の情勢を知る国際理解に重点が置かれている。英語による論理的思考力の育成を心がけ，実用英語力の育成のためタスクベースの活動を組み入れ，生徒の認知発達にあう題材を選び，民主化と人文，科学，社会の発展に関わる多面的な内容を扱うように具体的な記載がされているのもその特徴といえよう。

### 本章の小結：変遷の概観

以上のように，「課程標準（綱要）」の「目標」の記載は，戒嚴令下では「(中華) 民族文化」と「三民主義」などを重視した内容となっており，戒嚴令解除後は，「民主主義」，「人權」，「福祉」，「環境保護」，「台湾の文化」などに変化が見れた。最後に，7 つの課程標準（綱要）の特徴を比較し，その傾向と変化の様子を表 2-1 に沿ってまとめていく。

まず 1948 年「課程標準」では，英米の近代文学の散文や詩を教材として用い，科学的，趣味的な要素も含めることが示されている。英語教育の中で，西洋文化を中心とした国際理解と (中華) 民族的な精神を啓発すること，愛国主義という文言もある。4 技能では特に「読む」能力に重きを置いていることがわかる。

1962 年「課程標準」は，大筋は 1948 年を踏襲している。英語学習において 4 技能の育成に心がけるとともに，体系的な語彙，熟語，文型，文法の指導が開始されている。とは言



え、「読み」を中心とした訳読式教授法を重視しているのは、当時の英語の必要性からすれば当然のことかもしれない。1960年代は工業生産の成長率が農業生産の成長率を上回り、加工輸出工業に転換する時期であり、国際貿易には「読む」英語は必須である。英語教育の体制が整ってくると同時に英語の授業時間も増加し、「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」に分けての記載があることも大きな特徴である。

1971年「課程標準」は、1962年に続き、「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」の別がある。その後はこの記載は現在に至るまで見られない。英語授業時間も1962年と同様に若干他の年代より多く、「社会科学系生徒」では6・7時間となっている。教材は英米作家の近代文学中心という文言は1948年からおおむね変化はない。新しく4技能重視の文言が入る。

1983年「課程標準」から「教材の概要」に、これまであった「民族意識を喚起したり…」は残したまま、新しく「民主主義」の文言が加わったことは大きな変化である。戒厳令解除前のこの時代に、すでにその兆しの見える内容となっている。指導では「他教科との連携」が記載され、将来のContent-based instruction (CBI) や Content and Language Integrated Learning (CLIL) に引き継がれるものである。1983年から「人生の意義を啓発し…」の文言が入り、現在に至る。

1995年「課程標準」からは、文字通り多様化と民主化の色調が入る。2005年「暫行課程綱要」からは「基礎能力」と「進級能力」の二つに分けられるようになり現在に至る。論理的思考力、批判力・判断力、創造力の文言が入るのも2005年からである。2008年「課程綱要」は、さらに「教材の概要」に民主化、本土化（台湾化）の色が顕著に表れるようになる。

「課程標準（綱要）」の記述の大きな変化は、戒厳令下と戒厳令解除後で明らかに違い、その変化は、1980年代以降の社会情勢に反映していることが明らかとなった。具体的文言としては、「愛国心の養成」から「民主化」、「本土化（台湾化）」に変化していく。これらの記述の変化が、各準拠版教科書にどのように影響されているかを、次章で考察する。

以下は、各「課程標準（綱要）」を項目ごとに比較したものである。

表 2-1: 戦後台湾「課程標準」「課程綱要」の変遷

	1948 年 (民国 37 年) 版	1962 年 (民国 51 年) 版	1971 年 (民国 60 年) 版	1983 年 (民国 72 年) 版	1995 年 (民国 84 年) 版	2005 年 (民国 94 年) 版	2008 年 (民国 97 年) 版
自然科学系 社会科学系 の別	分けない	自然科学系 社会科学系の別	自然科学系 社会科学系の別	分けない	分けない	分けない	分けない
基本能力 進級能力の 別	分けない	分けない	分けない	分けない	分けない	基本能力 進級能力の別	基本能力 進級能力の別
目標	「愛国主義」と 「国際理解を育む こと」を重視。英 文の詩や散文の理 解を学習の中心と し、それによって 西洋文化の理解	民族文化を学ぶ。「英 語で書いたり、翻訳す る力を養う」が追加	1962 年とおおむね同 様。英語の読み書き能 力を育成することに重 点	国際業務、科 学技術、民族 文化、 4 技能重視	芸能活動の鑑賞と 国際情勢、新しい 科学技術、国際理 解、4 技能重視	文学的教養、科学 の知識、多元的国 際理解、生命の尊 重。世界の永遠の 発展、4 技能の統 合・思考力育成	人文社会・科学技 術、多元的国際理 解、生命の尊重。 世界の永遠の発 展、4 技能の統合、 思考力育成
学習時間	5-6 時間/週	自然科学系 5-6 時間 社会科学系 6-7 時間	自然科学系 5-6 時間 社会科学系 6-7 時間	1, 2 学年 5/週 3 学年 6/週	5 時間/週	4 時間/週	4 時間/週
教材概要	英米作家の近代文 学を取り扱うこと が中心となってお り、文学的な意味 合い、そして科学 系のもの、さらに 趣味的なもの	英米作家の近代文を扱 い文学的な意味合い、科 学的、そして趣味関連	英米作家の近代文を扱 い、文学的な意味合 い、科学系や趣味に関 する記述を奨励	英米作家の近 代文を扱い、 文学的な意味 合い、科学系 や趣味に関す る記述を奨励	多様化させる。趣 味性、実用性、お よび生活性に依拠 する。生徒の生活 背景と心理知能の 発達に配慮	生徒の生活背景・ 心理・認知発達に 応じる倫理教育、 男女平等、法治教 育、環境教育、人 文教養を重視、生 命の尊重および世 界の永遠の発展	知識性、趣味性、 実用性および啓発 に配慮。生徒の生 活背景・心理・認 知発達に応じる。 倫理教育、男女平 等、法治教育、環 境教育海洋教育、 多元的文化、消費 者保護の教育、人 文教養を重視、生 命の尊重および世 界の永遠の発展

				「人生の意義を導いたり，民族意識を喚起したり，，民主的な風土および科学を探究する精神を養わなければならない」が追加	「人生の意義を啓発し，民主的な風格および科学を探究する精神を育成する」		
実施（指導）方法	4 技能平均的発達 「読む」ことに重点	「読む，書く」の他，英語を 4 技能の育成に心がけるとともに，体系的な語彙，熟語，文型，文法の指導が開始	これまでの「読む，書く」重視から 4 技能をバランスよく指導することに重点が移行	4 技能は同時に配慮，総合的に応用			
評価	なし	なし	なし	なし	専門家がなすべき	カリキュラムに合わせて行う。ファイル式に評価するのが望ましい。	カリキュラムに合わせて行う。ファイル式に評価するのが望ましい。

### 第3章 高校英語教科書の題材内容調査

台湾では、第2章で述べたように、戦後70年間（1945年～2015年）に「修訂中學課程標準」（1948年，1962年），「高級中學課程標準」（1971年，1983年，1995年）（以降「課程標準」），「普通高級中學課程暫行綱要」（2005年）（以降「暫行綱要」），そして「普通高級中學課程綱要」（2008年）（以降「課程綱要」）が公布された。本章では、それらに準じた各準拠版教科書が計量的にどの分野の題材を重視しているのか，どの分野に時代により変化が認められるかなどを調査する。一方，質的にどのような内容を扱っているかを確認するため，各課の「本文」の内容を調査する。以上のように，準拠版高級中学英語教科書の，それぞれ高校3年間分の教科書の各課で扱われている題材内容（全80巻1038課）における特徴と要因を，計量的・質的特色に基づいて明らかにすることを試みた。

#### 第1節 研究方法と背景

##### 1. 調査方法

調査方法は序章で述べたように，題材内容については計量的調査と質的調査を行った（序章，第3節2参照）。計量的調査として各分野に分類をした。このとき，客観的な分析の枠組みが必要であることから日本十進分類法（NDC）<sup>1)</sup>を用いた。本研究では先に述べたように，第1次区分（1桁，10区），第2次区分（2桁，100区分），第3次区分（3桁，1000区分）の1000区分に分類することとした。NDCについても序章に詳しい。質的調査については，「本文」を中心にそのメッセージ性や文章のトーンなどを指標にその特徴を探り，量的調査では拾いきれない部分を確認するため，「本文」の内容を調査した。

##### 2. 教科書審定制

台湾での高級中学教科書編纂と国立編譯館の審定はどのようなものであるかを「課程標準」，「課程綱要」の拘束力を含め確認する。1987年の戒嚴令解除前は，国立編譯館が高級中学および職業学校の教科書を審定したが，審査会議の主な仕事は教科書の構成の是非にとどまり，教科書の質や内容には介入しないものであった。高級中学（英語）においては1983年「課程標準」準拠版のみが国立編譯館主編教科書であったが，戒嚴令解除後の1989年には高級中学の教科書が（民間に）解放され，1995年「課程標準」準拠版からは再び民間教科書会社出版の教科書の審定制となった。この時点から現在までに至る教科書審定は，「高級中学法」に則っている。「高級中学教科書審定法」と「高級中学教科用書審定委員会設置の要点」など審査の法制を定め，「課程標準」，「課程綱要」に則ることを基本とし<sup>2)</sup>，その過程は公正で民主的な審査が行われるように努められている（楊，2011）。

このため、1948 年「課程標準」から 1971 年「課程標準」準拠版教科書までは、教科書の構成は一律にはなるが、主編者・編著者や出版社によって、扱う題材内容や前後の練習問題、そして言語活動には差異が認められるものであった。

## 第 2 節 1948 年（民国 37 年）「修訂高級中學英語課程標準」準拠版教科書

### 1. 調査教科書と調査対象課数

調査対象教科書と課数について説明する。戦後初めて改訂された「課程標準」が公布されたのが 1948 年（民国 37 年）である。台湾の英語教育における使用教科書と教授法の変遷については、李振清（2012）に詳しい。李によれば、沈亦珍らが編著し、1951 年から復興書局が出版した『高中英語』は早期に広く使用された正規英語教科書の草分け的存在である。台湾国家研究院の教科書図書館の蔵書を調査したところ、1950 年代に出版された復興出版のものが、シリーズ（第 1 巻～6 巻）で入手することができた。さらに、李によれば、正中出版のものが数巻あるようだが、シリーズでは入手できなかったため、1948 年「課程標準」準拠版教科書の調査では、この復興出版の総合英語の教科書『高中英語』I～IV の 6 巻を調査した。教科書編纂の様式は基本的には、現在まで大きくは変わっておらず、1 年間で 2 巻学習し、3 年間で 6 巻学習する作りとなっている。本シリーズでは基本的に 1 巻は 16 課からなっているが、*Book 1* のみが 14 課となっておる。このため、6 巻を合わせると各 94 課となる。調査題材数は全ての課数と一致するので、94 課分の題材を調査したこととなる。以下に掲げる表 3-1 を参照していただきたい。

表 3-1：1948 年(民国 37 年)「課程標準」準拠版調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	章数
<i>English Readers for Senior High Schools 1</i>	復興書局印行	1953	14
<i>English Readers for Senior High Schools 2</i>	復興書局印行	1956	16
<i>English Readers for Senior High Schools 3</i>	復興書局印行	1957	16
<i>English Readers for Senior High Schools 4</i>	復興書局印行	1957	16
<i>English Readers for Senior High Schools 5</i>	復興書局印行	1952	16
<i>English Readers for Senior High Schools 6</i>	復興書局印行	1954	16
計 6			Total 94

### 2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）

1948 年「課程標準」準拠版教科書の題材内容の掲載課数の多数比順位を前記の NDC の第 1 次区分の分類に従って示すと、以下の表 3-2 のようになる。第 1 位が「文学」で 33

課あり、全体の 35%を占めている。第 2 位が「哲学」で 20 課あり、21.3%を占めている。第 3 位が「歴史」と「社会科学」で、それぞれ 14 章あり、14.9%を占めている。第 5 位が「自然科学」で 5 課あり、5.3%を占め、第 6 位が「芸術」（3 課 3.2%）と続く。第 7 位が「言語」（2 課 2.1%），第 8 位が「技術・工学」，「産業」，「総記」（1 課 1.1%，となる（表 3-2，図 3-1 参照）。

表 3-2： 台湾の 1948 年「課程標準」準拠版高校英語教科書の題材内容の順位（第 1 次区分）

	<i>English Readers for Senior High Schools</i>						合計	%
	<i>Book1</i>	<i>Book2</i>	<i>Book3</i>	<i>Book4</i>	<i>Book5</i>	<i>Book6</i>		
総記	0	0	1	0	0	0	1	1.1
哲学	3	5	3	1	5	3	20	21.3
歴史	5	4	1	0	2	2	14	14.9
社会科学	2	4	2	0	3	3	14	14.9
自然科学	1	0	1	3	0	0	5	5.3
技術・工学	0	0	0	1	0	0	1	1.1
産業	0	0	0	0	1	0	1	1.1
芸術	0	1	0	1	1	0	3	3.2
言語	0	0	0	0	1	1	2	2.1
文学	5	2	8	10	3	5	33	35.1
計	14	16	16	16	16	16	94	100

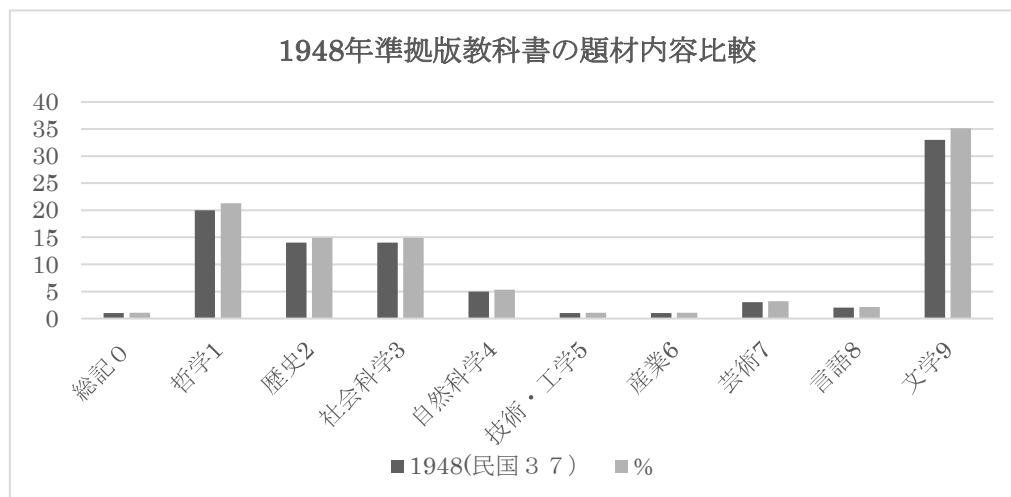


図 3-1： 1948 年「課程標準」準拠版教科書の題材内容比較（NDC 第 1 次区分）

次に、これらの結果を第 1 次区分で第 1 位の「文学」から順に、第 2 次区分，第 3 次区分に分類した。第 1 位の「文学」は 35.1%であり、全体の 3 分の 1 以上を占めている。その第 2 次区分をみると〈英米文学〉(930) が 1 位となっており、〈英米〉のものが圧倒的に多い。その中のさらに第 3 次区分は《英米小説》(“Beauty in China” Pearl Buck, *Book 6*)，《英米詩》(“The Charge of the Light Brigade” Alfred Tennyson, *Book 3*) が多く取り

上げられている。どちらもイギリス、アメリカの18世紀、19世紀の古典文学(Jane Austen, H. Longfellow)が取り上げられている。英米に次いで多いのはフランスでモーパッサンの作品である。《英米詩》については、1巻に1課程度は取り扱う傾向があるが、どの作品も古典的なものが多い。

これは、第2章でのべた1948年「課程標準」の「目標」や「教材の概要」の内容に順守していることが示唆される。1948年「課程標準」の「目標」では、「二、英文の詩や散文で英語の語学訓練を増進する」と書かれており、また「教材の概要」では「原則として英米作家の近代文を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか...」と記載されており、それらと一致するものである。

続く第2位は「哲学」で、20課が取り上げられている。その第2次区分では、内容のほとんどが〈倫理学〉(150)で、人生訓的なものが多い(“The Importance of Little Things” *Book 2*)。道徳や倫理観などを論じたものや美談などが多く扱われている。良い社会人となるための資質(“Truth and Honesty” Charles C. Everett, *Book 3*)など、多くの題材が英米の著名人の文章が使われていることも、先に示した1948年「課程標準」の「教材の概要」と一致する。

第3位は「歴史」と「社会科学」が同数で14課が取り上げられている。まず「歴史」では、その第2次区分では、多くが〈伝記〉であり、続いて〈紀行〉である。〈伝記〉では、アイザック・ニュートンやヘンリー・フォード(“Henry Ford” *Book 2*)など、イギリス、アメリカ、また、フランスのジャンヌ・ダルクが取り上げられている。〈紀行〉はイタリアのコモ湖やイギリスの湖水地方やのものなどヨーロッパのものが多い。また自然の美しさを謳うものがあり、これは中華文化の山水の美しさを立てる発想がうかがわれて興味深い。歴史では、古代ローマ史やドイツの中世史、フランス革命など、ヨーロッパが多く取り上げられている。

同じく第3位の「社会科学」は、その第2次区分では〈風俗習慣〉(380) (“The Romans at Table” *Book 2*)が多く取り扱われている。その他は〈国防・軍事〉(390)

(“The Last French Lesson” *Book 2*)が取り扱われている。これはアルフォンス・ドーデの短編小説「月曜物語」の一部を基にしたものである。「本文」の作品からの取り出し方から「社会科学」に分類した。日本では「最後の授業」として教科書でも扱われている。内容は、普仏戦争後にドイツ領となり、フランス語を使えなくなったフランス領のアルザス地方の学校の様子である。ある日、最後のフランス語の授業を先生が行い、フランス語の誇りを教える心に残る授業の様子が描かれている。当時の台湾の教科書審定が内容に踏み込まないものであったことを考慮しても、この内容は、今まで使用していた台湾語や日本語の使用を禁止され、北京語を強いられた当時の台湾の学校に置き換えられ、興味深い。これについては第5章第1節で引き続き論ずる。

その他、〈法律〉(320) (“The United Nations” *Book 6*)、そして〈政治〉(310)

(“President Chiang Kai-shek’s New Year Message”: 蒋介石のスピーチ *Book 5*),

（“President Chiang’s Double Tenth Message” *Book 6*）が取り上げられている。これらは、政治色の強いものであり、蒋介石の理念と三民主義が述べられており、あえて英語でこれを載せる意味を考えると、教育における思想教育とも解釈できる。しかし、全体的には西洋の文化や歴史を題材にしている。これ以降の区分の数は急に少数となり、「文学」、「哲学」、「歴史」、「社会科学」と他のものとの差が大きい。

第5位の「自然科学」は5課で扱われ、第2次区分では〈天文・宇宙〉（440）（“Your Trip to the Moon” *Book 4*）が多く、続いては〈地球科学・地学〉（450）である。

第6位は「芸術」で3課取り上げられている。〈絵画〉（720）（“Raphael, the Painter” *Book 2*）や〈音楽〉（760）（“The Moonlight Sonata” *Book 5*）ではベートーヴェンが扱われている。

第7位は「言語」で2課扱われている。特徴的なのは、マッカーサー元帥のスピーチが扱われていることであろう。歴史的に見るとマッカーサー元帥と中華民国には接点があり、第二次大戦後、連合国最高司令官のマッカーサーは日本軍に、中国戦区最高司令官蒋介石への降服を命じ、それに基づき台湾は中華民国政府に接收されることとなった。日本では取り上げる例を見ない題材であるが、台湾との接点を顧みるとその要因も見えてくる。

第8位が「技術・工学」、「産業」、「総記」で、各1課扱われている。どの分野でも、英米の著名な作家の文章が使われているものが多く、これは第2章で述べた1948年「課程標準」、「教材の概要」が順守されていることが示唆できる

以下表3-3は第2次区分と第3次区分の上位を示したものである。〈英米文学〉では《小説・詩》が多く扱われており、「哲学」では〈倫理・道徳〉が多く、「歴史」では〈伝記〉が多く扱われている。

表 3-3： 台湾 1948 年「課程標準」準拠版高校教科書の題材内容の順位  
（第2次区分と第3次区分）

第2次区分			第3次区分		
数	分類番号	内容	数	分類番号	内容
27	93 (文学)	英米文学	17	159 (哲学)	倫理学：人生訓教・教訓
18	15 (哲学)	倫理学・道徳	15	933 (文学)	英米：小説・物語
8	28 (歴史)	伝記	8	289 (歴史)	伝記：伝記
			7	931 (文学)	英米：詩

### まとめ

1948年「課程標準」準拠版教科書の特徴は、まず、「文学」を扱うものが圧倒的に多い（約35%）ことである。これは戦前までの訓詁的な外国語教育の継続であり、1948年「課程標準」に、「英米の近代文学の散文や詩を教材として用い、科学的、趣味的な要素も含



める」こと、4技能では特に「読む」能力の育成を重視していることが示されていることの反映であることが示唆される。

その他、「哲学」、「歴史」、「社会科学」が題材内容の分野として多く扱われており、内容は欧米の歴史的出来事や偉人が中心に挙げられている。その中で数は少ないが、中華民国に直接かかわる蒋介石のスピーチやマッカーサーのスピーチが扱われるなど、「課程標準」の「目標」に記載された「英米民族史跡の記載の中から愛国思想を育て国際理解を促進する」に通じるものがある。その意味においても「最後の授業」についてはさらなる調査が必要である。

### 第3節 1962年（民国51年）「高級中學英文課程標準」準拠版教科書

#### 1. 調査対象教科書と対象課数

1962年（民国51年）「課程標準」は戦後2度目の公布となる。前述の李（2012）によると、戦後台湾初期の英語教育および教科書編纂に貢献した人物の一人として英千里が挙げられる。彼は教育者として、多くの優秀な英語教育者を育て、同時に著名な教科書や参考書、辞書を編纂した。そこで、英千里が編纂した『英氏高中英語』のシリーズを調査することとした。研究対象となる英千里編の教科書は世界書局出版である。世界書局は1916年に上海で設立された（李，2012）。1947年に台湾政府が新聞処と編譯館を設立して出版事業の管理を始め、それに伴い大陸の出版社が台湾に拠点を設置し始めたが、世界書局も1949年に台北市に本部を持った。「英氏高中英語」については、国家教育研究院教科書図書館と国立台湾大学図書館にて、調査対象全巻を入手した。『英氏高中英語』は高校1年生用の（1，2巻），2年生用の（3，4巻），そして3年生用の（5，6巻）の合計6巻から成る。1巻から5巻までは各14課からなり、6巻のみ12課からなっており、合計82課となる。出版年は1963年～1968年である（表3-4-1参照）。

表3-4-1: 1962年「課程標準」準拠版教科書調査教科書と課数（世界所局英千里編）

教科書	出版社 編（著）社	出版年	課数 Reading Part
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 1</i>	世界書局 英千里	1963	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 2</i>	世界書局 英千里	1964	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 3</i>	世界書局 英千里	1964	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 4</i>	世界書局 英千里	1968	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 5</i>	世界書局 英千里	1968	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 6</i>	世界書局 英千里	1966	12
計			82

表 3-4-2: 1962 年「課程標準」準拠版教科書調査教科書と課数（正中書局 趙麗蓮編著）

教科書	出版社 編(著)社	出版年	課数 Reading Part
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> 1	正中書局 趙麗蓮編著	1971	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> 2	正中書局 趙麗蓮編著	1971	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (自然組)3	正中書局 趙麗蓮編著	1967	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (自然組)4	正中書局 趙麗蓮編著	1967	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (自然組)5	正中書局 趙麗蓮編著	1968	15
N 高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (自然組)6	正中書局 趙麗蓮編著	1966	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (社会組)3	正中書局 趙麗蓮編著	1968	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (社会組)4	正中書局 趙麗蓮編著	1968	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (社会組)5	正中書局 趙麗蓮編著	1968	15
高級中学英文 <i>English Readers for Senior Middle Schools</i> (社会組)6	正中書局 趙麗蓮編著	1971	15
計 10 巻			150 課

1962 年「課程標準」が 1948 年のものと大きく変化したのは「自然科学系生徒」と「社会科学系生徒」に指導内容を分けていることである。「時間配分」についても、「自然科学系」と「社会科学系生徒」ともに、1 学年では週に 5～6 時間の学習が定められており、2, 3 学年については「自然科学系生徒」では週 5 時間、「社会科学系」では週 6 時間が定められている。そこで、「自然科学系」と「社会科学系」の二種類に分かれた教科書の調査が必要であることから、戦後、世界書局と同じく中国大陆から台湾に拠点を設置して拡大していた正中書局の出版で、趙麗蓮編著の『高級中学英文』を調査することとした。対象教科書は第 1 学年は共通教科書を使い（1, 2 巻）、第 2 学年（3, 4 巻）、第 3 学年（5, 6 巻）においては、自然科学系、社会科学系に分かれて専用の教科書を用いる。したがって合計 10 巻となる。出版年は 1967 年から 1970 年となる。1 巻から 6 巻まで自然科学系、社会科学系のすべて 10 巻の教科書は 15 課から成っており、したがって調査課数は 150 課となる（表 3-4-2 参照）。ただし、計量的調査の際には、自然科学系と社会科学系を分けて調査する関係上、1 年生の共通教科書 1, 2 巻については数が重なることとなり、180 課の調査となった。これらの各課の題材内容について計量的調査と質的調査を行った。

## 2. 教科書分析の結果と考察

### (1) 計量的分析

計量的分析については、日本十進分類法を用いて分類し、英千里編『英氏高中英語』、趙麗蓮編著の『高級中学英文』については表 3-5 および図 3-2 のような結果になった。

英千里編『英氏高中英語』では、1948 年準拠版と同様に「総記」、「産業」、「芸術」、そして「技術工学」において扱われている数が少ない、もしくは扱われていない。同様に、「文

学」が最も扱われており、その他「哲学」，「歴史」，「社会科学」が多く扱われている。1948年度準拠版に比べ，若干「自然科学」が多く扱われているのが特徴である（1962年『英氏高中英語』7.3%，1948年『高中英語』5.3%）。

表 3-5：1962 年「課程標準」準拠版世界書局教科書題材内容第 1 次区分順位

	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会 科学 3	自然 科学 4	技術・ 工学 5	産業 6	芸術 7	言語 8	文学 9	小計
1962	0	12	14	10	6	1	0	0	7	32	82
%	0	14.6	17.1	12.2	7.3	1.2	0	0	8.5	39	100

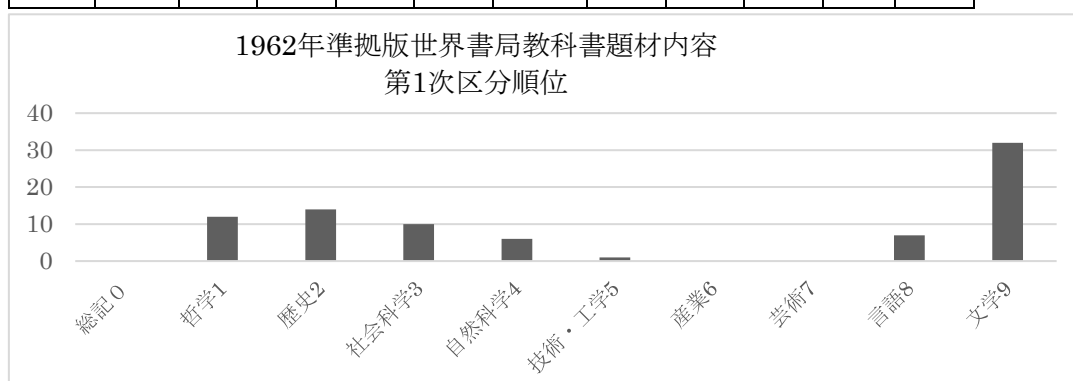


図 3-2：1962 年「課程標準」準拠版世界書局教科書題材内容第 1 次区分順位

一方，1962 年準拠版でも正中書局出版の趙麗蓮編著の「高級中学英文」は全ての分野を扱っている。1948 年準拠版と同様に「文学」を筆頭に「哲学」，「歴史」，「社会科学」が多く扱われているが，「自然科学」が増加しているのは，英氏編世界書局のもの以上の割合である。自然科学系と社会科学系のバランスは NDC の分野別ではほぼ同様であるが，自然科学系では「自然科学」，「技術・工学」が多く，社会科学系では「文学」，「哲学」，「言語」が多くなっている（表 3-6 および図 3-3 参照）。

表 3-6：1962 年「課程標準」準拠版正中書局 NDC 第 1 次分類

	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会科学 3	自然科学 4	技術・工学 5	産業 6	芸術 7	言語 8	文学 9	小計
1962（自然組）	4	13	12	12	16	8	1	2	2	20	90
1962（%）	4.4	14.4	13.3	13.3	17.8	8.9	1.1	2.2	2.2	22.2	100
1962（社会組）	6	17	10	14	6	2	1	2	5	27	90
1962（%）	6.7	18.9	11.1	15.6	6.7	2.2	1.1	2.2	5.6	30.0	100
合計	10	30	22	26	22	10	2	4	7	47	180
合計%	5.6	16.7	12.2	14.4	12.2	5.6	1.1	2.2	3.9	26.1	100

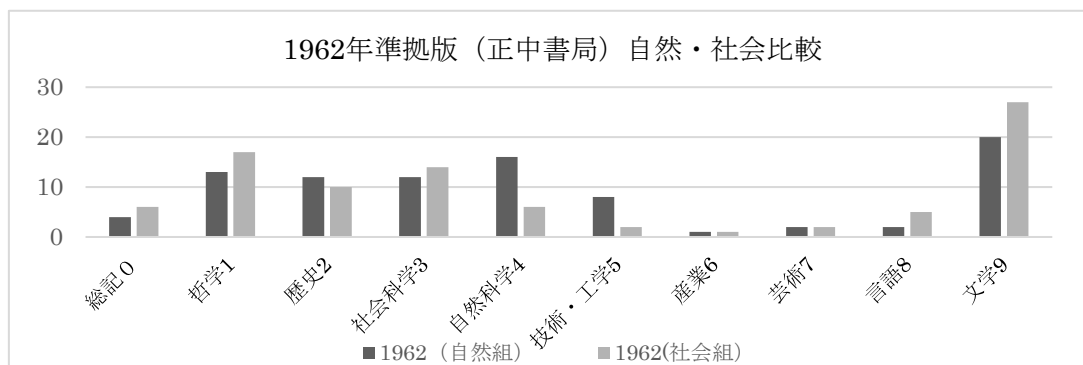


図 3-3: 1962 年「課程標準」準拠版正中書局 NDC 第 1 次分類

## (2) 各課の質的分析: どのような題材が扱われているか

『英氏高中英語』について、扱われている題材内容の傾向を、NDC 第 1 位の「文学」から見ていく。国別では、米、英の作品が同数扱われ、Mark Twain や Saki が扱われている。その他、中国では、「紅樓夢」(“The Story of the Hung Lou Meng” Book5), 林語堂(1895-76) の作品 (“Curly-Beard” Book2), 漢詩の英訳 (“The Man-wind and the Woman-wind” Book6) などが挙げられる。日本のものでは、ラフカディオ・ハーン の作品 (怪談“Aoyagi” とシェークスピア論) が扱われているのが大きな特徴である Book1 の“Baggy Pants”は異色の内容で、1956 年 1 月出版の『リーダーズ・ダイジェスト』からの引用であるが、第二次世界大戦中にフィリピンで日本兵に捕らえられた米兵の話である。これについては第 4 章で論ずる。

第 2 位の「歴史」については個人伝記が多く扱われている。ジャンヌ・ダルク (“The Maid of France” Book3), キュリー夫人 (“Pierre And Marie Curie” Book4) がそれに当たる。史実も扱われており、「アメリカ独立宣言」 (“The Declaration of Independence Book5), 「中華民国時代」 (“A Historical Kidnaping” Book2) などが扱われている。「中華民国時代」を扱った一つは、孫文のかつての医科大学の恩師である Dr. J. Cantlie が、孫文がロンドンから中国へ強制送還されるのを防いだ話である。社会的・政治的なものが多く扱われ、同時に師弟愛など「文学」同様に情緒的側面に触れるものもある。

3 位の「哲学」については、道徳、人生訓 (“Think Well, Then Decide Calmly” Book3, 竹のような粘り強さ、よく考えて決断するようになど若者へのアドバイス), 恋愛, キリスト教などがある。キリスト教は 2 課扱われており珍しい。

4 位の「社会科学」については、「歴史」と同様に政治・社会的なものが多く、中国人や中国文化の偉大さとそれが米国 (西洋) にもたらした貢献と中国への誇りを述べたもの (“Some Chinese Contributions to America” Book3), アヘン戦争の理不尽さと香港割譲の事実 (“Hong Kong: Past and Present” Book4) がある。ここでは同時にアヘンの密輸取り締まりを断行した林則徐という人物にも焦点を当て、人間の徳を描いている。多くが中華民国時代の対外国家との複雑な関係についての説明である。しかし決して否定的、敵対的な内

容ではなく、事実を客観的に語るものが多い。これについては第4章で考察を深める。

第1次区分が第5位の「言語」は、英語のスペルと発音 (“The Anomaly of English Spelling” *Book 4*)、語源 (“Words are Wonderful” *Book 6*)、文法・語法 (“Unlikable “Like”” *Book 4*) など、英語に関係した説明文が扱われているのが特徴である。

英千里編の1962年準拠版教科書の題材内容の特徴として以下の2点にまとめられる。まず、数多く扱われている「文学」では、英米の優れた作品を選び、小説・詩を紹介しており、これは1948年、その後の1971年準拠版と変わらない。異なる点としては、中国の作品を英語で紹介していることが挙げられる。さらに、社会問題や道徳など人間として成長を促す作品が教材として多く取り入れられている。

次に、政治的、社会的な題材が多いことである。とりわけ台湾とその周りの国々との関係に及んだ内容が多く扱われており、注目できるのは、不安定な政治状況や社会の不安を責めるのではなく、「人間愛」、「道徳」で解決することが重要という人間としての成長を促すものが多いことである。以上により、編著者である英千里の人物像をさらに深める必要性が示唆され、『英氏高中英語』については第4章で詳しく論ずる。

次に、1962年準拠版でも正中書局出版の趙麗蓮編著の「高級中学英文」では、1位の「文学」は英米文学がその大半を占める (“The Red Snake” 自然組 *Book 4*; アンナとシャム王, “At Their Own Funeral” *Book 2*; トム・ソーヤの冒険, “The Happy Prince” オスカー・ワイルド, 社会組 *Book 4*) 他、アンデルセンやイタリア文学 (“The Bell of Atri” 社会組 *Book 3*)、そして中国文学 (“The Three Lin Daughters” 林語堂 *Book 2*) など多岐にわたって扱われている。

2位の「哲学」では、中国古来の儒教、孫文 (“An Episode from the Life of Dr. Sun Yat-Sen” 社会組 *Book 3*) などが扱われ、ギリシャ神話、人生訓も多い。3位の「社会科学」は〈風俗・習慣〉で北京の道路の水まきの習慣 (“The Street -Sprinklers” *Book 1*) や戦争孤児の話 (“War Orphans” 社会組 *Book 3*) などがある。

4位の「歴史」では《個人伝記》がほとんどで、ヘレン・ケラー、ディケンズ、エジソン、アルキメデス、リンカーンなど欧米の偉人をはじめ、中国系アメリカ人物理学者の呉健雄 (“A Chinese Woman of Modern Science-Dr. Chien Shiung Wu” 自然組 *Book 3*)、中国人教育者などもある。台湾の教育者が扱われているのは極めて珍しい (“Wu Hsuin” 自然組 *Book 3*)。

5位の「自然科学」では、パブロフの条件反射 (“A Dog, a Bell, and a Baby Named Albert” 自然組 *Book 3*) やニュートンの万有引力や遺伝学、電磁気学、細菌学など広範囲に及んでいる。この他、「芸術」では写真やスポーツも扱われ、「技術・工学」では核問題も扱われ、点字の創作者など福祉も扱われ、幅広い内容を英語という言語を通して教えようとする編著者の意向がうかがえるものである。

以上のように、欧米の文化・社会その歴史を紹介し、言語の背景にある異文化理解を促す

ものを中心としながらも、1948年準拠版教科書には見られないほど、孫文、蒋介石、宋美齡などの人物を取り上げているのは、国民党政権が社会系教科などで行っていた国民化教育にも通じるものであり、この時代台湾の社会的・政治的な要因、そして編著者の背景を深める必要が指摘される。これについては、第4章、第6章第1節で論ずる。

### 3. 1962年「課程標準」準拠版世界書局と正中書局の比較

1962年準拠版世界書局と正中書局出版の教科書の題材内容をNDC第1次区分で比較したのが表3-7および図3-4である。どちらも「文学」が多く、その他、「歴史」、「哲学」、「社会科学」が多く扱われ、「自然科学」を扱う数も増えてきているのは同様の特徴である。一方、『英氏高中英語』は特定分野により集中している。「言語」が多いのも特徴である。正中書局のものが「三民主義」、「竹のカーテン」、蒋介石のスピーチ、そして宋美齡のエッセイなどを扱うなど、政治色が強く、内容も思想教育がうかがえるものがあるのに対し、『英氏高中英語』は同じ政治的な題材を扱っても、事実を述べるにとどまる中立性があることが大きな違いとして示唆される。

表 3-7: 1962年「課程標準」準拠版世界書局と正中書局のNDC第1次区分の比較

	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会科 学 3	自然科 学 4	技術・ 工学 5	産業 6	芸術 7	言語 8	文学 9	小計
正中書 局%	5.6	16.7	12.2	14.4	12.2	5.6	1.1	2.2	3.9	26.1	100
英氏編世 界書局%	0	14.6	17.1	12.2	7.3	1.2	0	0	8.5	39.0	100

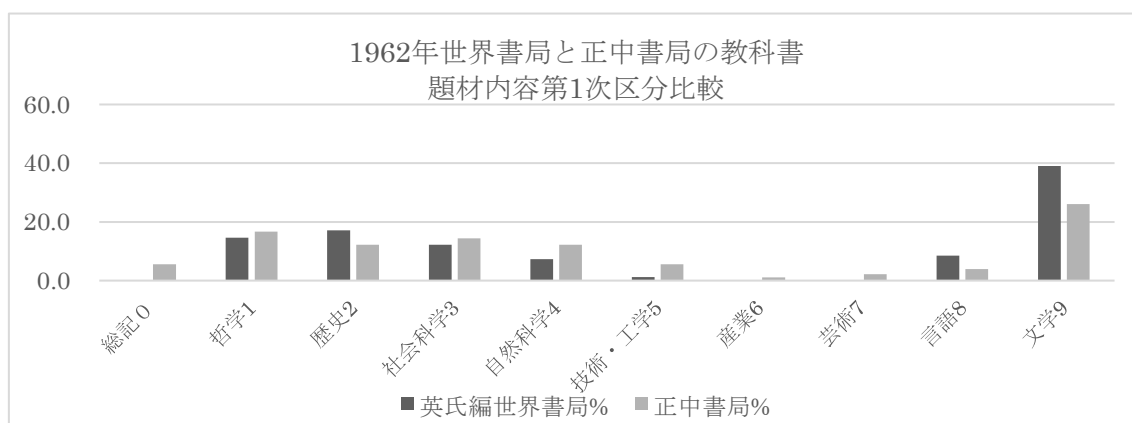


図 3-4： 1962年世界書局と正中書局の教科書題材内容第1次区分比較

## 第4節 1971年（民国60年）「高級中學外國文（英文）課程標準」準拠版教科書

### 1. 調査教科書と調査対象課数

調査教科書と課数について説明する。1971年（民国60年）に、戦後3回目に改訂された「課程標準」が公布された。前述の李（2012）によれば、1970年代に年になると中学校で英語が必修となったことに伴い、梁実秋らが編集した英語教科書が台湾各地の中学校、そして高校でも広く使われるようになった。その後、梁実秋が主編を務めた「遠東英語教科書」、および「遠東英語辞典」が多くの人に評価され使用された時期があった。そこで、台湾国家研究院の教科書図書館の蔵書を調査したところ、1970年代から80年代に出版された遠東出版のものが、シリーズで入手できた。

1971年「課程標準」準拠版の調査では、この遠東出版の総合英語の教科書である『遠東英文読本』を自然組、社会組共通教科書である1, 2の2巻、自然組用教科書3～6の4巻、社会組用の教科書3～6の4巻の合計10巻を調査した。教科書編纂の様式はこれまでのものと変わらず、1年間で2巻学習し、3年間で6巻学習する作りとなっている。第1学年で共通教科書を用い、第2学年、第3学年では「自然組」と「社会組」に分かれた教科書を用いることとなる。共通教科書の1と2のそれぞれ1巻15課からなっており、「自然組」、「社会組」ともに3～6まではすべて1巻14課からなっている。合計すると142課となる。調査題材数は全ての課数と一致するので、142課分の題材を調査したこととなる。次にあげる表3-8を参照していただきたい。

表3-8：1971年(民国60年)「課程標準」準拠版調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	課数
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 1</i>	遠東図書公司印行	1977	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 2</i>	遠東図書公司印行	1973	15
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 3</i> (自然組)	遠東図書公司印行	1978	15
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 4</i> (自然組)	遠東図書公司印行	1985	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 5</i> (自然組)	遠東図書公司印行	1979	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 6</i> (自然組)	遠東図書公司印行	1985	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 3</i> (社会組)	遠東図書公司印行	1984	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 4</i> (社会組)	遠東図書公司印行	1985	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 5</i> (社会組)	遠東図書公司印行	1975	14
<i>Far East English Readers for Senior Middle Schools 6</i> (社会組)	遠東図書公司印行	1985	14
計 10			計 142

なお、本調査では、遠東図書から出版されているシリーズ（10巻）の他、正中書局から出版されている教科書4巻（*Book 2*, *Book 4*, *Book 5*, *Book 6*）について加えて調査した。調査教科書は以下（表3-9）になる。

表 3-9：1971 年（民国 60 年）「課程標準」準拠版調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	章数
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 2</i>	正中書局	1983*	14
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 4</i>	正中書局	1984*	14
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 5</i>	正中書局	1984*	14
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 6</i>	正中書局	1984*	14
計 4			計 56

\*これらの教科書については、出版年が次に改訂された 1983 年を過ぎているが、1971 年版の「課程標準」準拠版である。

## 2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）

1971 年「課程標準」準拠版教科書「自然組」の題材内容の掲載課数の多数比順位を前記の NDC の第 1 次区分の分類に従って示すと、以下の表 3-10 のようになる。この調査では、「自然組」と「社会組」に分けて調査する関係上、共通教科書の 1, 2 巻の課数である 30 課が加算され、合計は 172 課となっている。

第 1 位が「歴史」で、第 2 位が「自然科学」、第 3 位が「社会科学」、第 4 位が「文学」、第 5 位が「産業」、第 6 位が「哲学」と続く。第 7 位が「芸術」と「言語」、第 9 位が「技術・工学」、第 10 位が「総記」となる（表 3-10、図 3-6 参照）。

「社会組」については、第 1 位が「歴史」、第 2 位が「文学」、第 3 位が「社会科学」、第 4 位が「哲学」、第 5 位が「自然科学」、第 6 位が「芸術」と続く。第 7 位が「言語」、第 8 位が「産業」、第 9 位が「技術・工学」と「総記」となる（表 3-10、図 3-5 参照）。

表 3-10：台湾の 1971 年「課程標準」準拠版高校英語教科書の題材内容の順位（第 1 次区分）

	<i>English Readers for Senior High Schools</i> （遠東図書）				合計	%
	自然組	%	社会組	%		
総記	1	1.2	1	1.2	1	1.2
哲学	5	5.8	8	9.3	13	7.6
歴史	21	24.4	22	25.6	43	24.4
社会科学	15	17.4	16	18.6	31	18.0



自然科学	16	18.6	6	7.0	22	12.8
技術・工学	2	2.3	1	1.2	3	1.7
産業	6	7.0	2	2.3	8	4.7
芸術	4	4.7	5	5.8	9	5.2
言語	4	4.7	4	4.7	8	4.7
文学	12	14.0	21	24.4	33	19.8
計	86	100	86	100	172	100

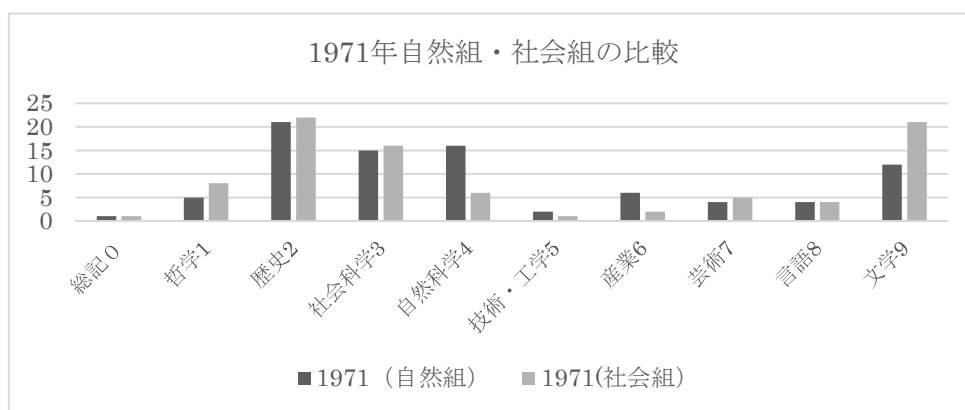


図 3-5 : 1971 年「課程標準」準拠版教科書（自然組）と(社会組)の題材内容比較

「自然組」の結果を、第 1 次区分で第 1 位の「歴史」から順に、さらに第 2 次区分、第 3 次区分に分類した。第 1 位の「歴史」は 21 課の扱いで、全体の 24.4%と全体の約 4 分の 1 を占めている。その第 2 次区分をみると〈伝記〉(280)が圧倒的多数(16 課)で 1 位となっている。その中のさらに第 3 次区分は《個人伝記》(“A Great Citizen”ベンジャミン・フランクリン *Book 1*)、(“The Story of Helen Keller” *Book 3*) など、アメリカのものが多く取り上げられている。リンカーンなど政治家も扱われているのも特徴であろう。その他はニュートン、マルコ・ポーロやコペルニクスなど日本でもなじみのある人物が取り上げられている。〈伝記〉の他は、先史時代やアメリカ合衆国の歴史、そして、アジア史、東洋史も含まれており、中国の万里の長城なども扱われている。

第 2 位の「自然科学」は 16 課取り扱われている。第 2 次区分では〈医学〉(490) (“Man and the Mosquito” *Book 4*) が多く、続いては〈動物学〉(480)である。特に注意を引くのは、〈医学〉の第 3 次区分において、現代、地球温暖化に伴って注目を浴びている《予防医学・感染症》の問題を 2 課扱っている (“Parasites and Hosts” *Book 6*) ことである。その他は〈気象学〉(450)、〈天文学・宇宙科学〉(440) などがある。

第 3 位は 2 位に僅差の「社会科学」で、15 課取り上げられている。その第 2 次区分では〈風俗習慣〉(380) (“Recreation in the United States” *Book 2*) が多く取り扱われている。その他は〈教育〉(370) (“The True End of Education” *Book 6*) や〈法律〉(320) (“Are You Willing to Admit Your Fault?” *Book 6*)、そして〈政治〉(360) (“Individual Liberty” *Book*

5) を扱っている。

次は第4位の「文学」で12課取り上げられている。その第2区分では〈英米〉のものが多く、《小説》が多く扱われている。その他、スペインのドン・キホーテやインドの仏教寓話などがある。

第5位の「産業」は6課取り扱われている。第2区分は〈農林水産業〉(610) (“A Rice Farmer Before Machines Came In” *Book 5*, “The Fight Against the Potato” *Book 6*) などがあり、当時は農業国であった点もその題材選択に反映していると思われ興味深い。

続く第6位は「哲学」で、5課が取り上げられている。その第2次区分では、が〈倫理学〉(150)で、人生訓的なものが多い (“The Challenge of Greatness” *Book 6*)。道徳や倫理観などを論じたものが多く扱われている。その他、〈先秦思想〉(120)で《儒教》を取り扱ったものがある (“Confucius” *Book 5*)。

第7位は「芸術」と「言語」で3課取り上げられている。「芸術」の第2次区分は〈音楽〉(760)や〈スポーツ〉(780)、そして〈写真〉(740)がある。「言語」は〈英語〉(830)などがある。第9位は「技術・工学」, 「総記」で、それぞれ1課扱われている。

次に「社会組」の結果を、第1次区分で第1位の「歴史」から順に、さらに第2次区分、第3次区分に分類した。第1位の「歴史」は22課の扱いで、全体の24.4%と全体の約4分の1を占めている。ただし、第2位の「文学」が21課扱っており、僅差で続いている。その第2次区分をみると〈伝記〉(280)が圧倒的多数(16課)で1位となっている。その中のさらに第3次区分は《個人伝記》, “The Life of Mark Twain” *Book 4* など、アメリカのものが多く取り上げられている。その他、イギリスやイタリア (“Christopher Columbus” コロンブス *Book 5*) も扱われている。〈伝記(280)〉の他は、先史時代や古代ギリシャ史などヨーロッパ史, エジプトなどのアフリカ史, そして、〈地理・地誌・紀行〉(290)でオセアニア(ハワイ)が取り扱われている。取り扱う国々に幅が出たのは、今後の傾向の先駆けとして注目される。

第2位の「文学」は21課取り扱われている。その第2次区分では〈英米〉のものが多く《小説》が多く扱われている。O. ヘンリー (“After Twenty Years” *Book 4*) やシェイクスピア (“Shakespeare: England’s Greatest Playwright” *Book 5*) が扱われ、インドの仏教寓話はあるものの、圧倒的に〈英米〉の作品を取り上げている。《英米詩》については、少数(3課)しか扱われていないことも、他と比較すると、1971年準拠版の特徴といえよう。

第3位は「社会科学」で16課扱われている。その第2次区分では〈風俗習慣〉(380) (“Recreation in the United States” *Book 2*) が多く取り扱われている。その他は〈教育〉(370) (“The True End of Education” *Book 6*) や〈社会〉(360)が扱われており、第3区分では、《社会福祉》 (“The Tree Days to See” ヘレン・ケラー *Book 6*) や《家族問題, 男性・女性問題》 (“Don’s Letter from College” *Book 5*) などにも扱われており、家族問題や福祉を取り上げるのは以降に続く傾向となり、興味深い。

第4位は「哲学」で8課取り上げられている。その第2次区分では、が〈倫理学〉(150)

で、人生訓的なものが多い(“Pass a Good Word Along” *Book 6*)。道徳や倫理観などを論じたものが多く扱われている。その他、〈先秦思想〉(120)で《儒教》を取り扱ったもの(“Confucius” *Book 5*)やキリスト教を扱うものがある。

続く5位は「自然科学」で6課扱っている。第2次区分では〈医学〉(490)である。特に注意を引くのは、「自然組」と同様に〈医学〉の第3次区分において、現代、地球温暖化に伴って注目を浴びている《予防医学・感染症》の問題(“Preventing Contagious Diseases” *Book 6*)を扱っていることである。1970年代の教科書で感染症の予防策に関する内容が英語の教科書で扱われているのは注目に値する。しかも、かなり高度の内容が扱われていることも題材内容の選択として考慮すべき点である。これは当時、大きな社会問題であった環境問題が反映された可能性がある。これについては第6章第3節で引き続き検討する。

第6位は「芸術」(5課)である。「第2次区分は〈音楽〉(760)や〈芸術〉(700)で《芸術史:ルネッサンス》(“The Glory of Renaissance Art” *Book 6*)を取り上げている。

第7位は「言語」(4課)である。第2次区分は〈英語〉、さらに第3次区分では〈音声・音韻〉なども取り上げている。「課程標準」に「音声」を重視する記載が増えたことも反映されている可能性がある。

第8位は「産業」(2課)で、第2次区分は〈通信事業〉第3次区分は《電気通信》で“Communication” (*Book 2*)がある。

第9位は「技術・工学」〈製造〉《繊維業》,「総記」〈ジーナリズム〉《新聞》,それぞれ1課扱われている。以下表3-11は第2次区分と第3次区分の上位を示したものである。

表3-11：台湾1971年「課程標準」準拠版高校教科書「自然組」の題材内容の順位  
(第2次区分と第3次区分)

第2次区分			第3次区分		
数	分類番号	内容	数	分類番号	内容
16	28 (歴史)	伝記	16	289(歴史)	個人伝記
9	9338 (文学)	英米文学	8	933 (文学)	英米：小説、物語
7	38 (社会科学)	風俗習慣・民族	8	383 (社会科学)	衣食住

「社会組」の第2次区分では、「文学」の〈英米文学〉が一番多く取り扱われており、続いて「歴史」の〈伝記〉,「社会科学」の〈風俗習慣〉が数多く扱われている。第3次区分では、《個人伝記》(「歴史」)が1位で、《英米小説》が続き、第3位には「社会科学」の《衣食住》となる(表3-12参照)。

表 3-12：台湾 1971 年「課程標準」準拠版高校教科書（社会組）の題材内容の順位  
（第 2 次区分と第 3 次区分）

第 2 次区分			第 3 次区分		
数	分類番号	内容	数	分類番号	内容
16	38 (文学)	英米文学	15	289(歴史)	個人伝記
20	28 (歴史)	伝記	15	933 (文学)	英米：小説、物語
7	38 (哲学)	風俗習慣・民族	6	383 (社会科学)	衣食住

「自然組」，「社会組」とともに「歴史」が一番多く取り扱われており，また，「社会科学」も数多く扱われている。「自然組」では，「自然科学」，「産業」が多く扱われている。それに対し「社会組」では「文学」や「哲学」が多く扱われている。1948 年準拠版に比べると全体的に「哲学」を重要視していたものが，「歴史」と「社会科学」へ移行したことがうかがわれる。内容については「自然組」と「社会組」で全く同じ内容の課も多く見受けられる。

### 3. その他の教科書題材内容調査（正中書局）の結果

前述のように 1970 年代から台湾では英語教育研究が盛んになり，教科書が広く普及され始めた。すなわち，最も主要である遠東図書以外の教科書はいかなるものであったのか，教科書会社によつての差異はないのかを調査することも必要であろう。そこで本調査では，上記に加えて，正中書局から出版されている教科書 4 巻（*Book 2*, *Book 4*, *Book 5*, *Book 6*）について調査した。正中書局からのものはどれも出版年が 1983 年と 1984 年であり，遠東公司印行のものにはない年代であった。NDC による分類結果については，本章では扱わないものとする。1983 年出版の *Book 2* の内容からみると，「社会科学」では“War Between Justice and Force”そして，“Our Anti-Japanese War”が第 1 課に用意されている。その他，第 8 課に，“One China under San Min Chu”があり，〈国防・軍事〉(390)や〈政治〉(310)が多く扱われている。同様に，〈歴史〉の分類では，第 2 課の“Dr. Sun Yat-sen”（孫文）があり，他のどの準拠版の教科書にも類を見ないほど，政治的な題材が多い。

同様に 1984 年出版の *Book 5* には「社会科学」として“The Chung Cheng Memorial Hall”があり，*Book 6* には「歴史」〈紀行〉の分類で万里の長城など中国の遺産を紹介したもの，「哲学」では，“Chinese Hospitality”として，中国の儒教を伝統として紹介したものなどがある。これについては 6 章 1 節で考察を深める。

### まとめ

1971 年「課程標準」準拠版教科書は，これまでの年代のものと大きく違う点は，扱う分野，そして国々に幅が出てきたことである。これらは，1971 年「課程標準」にある「英語の題材が他の課目と関連がある場合は，それらを組み合わせる」という記載の反映している。

分野では「哲学」が減少し，代わりに「自然科学」の増加が認められる。具体的な題材も，

地球温暖化や感染症など、環境問題にいち早い知見が認められる。これは当時の社会問題との関係が明らかとなった。扱う国々はアフリカ、アジアにも及ぶようになった。一方、当時の台湾の国際情勢からか、アメリカを扱うものが圧倒的に多いこともまた事実である。これについては後述する。

さらに他社の教科書研究からは、当時の審定教科書は前述のように内容には踏み込まない」(楊, 2011) ことから、教科書の主編者・編著者、出版会社によって、扱う題材に大きな違いが認められた。とりわけ、政治的な題材の扱いが多いのはいかなる理由によるものかは、当時の社会的背景からの深い考察が求められるものである。これについては第6章第1節で述べる。

## 第5節 1983年(民国72年)「高級中學外國文(英文)課程標準」準拠版教科書

### 1. 調査教科書と調査対象課数

調査教科書と課数について説明する。1971年(民国60年)に続き、戦後4回目に改訂された「課程標準」が發布されたのが1983年(民国72年)である。調査教科書と課数について説明する。これに準拠した教科書で、現在、台湾国家研究院の教科書図書館が蔵書しているものを調査したところ、改訂後間もない1984年から86年までは、いくつか(復興書局印行、正中書局、遠東公司印行、世界出版など)の出版社から出ているものが蔵書されていたが、これらはすべて1971年「課程標準」準拠版教科書であった。1990年代に入ると、1983年準拠版教科書は、国立編譯館主編のものとなる。国立編譯館主編の初版が1989年(民国79年)であるので、このころ、英語においては、国立編譯館主編のみの教科書に限定されたのではないかと思われる。1983年版の「課程標準」には、これまでには見られない細かな教科書についての編纂、内容、指導方法、そして評価についての指導がなされている。しかしながら、「国定の教科書を使用する」といった記載はされていない。国立編譯館主編の教科書の編纂は台湾師範大学の当時の主任教授である張芳杰が委員長となり、国立台湾師範大学の教授陣が中心に編纂が行われている。

本調査では、以上のことを鑑み、国立編譯館主編の『高中英文』のうちでも、何度か再販し内容も定着してきたと思われる1991年(民国79年)ら1992年(民国80年)のシリーズ(1巻～6巻)の6巻を調査した(表3-13参照)。教科書編纂の様式は基本的には、これまで調査したものとは大きくは変わらっておらず、1年間で2巻学習し、3年間で6巻学習する作りとなっている。各巻は14課からなっており、全部で6巻から成っているので、合わせると84課となる。調査題材数は全ての課数と一致するので、84課分の題材を調査したこととなる。1962年準拠版、1971年準拠版と継続された「自然組」と「社会組」にかけての教科書作成は1983年度版では、再び区別のないものに変更された。したがって、調査教

科書は全部で6巻となる。

表 3-13 : 1983 年(民国 72 年)「課程標準」準拠版調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	課数
<i>English Readers for Senior High Schools</i> 1	国立編譯館主編	1990	14
<i>English Readers for Senior High Schools</i> 2	国立編譯館主編	1997	14
<i>English Readers for Senior High Schools</i> 3	国立編譯館主編	1991	14
<i>English Readers for Senior High Schools</i> 4	国立編譯館主編	1992	14
<i>English Readers for Senior High Schools</i> 5	国立編譯館主編	1992	14
<i>English Readers for Senior High Schools</i> 6	国立編譯館主編	1992	14
計 6			計 84

## 2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）

1983 年「課程標準」準拠版教科書の題材内容の掲載課数の多数比順位を前述の NDC の第 1 次区分の分類に従って示すと、以下の表 3-14 のようになる。第 1 位が「社会科学」で 20 課あり、23.8%で全体の四分の一を占めている。第 2 位が「文学」で 17 課あり、20.2%を占めている。第 3 位が「自然科学」と「言語」で、それぞれ 9 課あり、10.7%を占めている。第 5 位は「哲学」で 9.5%を占め、第 6 位が「歴史」と「芸術」でそれぞれ 7 課あり、8.3%を占め、第 8 位が「技術・工学」(6 課 7.1%)と続き、第 9 位が「産業」(1 課 1.2%)である。「総記」は全く扱われていない(図 3-6 参照)。

第 1 位は「社会科学」、そして、第 2 位が「文学」という現在まで続くトップ 2 の流れが始まったのが 1983 年「課程標準」準拠版からである。1971 年は「歴史」が第 1 位で、1983 年版から「社会科学」がその数を増した。1983 年「課程標準」準拠版の教科書で扱われている題材内容の特徴を、ここで四点に分けて指摘したい。

まず、最も多くの題材が扱われている「社会科学」について述べたい。その第 2 次区分は、〈風俗習慣〉(380)が 10 課取り扱われ、続いて 9 課取り上げられている〈社会〉(360)と二分している。〈社会〉では、第 3 次区分は《労働経済・労働問題》(366)、《生活・消費者問題・余暇》(365)など、台湾が経済成長を遂げる 1980 年代の世相を反映している題材内容であることも興味深い。これまであった〈政治〉、〈法律〉は姿を消したのも特徴の一つであろう。この理由が何であるかは歴史を通した全体的な観点から後に検討することとする。しかしながら、1983 年度版の「課程標準」では、「教科書概要」では以下のような記載がある。「...特に人生の意義を導いたり民族意識を喚起したり、民主的な風土および科学探求精神を養わなければならない(下線筆者)。」このように、「民主的な風土」という文言が追加されている。これによって教育の中立性という観点から政治的なものが

排除されたとする推論は妥当であろうか。また、1987年の戒厳令解除との関係については後述する（第6章第2章）。

2点目は第2位の「文学」についてで、1971年準拠版では以前に比較して少なくなった《英米詩》が再び多く扱われるようになったことが挙げられる。すなわち、1巻に1課程度は取り扱う傾向がはじまり、これは、1995年準拠版、2008年準拠版と現在まで続く傾向である。これについても後に検討する。

3点目は日本のその当時の高校英語教科書との関連である。ここでは《英米小説》、《英米詩》ともに、イギリス、アメリカの18世紀、19世紀の古典文学ヘミングウェイ、O.ヘンリーなどが取り上げられている。とりわけ「詩」については、日本の教科書からの引用がある（“Two Poems” *Book 2*）。これは、Emily Dickinson と James Stephens が取り上げられたものであり、日本の東京書籍の教科書（*New Horizon English Readers 2*）から引用されている。このことから、日本の教科書が台湾の教科書編纂の参考になっていた可能性が示唆される。筆者の台湾における実態調査<sup>3)</sup>からは、戦後英語教育の中心的役割を担ってきた国立台湾師範大学附属図書館には多くの日本の教育書や日本の英語教科書とそれに関連する図書が保管されていることが確認されている。「歴史」〈伝記〉については、チャーチル、ノーベル、ヘレン・ケラー、ニュートンなど、イギリス、アメリカ、ノルウエイの人物が取り上げられている。ヘレン・ケラーは戦後すべての時代の教科書を通して登場している。これらの偉人もまた、日本の教科書ではなじみのあるものが多い。

4点目は、1983年「課程標準」に見られる変化が題材内容選択に如実に影響していることが認められる点である。1983年準拠版では、これまで登場数が比較的少なかった「自然科学」と「言語」が増えた。「言語」では第2次区分では〈英語〉(830)で《読解・解釈・会話》（“A Conversation” *Book 2*）や《英語》（“American Speech” *Book 2*）など、英語そのものの理解や各種の会話が取り扱われている。これは1983年版「課程標準」の「教材概要」で「...、特に口頭による能動的な応用力に着目すべきである」との文言が追加されており、コミュニケーション力が重視されるようになったことによるものと思われる。その他、「技術・工学」では環境問題が1972年「準拠版」に継続して扱われている。「技術・工学」、「言語」、「芸術」などを扱う件数も増え、全体的にバランスが良くなっている。これも「課程標準」の「目標」にある「生徒の国際業務や科学技術を学ぶ興味を啓発し、民族文化の交流を促進し、...」というように、多岐におよぶ題材を扱うことが教示されていることの反映といえよう。

表 3-14：台湾の 1983 年「課程標準」準拠版高校英語教科書の題材内容の順位  
(第 1 次区分)

<i>English Book</i>								
	<i>Book1</i>	<i>Book2</i>	<i>Book3</i>	<i>Book4</i>	<i>Book5</i>	<i>Book6</i>	Total	%*
総記	0	0	0	0	0	0	0	0
哲学	1	0	1	2	2	2	8	10
歴史	1	2	1	0	2	1	7	8
社会科学	4	4	6	4	1	1	20	24
自然科学	1	2	1	2	2	1	9	11
技術・工学	1	0	1	1	1	2	6	7
産業	0	0	0	0	1	0	1	1
芸術	1	1	2	1	0	2	7	8
言語	3	2	0	1	1	2	9	11
文学	2	3	2	3	4	3	17	20
計	14	14	14	14	14	14	84	100

\*%は四捨五入した値となる。

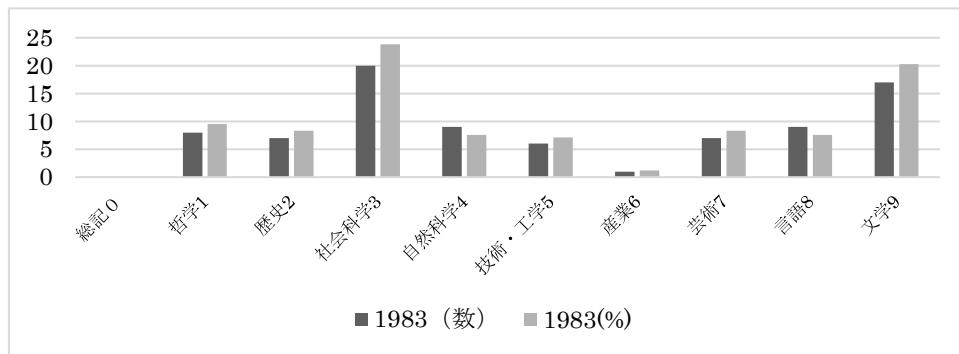


図 3-6： 1983 年「課程標準」準拠版教科書の題材内容比較

以下、表 3-15 は第 2 次区分と第 3 次区分の上位を示したものである。全体的に見た第 2 次区分では「文学」の中の〈英米文学〉が一番多く取り扱われており、また、「社会科学」の中の〈風俗習慣〉、〈社会〉が数多く扱われている。第 3 次区分では、《英米小説》が 1 位で、それに《英米詩》が 2 位に続き、《伝記》(「歴史」)が 3 位、そして《倫理》(「哲学」)がそれに続く。

表 3-15：台湾 1983 年「課程標準」準拠版高校教科書の題材内容の順位  
(第 2 次区分と第 3 次区分)

第 2 次区分			第 3 次区分		
数	分類番号	内容	数	分類番号	内容
17	93 (文学)	英米文学	17	933 (文学)	英米：小説・物語
18	38 (社会科学)	風俗習慣・民族	6	931 (文学)	英米：詩
9	36 (社会科学)	社会	5	289 (歴史)	伝記：伝記
			4	159 (哲学)	倫理学：人生訓・教訓



### まとめ

題材内容とトップを見てみると、1983 年準拠版では、第 1 位は「社会科学」第 2 位が「文学」という順位で、現在まで続くトップ 2 の流れが始まったことになる。国際化に関する流れもまた、1983 年版から徐々にその傾向が現れてくる。このため、扱う国や地域にも広がりが見え、題材内容のバランスが取れはじめ、「自然科学」、「言語」の占める割合が多くなってくる。

具体的な内容は、「社会科学」から《労働経済・労働問題》(366)、《生活・消費者問題・余暇》(365) などが多く取り上げられており、台湾が経済成長を遂げる 1980 年代の世相を反映していることが指摘された。

1983 年準拠版は唯一国立編譯館主編の英語教科書に限定された時期となる。1983 年版では、題材内容は出版年とも関わっていると思われるが、中国を扱ったものが依然多い。また、アメリカを扱ったものについては以前にもまして増えている。アメリカの「台湾関係法」発効(1979 年)後の政治・経済的な結びつきも、その要因といえるであろう。また調査対象となった教科書の出版年が 1990 年初頭のものでは、1987 年の戒嚴令解除後の、民主化・国際化の気運のためか、「言語」、「自然科学」などが増えてきており、国別では台湾を扱ったものが全体を通して 2 課あり、「本土化(台湾化)」の影響も入ってきていることが伺える。

最後に教材の内容も「課程標準」の記載を反映し、「人生の意義を導く」人生訓の内容が扱われていることを加えたい。

## 第 6 節 1995 年(民国 97 年)「高級中學英文課程標準」準拠版教科書

### 1. 調査教科書と対象課数

調査教科書と課数について説明する。1990 年代半ばから始まった教育改革、特に 1999 年の「教育基本法」の制定により、教育の民主化、自由化が進み、これを受けて、教科書も国定教科書に代わって国立編譯館の審定を得た民間の出版社が出版した教科書が使用されるようになった。先に高等学校の教科書が審定制となり、中学校もこれに続いた。

台湾の教科書は、比較的頻繁に改訂されている。そして高校では教科書を概して教員の裁量で自由に選ぶことができ、学校によっては一年ごとに使用教科書を変えているところもあるようである。また、よく使われている教科書もあり、1995 年の「課程標準」準拠版までは、受験用図書の出版として大手の遠東図書から出版されている、*Far East English Readers* が最も使われていた。次に三民書局の *San Min English Readers*、そして、龍騰文化の *Lung Teng English Readers* である。この流れは 2008 年に教科書が改訂されるまで続いた<sup>4)</sup>。今回の調査の対象としたのは、最も幅広く使用されている、前述の 3 社の審定(検定)教科書で、*Far East English Readers*、*San Min English Readers*、そして *Lung*

*Teng English Readers* である。それぞれ 6 巻からなり、3 社のものを合わせて 18 巻である。

台湾の英語のこのころの教科書は、日本のように「コミュニケーション英語」、「英語表現」などに分かれておらず、すべて一種類の教科書にまとめられている。B5 判サイズの教科書を 1 年間で 2 巻学習し、3 年間で 6 巻学習するのが標準である。進学校を中心にした多くの学校では、それらにワークブックとサブリーダーが併用されている。基本的に 1 巻は 12 課からなっており、一つの教科書につき 6 巻ずつあるので、合わせると 72 課となる。しかし、*Lung Teng English Readers* においては *Book 5* と *Book 6* が各 10 課となっており、6 巻を合わせると各 68 課となる。そのため、3 社の教科書を全て合わせると、212 課となる。調査題材数は全ての課数と一致するので、212 課分の題材を調査したこととなる。次に掲げる表 3-16 を参照していただきたい。なお、表 3-16 では *Far East English Readers*, *Lung Teng English Readers*, そして *San Min English Readers* の順に配置した。よって、以下、3 社の教科書を比較検討する場合はこの順に従うものとする。

表 3-16 : 1995 年 (民国 84 年) 「課程標準」 準拠版 調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	課数
<i>Far East English Readers 1</i>	遠東図書公司印行	1999	12
<i>Far East English Readers 2</i>	遠東図書公司印行	2000	12
<i>Far East English Readers 3</i>	遠東図書公司印行	2000	12
<i>Far East English Readers 4</i>	遠東図書公司印行	2001	12
<i>Far East English Readers 5</i>	遠東図書公司印行	2003	12
<i>Far East English Readers 6</i>	遠東図書公司印行	2003	12
<i>Lung Teng English Readers 1</i>	龍騰文化事業公司	2002	12
<i>Lung Teng English Readers 2</i>	龍騰文化事業公司	2001	12
<i>Lung Teng English Readers 3</i>	龍騰文化事業公司	2001	12
<i>Lung Teng English Readers 4</i>	龍騰文化事業公司	2002	12
<i>Lung Teng English Readers 5</i>	龍騰文化事業公司	2003	10
<i>Lung Teng English Readers 6</i>	龍騰文化事業公司	2003	10
<i>San Min English Readers 1</i>	三民書局	2004	12
<i>San Min English Readers 2</i>	三民書局	2005	12
<i>San Min English Readers 3</i>	三民書局	2004	12
<i>San Min English Readers 4</i>	三民書局	2005	12
<i>San Min English Readers 5</i>	三民書局	2004	12
<i>San Min English Readers 6</i>	三民書局	2005	12
計 18			計 212

## 2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）

教科書の題材内容の掲載課数の多数比順位を前記の NDC の第 1 次区分の分類に従って示すと、以下の表 3-17 のようになる。第 1 位が「社会科学」、第 2 位が「文学」、第 3 位が「哲学」、第 4 位が「自然科学」と「言語」、第 6 位が「技術」と続く。第 7 位が「歴史」、第 8 位が「芸術」、第 9 位が「産業」、第 10 位に「総記」である。

表 3-17 : 台湾の高校英語教科書の題材内容の順位（第 1 次区分）

	Far East English Readers	Lung Teng English Readers	San Ming English Readers	合計	%
社会科学	17	24	15	56	26.4
文学	15	14	11	40	18.9
哲学	5	7	13	25	11.8
自然科学	5	5	11	21	9.9
言語	15	3	3	21	9.9
技術・工学	4	5	8	17	8.0
歴史	4	8	3	15	7.0
芸術	4	1	4	9	4.3
産業	3	0	2	5	2.4
総記	0	1	2	3	1.4
計	72	68	72	212	100

次に、これらの結果を第 1 次区分で第 1 位の「社会科学」から順に、さらに第 2 次区分、第 3 次区分に分類した。第 1 位の「社会科学」は 26.4%であり、全体の 4 分の 1 を占めている。その第 2 次区分で第 1 位は〈社会〉(360)である。その中のさらに第 3 次区分は《家族問題》(“The World’s Best-Loved Advice Givers” *Far East English Readers, Book 5*), 青少年問題 (“All I Ever Wanted” *Lung Teng English Readers, Book 2*), 《男性女性問題》 (“A Perfect Match?” *Lung Teng English Readers, Book 1*), 《老人問題》 (“Memories of a Special Summer Visit” *Lung Teng English Readers, Book 5*) が多く取り上げられている。第 2 次区分の第 2 位は、〈風俗習慣, 民俗学〉(380) (“The Green Banana” *Lung Teng English Readers, Book 6*) などが続き、〈経済〉 (“Plastic Money” *Far East English Readers, Book 1*) はあるが、政治は取り上げられていない。

続く第 2 位は「文学」で、40 課が取り上げられている。〈英米〉のものが圧倒的に多く、次に〈フランス〉が続く (G・モーパッサン「首飾り」、ガストン・ルルー「オペラ座の怪人」)。

《小説・物語》ではイギリス、アメリカ文学の古典 (イギリス: W・シェークスピア) から現代小説 (アメリカ: O. ヘンリー) までの代表作、青少年向き題材のものがバランスよく選ばれている。例えば、イギリス文学の小説・物語として、“The Story of Frankenstein” *Lung Teng English Readers, Book 5* が挙げられる。

また、《詩》については、詩が小説とほぼ同数取り上げられているというのが台湾の特徴

であろう。詩については、イギリスをはじめアメリカの代表的詩人の作品を体系的に取り上げ、その基本から技巧、鑑賞まで細かく指導している。どの教科書でも 1 巻に 1 課程度は取り扱う傾向にあり、段階的に教えているのが特徴である。取り上げられている詩人は、ロバート・ブラウニングからロバート・フロスト(“The Poems of Robert Frost” *San Min English Readers, Book 1*)まで、さまざまな詩人が扱われている。

第 3 位は「哲学」で、25 課が取り上げられている。その第 2 次区分では、内容のほとんどが〈倫理学〉(150)で、人生訓的なものが多い(“Attitude Is Everything” *San Min English Readers Book 3*)。青少年に対していかに生きるべきかを説き、思春期の悩みの解決などを扱ったものが非常に多いが、これは「課程標準」の「第三 教材の要綱 I 編纂の原則」でも書かれている、「人生の意義を啓発し…」の部分の反映であろう。また、儒教についても取り上げられている。さらに続いて〈心理学〉(140)が扱われている。例えば、色が人に与える影響や星座占い(“It’s a Colorful World” *Lung Teng English Readers, Book 3*)、新しいトピックでは EQ (Emotional Quotient)、つまり心の知能指数、感情指数についてなどがある。

第 4 位は「自然科学」と「言語」が同数の 21 課が取り上げられている。まず「自然科学」では、その第 2 次区分では〈医学、薬学〉(490) (“Chinese Medicine” *Lung Teng English Readers, Book 4*)、〈地球科学〉(450) (“The 9-21 Earthquake” *Far East English Readers, Book 5*)、〈天文学・宇宙学〉(440) (“The Challenges of Space Travel” *San Min English Readers, Book 4*)が多く取り扱われている。「課程標準」で、自然科学を題材として重要視するように説いているにもかかわらず、数として「社会科学」、「文学」と比較すると実際にはそれほど多くはなく、全体の 1 割に満たない。しかしながら、取り上げられている題材は、日常的、かつ最近のトピックと言える。例えば、SARS、鳥インフルエンザなどの感染症や、クローンによって絶滅種を再生すること、ナノテク、遺伝子組み換え食品など、比較的新しく、新聞雑誌で社会的にも取り上げられた話題を詳しく論理的に述べた内容のものが多く、この傾向は、最も新しく改訂された *San Min English Readers* には顕著に現れている。

同じく第 4 位の「言語」は、第 2 次区分では〈英語〉(830)が多く、その内容は英語の読み方、会話、作文、スピーチなどで、実用な面で充実している。これは台湾の教科書の大きな特徴のひとつといえよう。具体的には、まず、英語の習得法や実用英語が会話と読み書きの両面から教えられている。会話では、海外旅行するための基本的な英会話から、パーティに出席した際に、英語で上手に会話をする方法 (“How to Carry on a Conversation” *Far East English Readers, Book 6*)まで取り上げられ、実用性の重視は顕著である。読み書きでは、英語で書かれた薬の取り扱い説明書の読み方などが扱われ (“Following Instructions” *Far East English Readers, Book 5*) また、英語の書類の書き方 (“Filling Out Forms” *Far East English Readers, Book 2*)として、入国審査カードや会員登録の書き方などが扱われており、非常に実践的な内容に及んでいる。これについては、台湾の「課

程標準」の「第三 教材の要綱 II 編纂の方式」で先にあげたように「…使用説明書…などを含むことができる」と具体的にあげられている。3年生では、一年間を通して体系的にパラグラフ・ライティング（“Writing Is a Process” *Far East English Readers, Book 5*）の指導を行っている。

第6位は「技術」で、17課取り上げられている。その第2次区分では、〈ごみ・環境問題〉などが多く取り上げられている。例えば、“The Coming of Silent Spring” *Lung Teng English Readers, Book 5* の環境問題、“Genetic Engineering” *San Min English Readers Book 3* の遺伝子工学などである。

第7位は「歴史」で、15課取り上げられている。その第2次区分では、多くが〈伝記〉であり、続いて〈紀行〉である。〈伝記〉では、ヘレン・ケラー、キング牧師などアメリカ人が多く、次にウイストン・チャーチル、キュリー夫人（“This I Believe” *Lung Teng English Readers, Book 5*）など、イギリスをはじめとするヨーロッパの人々を取り上げられている。〈紀行〉は台湾のものをはじめ、中国の万里の長城、世界の遺跡（“Mysteries of the Past” *Far East English Readers, Book 6*）などがある。

第8位は「芸術」で、9課取り上げられている。その内容は、〈スポーツ〉（“Basketball” *Far East English Readers, Book 2*）、〈演劇・映画〉（“A Memorable Event” *San Min English Readers, Book 3*）、〈絵画・書道〉などである。

第9位は「産業」で、5課扱われている。台湾では国際貿易に当たって必要な英語力養成が説かれているが、実際に教科書で取り上げられているのはわずかに4課で、その数は比較的少ない。しかしながら、取り上げている題材は、〈マーケティング〉（“Marketing” *San Min English Readers Book 1*）のように商業関係が中心である。

第10位は「総説」で、3課が取り上げられている。取り上げられている題材は、〈ジャーナリズム・新聞〉（007）などメディア関係（“I like E-mail” *Lung Teng English Readers, Book 1*、情報科学）や、〈出版・編集〉（025）に関するものである。

次に、全体の中で第2次区分、第3次区分で多く扱われているものについて検討したい。第2次区分、第3次区分で上位5位をそれぞれまとめたものが表3-18である。第2次区分では、「文学」の〈英米文学〉が第1位で、それにほとんど差がなく、次に「社会科学」の〈社会〉が続き、さらに「社会科学」の〈風俗習慣・民族学・民族学〉の順になり、「社会科学」が第2位、第3位を占める。少し差があつて「言語」の〈英語〉、そして第5位が〈倫理学・道徳〉で再び「社会科学」が占めている。第2次区分の上位を占めた項目を見ると、重視されている分野（「社会科学」、「文学」、「言語」）がより明確になり、台湾の「課程標準」で前述したように文学を中心として、教養や国際理解に重点が置かれていることがわかる。

第3次区分では、第1位が「社会科学」の《家族問題・男性・女性問題・老人問題》で、第2位、第3位には「文学」の《小説・物語》、《詩》が続く。第四位に「哲学」の《人生訓・教訓》、そして第五位は「歴史」の《個人伝記》が続いており、重視されている項目として

社会問題，英米小説，詩，人生訓，伝記とその体系が浮き彫りになってくる。ここには「自然科学」，「技術」，「産業」のに該当する項目が全く見られず，それらの分野では特に重視された項目がないことがわかる。この理由としては，「自然科学」，「技術」，「産業」においては第 2 次区分以下がバランスよく扱われているのに対して，「文学」，「言語」については，特に英語関係に比重が置かれていることが指摘できるであろう。

表 3-18： 台湾高校教科書の題材内容の順位（第 2 次区分と第 3 次区分）

第 2 次区分			第 3 次区分		
数	分類番号	内容	数	分類番号	内容
32	93 (文学)	英米文学	21	367 (社会科学)	家族問題，男性・女性問題，老人問題
31	36 (社会科学)	社会	17	933 (文学)	小説，物語
20	38 (社会科学)	風俗習慣，民俗学，民族学	14	931 (文学)	詩
12	83 (言語)	英語	11	159 (哲学)	人生訓，教訓
11	15 (社会科学)	倫理学，道徳	8	289 (歴史)	個人伝記

最後に，題材内容について，教科書出版の 3 社によって差があることを検討したい（図 3-7 参照）。3 社の中でも最も多く使用されている *Far East English Readers* は，「社会科学」，「文学」，そして「言語」が多く，「文学」と「言語」は同数で，他の 2 社に比べ「言語」を多く取り上げている。*Lung Ten English Readers* も「言語」，「歴史」，「芸術」，「産業」を除き，*Far East English Readers* と同様の傾向である。最も新しく改訂された *San Min English Readers* は，「自然科学」を扱う数が他の 2 社に比べると 2 倍以上であり，「技術」も多く取り扱っている。「社会科学」，「文学」に対する比重が他の 2 社に比べて少なく，最も平均的にかつ多くの分野を取り扱っている。3 社の差については，後でさらに検討を加えたい。

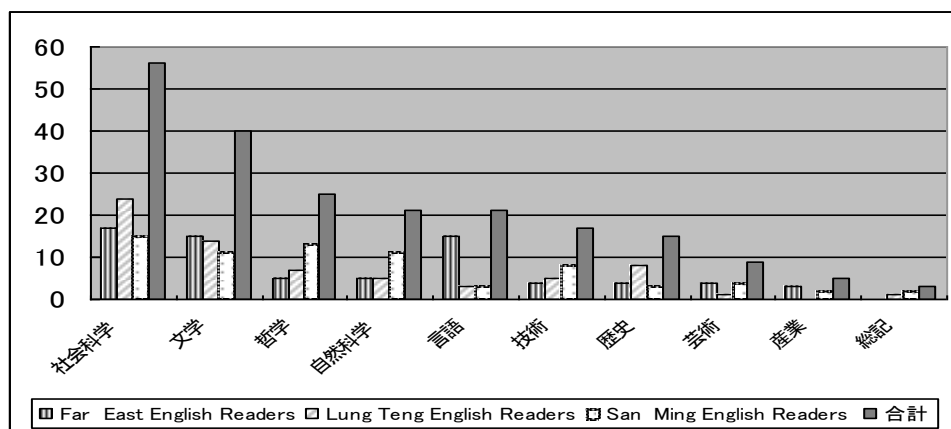


図 3-7：教科書会社別の題材内容比較

### 3. 1995 年「課程標準」準拠版教科書：考察とその特徴

教科書で扱われている題材内容の特徴を、ここで 3 点に分けて指摘したい。まず、第 1 次区分で、「言語」を多く取り扱っており、読み・書き・話すについて実用的な内容で指導していることである（機器の取り扱い説明書の読み方、英語の書類の書き方、パラグラフ・ライティング、パーティでの会話の仕方など）。これは、「課程標準」で実用性と生活性を重視していることから裏付けられるであろう。第二は、「文学」が多く扱われ、特に詩が多いことである。そして、詩が 1 巻に 1 課という構成で、段階的に教えられていることもその特徴といえよう。これは、歴史的に見て古くから中国社会では漢文、漢詩の素養が社会人としても重要視されてきた伝統が台湾では今なお根強く存続していることによるものではないだろうか。まことに興味深い問題である<sup>5)</sup>。第三は、「自然科学」が「課程標準」では、文学的教養、国際理解と同列なものとして重視されているにも関わらず、「社会科学」、「文学」に比べ、取り上げられている数が相対的に少ないということである。

最後に、教科書の題材内容を大学入試の実情と比較した場合、興味深い点を上げてみたい。すなわち、自然科学、産業、芸術が、最近の統一大学入学試験には頻出し、文学作品が出題されるのが、近年は皆無であるという傾向に対して、教科書の題材選択はこれと反する傾向にあることである。この統一大学入学試験との矛盾点は、どのように理解されるべきであろうか。

教科書で取り扱われる題材については「課程標準」では、人間性を重んじる立場からも文学作品を取り扱うように明記されている。しかし、同じく「課程標準」で、科学技術の新知識についても取り上げるように繰り返し指導されている。本調査の結果からすると、後者の立場は「文学」に比較すると、それほど教科書には反映していない。ところが統一大学入学試験では、前述したように科学技術の題材が多く取り上げられ、文学作品はほとんど取り上げられていない。これについては、台湾での現地での実態調査での質問紙調査・聞き取り調査<sup>6)</sup>の結果から判断すると、以下の点が理由と考えられる。すなわち、文学作品、特に詩については、入学試験として出題する場合、その特殊性のゆえに、問題の客観性を考慮する上で出題が難しいという点である。入学試験は、年々、特異な問題、難解な問題は排除し、明確で標準的な問題が望まれる傾向にあるからである。

さらに今回調査の対象とした審定（検定）教科書が、普通高校用のものであることが関係していることが実態調査<sup>7)</sup>から示唆された。すなわち、職業高校用の教科書であれば、題材は科学技術系のものが多くなるとの見方は確かであろう。しかし、実際、統一大学入学試験を受験する大部分の生徒は、これらの普通高校用の教科書を使用する生徒たちであることから、その点が一致しないとの指摘である。いずれにしても、今回の調査では、最も新しく改訂された *San Min English Readers* で「自然科学」や「技術」などの科学技術系の題材が多く取り扱われていることが注目される。これが題材内容の新しい傾向といえるかどうかを、引き続き注意していくことが必要であろう。

なお、本章で調査の対象とした教科書会社 3 社については、扱う題材内容がそれぞれの

出版社によって違うことがその特徴としてあげられる。これについては、台湾の現地調査の結果を考慮して、ここでさらに分析をしたい。*Far East English Readers*は、前述したように「言語」について実用性を重んじた題材を多く取り上げており、そのことが多くの学校に使用されている大きな理由のひとつである。そして、台湾の教科書は比較的頻繁に改訂されるが、現在、新しく改訂されている他社の教科書にもその傾向が出てきたとの見方もある。この傾向が、前述した、最新版の *San Min English Readers* が科学技術の分野を多く取り扱っているというような、科学技術系の題材内容重視と、いかに結びついていくかも含め、今後も引き続き調査する必要性が示唆された。また、教科書会社 3 社の教科書題材内容の違いは、先に述べた「課程標準」の中でも明確なように、教科書を中心に均一した指導を重んじる中で、それぞれがその特徴を出しているという点で意味を持つ事が示唆される。

最後に、本研究と同じく日本十進分類法 (NDC) を用いて日本の高等学校の英語教科書について調査されたもの (小川他, 2007) を引用して台湾と日本を比較してみたい。その特徴をまとめると以下の 4 点になる。1) 最も多く取り扱われているのは、台湾、日本ともに「社会科学」である。両国ともに、第 2 次区分としては〈社会〉に関するものが最も多く、それ以外では、台湾は〈風俗習慣・民俗学・民族学〉、日本は〈政治〉に関するものが多い。台湾は政治というより社会問題が多くなる。2) 台湾は、日本に比べ、「文学」を多く取り扱っている数が圧倒的に多い (台湾 18.9%, 日本 3.0%)。両国ともに英米文学に関するものが大部分である。ジャンルの的には、両国ともに小説・物語が多い。さらに、台湾は詩を取り扱っている数が日本に比べて大変多い。3) 日本は台湾に比べ、「自然科学」、「産業」、「技術」を取り扱っている数が多い。「自然科学」では、両国とも医学が多く、「技術」では、両国ともに公害・環境工学が多い。4) 「言語」では、取り扱われている量はさほど変わりはないが (台湾 9.9% 日本 9.4%) 日本は言語一般の取り扱いが多く、台湾のような英語について実用的内容を取り上げているものが少ない。日本はバランスよくどの分野も取り扱っているが、英語そのものについての実用的内容 (実用英語) を取り扱うものが少なく、この点の改善を提案できよう。さらに、文学作品や詩の取り扱いが極端に少ないことから、人間性、教養としての英語教育の部分が希薄であることが指摘できる。これについては第 5 章で引き続き論ずる。

## 第 7 節 2005 年 (民国 94 年) 「普通高級中學必修科目「英文」課程 (暫行綱要) 準拠版教科書

### 1. 調査教科書と対象課数

2005 年「暫行綱要」準拠版教科書は、最も採択率が高いといわれている *New Far English Readers* 1~6 までを調査した (表 3-19 参照)。本調査ではリーディング・パートのみを調査したので、合計 68 課の調査となる。2005 年「暫行綱要」準拠版の教科書編纂の基盤とな



る教授法は、コミュニケーション・アプローチ (Communicative language teaching/approach) と内容重視の教授法 (Content-based instruction) が中心となることが「編纂大意」で明記されている。これまでは、コミュニケーション・シラバス (Communicative syllabus) であった。さらに、これまでのものとは教科書の構成が大きく異なり、「リーディング・パート」と「カンバセーション・パート」になっている。これまでのものは「リーディング・パート」のみの構成となっており、その中にここでは「カンバセーション・パート」で扱われている題材が組み入れられていた。

まず、「カンバセーション・パート」について簡単に述べる。各巻 9 課構成となっている。これまで「リーディング・パート」で扱われていた「言語」の会話にあたるものなどが、この「カンバセーション・パート」に集約され、かつ新しい内容が加わって物語り形式になっている。舞台を台湾と米国の高等学校に設定し、*Book1-2* は米国からの交換留学生を迎えた台湾の高校が舞台であり、*Book3-6* は台湾人生徒が過ごす米国の高校生活が描かれている。米国の高校生生活、行事、大学入試、卒業などを紹介しながら、異文化教育にも役立つように配慮され、何より実際の生活で利用できる表現が重視されている。

表 3-19： 2005 年「課程暫行綱要」準拠版教科書調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	課数 Reading Part
<i>New Far East English Readers 1</i>	遠東図書公司印行	2007	12
<i>New Far East English Readers 2</i>	遠東図書公司印行	2007	12
<i>New Far East English Readers 3</i>	遠東図書公司印行	2007	12
<i>New Far East English Readers 4</i>	遠東図書公司印行	2008	12
<i>New Far East English Readers 5</i>	遠東図書公司印行	2007	10
<i>New Far East English Readers 6</i>	遠東図書公司印行	2008	10
計			68

このため、各課のリーディング・パートの具体的構成では、これまであった Pronunciation のセクションがなくなった。コミュニケーション力重視がより明瞭になった今回の準拠版では、以前は「読解確認」(Comprehension Check) の中にあった「ディスカッション」(Discussion) が別立てされたのも特徴である。さらに、「ライティング」(Writing) も重視され、以前は *Book 5, 6* のみで扱っていたライティング活動が、*Book 1* から *6* までの全てに配置され、系統立てて実用力を養成している。加えて Word Power のセクションを入れ、幅広い語彙力を養成する構成となっている。さらに、4 技能を統合した活動内容を重視しているのも特徴である。「本文」自体の語彙レベル文法レベルは、「暫行綱要」でこれらの学年別の枠が取れた分、教材の難易度に幅が出ている。しかも、全体的に難易度が高くなっていることが見受けられる。例えば、1995 年準拠版では *Book 3* で扱った同じ作品を、2005 年準拠版では *Book 2* で扱い、*Book 4* で扱ったものを *Book 3* で扱っているという具合である。これらの文法事項の習得などはほぼ同じである。

## 2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）

下の表 3-20 と図 10 は日本十進分類法（NDC）を用いて題材内容を第 1 次区分で分類したものである。1995 年準拠版と比較すると、第一に目につくのが「言語」が減っている（15 から 4 へ）ことである。「言語」を多く取り扱い、中でも実用英語を取り扱うのが 1995 年準拠版の *Far East English Readers* の特徴であったが、2005 年準拠版では、実用的な会話は「カンバセーション・パート」へ移動した。「言語」の数が減ったのはこのためである。「文学」については、扱う課数にはほとんど差がなく、依然、各巻に基本的に小説と詩を各 1 課扱っており、詩を重視する姿勢は変わらない。「社会科学」についても同様に多くを扱っている。一方、「自然科学」が急速に増え（5 から 12 へ）、「芸術」も増加している（4 から 7 へ）。表 3-20 および図 3-8 を参照されたい。

2005 年「暫行綱要」の「目標」では、四、「生命の尊重と世界の永遠の発展への思いを心に奥深く根付かせる」という文言が加わり、それに関わる「医療」、「動物」などの題材が増えた。

表 3-20 : 1995 年「課程標準」準拠版教科書と 2005 年「暫行綱要」準拠版教科書の

題材内容の順位（NDC 次 1 次区分）

		<i>Far East English Readers</i> 1995	<i>New East English Readers</i> 2005
0	総記	0	0
1	歴史	4	6
2	哲学	5	6
3	社会科学	17	14
4	自然科学	5	12
5	技術	4	4
6	産業	3	1
7	芸術	4	7
8	言語	15	4
9	文学	15	14
	計	72	68

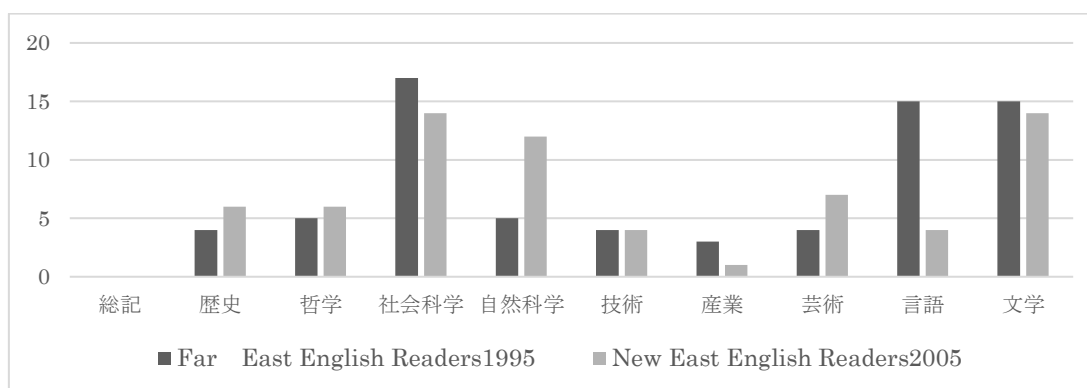


図 3-8 : 1995 年「課程標準」準拠版教科書と 2005 年「暫行綱要」準拠版教科書の題材内容の順位（NDC 次 1 次区分）

ここで 1 課を上げて、どのような題材がどのような方法で教えられているかを確認する。取り上げるのは *Book 3* (高校 2 年前期) の 9 課 “Giant Pandas: An Endangered Species”

である。「本文」は、危機に瀕する動物としてのパンダの生態を紹介して述べられている。続く内容理解の後、「ディスカッション」(Discussion)では、「あなたが危機に瀕する動物として一つ選べるなら何を選ぶか、それはどうしてか」という問いを友達と話し合う活動がある。続く、Word Power では、その他の危機に瀕する動物の名称を学ぶ。「言語使用」(Language Use)では、Animal Rights に関していくつかの例が出されており、それに対して自分の意見を書いたり、自分で動物虐待の事実を調べ、それを友達に紹介し、解決のためにどうすればよいかの意見を述べる活動が用意されている。さらに、それを友達と話すペアおよびグループワークがあり最終的には Writing 活動でパラグラフ・ライティングの指導が用意されている。ここでは、「空間配列で書く」(spatial order)を学習する。

### まとめ

全体的に題材内容のバランスが良くなっており、Content-based instruction (内容重視の教授法)が充実してきていることがわかる。さらに、語彙力の強化(語彙数と語彙の幅)が認められる。活動は「統合的活動内容(4技能の総合運用能力)」が中心となっており、実用的な英語の養成が「ディスカッション」(Discussion)セクションや「言語使用」(Language Use)のセクションで培われる設計になっている。「ライティング」(Writing)セクションではブレイン・ストーミングの説明なども入り、系統立てて指導し高度なレベルを求めている。大学入学試験に約3割を英作文(記述式)が占めることも大きな要因として挙げられよう。以上のように、2005年準拠版教科書には、「暫行綱要」の変化に則した改編がみられる。

## 第8節 2008年(民国97年)「普通高級中學必修科目「英文」課程綱要」 準拠版教科書

### 1. 調査教科書と対象課数

1995年準拠版の調査と同様に今回も *Far East English Readers*, *San Min English Reader*, そして, *Lung Teng English Readers* の3社の教科書を使用した。2008年準拠版が使用される頃から、市場占有率に変化があり、以前は6,7割の占有率とも言われた *Far East English Readers* は勢いがなくなり、三民書局の *San Min English Readers* の人気が高まっている。次に、*Far East English Readers*, *Lung Teng English Readers* と続いているようである<sup>8)</sup>。なお、先行研究(小川 他 2007, 平井 2017a)に準じ、*Far East English Readers*, *Lung Teng English Readers*, そして *San Min English Readers* の順に配置した。よって、以下、3社の教科書を比較検討する場合はこの順に従うものとする(表3-22 参照)。

1983年「課程標準」準拠版以来1995年、2005年、2008年準拠版と、ほぼ教科書の使

用巻数や内容構成には大きな変更は見られない。2005 年「暫行綱要」準拠版から 2008 年準拠版と引き続き、それまでのものと構成面で異なる点は「リーディング・パート」と「カンバセーション・パート」の二部構成になったことである。1995 年準拠版教科書の「本文（リーディング）」の母体となっているのが、改訂後の「リーディング・パート」で、後で追加されたのが、「カンバセーション・パート」とみてよいであろう。これは、「課程綱要」でさらに「コミュニケーション力の養成」が重視されたためと思われる。本節ではしたがって、2005 年準拠版同様に「リーディング・パート」のみを調査の対象とした。

どの教科書会社のものも、基本的に 1 巻は 12 課からなっており、一つの教科書につき 6 巻ずつあるので、合わせると 72 課となる。しかし、*Far East English Readers* と *Lung Teng English Readers* においては *Book 5* と *Book 6* が各 10 課となっており、6 巻を合わせると各 68 課となる。*San Min English Readers* に関しては *Book 6* が 10 課の構成であるので、6 巻を合わせると 70 課となる。そのため、3 社の教科書を全て合わせると、206 課となる。調査題材数は全ての課数と一致するので、206 課分の題材を調査したこととなる。次に掲げる表 3-21 を参照していただきたい。

表 3-21 : 2008 年「課程綱要」準拠版教科書調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	課数
<i>Far East English Readers 1</i>	遠東図書公司印行	2011	12
<i>Far East English Readers 2</i>	遠東図書公司印行	2012	12
<i>Far East English Readers 3</i>	遠東図書公司印行	2012	12
<i>Far East English Readers 4</i>	遠東図書公司印行	2013	12
<i>Far East English Readers 5</i>	遠東図書公司印行	2012	10
<i>Far East English Readers 6</i>	遠東図書公司印行	2012	10
<i>Lung Teng English Readers 1</i>	龍騰文化事業公司	2010	12
<i>Lung Teng English Readers 2</i>	龍騰文化事業公司	2010	12
<i>Lung Teng English Readers 3</i>	龍騰文化事業公司	2011	12
<i>Lung Teng English Readers 4</i>	龍騰文化事業公司	2010	12
<i>Lung Teng English Readers 5</i>	龍騰文化事業公司	2012	10
<i>Lung Teng English Readers 6</i>	龍騰文化事業公司	2012	10
<i>San Min English Readers 1</i>	三民書局	2011	12
<i>San Min English Readers 2</i>	三民書局	2011	12
<i>San Min English Readers 3</i>	三民書局	2012	12
<i>San Min English Readers 4</i>	三民書局	2013	12
<i>San Min English Readers 5</i>	三民書局	2012	12
<i>San Min English Readers 6</i>	三民書局	2013	10
計 18			計 206

## 2. 題材内容の分類結果と分析（計量的分析と質的分析）

教科書の題材内容の掲載課数の多数比順位を前記の NDC の第 1 次区分の分類に従って示すと、以下の表 3-22 のようになる。第 1 位が「文学」、第 2 位が「社会科学」、第 3 位が「哲学」、第 4 位が「自然科学」、第 5 位が「技術」、第 6 位が「歴史」、「芸術」と続く。第 8 位が「言語」、第 9 位が「産業」、「総記」となる。

表 3-22：2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容の順位（NDC 第 1 次区分）

	<i>Far East English Readers</i>	<i>San Min English Readers</i>	<i>Lung Teng English Readers</i>	合計	%
0 総記	0	4	2	6	2.9
1 哲学	9	14	6	29	14.1
2 歴史	4	3	8	15	7.3
3 社会科学	10	15	13	38	18.4
4 自然科学	10	7	6	23	11.2
5 技術	8	4	9	21	10.2
6 産業	1	4	1	6	2.9
7 芸術	6	5	4	15	7.3
8 言語	5	3	3	11	5.3
9 文学	15	11	16	42	20.4
計	68	70	68	206	100

次に、これらの結果を第 1 次区分で第 1 位の「文学」から順に、さらに第 2 次区分、第 3 次区分に分類する。第 1 位の「文学」は 20.4%であり、全体の 5 分の 1 を占めている。第 2 区分は〈英米〉のものが圧倒的に多く、次に〈フランス〉と〈ギリシャ〉が続く（ガストン・ルルー「オペラ座の怪人」、*「ギリシャ神話」*）。第 3 区分では《小説・物語》と《詩》が同数取り扱われている。作品はイギリス、アメリカ文学の古典（イギリス：W・シェイクスピア）、そして近代小説（アメリカ：O. ヘンリー）の代表作、また、現代の小説家の作品など、青少年向き題材のものが選ばれている。例えば、イギリス文学の小説・物語として、“Why Are You Romeo?” *San Min English Readers, Book 3* が挙げられる。《詩》については、詩が小説と同数取り上げられているというのが台湾の特徴であろう。詩については、イギリスをはじめアメリカの代表的詩人の作品を体系的に取り上げ、その基本から技巧、鑑賞まで細かく指導している。3 社のうち 2 社の教科書では、1 巻に 1 課程度は取り扱う傾向にあり、段階的に教えているのが特徴である。取り上げられている詩人は、ロバート・ブラウニングやロバート・フロスト、そして、現代の詩人を含め(“The Road Not Taken” *San Min English Readers Book 4*, “Rhyming Fun in Poetry” *Lung Teng Readers, Book 1*)、さまざまな詩人が扱われている。

第 2 位であった「社会科学」では、第 2 次区分は第 1 位は〈風俗習慣、民俗学〉(380) である。その中のさらに第 3 次区分は《衣食住の習俗》(383) (“Yummy’s Blog” *Far East*

*English Readers, Book 3*), 続いて《年中行事・祭礼》(“The Light of Halloween” *San Min Readers 1*)が取り上げられている。第2次区分の第2位は、〈社会〉(360)で《社会福祉》(“Diving with Courage” *Far East English Readers, Book 2*) 続いて《家族問題》(“Communicating with Parents: An Impossible Mission?” *Far East English Readers, Book 2*)などが扱われている。

第3位は「哲学」で、29課が取り上げられている。その第2次区分では、内容が〈心理学〉(140)と〈倫理学〉(150)に二分割されている。例えば〈心理学〉(140)では、“Learning to Keep Your Cool” *Far East English Readers, Book 3*, “Tips for Improving Your Memory” *San Min English Readers, Book 2* などがある。〈倫理学〉(150)では、人生訓的なものが多い(“Because She Is My Best Friend” *Lung Teng English Readers Book 2*)。内容は青少年に対していかに生きるべきかを説き、友情の大切さなどを扱ったものが多い。第3次区分では《普通心理学》(141)が最も多い。

第4位は「自然科学」で、21課取り上げられている。その第2次区分では〈医学、薬学〉(490) (“Skin Care” *Far East English Readers, Book 1*), 〈生物化学・一般生物〉(450) (“Jane Goodall: From Chimps to Champion” *Lung Teng English Readers, Book 2*) などがある。第3次区分では、《衛生学・公衆衛生・予防医学》(498)が多かった。

第5位は23課扱われている「技術」である。その第2次区分では、〈建設工学・土木工学〉が最も多く取り上げられている。その中のすべてを占めているのが、第3次区分の《環境工学・公害》(519)で、“Is Your Diet Saving the Earth?” *Lung Teng English Readers, Book 2*, “Earth Ride: Water on Earth” *Far East English Readers, Book 2* などがある。

第6位は「歴史」と「芸術」で、各15課取り上げられている。まず「歴史」では、その第2次区分は、半数以上が〈紀行〉であり、続いて〈伝記〉が占める。〈紀行〉は台湾のものをはじめ、インドのタージマハル(“A Monument to Love” *Lung Teng English Readers, Book 2*), アジア、アフリカ、日本など世界各国に及んでいる。〈伝記〉では、ヘレン・ケラーやアンネ・フランクがあり、ヘレン・ケラーは二種類の教科書で全く同じものが扱われている。 (“Three Days to See” *Far East English Readers, Book 5, Sun Min English Readers 6*)。

同じく第6位の「芸術」の第2次区分の内訳は、〈演劇・映画〉と〈スポーツ〉が同数である。〈演劇・映画〉の第3区分は、《映画・アニメ》で日本の宮崎駿のアニメが (“Miyazaki’s World of Fantasy” *Far East English Readers, Book 4, The Wonderful World of Hayao Miyazaki, Sun Min English Readers 5*, がある。〈スポーツ〉は《球技》が多く野球が扱われている (“Every Day is a New Opportunity” *Sun Min English Readers, Book 3*)。

第8位「言語」は、第2次区分では〈言語学〉(800), その中でも《言語生活》(809)でスピーチが多く扱われており、キング牧師の“I Have a Dream” *Far East English Readers, Book 6*, スティーブ・ジョブズの“Live Each Day As If It Were Your Last” *Lung Teng English Readers, Book 6* など新しいものも扱われている。次は〈英語〉(830)で、音声や

会話についてのものが多い。

第9位は「産業」と「総説」で、各6課扱われている。「産業」で取り上げている題材は〈商業〉（“If I use My Imagination” *San Min English Readers Book 3*）のように商業関係や〈運輸・通信〉で携帯電話について扱われている。「総説」で取り上げられている題材は、〈ジャーナリズム・新聞〉（007）などメディア関係（“No Escape from the Web” *San Min English Readers, Book 3*, 情報科学）や、〈出版・編集〉（025）に関するものである。

ここまで第1次区分を見てきたが、全体の中で第2次区分、第3次区分で多く扱われているものはどうであろうか。第2次区分、第3次区分で上位5位をそれぞれまとめたものが表3-23である。第2次区分では、「文学」の〈英米文学〉が第1位で、次に「社会科学」の〈風俗習慣、民俗学〉が続き、「哲学」の〈心理学〉の順になる。次に再び「社会科学」の〈社会〉が続き4位となり、「歴史」の〈紀行〉となる。

第3次区分では、第1位が「文学」の《小説・物語》、《詩》が同数である。次に「哲学」の《心理学》、第4位には「哲学」の《人生訓・教訓》、そして第5位は「技術」の《環境保全》、「社会科学」の《衣食住》が続いている。

表 3-23 : 2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容の順位（第2次区分と第3次区分）

第2次区分			第3次区分		
数	分類番号	内容	数	分類番号	内容
34	93 (文学)	英米文学	14	933 (文学)	小説・物語
21	38 (社会科学)	風俗習慣・民俗学・民族学	14	931 (文学)	詩
17	17 (哲学)	心理学	13	141 (哲学)	普通心理学
13	36 (社会科学)	社会	9	159 (哲学)	人生訓・教訓
11	29 (歴史)	紀行	8	519 (技術)	環境
			8	383 (社会科学)	衣食住の習慣

### 3. 2008 年「課程綱要」準拠版教科書：考察とその特徴

調査した3社の教科書で扱われている題材内容の特徴をいくつか指摘する。第一は、第1次区分で、「文学」を多く取り扱っていることで、「社会科学」を押して1位である。第2次区分においては〈英米文学〉が圧倒的に多く、第3次区分では《詩》多いことが注目される。3社の中では *San Min English Readers* を除く2社では、詩が1巻に1課という構成で、1年次から3年次までの間に段階的に教えられていることもその特徴といえよう。これは、歴史的に見て古くから中国社会では漢文、漢詩の素養が社会人としても重要視されてきた伝統が台湾では今なお根強く存続していることによるものと考えられる。とりわけ興味深い問題である。これについては後述する。

次に多いのが〈ギリシャ文学〉で「神話」が扱われている。これは、1995年準拠版には

見られない新しい傾向である。第2位の「社会科学」においては、第2区分では〈風俗・習慣〉が多く取り扱われ、英語圏の国ばかりではなく、アジア・アフリカなどの様々な国や地域に渡ってその習慣や文化について扱われている。これも1995年準拠版では見られなかった傾向である。国別では「台湾」が多く、自国の文化を他と比較する、特徴的な文化について述べられたものなどが扱われている。1987年の戒厳令解除後、ようやくその形を見はじめる1990年以降の「本土化（台湾化）」の影響が、英語教科書にも現れていることが推測される。これについては第6章第2節で論ずる。第3位の「哲学」では〈人生訓・親子問題〉などが扱われている。これは1995年準拠版と共通するものであるが、漢文化での親子関係や人生訓などを教える儒教の影響があると考えられる。「自然科学」、「技術」などでは健康問題や環境保全、動物、宇宙、化学など多岐に渡って取り上げており、二つの分野の扱われている合計数は、旧版よりはるかに多く、「課程綱要」が科学技術を重視項目のひとつとしている傾向が見られる。

第2次区分の上位を占めた項目を見ると、重視されている分野（「文学」、「社会科学」、「哲学」）がより明確になる。一方、1次区分では6位の「歴史」のうち《紀行》が多く扱われており、国際理解が配慮されている。以上のように、2008年度準拠の教科書は、「課程綱要」に準じた、文学を中心とした教養や国際理解に重点が置かれていることが明確であろう。

第3区分では、重視されている項目として《英米小説》、《詩》、《心理学》、《環境保全》、《人生訓》、《衣食住》と、その体系が浮き彫りになってくる。《英米文学》と《心理学》、《人生訓》など、教養や青年期の生き方や悩みに関わるものが重視されている。また、国際的視野から世界の衣食住などの文化や紀行、地球規模の環境を取り上げていることも、2008年の「課程綱要」と一致するところである。

#### 4. 1995年「課程標準」と2008年「課程綱要」準拠版教科書との比較

2008年度「課程綱要」準拠版教科書の上記の調査結果を1995年「課程標準」準拠版教科書（出版年1999－2005）18巻の特徴と相違点を中心に比較検討する。その目標は、戒厳令解除後に起こった大きな社会・政治的变化がいかに教科書の題材内容に反映しているかを分析するためである。さらに、2008年改訂版は、一連の英語教育改革が2005年の「暫定綱要」の試行を経て行われ、改めで公布されたものである。論理的思考力と4技能統合を重視し、さらには、小学校から高校まで継続した英語教育を考慮したこの「課程綱要」が準拠版教科書にいかに関与しているかを検討する。



表 3-24：台湾の高校教科書（1995 年「課程標準」準拠版と 2008 年「課程綱要」準拠版）の題材内容の比較

	総記 0	哲学 1	歴史 2	社 会 科学 3	自然科 学 4	技術。 工学 5	産業 6	芸術 7	言語 8	文 学 9	合計
1995 年準拠 版 (%)	1.4	11.8	7.1	26.4	9.9	8	2.4	4.2	9.9	18.9	100
2008 年準拠 版 (%)	2.9	14.0	7.3	18.4	11.2	10.2	2.9	7.3	5.4	20.4	100

表 3-24 をグラフにしたものが図 3-9 である。これが示すように 2008 年準拠版のほうが、全体的に題材のバランスがよくなっており、大きな特徴は、1995 年準拠版に非常に多かった「社会科学」が減っており、「哲学」、「自然科学」、「技術」、「芸術」が増加していることである。特に「自然科学」と「技術」が揃って増加しているのは、1995 年「課程標準」から科学技術を重んじていることがようやく教科書に反映してきたものとみられる。また、1995 年準拠版に 2 位であった「文学」は、2008 年準拠版では第 1 位となり、1995 年準拠版の傾向である「文学」が多く扱われ、特に《詩》が多いという傾向は依然変化が見られなかった。

先に述べたように、2008 年「課程綱要」準拠版教科書には、「カンパセーション・パート」が加えられた。「これによって改訂前は「リーディング・パート」で扱われ、分類では「言語」となっていた「パーティでの会話」や「議論のための会話」などは「カンパセーション・パート」に移っている。2008 年準拠版では「言語」が減っているのはこのためである。

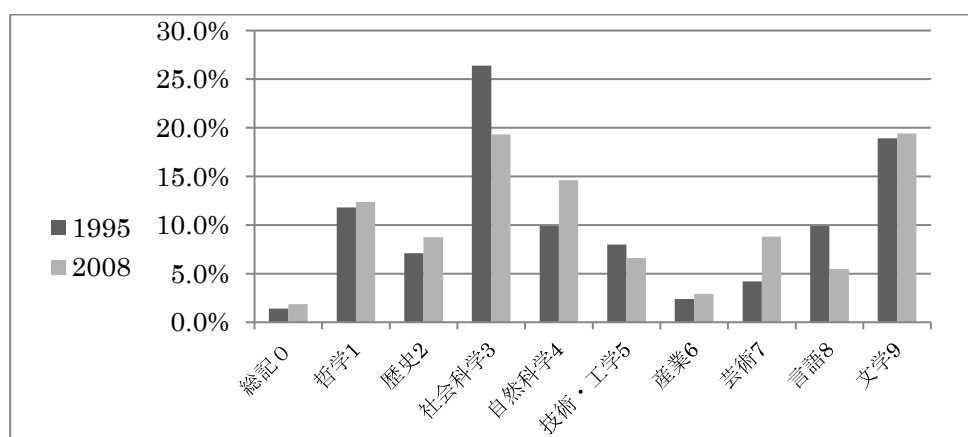


図 3-9：台湾の高校教科書（1995 年「課程標準」準拠版と 2008 年「課程綱要」準拠版）の題材内容の比較

以下、それぞれの項目について詳細を検討する。まず、1995 年準拠版は、「日本」を扱った課は全くなく、教科書全体でも pre-reading にドラえもんが姿を見ただけであったが、改訂後は、「日本」について扱われたものが全体で 3 課あり、宮崎駿の「アニメ」と「京都」

についてであった。その他にも文化の違いやロボット工学などで、いくつかの課に一部分ではあるが取り扱われている。これについては、日本の映画の輸入が認められたのが1994年であるので、戒厳令が解かれていたとはいえ、1995年準拠版では日本についての記載は難しかったことが推測される。2008年準拠版になり、日本をはじめ世界の多くの国々が扱われている。1995年準拠版は米国を取り扱っているものが極端に多かった。また、「台湾」を扱ったものも、1995年準拠版に比べ、2008年準拠版でははるかに多い。「課程綱要」に見られる「多様性・多元主義」への移行がここにも反映されていると言えよう。「歴史」において《紀行》として有名な土地が取り上げられ、「社会科学」では《風俗・習慣》など台湾独自の食生活や祭りなどを紹介したもの、さらには台湾人の著名人を取り上げたものがある。これは、1990年代半ばから本格化した「本土化（台湾化）」の影響を受けるものと考えられる。その影響は、「自然科学」では「漢方医学」を、「歴史」では「万里の長城」などたびたび取り扱われていた中国（本土）について扱ったものが、その数を減らしていることにも現れており、興味深いところである。

「文学」については、1995年準拠版では「社会科学」について2位であったものが、2008年準拠版では1位となっている。1995年準拠版では、日本や韓国、中国に比べても（小川他, 2007）、極端に「文学」を扱う割合が多かったが、さらにその傾向が強まっていることは注目に値するであろう。第3次区分の《詩》が、1995年準拠版と同様に重きが置かれ、1年生から3年生に渡って段階的に計画的に指導されていることもまた、興味深い点である。《詩》については、2008年準拠版では小説と同数取り上げられている。イギリスをはじめアメリカの代表的詩人の作品を体系的に取り上げ、その基本から技巧、鑑賞まで細かく指導している。*San Min English Readers* 以外の2社の教科書では、1995年準拠版と同様に1巻に1課程程度は取り扱う傾向にある。取り上げられている詩人は、ロバート・フロスト、ロバート・ブラウニングがある。しかしながら、1995年準拠版ではなかった「虫」についての詩を作るというように、古典にこだわらず、近代・現代のものを新版では取り上げている。

《小説》については、イギリスでは、「ジキル博士とハイド氏」、「ロミオとジュリエット」などの古典が扱われており、アメリカのO. ヘンリー短編（二十年後）は1995年準拠版と共通するものであるが、2008年準拠版では、1995年準拠版に見られない、ブラジルやイギリスの新しい作家（パウロ・コエリョ、ダレン・シャン）など新しい作家のものも現れている。

次に興味を引くのは、《ギリシャ神話》を扱っているものが多いことである。この傾向は1995年準拠版ではとくに認められなかったものである。「オペラ座の怪人」、「レ・ミゼラブル」などフランスの作品も多いが、これは1995年準拠版に共通するものである。

「歴史」では《伝記》として、1995年準拠版と同様にリンカーン、キング牧師（3社共通）、ヘレン・ケラー（2社共通）チャプリン、などが扱われている。これらは、「文学」で扱われている作品と同様に、日本でもなじみのあるものが多く、その背景には、占領下の日本で、

台湾の学校教育の中で教えられていた題材が取り上げられている可能性も考えられる。これについては第 5 章でさらに詳しく考察する。

「課程綱要」で記載された「論理的思考力と 4 技能統合を重視」という文言に直接関係する事柄は、題材内容については特に見当たらなかった。

## 本章の小結：教科書題材内容の「文学性」と「政治・社会性」

本章では台湾の「課程標準（綱要）」準拠版教科書の題材内容を量的、質的に調査し、それぞれの特徴を明らかにした。これにより、文学作品が戦後どの時期にも多く取り扱われていること、時代の影響により多少教材に変化はあっても、青年期の人間形成にふさわしい英米小説や詩が多く扱われていることが分かった。選ばれている教材は、日本の 70 年代 80 年代の高校英語教科書に使われていた教材と共通しているものが多いことが明らかとなり、日本、アメリカ、そして中国との歴史的、社会文化的、政治・経済的背景も関係していることが示唆された。これらの特徴をさらに中国、日本の教科書との比較から分析し、その要因を明らかにすることは第 5 章にゆだねることとする。

一方、政治・社会性のある題材が 1970 年代までは「哲学」、「歴史」、「社会科学」など様々分野で取り扱われている。あくまで中立な立場で、英語学習を通して欧米の歴史や社会・文化理解に重きを置くものも認められる中、英語の教科書でありながら、三民主義、反共（後述第 6 章）、抗日に至る題材を扱う教科書もある。そして、これは出版社や主編者・編著者の意向が時代背景と重なり反映されたものであることが明らかとなった。

また、政治・社会性のあるものを扱う年代が特定されることも明らかとなった。1983 年「課程標準」準拠版以前は「政治性」のある題材が多いのに対し、1995 年「課程標準」準拠版以降は「社会性」のある題材が多くなる。これはいかなる理由によるものであろうか。1995 年準拠版教科書、2008 年準拠版教科書の比較検討からは、戒厳令解除後の台湾社会の現状が教科書へ複雑な国際関係とも絡んで影響していることが示唆された。これについては第 6 章でさらに時代ごとの特徴とともに教科書編纂の状況も併せて検討していく。

次章第 4 章では、「文学性」と「政治・社会性」の二つの特徴を兼ね備えた英千里編 1962 年「課程標準」準拠版教科書を、編著者である英千里という人物に着目しながらさらに掘り下げて研究する。

### 〈注〉

- 1) 本調査では、NDC 新刊 9 版（1995）を、1995 年準拠版教科書の題材内容調査に用い、1948 年、1962 年、1971 年、1983 年、そして 2008 年準拠版教科書には NDC 新刊 10 版（2015）を用いた。これは筆者が研究を進めた時期と一致する。なお、10 版には 9 版には収められていない新用語（情報や IT 関係、環境等）が加わっている。

- 2) 「高級中学法」第 8 条 2 項は、「第 6 条に定める各形態の高級中学の課程標準ないし綱要，設備標準は，中央の教育行政主管機関（引用者注．教育部を指す）がこれを定める」と規定している。現在の「課程綱要」は，かつての「課程標準」に比べて中央政府の縛りが弱く，地方，学校，教師の裁量が拡大しているが，依然として民間出版社が審定（検定）（教科書を編纂する主要な拠り所となっている。
- 3) 2015 年 8 月に筆者が行った台北市内の実態調査（国立台湾師範大学，国立台湾大学，国立教育研究院訪問）による。
- 4) 2014 年 2 月に行った台湾市内の高等学校訪問時の実態調査（遠東図書，三民書局訪問）の結果による。
- 5) いまひとつの例としては，文字として，台湾では伝統的な繁体字が使用され，これに対し，中国本土が簡略化した簡体字を使用していることが挙げられる。
- 6) 2004 年 3 月に台湾師範大学で聞き取り調査をさせていただいてからは，主に 2006 年～2007 年にかけての複数回のメールでの質問と回答による。
- 7) 同上。
- 8) 2014 年 3 月 3 日～6 日に筆者が行った国立台湾師範大学英語学系の元教授との聞き取り調査の結果，および，2017 年 1 月 3 日～5 日に筆者が行った国立台湾師範大学英語学系の元教授および教員(副教授)との聞き取り調査による。事前事後のメールによる質問紙調査を含める。

## 第4章 英千里編『英氏高中英語』教科書研究

### —「文学性」と「政治・社会性」—

第3章では、英千里編の1962年「課程標準」準拠版教科書、いわゆる『英氏高中英語』は、台湾の教科書の特徴である文学作品を重視する「文学性」、そして、様々な政治・社会的題材を扱っている意味で「政治・社会性」を兼ね備えていることが明らかとなった。文学作品もこれまでの欧米の作品に加え、中国や日本の作品もみられた。さらに、政治的な題材についても「本文」の書き方やメッセージなどがこの時代のものには珍しく「中立的」であることなどがその特徴として明らかとなった。

そこで本章では、1962年準拠版英千里編の教科書各課の題材内容といった「本文」の他、語彙、文法、練習問題のセクションの分析を加え、英千里の教科書編纂の「文学性」と「政治・社会性」についての特徴をさらに検証する。影響を与えた要因を特定するために、英千里の教育哲学と1960年代の歴史的背景を調査する。これにより、当時の教科書編纂にかかわる要因を明らかにすることを試みる。そしてその延長線上として、英千里編纂の教科書がその後の台湾英語教科書編纂に与えた影響を明らかにする。

### 第1節 初期における教科書とその背景

台湾では戦後初期の頃はまだ固定した教科書はなく、教授法は文法訳読教授法（Grammar-translation method）であった。1955年頃から修学者も増え、1960年代は、中学での選択英語の授業のための教科書作りを各出版会社が競うようになった。中でも遠東、世界、環球、正中、復興、海国および開明から出版されたものが比較的多く使用されていた。この時期、教授法はオーディオ・リンガル法（Audio-lingual approach）が流行してくる（李振清, 2012）。当時の英語の教科書はいずれも審定制であるが、前述したように、戒厳令下のこの時代は国立編譯館が行う高級中学および職業学校の教科書の審査は教科書の体裁のみであり、教科書の質や内容に触れるものではなかった（楊, 2011）。

当時の社会と政治に鑑みると、1950年代から1960年代は大陸からの国民党政権による外省人集団による「権威主義体制」が行われていた時代である。その中で、農地改革の成功と工業化による持続的高度成長を実現することができ、これが教育の著しい普及をもたらすことになる。同時に朝鮮戦争勃発によって、台湾と米国との関係が親密になってくるのもまた1960年代から1970年代の特徴である（若林, 2001）。

## 第2節 研究方法

### 1. 英千里編 1962 年（民国 51 年）「課程標準」準拠版の対象教科書と調査課数

戦後 2 度目の公布となる 1962 年（民国 51 年）「課程標準」準拠版の英千里編『英氏高中英語』は世界書局出版である。世界書局は 1916 年に上海で設立され、1947 年に台湾政府が新聞処と編譯館を設立して出版事業の管理を始めたことに伴い、世界書局も 1949 年に台北市に本部を持った。『英氏高中英語』については、国家教育研究院教科書図書館と国立台湾大学図書館にて、調査対象全巻を入手した。

『英氏高中英語』は高校 1 年生用の *Book 1-2*、2 年生用の *Book 3-4*、そして 3 年生用の *Book 5-6* の合計 6 巻から成る。*Book 1* から *Book 5* までは各 14 課からなり、*Book 6* のみ 12 課からなっており、合計 82 課となる。出版年は 1963 年～1968 年である（表 4-1 参照）。これらの各課の題材内容と「本文」そして、練習問題・タスク、そして『英氏高中英語』の冒頭部分にある編著者が教科書の理念や使用方法を記載した「編纂大意」を調査した。

表 4-1：1962 年「課程標準」準拠版教科書調査教科書と課数

教科書	出版社 編（著）社	出版年	課数 Reading Part
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 1</i>	世界書局 英千里	1963	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 2</i>	世界書局 英千里	1964	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 3</i>	世界書局 英千里	1964	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 4</i>	世界書局 英千里	1968	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 5</i>	世界書局 英千里	1968	14
英氏高中英語 <i>New Standard English Readers 6</i>	世界書局 英千里	1966	12
計			82

#### (1) 計量的分析

題材内容については、計量的調査と質的調査を行った。計量的調査として各分野に分類をした。このとき、客観的な分析の枠組みが必要であることから日本十進分類法日本十進分類法（NDC）（日本図書館協会分類委員会,1995;2015）を用いた。NDC については序章に詳しい。本章調査でも、本研究他調査と同様に、第 1 次区分（1 桁，10 区），第 2 次区分（2 桁，100 区分），第 3 次区分（3 桁，1000 区分）の 1000 区分に分類することとした。

#### (2) 質的分析

同時に各課の本文を読み、量的分析では拾いきれない部分を探るため、質的分析を行った。また、『英氏高中英語』の「編纂大意」を読み、英千里の編纂の意図や基づく理論、そして理念を明らかにすることを試みた。

## 2. 英千里の教科書編纂とその背景

一方、編著者である英千里とはいかなる人物であったか。教科書編纂をする上で、その背景、そして骨格ともいえる教育哲学はどのようなものであったのだろうか。これは 1.(2)質的分析の裏付けとなる重要な部分であると考え。これについては、熊健嬉・韓拱辰（熊・韓）、鄭培凱（鄭）、韓拱辰（韓）、そして、英千里（英，1963）が執筆した資料等を使用し、その人物像と教育哲学を探った。

## 第3節 教科書分析の結果と考察

### 1. 計量的分析

計量的分析については、日本十進分類法を用いて分類し、以下のような結果になった。1962 年準拠版の第 1 次区分の分類、その前後に出版された 1948 年準拠版、1971 年準拠版教科書と比較したものが表 4-2、図 4-1 である（第 3 章参照）。

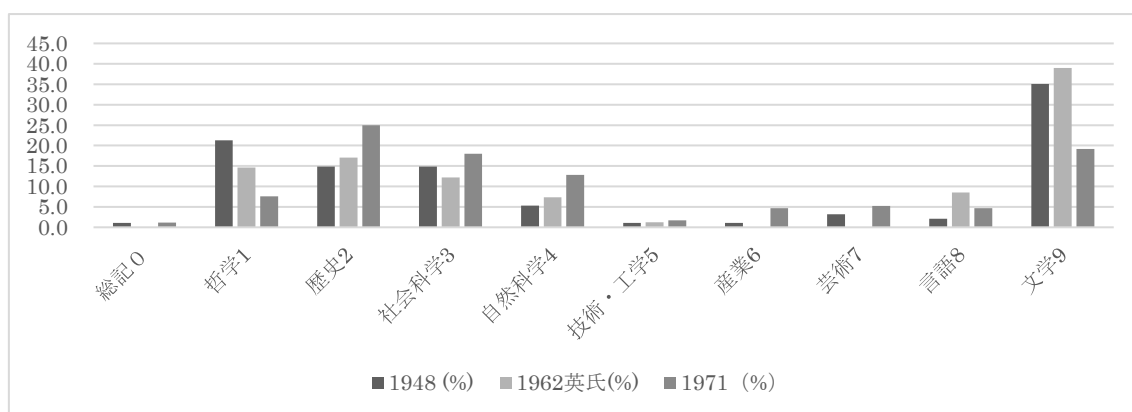


図 4-1：1948，1962，1971 年「課程標準」準拠版教科書題材内容 NDC 第 1 次区分比較

表 4-2：1948，1962，1971 年「課程標準」準拠版教科書題材内容 NDC 第 1 次区分比較

	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会科学 3	自然科学 4	技術・工学 5	産業 6	芸術 7	言語 8	文学 9	小計
1948 (%)	1.1	21.3	14.9	14.9	5.3	1.1	1.1	3.2	2.1	35.1	100
1962 英氏 (%)	0	14.6	17.1	12.2	7.3	1.2	0	0	8.5	39.0	100
1971 (%)	1.2	7.6	25.0	18.0	12.8	1.7	4.7	5.2	4.7	19.2	100

表 4-3:1962 年「課程標準」準拠版教科書題材内容 NDC 第 2 次区分・国別比較

1 位 第 2 次・国別	文学	中国	日本	イギリス	アメリカ	合計
		6	2	12	12	32
2 位 第 2 次	歴史	伝記 (政治・社会)	伝記 (その他)	政治・社会	地理	合計
		7	2	2	3	14
3 位 第 2 次	哲学	倫理・道徳	宗教	心理学		合計
		9	2	1		12
4 位 第 2 次	社会科学	政治	社会	風俗習慣	教育	合計
		5	1	2	2	10

1948 年, 1971 年準拠版教科書とともに, 1962 年準拠版英千里編の教科書は「文学」を筆頭に「哲学」, 「歴史」, 「社会科学」, 「自然科学」が多く, その傾向は他と大きくは変わらない。しかし, 英千里編教科書は, 題材内容の分野バランスに偏りがあることが分かる。また, 他に比べ「言語」が多いのが特徴である (図 1 参照)。

表 3 から第 2 次区分・国別比較を見ると, 以下のことが分かる (表 4-3 参照)。1 次区分で第 1 位の「文学」については, 国別では他の年代のものでは扱われていない中国, そして日本の作品があることが注目される。3 位の「哲学」では, 12 課のうち 9 課が倫理・道徳で, 全てが第 3 次区分では人生訓になる。聖書の扱いがあることも他の年代にはない特徴である。第 1 次区分で第 2 位の「歴史」, そして, 第 4 位の「社会科学」については, 1962 年準拠版では, 政治・社会的なものが多い。「歴史」では 9/14 課, 社会科学では 6/10 課が, 政治的なものになる (表 4-3 網掛部分参照)。以上のように, 区分別では必ずしも「政治」に含まれないが内容は政治的なものの扱いが多いことが特徴として挙げられる。これについての詳細は後述する。

同じ 1962 年「課程標準」準拠版教科書で他の出版社からの教科書 (正中書局, 趙麗蓮編著者) との題材内容の比較については第 3 章第 3 節を参照していただきたい。

## 2. 各課の質的分析

### (1) 題材内容: どのような題材が扱われているか

#### 1) 全体的特徴

扱われている題材内容の傾向を, NDC 第 1 位の「文学」から見ていく。国別では, 米, 英の作品が同数扱われ, Mark Twain や Saki (“My Watch” (I) (II) *Book5*), (“The Open Window” (I) (II) *Book3*)がある。その他, 中国では, 「紅樓夢」 (“The Story of the Hung Lou Meng” (I) (II) *Book5*), 林語堂(1895-76) の作品 (“Curly-Beard”(I) (II) *Book2*), 漢詩の英訳 (“The Man-wind and the Woman-wind” (I) (II) *Book6*) などが挙げられる。

「紅樓夢」は中国四大名著の一つといわれる。内容は男女の恋愛を含んだ上流社会の生活を描き, 四大著書の中でも「情」の文学であるとされる。清代末期から紅樓夢を専門に研究する学問を紅学というほど有名な作品である。また, 日本のものでは, ラフカディオ・ハーンの作品 (“Aoyagi—A Tale of Old Japan” (I) (II) *Book1*), (“Why Shakespeare is Great”



*Book2*が扱われているのが大きな特徴である。中国、とりわけ日本の作品が取り扱われるのは初期の教科書では珍しい。

*Book1*の“Baggy Pants”は異色の内容で、1956年1月出版の『リーダーズ・ダイジェスト』からの引用で、第二次世界大戦中にフィリピンで日本兵に捕らえられた米兵の話である。これは自身がフィリピンで日本軍の捕虜となった作家が戦後に書いたものである。内容は、ある米国人捕虜が検閲のときに、詩を書き留めた創作ノートを没収されるのだが、これを手にした同じく文学をたしなむ上官との心の交流を描いたものである。これについては後述する（参考資料 5-2 参照）。

第2位の「歴史」については個人伝記が多く扱われている。ジャンヌ・ダルク（“The Maid of France”（I）（II）*Book3*）、キュリー夫人（“Pierre And Marie Curie” *Book4*）がそれにあたる。史実も扱われており、「ノルマンディ上陸作戦」（“General Eisenhower’s Narrow Escape”（I）（II）*Book5*）、「アメリカ独立宣言」（“The Declaration of Independence（I）（II）*Book5*）、「中華民国時代」（“A Historical Kidnaping” *Book2*）などが扱われている。「アメリカ独立宣言」のような欧米の近代の歴史・社会を扱うのは、異文化理解の意図が読み取れる。しかし、「中華民国時代」を扱った一つは、孫文の医科大学の恩師である Dr. J. Cantlie が、孫文がロンドンから中国へ強制送還されるのを防いだ話である。これを英語教科書で扱うことによって生徒に何を学ばせる意図があるのか。ここでは国父と言われる孫文についての歴史的事実を英語を通して生徒に知らせること、同時に師弟愛と真摯な人間関係の重要性を教えることが本文から読み取れる。これについては引き続き論ずる（参考資料 5-3 参照）。

3位の「哲学」については、道徳、人生訓が多く扱われている。竹のような粘り強さが重要で、よく考えて決断するようになどの若者へのアドバイス（“Think Well, Then Decide Calmly” *Book3*）などがある。その他、恋愛、キリスト教などがある。キリスト教は2課扱われており、内容はイエスの誕生に関わる知識（“The Nativity of Jesus Christ” *Book5*）と、人間性を指し示す旧約聖書の話（“The Story of Susanna” *Book6*）である。キリスト教が扱われるのは当時のものとしては珍しい。

4位の「社会科学」については、「歴史」と同様に政治・社会的なものが多く、以下のものがある。“America’s Stand and Free China’s Determination”（*Book1*）は1955年の大陳島撤退作戦を冒頭に挙げ、中国の脅威に対しての台湾情勢の不安についてアメリカの擁護を求めるものである。これは“The Facts about Formosa”という1955年出版の『リーダーズ・ダイジェスト』からの引用である。“Some Chinese Contributions to America”（*Book3*）は芸術、絹や薬など、中国文化の偉大さとそれがヨーロッパを経由してアメリカへもたらした恩恵、それに伴う中国への誇りを述べたものである。“Hong Kong: Past and Present”（*Book4*）はアヘン戦争の理不尽さと香港割譲の事実を述べ、林則徐の活躍と中国の衰退を語っている。これも1955年出版の『リーダーズ・ダイジェスト』からの引用で、事実とその波及まで論点を進めたもので視点は中立的である。“From the “Introduction” to “Soviet

Russia in China ””(Book4) は、孫文が進めた連ソ・容共、労農扶助、そして国共合作についても、新三民主義を蒋介石が回想するものがある。以上のように、多くが中華民国時代の対外国家との複雑な関係についての内容となっている。

これらの「本文」の内容は、『リーダーズ・ダイジェスト』からの引用も複数あり、事実の列举が多く、視点はある程度は客観的である。中には蒋介石の書き残したもののからの引用があり、共産党に対する批判がくみ取れる内容もある。しかし、この教科書を同時期の他の出版社の教科書、そしてそれ以降の教科書と比較しても、その中立性が際立っている。例えば 1971 年準拠版教科書の一部にみられるような、三民主義や孫文に対する絶対的な肯定感 (“Upon this condition, China will be united as one nation. Let us cry out with confidence and courage: ‘One China under San Min Chu I!’ ” 「この条件において中国は一つの国家として統一されるのである。「三民主義のもとの一つの中国！」 1971 年準拠版 正中書局 顔元叔編 Book2) とは異なる冷静さがみられる。“Hong Kong: Past and Present” (Book4) の「本文」に続く練習問題の英問英答では、”What kind of man was Lin Tse-hsü? And what was his mission in Canton?” とアヘンの密輸取り締まりを断行した林則徐という人物に焦点を当てる設問を用意している。

以上のように、教科書を通して、生徒に今日、自分たちの置かれた国際間の現状を考えさせる材料となっているものが多い。しかし決して否定的、敵対的なものではなく、事実を客観的に語り、師弟愛や人間の徳といったものをメッセージの一部とすることは、本文の多くに見られる共通した描き方であると指摘される。

第1次区分が第5位の「言語」は、英語のスペルと発音 (“The Anomaly of English Spelling” Book4)、語源 (“Words are Wonderful (I) (II)” Book4)、文法・語法 (“Unlikable “Like”” Book4) など、英語に関係した説明文が扱われているのが特徴である。

英千里編の 1962 年準拠版教科書の題材内容の特徴として以下の 2 点にまとめられる。まず、「文学」では、高校生に適した英米の優れた作品を選び、小説・詩を紹介しており、これは 1948 年、1971 年準拠版と変わらない。異なる点としては、中国の林語堂 (1895-1976) の作品 (“Curly-Beard”) や「紅樓夢」など中国の作品を英語で紹介していることが挙げられる。これは、英千里自身が幼い頃から欧米で生活し、留学時代に英国にて中国文化と文学を英語で雑誌を通して紹介していたことから、英語圏の文学と同様に英語で書かれた中国の文学を取り入れた可能性が示唆される。さらに、“Baggy Pants”などの作品でもわかるように、社会問題や道徳など人間として成長を促すものが多く取り扱われている。英語教育を通しての知的滋養を考慮すると、取り扱う題材に一つの流れがあることに気が付く。すなわち、社会的問題や哲学的な命題を含むことである。これらが思慮深く生きるための教養と人生の指針につながるという考え方は、人格主義的な教養教育に基づくものであろう。

次に挙げられるのは、政治的、社会的な題材が多いことである。とりわけ台湾とその周りの国々との関係に及んだ内容が多く扱われ、これは、国民党の強い支持者として、蒋介石とともに 1949 年に台湾にやってきた文化教養人としての英千里が現在の台湾の状況を、若者

たちによく理解して深く考えてほしいというメッセージが込められていることがうかがわれる。とりわけ注目できるのは、不安定な政治状況や社会の不安を責めるのではなく、「人間愛」、「道徳」で解決することが重要であるという人間としての成長を促すものが多いことである。

最後に『英氏高中英語』の「編纂大意」からその意図を確認する。まず、五「本書は言語学の手法に基づいて、生徒が英語を学習する目的に沿って教材を実用的な必要性に応じて選択している。一般的に中国人の英語学習の目的は、知識を吸収するための新しい道具として学ぶ。…」という文言がある。さらに、七「…本文が中国語で学ぶ知識の深さ・浅さに合わせたものとなっており、…」(訳ならびに下線は筆者による、以下同様)というように、本書の題材選択は、英語を媒介として生徒に新しい知識を学ばせるという観点に加え、中国語で学ぶ他教科と同程度の認知レベルの内容を英語で学ばせるという観点からなされていたことがわかる。

## 2) 日本の教科書との類似点

次に『英氏高中英語』においてとりわけ興味深いのは、日本の教科書との共通ものが多い(全 82 課中 7 課)ことである。そのうちの 6 課が大学書林出版の *English for High Schools Book1, 2* (1950), *New English for High Schools Book1, 2* (1953), *High School English Readers Book1, 2* (1956) からのものであり、本文の内容については、全で一一致するものと本文から一部分を引用したものなどがある。その内の 2 課については引用が明記されている。東京書籍 *New Horizon English Readers (NHER)* (1980) については同じものが 1 課ある(表 4-4, 参考資料 5-4 参照)。この当時の大学書林出版の高校英語教科書は、3 年ごとにタイトルの違う上記 3 種の教科書が出版されているが、使用されている課は同じものが多く見受けられる。

まず『英氏高中英語』*Book1* (1963) L5 “Our Vision of Things”が、大学書林 *High School English Readers* からの引用であることが明記されている。調査の結果、これが *Book1* (1956) L8 “Our vision of Things”であることが分かった。出版年は大学書林 *High School English Readers Book1* が 1956 年で、『英氏高中英語』*Book1* が 1963 年であることから、大学書林の方が出版が先んじていることが分かる。次は『英氏高中英語』*Book1* (1963) の L8 “Coal”が同じく大学書林 *English for High Schools Book1* (1950) の L5 “Coal”, *New English for High Schools Book1* (1953) の L5 “Coal”, そして *High School English Readers Book1* (1956) の L10 “Coal”と同じものであることが分かった。続いて、『英氏高中英語』*Book2* (1964) の L7 “The Origin of Our Earth”と L10 “Earthquakes”が大学書林 *New English for High Schools Book2* (1953), *High School English Readers Book2* (1956) の L11 “Our Earth”と一致する。この場合、『英氏高中英語』では本文を二課に分けて掲載している。こちらも大学書林の出版が先である。『英氏高中英語』には、別の出典が明記されている (Textbook of Geology by C. R. Longwell, A. Knopf R. and R. F. Flint (adapted) )。さ

らに『英氏高中英語』*Book 1*のL11 “The Old World”については、大学書林 “*High School English Readers*”からの引用であることが記載されている。調査の結果 *Book1* (1956) のL12 “The Old World”からの引用であることが判明した。最後は、『英氏高中英語』*Book2* (1964) のL14 “Why Shakespeare is Great” (ラフカディオ・ハーン作品) がある。大学書林 *English for High Schools Book2* (1950) L16 “Why Shakespeare is Great”と *New English for High Schools Book2* (1953) のL17 “Why Shakespeare is Great”と同じものであることが分かった。大学書林の出版年は1950～1953年であるので、1964年出版の『英氏高中英語』の出版の方が10年余り後ということになる。以上のように、全てにおいて大学書林のほうが出版が先んじていることから、『英氏高中英語』が大学書林から引用した可能性が高いと判断できる。

最後の東京書籍の *NHER* (1980) については、『英氏高中英語』*Book3* (1964) L8 “The Open Window” 東京書籍 *NHER* (1980) L6 “The Open Window”が一致する。出版年を比較すると日本の方が後になっており、日本が『英氏高中英語』を参考にした可能性もあるが、作品として単に同じ作品を使用したことによる一致との見方の方が可能性としては高い。

文学教材の一致については、青少年に相応しい内容の作品であること、そして英語教育で取り扱う観点からは、文章の長さ、難易度などを考慮し、日本、中国、台湾では共通したものが見られる (平井, 2019b)。これに当たるのが、東京書籍との一致であろう。しかしながら、大学書林との一致はその数の多さや内容がそっくり一致し、転用している点から考慮すると、編纂当時、英千里の手元に、大学書林教科書があったとは想像に難くない。とりわけ、『英氏高中英語』にその引用が明記されていること、共通する課のすべて含まれていることから考察すると、それが *High School English Readers Book1, 2* (1956)であった可能性が高い。大学書林の教科書からは、日本文学は別とすると自然系の題材が多く引用されている。これを考慮すると、当時、英千里の元にあった教材資料の中でも、日本の教科書は自然系の題材が優れているとの判断があったのであろうか。もちろんこれについては、今後の調査が必要となることは言うまでもない。

表 4-4 : 英氏編高中英語』世界書局と *English for High Schools Book1,2*(1950), *New English for High Schools Book1,2*(1953), *High School English Readers Book1,2*(1956) 大学書林の題材内容

『英氏編高中英語』 世界書局	<i>English for High Schools Book1,2</i> (1950), <i>New English for High Schools Book1,2</i> (1953), <i>High School English Readers Book1,2</i> (1956) 大学書林
① <i>Book1</i> (1963) L5“Our Vision of Things”	<i>High School English Readers Book1</i> (1956) L8“Our Vision of Things”から引用明記あり
② <i>Book1</i> (1963) L8“Coal”	<i>English for High Schools Book1</i> (1950) L5 “Coal”, <i>New English</i>

	<i>for High Schools Book1</i> (1953) L5 “Coal”, <i>High School English Readers Book1</i> (1956)L10 と一致
③ <i>Book1</i> (1963) L11“The Old World”	<i>High School English Readers Book1</i> (1956) L12 “The Old World”から引用明記あり
④ <i>Book2</i> (1964) L7“The Origin of Our Earth”	<i>New English for High Schools Book2</i> (1953), <i>High School English Readers Book2</i> (1956)の L11“Our Earth”と一致
⑤ <i>Book2</i> (1964) L10“Earthquakes”	<i>New English for High Schools Book2</i> (1953), <i>High School English Readers Book2</i> (1956) L11“Our Earth”と一致
⑥ <i>Book2</i> (1964)L14 “Why Shakespeare is Great”(ハーンの作品)	<i>English for High Schools Book2</i> (1950) L16 “Why Shakespeare is Great”, <i>New English for High Schools Book2</i> (1953), L17 “Why Shakespeare is Great”と一致
	<b><i>New Horizon English Readers</i> 東京書籍</b>
⑦ <i>Book3</i> (1964) L8“The Open Window”	<i>Book2</i> (1980) L6 “The Open Window”と一致

## (2) 各課の練習問題の質的分析：どのような練習問題が扱われているか

各課の本文（Reading）以外のパートはどうであろうか。1962 年準拠版英氏編では、本文以外の部分が充実しており、“Vocabulary in Context”（英語・中国語で言い換え）, “Notes on Words and Idioms”では語彙・句の説明や言い換えをしている。この説明は中国語の意味を示すだけでなく、必ず英英辞典のように、この「本文」での意味を英語で示している。この方法は、1948 年からのものではあるが、その後、さらに充実して、1971 年準拠版梁実秋主編の遠東図書の教科書、1983 年準拠版国立編訳館編の教科書へと継承され、今日に至っている。言語教育の理論に沿った有効な方法であるが、それは『英氏高中英語』の「編纂大意」でも明らかである。すなわち、「編纂大意」（六）では以下のように書かれている。「本書は言語学に基づいて、新しい語彙を知るときは主な意味を知ることでは十分ではなく、最も重要なのは、その語が文章の中で他の単語との関係と文章の中で示す意味を理解することである。これはつまり、その文脈における用語の意味を大事にすることで、“Vocabulary in Context”を用意した…」。

次に文法事項であるが、“Notes on Grammar and Patterns”や“Grammar and Syntax”では構文や表現についての文法的な説明がされており、その課で挙げられている項目に関わる文法の説明がなされている。「本文」の内容を利用した問いや練習も多い。これは 1962 年「課程標準」に記載されている「文法の教授法については、体系化した文法を説明する素材は必ず実際に応用する文章に基づいてそれらをまとめて整理したものでなければならず、…」と一致するものである。また、ある文法事項に集中して復習するものがある。例えば、否定文、助動詞など、系統立てて復習しているのが特徴である。これについては、以下の『英氏高中英語』の「編纂大意」八「言語学の専門家は文法と作文指導は本文から切り離して単独で教えるべきではないと主張している。それに沿うのは当然ながら、2, 3 年、英語を学習

して基礎を持っている初級の場合、今まで学習した文法の知識がバラバラになっているものをきちんと整理し、系統立てて復習すると古いものから新しいものを学ぶことができる」の記述からも明らかである。台湾では、1971年「課程標準」で教科書の編纂について3年間で6巻で編纂することが明記され（教育部，1971）現在までこの形態が継承されている。日本でかつて存在した、文法、英作文の教科書が別に用意されることはなく、全てこれらの総合教科書を使用している。これは、英氏の教科書編纂の理念が引き継がれている可能性が示唆される。

最後の“Exercise”は、*Book1*～*Book3*については、その課で学習したイディオムやフレーズを使用しての英作文、次に中国語から英語への訳、そして構文の学習または英語から中国語への訳、重要構文の暗記などがある（EX. I .Make sentences containing the following phrases. Ex.1.to be foreign to, II. Translate into English. III. 以下の英文を and または or を使って複文に替えなさい。Ex.1. If you lie to me, you will be punished. IV. Learn the following expressions. Ex.1.He remains foreign to the matter.）（*Book2*）。しかし、学年が上がる *Book4* から *Book6* では、I の設問が「本文の内容についての英問英答」に替わる。例えば *Book5* L4 のロングフェローの詩“A Psalm of Life”では、“Re-write in your own words and in simple English the following stanzas of “A Psalm of Life”という問題があり、具体的な押韻の指示が書かれている。すなわち、自分で詩の内容を理解し、さらに書き換える問題である。これまでの1948年準拠版教科書（復興書局）では、同様の詩に関する練習問題は、詩の作者を問う問題（*Book3* 16. “The Charge of the Light Brigade”）や詩を暗記し朗読させるもの（*Book1*, 16. “Poems”）であるのに対し、詩の内容を理解しそれを英語で表現する力を求めるものとなっている。また、*Book 4* L2 （“The Best Investment I Ever Made”）の、Ex. Questions “Answer each of the following questions with one or more complete sentences in English: ex.1 What made the author remember the last occasion he had met the other passenger?”がある。物語は医師である筆者が若き日に命を救った少年と20年余りの時を経て船上で再会する話である。「物語の筆者がその乗客と最後に会った時のことを思い出させたものは何か」を問うものであるが、これは単に本文中から抜き出すものではなく、前後の内容をよく理解し、自分で考え、自分の言葉で表現する解答を求めるものである。内容に関する英問英答には、本文で扱われている作品の鑑賞を含めて、内容の理解を英問英答で深めていく形になっている。高学年になるとかなり高度の設問が含まれている。例えば、*Book6* L1 “Living with Your Regrets(I)”では、Questions: “Tell briefly in your own words the difference between “vain regrets” and “false regrets”.”のように抽象的な概念について理解し、自分の言葉で答えるもの、*Book6* L5 “Lord Ullin’s Daughter”では、“Retell the story of “Lord Ullin’s Daughter” in simple English Prose (length of composition from 150-200 words.)”などがあるこの時代の台湾は権威主義的体制の中、小中学校では思想の一元化教育がなされていた時代である。高等学校であったとはいえ、このような言語活動を通し、論理的・批判的思考力を育てるとさえも言

える方法が取り入れられていたことは非常に興味深い。ここでいう「論理的・批判的思考力」は、教育においてしばしば用いられる「証拠に基づく論理的で偏りのない思考」という意味で使用する。

1962 年準拠版で、他の編著者・出版社のものはどうであろうか。同じく 1962 年「課程標準」準拠版の趙麗蓮編著のものは、語彙、文法問題の他に、内容に関する英問英答が入っており、一部「本文」の内容から “What lesson does this story teach?” という設問も入ってくる（社会組 *Book3* L11 “The Finest Lesson of the Year”）。その後の準拠版である 1971 年準拠版遠東図書出版の教科書（梁実秋主編）では本文についての内容に関する英問英答が一部用意されているが、どちらも内容に関するものが多い（社会組 *Book 4* L7 “After Twenty Years” : “What happened twenty minutes after the policeman had left?” “Where did Jimmy work in New York?”）。1983 年「課程標準」準拠版から練習問題の中に「本文」の内容に対する自分の意見や経験を尋ねるものやそれを「書く」問題が出ており（*Book6* L4 “Two poems; The Road Not Taken” : “Write an article about one of such experiences and elaborate on how you feel about the road you chose not to take.” あなたの同様の体験を書き、選ばなかった道についてどう思うのかを述べなさい。 *Book6* L3 “The Discoverer of X-ray” : “Write about 150 words to describe Rontgen’s discovery of X-rays. In writing this summary, you should select relevant points and leave out irrelevant information. 150 語でレントゲンの X 線の発見について述べなさい。その時必要（重要）なことのみ述べなさい。）、本文の内容から自分で考え解答する設問となっている。1983 年以降は “Reading Comprehension” など言語活動に関わるタスク（Questions for Discussion）も充実し、これはその後現在まで続く傾向である。以上のことから 1962 年準拠版英千里編の教科書はその指導法において、草分け的存在といえることが分かる。

### (3) 『英氏高中英語』に見る「文学性」と「政治・社会性」

英千里自らが西欧で学んだ教育と教育哲学を反映させながら、英語教育をとおして、欧米の文化・文学や歴史のみならず、中国の文化・歴史を当時の国際状況とともに取り上げた。選択された教材テーマは中立性を保ちながらも、中には中国固有の道德・倫理的側面からのメッセージが内包され、それらを英千里が 1960 年代を特徴付ける社会・文化的、政治・経済的困難な課題を解決する手がかりとして生徒に提示していることが示唆される。英千里編教科書は、中国文化に対する愛着を示しながらも、1960 年代から 80 年代の一部の英語教科書がそうであったように、国民党政権が喧伝する「中国」化教育とは明確に一線を画していた。これが大きな特徴となっている。

文学作品については、欧米の若者向けの作品を取り上げるなどの傾向は他と変わらないが、中国の作品の英訳や日本の作品を取り上げるという、現在に通ずる作品選びは、今後の台湾の国際関係をも彷彿させるものである。音の美しさや発音を重視し、詩を扱っていることもまた、現在に継承されている。

以上のように、英千里編の教科書の題材内容選択の神髄に流れるものは題材をとおしての人間形成であり、哲学・倫理・社会的な問題を内包したテーマを扱い、これを文学作品と政治・社会的なトピックを取り上げながら指導する点が特徴といえる。

第4節では、この題材選択の背景にある英千里の人物像と教育哲学を考察する。

## 第4節 英千里人物像と『英氏高中英語』

### 1. その略歴

英千里は1900年に上海で生まれる。1914年、13歳のときに父親の英斂之の意向により、雷鳴遠（Lei Ming-yuan）神父に伴われヨーロッパ留学に旅立ち、オランダ、ベルギー、英国、アイルランドなどの国に留学して、フランス語と英語を専攻した。1924年にロンドン大学を卒業する。帰国後は、父親を助けて私立輔仁大学を設立した。1927年以来輔仁大学西洋言語学科の教授と秘書長（事務長）を務め、同時に国立北京大学と国立北京師範大学を兼任で授業を担当した。

1937年に日中戦争が勃発し、北京が陥落したが、輔仁大学は国民政府の命令により現状を維持し、その国際的人間関係を利用して愛国心のある青年の育成に努めた。1938年の春、英千里とその他の有志は共同で「炎社」（後に「華北文教協会」「North China Cultural and Educational Association」と改名）を設立し、中国北部の様々な大学の教師と学生の秘密抗日組織を結合させた。1942年の夏、英千里は中国国民党北平市党委員会の書記長、兼主任委員職務を兼任し、それにより、その年の暮れ、輔仁大学の多くの同僚とともに日本当局に逮捕入獄された。幸い翌年には釈放された。1943年に、彼は再び日本の軍事警察によって逮捕され、このときは軍法により死刑を求刑された。しかし、翌年再び釈放に至り、その後まもなく重慶に赴いた。

第二次大戦終結後の1945年に、英千里は当局から北平教育局の局長を務めるよう求められ、翌年の8月、教育省教育研究委員会の特別委員になり、同月に社会教育部部長および中華教育映画製作所の部長に任命された。1948年9月にはすべてのポジションから辞任した。

中央政府が台湾に移った後、英千里は大陸から台湾に渡り、その後は二度と中国大陆に残した家族とは再開できなかった。国立台湾大学教授並びに外文系主任を兼任し、単身、台湾大学教員宿舎に住み、学生の教育に尽力し、教科書作成、英文学の翻訳などに従事した。1962年に輔仁大学が台湾にて復校され、副学長となり、後に顧問となった。1968年、体調を崩し、やむなく国立台湾大学を辞したが、輔仁大学と淡江大学では継続して教鞭を執った。1969年10月8日に病が重くなり亡くなった（鄭, 2017）。

### 2. 英千里の人物像と教育哲学

ここでは、英千里が国立台湾大学および、輔仁大学で教鞭を執った時代の教え子を書いた



資料（熊健媛・韓拱辰，鄭培凱，韓拱辰）そして、英千里自身が書いた資料（英千里，1963）を基に、その人物像を探り、上記のような英語教科書の特徴が生まれた要因を明らかにすることを試みる。まず、英千里の「文学」の講義の様子から、教科書編纂の特徴を明らかにする。

### （1）英千里の授業—文学の授業

1954 年国立台湾大学外文系に進み、勉強していた胡耀恆が言うには、「英先生に大学1年の時に西洋文学概論を教えていただいた。英先生がギリシャ文学の講義で、はじめ主に紹介していたのは、ホメロスの二部（イリアッド・オイデプス）の叙事詩であった。先生の講義は内容が非常に濃く、講義は常に臨場感があり作品の舞台を見ているようであった。先生は例えばベッドの下にもぐる場面では、本当に体を丸めてその場を再現してくれた。講義が魅力的である最も重要な要因は、英先生が中国語も英語も非常に堪能で、そのなめらかで美しい発音は、学生に一生忘れられない印象を与えた。」（陳，2008；熊媛，韓 2018）（訳ならびに下線は筆者による，以下同様）

さらに、陳若曦はこう回顧する。

陳若曦は、1957 年に国立台湾大学外文系に入学した。彼女は外文系には当時自由な雰囲気があり、それは学部主任の英千里先生の紳士的な雰囲気と関係していたといっている。「英先生は学問について非常に博学で見聞が広く、英詩の授業では、自由で気ままで即興的な教授法を取っていた。一行の詩でも彼は皆を引き込んで、一回の授業ではその詩の意味を語りつくせないほど内容が充実していた。」その時から 50 年後の現在、あの大学の歳月を回想し、さらに以下のように述べた。「英千里教授は私が個人的に大学時代で最も尊敬する教授です。彼が英詩を教えるときには、一つの詩を取り上げ何回か読み、それを翻訳して聞かせるのではなく、詩人がこの詩を作った時の背景に重点を置いていました。そして、この詩の特別な部分をいかに鑑賞し、思考するかを導いてくれました。中高のころのような穴埋め的な学習方法ではありませんでした。先生は熱心に私たちに欠けている独立的思考、鑑賞能力を育ててくれました。私はとても感動し感激しました。なぜなら、当時このような経験はなかなかできなかったからです。もし批判的思考がなければ、教育の目的はどこにあるのでしょうか。文学の存在にはどのような意義があるのでしょうか。今に至っても、私が「阿！頓河」（アフトン川の流れ（Flow Gently Sweet Afton）ロバート・バンーズ）という歌を耳にしたり、もしくは歌ったりすると、自然に英先生が当時授業で講義したあの感動的なストーリーを思い起こすのです。」（陳，2008；熊媛・韓 2018）

この二人の学生の回想からわかることは、英千里の授業は臨場感に満ち、学生はあたかも作品の場面にいるような錯覚を覚えるほどであったことである（鄭，2017）。その上で、作品の背景や作者を語り、学生に作品を深く理解し鑑賞させる。次に学生が理解したものを自分で英語によって表現するという経験をさせ、思考力を培っていくものであった。これがどのように英氏編の教科書に反映しているのだろうか。前述したように（2（2）），各課の練習

問題で内容についての英問英答を出題していることである。設問は本文の内容の詳細に関するものから始まり、例えば詩であれば、その詩を自分の言葉で表現する設問 (I. Retell the story of “Lord Ullin’s Daughter” in simple English Prose (Length of composition from 150 to 200 words.)) (Book6) が設けられていることである。ここには英語を外国語学習と位置付けるだけではなく、教養教育として捉えた英千里の教育理念が見える。外国語教育としての基礎である、語彙やフレーズ、そして文法項の暗記だけではなく、言語によって伝えられた作品を理解し、それを味わう、そして理解した自分の言葉で表現するというような思考過程があり、当時の台湾大学の学生を感動させていた授業の真髓が、彼の編纂した教科書の設問に見られるのである。

この指導法は、哲学にその基礎を置く欧米の文学理論とも通じるものがあり、作品の内容は哲学や倫理などの要素を内包する作品が選ばれ、それについて丁寧に発問を積み上げていく姿勢が見える。すなわち、教養教育として捉える英語学習の方法は、台湾の現在の英語教育の中核ともなっているのである (平井, 2021)。さらに、英千里が音韻の美しさや響きを重視した点は、英氏編教科書の一つの特徴である、NDC における「言語」の分野が比較的多く、音韻や発音などを丁寧に説明するなど英語の基礎も重んじる点の裏付けともいえる。英氏編教科書が、語彙、文法、発音などの基礎を重んじる点と、英語による作品を理解し、鑑賞し、それによって思考力や批判力を培うという二点に重きを置くことが、これらの資料から示唆される。

## (2) 論文指導および教材編纂

次に、授業のみならず、教育者としての英千里はどのような人物であったのかに着目し、以下の資料を読んでいきたい。これは英千里の学生であった楊世胡が、当時を回顧したものが取り上げられている。

「国立台湾大学 1 年の時、楊世胡にとって英先生の「西洋古典文学導論」が最も興味のある授業であった。今でも当時の授業の板書を保存している。大学 4 年の時、卒業論文の授業を選択し、楊世胡は毎週英先生の元で論文指導を受けた。英先生は学生の文章を非常に細かく手を入れ、書き込んだ赤ペンの字も非常にきちんとして、明瞭で、全く適当なことがなく、彼の性格そのものであった。彼は仕事を少しもおろそかにはしなかった。」楊世胡は、「英先生は当時、本当に大変でした。彼は外文系の主任で、名教授であり、身体も悪くしていたのに、さらに私のひどい英文を添削してくださったのだから。」(熊・韓, 2018) と続けている。

この文章からは、日々仕事に忙しい有名教授でありながら、卒論指導において学生の英語の添削を丁寧にしていた姿が浮かび上がる。国立台湾大学では、職員住宅に住み、そこから大学へ毎日通い、出かけることも少なかった。日々、学生の教育に時間を割き、宿舎に帰

宅後は、所狭しと置かれてある書籍の中で、翻訳や教科書編纂に尽くしていたのが彼の日常であった（熊健娒，韓拱辰）。次の資料からは英千里の教育者としての信念とその姿が映し出されている。

1950 年代 1960 年代、英先生が、梁実秋らと同様に、英語教育の先駆者として編纂した教科書は、戦後台湾の英語教育の基礎となった。英千里先生は中高生に適した教材を編纂して、世界書局、環球書局、大中書局が次々と中高の教科書を出版した。教科書の編纂・執筆と、教える、そして学問を究めることにおいて英先生は適当にはしなかった。当時国立台湾大学外文系で助手をしていた王乃珍はこのように回想する。「英先生は、早くにヨーロッパで教育を受けていたので、語源についても詳しく、ギリシャ文学、ラテン文学などからの多くの知識を持ち、すべて自分のものとしてすらすらと言える。それでも、英語辞典を編纂するときは一言一句すべて調べ考え、再考し、ようやく論を定めた。」王乃珍はそばで英先生を助けて執筆の手伝いをし、参考資料を調べたりした。高校と中学の英語の教科書は見たところ簡単だけれど、すべての部分に英先生の深い考えと思いが込められたものである。（韓，1960；王，2013；熊・韓，2018）

次の資料は英千里が手術後に静養しなければならないときにまで、生徒や学生のことを考え教科書編纂に従事している姿が語られている。本研究で扱った『英氏高中英語』のシリーズが英千里自身が手掛け、自ら真摯に編纂したことが証明される記述である。

1957 年の夏休みに英先生は手術を終えて退院した。台中、竹南等で休養を取った。しかし休養とは名ばかりで実際はベッドで起き上がり不眠不休で本の編纂をしていた。友人たちが彼の身体を心配して、「もっと休息をとるように。手術の後は疲れてはいけない」と勧めたが、英先生は次のように言った。「まもなく学校が始まります。私のせいで沢山の生徒の学業をおろそかにすることはできません」と寝ても覚めても学業のことを考えていた。（韓，1960）

中学 1 年生から高校 3 年生用に英先生が続けて編纂した『新標準初中英語』『英氏（新標準）高中英語』『英漢士四用辞典補編』『英氏初級英文法』『最新高級英文法』『英氏實用文法』『最新英漢字典』等は、学習心理に則って、浅いところから深いところ、簡単なことから少しずつ難度が上がっており、系統化された教科書であった。英先生が翻訳した世界の名著には、「大いなる遺産」（ディケンズ）、「虚栄の市」（サッカレイ）、「オリバー・ツイスト」（ディケンズ）等がある。（曾，1960；熊・韓，2018）

英千里が教育者として優れた人格者であったことはすでに明白である。では、どのような教育理念を持っていたのであろうか。彼の教育理念を明らかにすることで、それが題材内容の選択と大きくかかわることがわかる。

### (3) 教育理念と人柄

英千里が「人格教育」に重きを置いていたことは英千里自身の他の陳述の中でも明らかで、日本軍に囚われている獄中での「三つの心得」の中の一つが「人格が最も重要で学問や才能はその次である」(鄭,2017)とまで言っている。他のエピソードには以下のものがある。

彼をよく知っている人はみな、英先生がずっと他人に対して優しくて、めったに自分のために事を成すことがなかったことを知っている。郷里を離れた学生が助けを必要としていたり、同僚の家に家族が多くて生活が苦しいのを見ると、たびたび救済し、給料日には、すでに前借りをしてお金が無くなっていた。曹憲定の印象に残っているのは、あるクラスメートが親切にも「銀行に少しお金を残した方がいいですよ」と英先生に忠告すると、英先生は、「そうではないですよ」と説き、「お金は生まれたときに持つてはいないし、死ぬときに持つてもいけない。使うのに丁度よくあればいい。正しいところに使うものである。それでこそ意義があり、使う価値があるのだよ。さもなければ、何千何百万お金があっても何の役に立つだろうか。私は今までに金のために何か仕事をしたことはないし、今までに使うお金に不足したことはない」と言った(韓, 1970 ; 熊・韓, 2018)。

また、以下のエピソードからも英千里の分け隔てない人柄が分かる。

英千里先生は勉強している子どもに会うと、子供たちに家に来るように誘った。「自分で書斎に行って好きな本を探して読みなさい。本を持って帰ってもいいですよ。」教員官舎の机で本を編纂するときに、近所の子どももそばで一生懸命に勉強していた。その中の一人の賢くて可愛い拱辰をまるで自分の子どものように慈しんだ。拱辰は英先生に面倒を見てもらい大きくなった。拱辰(韓拱辰のこと)は次のように覚えている。「あの頃、台湾にはまだテレビが開始したばかりで英おじさんはテレビを分割払いで買いました。毎晩英おじさんの客間は、たくさんのテレビを見に来た近所の人たちで賑やかでした。ついに近所のある人がそれを見ていられなくて、「英先生は執筆しなければいけないし、書物を読む必要もある。英先生は身体の調子もよろしくなく安静が必要だ。みんなここで騒いではいけない。」という、英おじさんは「大丈夫ですよ。私は今までと同じように食事をして、寝て、本を読んでいます。テレビは彼らに見せてあげなさい。子供たちはテレビを見たほうがいい。」英おじさんは家族への愛を周りの人に注いだ。(韓, 1970; 熊・韓, 2018)

英千里は国民党員としての意思が固く、蒋介石が大陸から台湾に渡った1949年、ともに行動した多くの教養人たちと、家族と別れ台湾に渡った。その後二度と家族と会うことはなく、故郷をはるか遠くにして生涯、台湾大学の官舎で单身過ごした。彼の手紙からは、大陸に残した妻、5人の子供たち、そして母親のことをいつも懐かしんでいたことが分かる(熊・韓, 2018)。

次は身体を悪くしてからの晩年の出来事である。教え子たち（鄭培凱，2017）からは、国家に自分の務めを成し、志は高く、古代の偉人や武士の風格を備えた聖人と称えられている。

ある年、英先生は胃の病気を再発させた。症状は悪化し、緊急に輸血をする必要があった。大学の貧しい教授たちがお金を用立てて集めてもその金額は医療費には不足していた。それを知った蒋介石は政治部の主任の蔣経国を派遣して病院を探し、さらに公金を用立て英先生の医療費の支払いを申し出た。常に人のためを思う英先生はこのようなやり方は道理に合わないし、蒋介石先生に面倒をかけることになると思い、公金を使うことをあくまでも拒否した。英先生の気骨の精神はこのことからわかる。皆、この眼鏡をかけた格式のある地位の高い、外文系の主任を非常に尊敬していた。英先生は全く威張らず、学生に対しても学校の職員に対しても、家にいる女中に対してもこのようであった。（那，1991；熊・韓，2018）

このような英千里の人格形成が学問と同等、もしくはそれ以上に重要であるという教育理念は、英氏編英語教科書の題材内容の選択に如実に表れているといつてよい。すなわち、人格や人としての生き方などを扱ったものが多く、争いよりも人を許すことを知ること、人に対して誠実であること、常に努力して志を高く持つことなど、倫理・哲学を内包する題材を扱っている。それらの題材を通し、まずは言語教材である語彙・文法・構文などを丁寧に理解するところから始め、段階を踏みながら、内容を深く掘り下げ理解し、そして、自らの思考に導く構成となっている。

#### （4）抗日運動と投獄

英千里は1941年と1943年の二度にわたり日本軍にとらえられ投獄生活を送っている。その間のことは以下の資料に詳しい。

・1941年12月30日深夜、英千里は寝ている所を起こされ、手に銃を持った日本人（上村喜頼（原文では喜瀬）と三人の偽装警官（中国人）に手錠を掛けられ、北平公安局に拘束された。...尋問の過程で、日本軍は彼らを棒で殴る、蹴る、鞭で打つ、冷たい水を無理やり口に漱ぎこむ、両手を高く縛りあげて殴る、火箸で焼く、板で挟む、電気処刑、狂犬の群れの中に入れて噛ませる、指を釘打ちするなど、目にするのも耐え難いほどの無残なありとあらゆる拷問をおこなっていた。張懷教授と英先生は何度も拷問によって気を失っていた。

このような生き地獄の中で、英先生は手錠と足かせを付けられてもなお屈服しなかった。もともと健康な身体だった英千里であるが、度重なる残酷な拷問を経験し、肺と胃に重い損傷を受け、この時以降、身体は衰弱していった。しかし、彼は依然として、正義を貫き、屈服することなく、中国知識人らしく厳然として剛直な気風を保っていた。（孫，2007；熊・韓，2018）

獄中で苦難を強いられたが、英先生の心の中は始終静かに保たれ、恨みも憂いもなかった。英千里が日本人によってどれだけの拷問と侮辱を受けたかをみんな知っていたが、英先生本人は一度としてそれらに触れることはなかった。ただ一度、「日本人がこのようなにしたのも、彼らの国家の立場に立って彼らの国家の利益に従ったにほかならない。本当に私の心を痛ませたのは、過去に日本人や中国人に人格と魂を売ってしまった漢奸たちだ。」と英千里はかつて感慨深げに学生に語ったことがあった。(熊・韓, 2018)

そして、この精神をして、英千里を釈放へと導く、日本人憲兵たちとの心の交流があった。文中の上村喜頼(原文では喜瀬)は英千里が1941年に捕らえられた際の憲兵の上村喜頼准尉のことである。日本人憲兵らとの関わりを含め、獄中での生活については英千里自身「鐵窗回憶」(英, 1963, 3-16)で記している。ここでは、さらに詳細が語られている以下の資料を利用する(韓, 2019)。

その後、英千里は尋問にあったが、時には1日に1回、時には2〜3日に1回、多くても2〜3時間以下の時間で、尋問の内容も地下工作に関係することはほとんどなく、古今東西の雑談であった。例えば、彼らはかつて中国の知識人がなぜ日本に抵抗するのかと英千里に尋ねた。英千里はこれからの説明で道理にかなっていたことは明瞭だが、厳しい一言で「自業自得である」と言った。英千里は「日中両国は本来、非常に良い関係にあった。日露戦争の間、中国政府は日本側に立ち日本の勝利を願っていた。故に、清朝末まで、中国の知識人の大多数は親日だった。しかし残念ながら、中華民国4年に、日本は21か条という不当な要求を出し、中国全土の怒りを招いた。反日に変わったのは自業自得ではないでしょうか。」(韓, 2019)

時々彼らは英千里を尋問したが、主要な国務について言及せず、些細な雑談のみした。例えば、尋問のとき、憲兵らは主要な質問は一切せず、欧米各国の万年筆の構造と優劣について尋ねた。日本人憲兵たちは英千里に礼儀正しく、彼の飲食や生活状態も優遇した。時折、偽警官がやってきたが、彼らも英千里には礼儀正しく、こっそり英千里に告白することには、自分たちにも愛国心があり、自分たちに害が加わらない限り、彼の支援をしたいというものであった。英千里がこのように皆から尊敬される理由は、高尚な人格、見た目の優雅さ、知恵と知識の深さ、そして、深い信仰、忍耐力、強大な正義感と相まった中国の魂、国民の正義、真心が英千里の行動からすべて外に表れ、敵にも尊敬され賞賛されるのだ。(韓, 2019)

英千里は1942年4月4日に釈放された。その時の様子は以下のように記述されている。

釈放される前夜、偽警察高官が突然彼のところにやって来て、喜ばしい知らせを伝えた。(中略)翌日、偽秘書は「あなたの地下組織の反日行動はまったく成果を上げていません。

（中略）もっと巧に自分を守ることを忘れないでください。」といった。そして、奇妙なことに、偽秘書は遅かれ早かれ中国が勝つと述べた。最後に、とても丁寧に、「あなたは釈放されて自由になるが、依然として監視下になるのですよ」と告げた。それから彼は英千里を門まで見送り、門番に車を呼んで家に送るように頼んだ。これにより、最初の 100 日間の投獄生活が終了した。（韓，2019）

はじめは英千里に対して厳しく対処していた日本人憲兵たちであるが、英千里の忍耐強さ、正義感と忠誠心、崇高な精神、深い知恵と知識を知るにつけ、尋問もせず、態度も改めて丁寧に対処するようになる。ついには、彼らは英千里に社会の動きや欧米の文化など、知らないことを尋ねるようになった。こうして英千里と心のふれあいを経験した日本人憲兵たちを残し、英千里は釈放となる。

ここで、2 (1) で述べた『英氏編高中英語』*Book1* で取り上げられている“Baggy Pants”の内容を振り返ってみたい。ストーリーは以下になる。

「第二次世界大戦中、日本軍に捕らえられたある米国人捕虜が、ある日、詩を書きためていた創作ノートを検閲官に没収されてしまう。不安な気持ちで庭を耕している捕虜の元に、上官である身なりの良い日本人がその捕虜のノートを持って現れる。その日本人は、「これを書いたのは君かね」と尋ねる。そして、「私も詩を書くのですよ。あなたの詩は人の心を打ちますね。日本人も美しい詩を詠う習慣があるのですよ」と言ってお互いに詩を詠み合う。日本人上官は捕虜の育てた庭も美しいとほめ、日本人は美しい庭も慈しむことを話し、二人は握手をして心を通じ合わせる。」

この“Baggy Pants”の内容と、上記の英千里自身の日本人憲兵たちとの交流は、詳細は異なるものの重なり合う部分がある。抗日運動により日本軍に捕らえられ、拷問を受けた経験を持つ英千里が、日本兵と捕虜との心の交流を描いた作品を自身が編纂する教科書に載せることには一見違和感があるかもしれない。しかし、英千里はさらに深いところでこのストーリーと似た経験をしていたことが本調査により明らかとなった。“Baggy Pants”を教材に選んだことは、敵対心ではなく信頼と和解の重要性を生徒に伝えるためであり、英千里の崇高な人柄を物語るものである。

## 第 5 節 『英氏高中英語』と編纂の基本方針

当時の社会は「権威主義体制」の中、工業化が進み、教育の著しい普及がなされた時代である。教育においては、1968 年に「九年国民教育」が始まり、義務教育段階の教科書が国定化し、教育の一元化が打ち立てられた。このような中、英語の教科書を編纂していたのは、前後の「課程標準」の準拠版を編纂した人物たちと同様、大陸から 1949 年以降に台湾に来た教養人、文化人たちによってであった。彼らの多くは欧米の高等教育を受けているが、英

千里もその例外ではない。さらに彼の場合は少年期から西洋で教育を受けたエリートであった。

英千里は上層の立場でありながら、教養人、教育者、文学者として広く教育に尽力した。彼は抗日運動家で、1941年、1943年と二度にわたり日本軍に捕らえられ、ひどい拷問を受けた。しかし、英千里の高尚な人格と正義感、深い見識により、日本の憲兵たちからも尊敬されたことが明らかとなった。その後、彼は決して日本軍のことを悪くは言わず、彼の体験と徳の高さは教科書の題材内容にも反映していることが明らかとなった。

本研究から、英千里は自らが西欧で学んだ教育と教育哲学を反映させながら、英語教育をとおして、英・米の文化・文学や歴史、中国の歴史を、西欧諸国、中国と台湾間の当時の状況とともに取り上げた。選択された教材テーマは客観性を保ちながらも、中には中国固有と彼自身の道德・倫理的側面からのメッセージが提示されるものがあり、それらを英千里が1960年代を特徴付ける社会・文化的、政治・経済的困難な課題を解決する糸口として示唆していることが明らかとなった。

教科書の練習問題に関する分析の結果、英千里は文学教材をはじめ「本文」の内容を使用し、理解・鑑賞から論理的思考の育成につなげる指導法を使用していることが示唆された。当時の英語の教科書については、前後の時代を通して、一人、または複数が編著者となって編纂されている。そして、先行研究から当時の教科書では、編著者や出版社の意向が影響する場合があることが明らかとなった（平井，2019c）。すなわち、『英氏高中英語』は編著者である英千里の教育哲学や意向が如実に反映した教科書であることが、本研究より明らかとなった。それはとりもなおさず、当時の英語教科書の題材内容選択には政治・経済的、社会・文化的影響が見られることが明確となった。最後に、当時一部の英語教科書では「中国」化教育がなされる中、英千里編教科書の中に見られる客観性は大きな特徴として指摘される。

以上のように、本節では戒嚴令下の教科書編纂においては属人的傾向があることが明らかとなった。そこで次節では、当時の英千里以外の英語教育者、教科書編著者並びにその教科書の特徴を整理し、さらに第7節では、改めて英千里がその後の台湾の英語教科書編纂へ及ぼした影響について考察する。

## 第6節 戦後台湾の英語教育者たち

第1章で触れたように、戦後台湾初期の英語教育を担ったのは、戦後、大陸から国民党とともに台湾にやってきた知識人・文化人たちであった。沈亦珍は1948年「課程標準」準拠版教科書を程環とともに編著し、復興書局から出版した。続く1962年「課程標準」準拠版教科書を世界書局から編著者として出版したのは英千里、正中書局から出版したのは趙麗蓮であった。そして梁実秋は1971年「課程標準」準拠版教科書を主編者として遠東図書か



ら出版している。

沈亦珍(1900-1993)は1900年に江蘇省高郵市に生まれる。1917年に南京高等師範学校工学部に合格し、翌年香港大学に編入学をした。そこでは心理学・教育学などを学び、1922年に卒業する。卒業後は、上海大学英文学部で教え、その後、江蘇省立上海中学師範学科主任と教務主任を兼任した。1933年に米国、ミシガン大学教育学部に留学し、修士の学位を取得した。続いて、コロンビア大学教育学院に入り、1936年に博士の学位を取得し、中国人ではこの学位を得た第一人者となった。抗日戦争勃発後、甘肅省にて省内の教育に尽力した。その後、南京高等師範学校から改名して国立中央大学となっていた母校(1949年から南京大学に改名)で教鞭を採り、主に教育および哲学・教育原理等を教えた。第二次大戦後は台湾に渡り、1949年以降には、国立台湾大学外文系教授、そして台湾師範大学英語学系教授を務めた。その後、台湾教育部にて普通教育司長となり、4年間の間に小学校・中学校・高等学校および職業学校の課程標準を修訂した。さらに、台湾のアメリカ在華教育基金を担うなど、台湾の英語教育の基礎作りに尽力した。

1962年に、沈亦珍は香港に赴き、そこで蘇浙公学校校長を務めた。その在任期間は18年にもおよび、この間、香港中文大学の新亜書院・新亜中学・新亜研究所の創立に参加し、理事長・校長などの職に就き、香港の教育に尽力した(李, 2003)。生涯を通して中華と西洋の文化交流および華僑教育に尽力し、各種奨学金を設立した。以上のように沈亦珍は、1962年以降は香港で活躍することになり、台湾での英語教育は英千里他の者に委ねられることとなる。

当時国立台湾大学外文系の朱開軒は、「沈亦珍先生を懐かしむ」という一文の中で次のように書いている。「彼は一生涯を教育に従事した教育者です。教育事業に対して妥協することなく追及し、献身的に捧げるその精神は素晴らしいものでした。彼の成しとげたものは多くの面において、彼が生きていた時代の限界を超える仕事でした」(李, 2003)。

沈亦珍の台湾での功績はそれほど長い年月におけるものではないが、香港で学び、米国留学を経験し、学んだ分野も工学、教育学、心理学と幅広く、それらの見識を基に革新的な政策を打ち出し、教育の基礎整備をした。思想は国民党一色ではなく、それは復興書局から出版された教科書の題材内容からも汲み取れるものである(第3章2節)。具体的には、「愛国精神の養成」については、蒋介石のスピーチを取り上げているものの、「最後の授業」を教材としていることから、別の立場も考慮していることが示唆される。全体的に西洋の文化や歴史を紹介する従来の英語教科書の基礎となっている。語彙については、“Study Helps”として、「本文」の重要語彙を「英英辞書」の形式で英語を使用し解説し、用例を英文で載せる手法を使用している。これは英千里編の教科書にも受け継がれ、現在に至る台湾の教科書の大きな特徴の一つとなっている。

英千里と時を同じくして英語教育界で活躍した人物に趙麗蓮(1899-1989)がいる。趙麗蓮は1899年に米国NYで生まれる。父の趙士北は広東省出身で、中華民国の建国に関わりがあった人物であった。母はドイツ系アメリカ人医師であった。8歳の時、父の祖国中国上

海に渡る。夫は唐紹儀（中華民国の政治家・実業家。清末民初において、革命派を支持した政治家）の甥であったが、後に離婚する。1946年までは北京女子高等普通大学で音楽教師をし、またラジオで英語を教えていた。1948年に台湾に渡り、はじめ台湾省立師範大学、後に台湾大学で教鞭を執った。その間にコロンビア大学名誉博士号を取得する。大学で教える傍ら、1950年代から1960年代にかけては「空中英語教育」という放送番組の責任者となった。この番組は当時大変な人気を博し、大衆英語教育に貢献することとなる。その他、『學生英語文摘』という雑誌を発行し、読者からの質問や投稿の回答や添削を彼女自身の手で行い、当時、英語教育界で有名な英千里や梁実秋を顧問として、彼らの協力を得ながら、多くの読者を得た（林，2000）。

大学を退職後も、テレビ・ラジオの英語教育番組を続け、児童番組では「マザーグース・ティチングイングリッシュ」などの番組で児童英語教育に貢献し、趙麗蓮は台湾で多くの人に愛された人物である。彼女の人生は西洋と東洋の文化と政治的動向のはざまを経験し、決して平たんとは言えないものであった。若くして中国の大家族に嫁ぎ、また日本軍に捕らえられた経験もあり、病魔にも侵されていた。しかし、彼女はいつも前向きで、その無私の献身は、台湾人の心に刻み込まれ、その功績はたたえられている（林，2000）。

父の趙士北と唐紹儀の影響もあったのか教科書は正中書局から出版し（第6章第1節参照）、題材内容は宋美齡のエッセイ、竹のカーテンなどが取り上げられている一方、「アンナと王様」など異文化理解につながるものや、当時には珍しく自然科学の分野（医学系、公衆衛生）も充実し、核実験や点字の創設者などを取り上げている。これらは彼女自身の体験と重なるものであり、一方、平和、福祉、環境問題など、戒厳令解除後の題材内容に通じるものも多くあり、彼女の見識の広さと深さが題材内容に反映しているといえよう。練習問題では、「本文」の内容についての様々な難易度の英問英答が準備されているなど、英千里編教科書と共通したセクションが認められる。

1966年になると、梁実秋と傅一勤、そして、張在賢が共同で編纂した「遠東英語教科書」が現れ、台湾各地の中学校、高校で広く使われるようになった。その中心人物であった梁実秋（1903-1986）は北京に生まれ、父の梁咸熙は科举に合格した清朝政府役人であった。1915年に清華学校（現清華大学）に入学して文学活動を開始した。1923年に米国に留学し、ハーバード大学の大学院で西洋文学と文学理論を専攻し、英語学科の博士号を取得した。中国に帰国後は『新月』の編集委員をし、この間、国民党統治の現状から見て、共産党の存在には必然的な理由があることを認めている（稲本,1994）。

その後は北京大学外文系研究教授兼主任なども務めたが、個人の自由を愛し、国の自由を尊ぶため、妻子と離れ1948年暮れに台湾に渡る。その後は、台湾師範大学文学院の院長も務め、教科書編纂をし、台湾における現代英語教育と英語教員育成計画を推進した。シェイクスピア全集を翻訳するという功績も残している。しかし、彼が他の英語教育者と違うのは、彼が教育者でありながらも文学者、文芸評論家であったことである。加えて、彼は新月社時代の経験（自由主義的知識分子）から、国民党とは距離があったことも事実である（宋，

1998)。それは彼の編纂した教科書にも現れ、同じ時代に出版されている顔元叔編纂の教科書にあるような抗日、反共の色がそこに見られないのは、彼の思想や背景に裏付けられるものであろう。教科書の構成については、「本文」以外の語彙や文法解説、そしてその練習が充実しているのは、英千里編教科書の流れを汲むものであろう。その後の「本文」についての内容理解の英問英答があるのも共通しており、興味深い点である。

以上により、彼らはともに国民党とともに台湾に渡ったとはいえ、個人によってその前もその後も国民党との関わり方には違いがあることがわかる。しかし、彼らの知人、そして教え子たちが共通して語るのは、彼らの教育に対する熱意と真摯な態度である。これまで研究を進めてきた台湾の英語教科書の中に見られる優れた点は、戦後、台湾に生き、英語教育に携わってきた彼らのような教育者が、若者たちの教育に尽力し、培ってきたものに他ならない。

彼ら各々が国民党との関わり方が違ったのと同様に、一人ひとりの生き方や信念もまた違い、台湾の戒厳令下においては、教科書編纂者と教科書が切り離せないものであることが、編纂者の背景を顧みることですらに明白となった。

## 第7節 『英氏高中英語』と英千里が戦後台湾英語教育に与える影響

最後に第6節を踏まえ、戦後台湾の英語教育に英千里という人物が与えた影響が何であるかを考えてみたい。これは教科書の指導法・形式から挙げられる以下の3点にまとめることができよう。

まず、語彙についてはその意味を覚えるだけではなく、文脈での語彙の理解“Vocabulary in Context”（本文などの英文の中で語彙を理解）することに留意されている点である。次に文法事項が一課ごとに系統立てて入っている構成である。「本文」に関連した文法事項や構文の説明、そしてそれを練習問題で反復する構成となっている。これにより従来の文法の教科書を別に用意するのではなく、一卷の総合教科書として確立させた。この総合教科書の使用はその後、1971年「課程標準」準拠版の数種類の教科書に引き継がれ、1983年「課程標準」準拠版の国立編譯館主編の教科書で確立され、現在に至る。

次にあげられるのは、英語リーディング・パートを単なる語学の学習に用いるのではなく、鑑賞や思考過程に影響させることである。すなわち、本文の題材により、語彙・イディオムの暗記や単なる文法の穴埋めやパターン・プラクティスを用意するだけではなく、本文で扱った内容、作品の鑑賞を含めて、その理解を英問英答で深めていく、いわば論理的・批判的思考力の育成を目指すものであった点にある。指導法の確立としては以上2点が挙げられる。

3点目は題材内容の選択についてである。英千里が当時大学で学生へ常に語っていた彼の教育理念は、「学問を深め、徳を磨くこと」であった。英千里は、哲学・倫理・社会的な問

題を内包した題材内容を教科書で扱うことでこれを生徒に伝えたのである。とりわけ多く用いたのが、文学作品と政治・社会的な題材内容であった。この題材内容の選択は、儒教を重んじる漢文化とも相まって、以降の教科書にも受け継がれ、現在に至るのである。以上の英千里の教育理念と教科書の編纂方式は、その後の台湾英語教科書に影響しており、この意味において現在まで続く礎を作ったといえよう。

## 本章の小結

本章では、台湾の「文学性」と「政治・社会性」を兼ね備え、その後の英語教科書に大きな影響を与えた英千里編の教科書分析を行った。1962年準拠版英千里編の教科書の各課を題材内容と練習問題の調査および、英千里の人物像の調査から、『英氏高中英語』の特徴を捉え、英千里のどのような教育哲学が反映されているのかを探り、当時の教科書編纂に関わる要因を明らかにすることを試みた。

英千里は、自らが西欧で学んだ教育と世界観を反映させながら、英語教育をとおして、欧米の文化・文学や歴史のみならず、中国の文化・歴史を当時の国際状況とともに取り上げた。選択された教材テーマは客観性を保ちながらも、中には中国固有の道德・倫理的側面からのメッセージが内包され、それらを英千里が1960年代を特徴付ける社会・文化的、政治・経済的困難な課題を解決する糸口として生徒に提示していることが示唆された。

教科書の練習問題に関する分析の結果、英千里は文学教材をはじめとする「本文」を使用し、理解・鑑賞から論理的思考の育成（本文中などから提示される証拠に基づく論理的で偏りのない思考）とさえ言える設問を使用したことが示唆された。権威主義的体制の中、小中学校で一元化教育が行われる中、高等学校とはいえ、このような自分の意見を育てる教育をしていたことは注目に値する。さらに、当時一部の英語教科書では「中国」化教育がなされる中、社会・政治的な題材を扱いながらも、英千里編教科書の中に見られる中立性は大きな特徴として指摘できる。以上の英千里の教育理念と教科書の編纂方式は、その後の台湾英語教科書に大きく影響していることが示唆された。

英千里は今なお国立台湾大学、輔仁大学での教え子たちから尊敬される存在であり、回顧集などが作られている。英千里編の教科書に現れた様々な特徴がどのようにその後の台湾英語教育に影響したかを、さらなる調査によって明らかにすることを今後の課題としたい。

さらに、本研究で明らかにできなかった点はいくつかある。まず、なぜ大学書林からの引用が多いのか。なぜ日本文学からラフカディオ・ハーンを取り上げたのか、という点である。日本の教科書の引用と多さは、当時の日本と台湾の英語教育における結びつきと英千里と日本との関わりを検討する上で重要な発見といえよう。これらについては引き続き調査をしていく所存である。

第6節では、英千里以外の戦後台湾戒厳令下の英語教科書編纂者について論じた。各教科書の特徴には編纂者の意向が反映することが明らかとなり、人物から見る英語教育史のアプローチの可能性が示唆された。

## 第5章 高校英語教科書の題材内容の分析と考察

### —「文学教材重視の観点から」—

第3章では、戦後改訂された7つの「課程標準（綱要）」に準拠する高級中学英語教科書について、それぞれ高校3年間分の教科書の各課で扱われている題材内容（計80巻1038課）の特徴と要因を、計量的・質的特色に考慮して明らかにすることを試みた。結論として明らかになったのは、一貫して「文学」を重視し、詩を多く取り扱っていることであった。とりわけ1995年準拠版以降は、実用英語を重視しつつ「文学」的素養の人間教育を重んじ、これらを両輪としていること、「文学」を論理的思考力の育成のための重要な教材として活用していることが示唆された。

そこで本章では、これまでの題材内容研究の中でも「文学」に焦点を置き、さらに詳しくその特徴と要因を探る。第1節では、台湾の高等学校英語教科書の題材内容で重視されている「文学」の分野で取り扱われている文学作品と作者の選定にはどのような要因が関わっているかを、歴史的視座で考察する。調査対象の題材内容は、計58巻738課である。第2節では、論理的思考力の育成のために「文学教材」がどのように教科書で扱われているのか、具体的な指導法を明らかにすることで、文学教材を通して目指す「培う学力」を明らかにする。そして、「文学」が長きにわたり重視されている要因を解明する。

### 第1節 「文学」の特徴をとらえて

台湾の高等学校英語教科書で重視され、扱われている文学教材には、その時代の社会文化的、政治・経済的、歴史的、イデオロギー的な影響が認められ、日本統治下の教育や文化的な影響など歴史的背景も見逃すことができない要因であることがわかった。この意味から、歴史的、学際的視座による研究の必要性が明確となった。

一方、日本の国語教育においては、文学作品が人間形成、人間性の啓培に果たす役割が大きいことは言うまでもなく、言語文化の中核をなす文学作品を教材化して行われる文学教育は、学校教育の中で重要な領域を成している。文学教材の指導は、説明文教材の指導とともに、常に重きが置かれてきた（田辺,1985）。英語教育を言語教育と捉えた場合、その重要さは同様である。英語教育においては、文学作品が異文化理解の観点から、そして日常的な言語材料で深い内容が表現されている点で有用であると指摘されてきた（遠藤,1985）。これらの意味において、「課程標準」と「課程綱要」に準拠した英語教科書で扱われる文学作品やその作者の選定に関わる要因を分析し、社会文化的、歴史的背景から考察することは意義があると考えられる。

本節では、「文学」に焦点を置き、さらに詳しくその特徴と要因を探る。そして、台湾の

高等学校英語教科書の題材内容で重視されている「文学」で取り扱われている文学作品と作者の選定にはどのような要因が関わっているかを、歴史的視座で考察し、解明することで、台湾の英語教育の変遷を捕捉することを試みる。

## 1. 英語教育における「文学」の扱い

国際的には外国語教育における「文学」の重要性を認め、言語教育としての必要性を唱える動きは常にあるといつてよい (Povey, 1979; Paran, 2008)。1970年代に英国の外国語教育において、文型の暗記を中心とするこれまでの伝統的な教授法から、コミュニケーション能力育成を目指す、「コミュニケーション・アプローチ」(Communicative Approach) やコミュニケーション言語教育 (Communicative Language Teaching) という教授法に移行し始めた。1980年代後期にはそれは中国にもおよび、世界の外国語教育界で同様のシフトが行われていったのである (木塚, 2009)。しかしながら、英米の外国語教育においては、その流れの中でも文学教材への一定した支持は継続した (Hirvela, 1996; Kramsch, C. & Kramsch, O, 2000)。事実、文学教材はコミュニケーション・アプローチにおいても用いられた。今日まで英米の第二言語としての英語教育においては、文学作品は精読多読をはじめディスカッションやライティング活動へ応用されるなど現在も安定した教材として使用されている (Chamot & O'Malley, 1986; Akyel & Yalcin, 1990; Duff & Maley, 2007)。

日本の英語教育における「文学」の扱いはどうであろうか。戦前の英語教育においては文学を訓詁学的に読解する勉強法が主流であったことは言うまでもないが、戦後の1950年代は多くの文学作品が取り上げられていた。しかし1970年代後半には「コミュニケーション能力重視の英語教育」に移行する動きが出始め、1978年学習指導要領では、「説明文、対話文、物語形式、劇形式」となり、小説、詩、随筆、伝記などの規定が削除された (江利川, 2004)。1982年に文部省が「文法」教育を重視項目からはずし、語彙数、授業時間の削減とともに、文法・訳読指導、文型暗記中心の指導から、オーラル・コミュニケーション英語の指導が重視されていくのである。そして、英米でのコミュニケーション・アプローチにおいて用いられた文学教材は、日本ではほとんど用いられなくなったのである (高橋, 2015)。その後は急激に実用英語へ転換していくが、これについては2000年代前半に起こった「文学」再評価の波以来、現在まで多くの批判がある (江利川, 2004; 2008; 斎藤, 2003; 高橋, 2015)。

## 2. 1948年～2008年の「課程標準」および「課程綱要」

### (1) 「目標」と「教材の概要」—文学教材の扱い

調査の対象となる教科書が準拠している各「課程標準」と「課程綱要」の「英語」教科の内容を確認する。それぞれの「目標」と教科書編纂の要である「教材の概要」では、文学教材の記載がどのようになされているのであろうか。

まず、1948年「課程標準」の「英語」における「目標」では、「英文の詩や散文において英語学習を進める」と記載されており (訳ならびに下線は筆者による、以下同様)、英語学

習の目的の一つが文学作品の鑑賞であることがわかる。「散文」と同様に「詩」が明示されている。1971年の「教材の概要」では、「短編文の選択は、原則として英米作品を取り扱い、文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味関連の文章を採用する」、「散文を主として対話や物語・短編小説・詩歌・演劇等をサブ内容として取り扱う」との記載があり、英米文学が教材の中心であることが示されている。

国立編訳館主編となった1983年の「教材の概要」では、「内容においては人生の意義を導き民族意識を喚起し、民主的な風土および科学探求精神を養うものとする」が追加され、幅広い教材が求められるようになるが、依然「原則として英米作品を扱い、文学的な意味合い…」の文言は記載されている。しかしながら、1995年の「教材の概要」では、「材料選びは多様化させるべきで…人生の意義を啓発し、民主的な風格および科学を探求する精神を育成するもの」に変化するのである。文学重視ばかりでなく、分野におけるバランスが取れ多様化した内容で、高校生にふさわしい人生を啓発する内容であることが示されている。2008年「目標」では、「英語による論理的思考、分析、判断および整合・創造力の育成」が新たに明記される。「教材の概要」では、「材料選びは多様化すべきで、知的で興味を引き、実用性および啓発性に配慮し…人文教養を高め、生命の尊重および世界平和の概念を取り入れ」とあり、1995年のものにやや新しい項目が加えられている。

以上のように、1948年～1971年までの「課程標準」からは文学重視が明らかに打ち出されており、1983年以降はそれに加え、人生を啓発し民主的・平和的であること、高校生にふさわしく知的で興味を引く内容であることを主軸に題材選択が指示されている。1993年以降、特に2008年「課程標準」は題材については文学重視から多様化への変化がみられる。

## (2) 語彙数

文学作品を教材として使用するためには、学習者の語彙力の高さが要求される。遠藤(1985)は、日本の当時の英語教科書の文学教材の内容を乏しくしているのは言語材料の制約であるとすでに1980年代に論じている。江利川(2004)は、日本の英語教科書から文学が姿を消した最大の問題点として、文科省が一貫して語彙を削減させたことを指摘している。台湾の「課程標準」、「課程綱要」と日本の「学習指導要領」の定める高校レベル(および中高の合計)の語彙数の推移をまとめたのが表5-1である。台湾も日本と同じ学齢で中学ー高校は3年ー3年制である。台湾で定められている中高合わせた語彙数は、戦後一貫して4000語程度以上を維持している。2008年からは学年ごとの縛りもなくなり、レベルによってはさらに高い語彙力を養成する動きがある。これもまた、文学作品重視の重要な要因として指摘できるものである。



表 5-1: 台湾の「課程標準」「課程綱要」と日本の学習指導要領における高校レベル（および中高の合計）語彙数の推移

年	台湾 語彙数	年	日本 語彙数
1948	4000 語（中高合わせて 6000 語）	1951	2100～4500 語（中高合わせて～6800 語程度）
1971	3200 語（中高合わせて 4500 語程度）	1970	1200～3600 語（中高合わせて～4700 語）
1983	3600 語（中高合わせて 5000 語）	1978	1400～1900 語（中高合わせて～2950 語）
1995	2800 語（中高合わせて 4000 語程度）	1999	1300 語（中高合わせて～2200 語）（文科省見解）
2008	中高合わせて 4500 語（基礎レベル） 4500 語～7000 語（進級レベル）	2009	1800 語（中高合わせて～3000 語）

台湾は各「課程標準」「課程暫行綱要」「課程綱要」、日本は各指導要領と江利川（2018）を参考に作成

### 3. 英語教科書における題材内容の特徴

#### (1) 計量的調査

##### 1) 調査対象教科書と調査・分析方法

調査対象としたのは台湾の 1948 年, 1971 年, 1983 年, 1995 年「課程標準」、そして 2008 年「課程綱要」準拠版教科書の「本文」で扱う題材内容である。台湾の高校英語教科書は基本的に一種類にまとめられており, 1 年で 2 巻, 3 年間で 6 巻学習する構成となっている。

まず, 1948 年準拠版教科書としては, 沈亦珍と程璟が編著し, 1951 年から復興書局が出版した教科書〔(1～6: 1952-57) の 6 巻（全 94 課）を調査した。

1971 年準拠版教科書では, 梁実秋が主編し, この頃最も使用された遠東図書出版の総合英語の教科書である『遠東英文読本』(1973-1985) を, 自然（系）組, 社会（系）組共通教科書である 1, 2 の 2 巻, 自然組用教科書 3～6 の 4 巻, 社会組用の教科書 3～6 の 4 巻の合計 10 巻（全 142 課）を調査した。

1983 年準拠版教科書では, 国立編訳館主編の国定教科書『高中英文』（1～6）の 6 巻（1990～1997）全 84 課を調査した。

1995 年準拠版からは, 国立編訳館により審定を経た教科書が使用されるようになった。したがって本調査では, 台湾で採択率の高いものから 3 種のものを選び, *Far East English Readers (FEER) 1-6* (1999-2003), *Lung Teng English Readers (LTER) 1-6* (2001-2003), *San Min English Readers (SMER) 1-6* (2004-2005) を対象とした。3 種の教科書全てを合わせると 212 課となる。

2008 年準拠版についても同様に採択率の高いものを選び, 1995 年と同様の 3 種, *FEER 1-6* (2011-2013), *LTER 1-6* (2010-2012), *SMER 1-6* (2011-2013) の計 206 課を対象とした。調査対象となる教科書と題材内容の総数は, 計 58 巻 738 課である。

題材内容の分類法は, 客観的な分析の枠組みが必要であることから日本十進分類法 (NDC) (日本図書館協会分類委員会, 1995; 2015) を用いた。これらについては序章に詳



しい。本研究も、第3章、第4章と同様に第1次区分(1桁、10区)、第2次区分(2桁、100区分)、第3次区分(3桁、1000区分)の1000区分に分類した。1962年と2005年準拠版を今回含めなかった理由は、1962年「課程標準」準拠版については、他の年代のように最も定評のあるシリーズとして把握できたものがこの調査段階では1～6巻までのすべてを揃えて入手できなかったことによる。幸い、1962年準拠版は「課程標準」が1971年と概ね同様であり、大きな変革は見受けられなかった。2005年準拠版については、2008年と期間が迫っていること、暫定版であることによる。なお、台湾の教科書は日本のように学習指導要領改訂後に一挙に出版されず年毎に出版され、さらに年ごとにたびたび改編される。本調査における同一準拠版教科書の出版年に幅があるのはこの理由による。

## 2) 台湾の教科書:全題材の中の「文学」

各年代の題材内容における調査結果は、図5-1を参照されたい。まず題材内容の第1次区分の上位をみると、1948年準拠版は「文学」(35.1%)がトップ、そして「哲学」が続く。1971年準拠版は「歴史」がトップ、続いて「文学」(19.2%)である。「歴史」の内訳(第2次区分)はそのほとんどが〈伝記〉で《個人伝記》(第3次区分)で占められている。

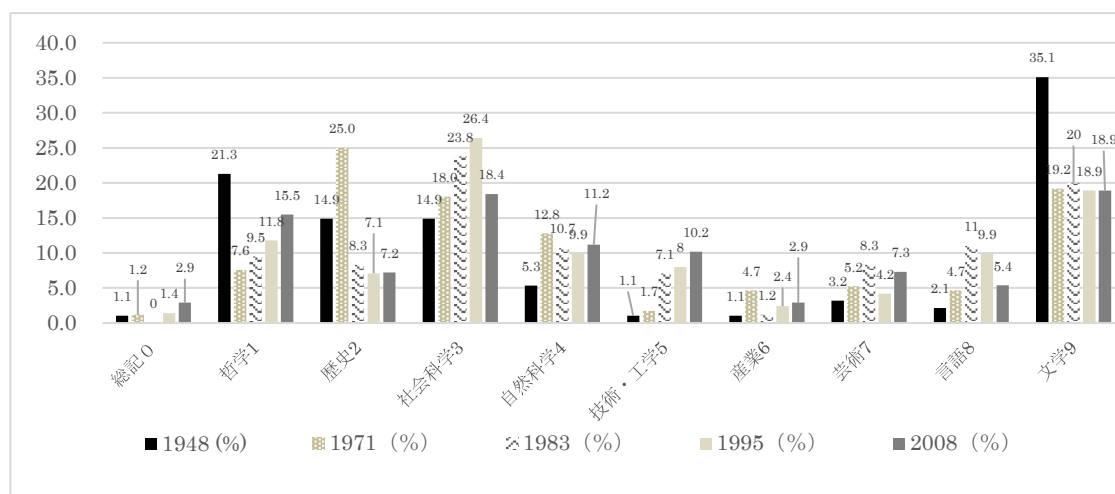


図 5-1: 1948 年～2008 年「課程標準（綱要）」準拠版教科書の題材内容（第1次区分）の比較

表 5-2 : 1948 年～2008 年「課程標準（綱要）」準拠版教科書の題材内容の順位（第2次区分）

順位	1948 年		1971 年		1983 年		1995 年		2008 年	
	内容	割合%	内容	割合%	内容	割合%	内容	割合%	内容	割合%
1	英米文学	28.7	伝記	25.3	英米文学	20.2	英米文学	15.1	英米文学	16.5
2	倫理	19.1	英米文学	17.6	風俗習慣	11.9	社会	14.6	風俗習慣	10.1
3	風俗習慣	4.3	風俗習慣	9.9	社会	10.7	風俗習慣	9.4	心理	8.3

1983 年準拠版では第 1 位は「社会科学」、第 2 位が「文学」(20.0%) という順位で、現在まで続くトップ 2 の流れが始まる。1995 年「文学」2 位 (18.9%)、そして、2008 年「文学」1 位 (18.9%) である。1995 年準拠版以降は、実用英語に関わる題材が増え、それは「言語」の第 3 次区分からも明らかになる(第 3 章第 6 節参照)<sup>2)</sup>。しかしながら、実用英語と両輪をなしながら「文学」が多く取り扱われているのが台湾の教科書の大きな特徴の一つである。

第 2 次区分を見るとその特徴はさらに明らかとなり、1971 年準拠版を除くすべてで 1 位は〈英米文学〉が占める(表 5-2 参照)。第 3 次区分を見ると文学重視は明確となり、1983 年、2008 年準拠版においては第 1 位、2 位が《英米小説》《英米詩》が占めている。1995 年準拠版ではそれが第 2 位、3 位となっているとはいえ、1983 年～2008 年準拠版にかけて《英米詩》が重視されていることはとりわけ注目される(表 5-3 参照)。

表 5-3 : 1948 年～2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容の順位 (第 3 次区分)

	1948 年		1971 年		1983 年		1995 年		2008 年	
順位	内容	割合%	内容	割合%	内容	割合%	内容	割合%	内容	割合%
1	人生訓	18.1	伝記	21.8	英米小説	10.7	家族老人	9.9	英米小説	6.7
2	英米小説	15.9	英米小説	16.2	英米詩	7.1	英米小説	8.0	英米詩	6.7
3	伝記	8.5	衣食住	7.7	伝記	5.9	英米詩	6.6	心理学	6.3

最後に分類が英米文学であるものを、英国と米国を別にし、さらにその他の諸国、そして作者不詳の 4 つのカテゴリーに分けたものが次の図表である(図 5-2 参照)。なお、不詳には判別できないものも含まれている。1948 年は英米の作品が中心ではあるが、若干イギリス文学が多く扱われている。この傾向は 1971 年には急変し、米国の作品が大幅に多くなり、さらにこの割合は国定教科書の 83 年に増していく。そして、再び審定(検定)教科書に戻った 1995 年、2008 年は米国の作品が減りはじめ、英国やその他の国の作品が増えることとなる。

1948 年準拠版は、戦後時勢の安定しない中で出版されたものも含んでいるので、教科書の題材のなかには戦前のものがそのまま使用された可能性もあり、イギリスの作品が若干多いという結果が出たのであろう。一方、1960 年代以降、台湾に多元的に関わってきた米国の影響が、「文学」における米国の作品の多さという形で 70 年代に顕著になり、80 年 90 年代の段階でそのピークに達したといえよう。1995 年準拠版から 2008 年準拠版にかけては、台湾の外国語(英語)政策における「国際化、グローバル化」の影響を受けて、さまざまな国の題材を扱うことが、「文学」にも影響していることが分かる。米国の作品が多いのは現在まで継続しており、その背景に政治的意向があることは否めない。同時に、1970 年

代頃からのアメリカ文化に対して台湾のサブカルチャーを求める当時の社会・文化的な影響がある（林，2003）<sup>3)</sup>ことも推測できる。すなわち，米国の作品が多いことは，当時の一般大衆の意向と一致していることが指摘できる。

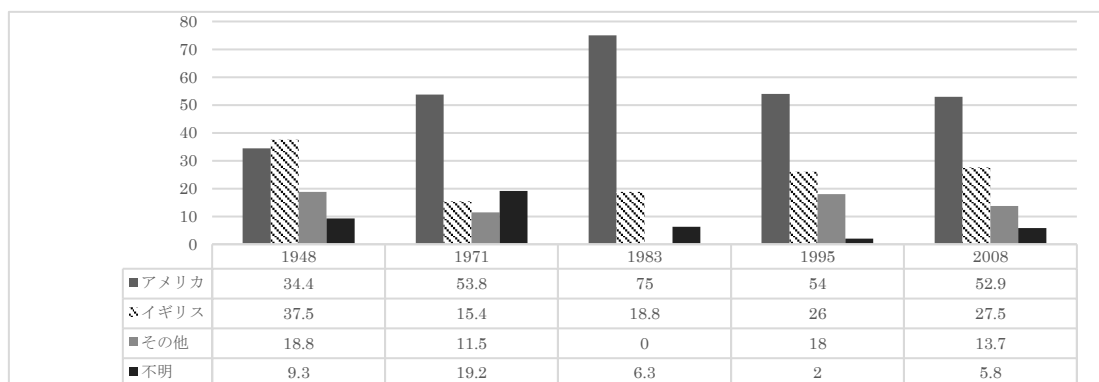


図 5-2：1948-2008 年「課程標準（綱要）」準拠版教科書題材内容「文学」国別割合の比較

## （2）質的考察

### 1) 台湾の教科書で扱われる「文学」の特色

ここで「文学」に着目し，扱われている作品や作者の特徴を年代別にまとめると以下のようになる。まず，1948 年準拠版は全体の約 35%が文学で〈英米文学〉がその大半を占める。中でもビクトリア朝のイギリス文学が多く，ジェーン・オースチン（“Mr. and Mrs. Bennet” *Book 6*），アルフレッド・テニソン（“The Charge of the Light Brigade” *Book 3*）などの作家が取り上げられている。また，アメリカ文学も扱われ，『リーダーズ・ダイジェスト』からのもの，ホーソーンの「伝記物語」（“Sir Isaac Newton” *Book 2*），詩では H.W.ロングフェローのもの（“A Psalm of Life”）が扱われている。フランスではモーパッサン（“Two Fishermen” *Book 6*），イタリアではエドモンド・デ・アミーチス「難破船」（“Shipwreck”）が取り上げられている。

興味深いのは，当時の社会的状況を物語るようなアルフォンス・ドーデ「月曜物語」から “The Last French Lesson” *Book 2* が取り上げられていることである。ドーデの同作品は 1905（明治 38）年に刊行された *New Century Supplementary Readers* (2) と 1921（大正 10）年に出版された『新英語讀本』（4 巻）など，日本の英語教育の教科書教材としてたびたび英訳されて掲載されている。したがって，戦後の混乱期にある 1948 年準拠版教科書は日本統治時代から台湾で使用されていた英語教科書の題材の影響を受けている可能性が示唆される。内容は，戦争によりこれまで土地の人たちが使用してきた言語を，別の言語に変更することを余儀なくされる話である。当時の台湾の子供たちにとってはまさに当事者の話である。

政治的意向が反映されがちなのは，社会科（歴史・地理など）の教科書，国語の教科書であり，これらの教科書については検定も綿密に行われる。しかしながら，外国語の教科書は，

政治的意向からは一般に遠いと思われがちである。この点から鑑みれば、国定教科書になる1983年以前は教科書審定（検定）がさほど厳しくないことに加えて、英語の教科書であるために当時の教科書審定（検定）を免れたのか興味のあるところである。

1971年準拠版では「文学」は「歴史」に次いで第2位である。「文学」のうち、英国の作品としては、シェイクスピア（“Shakespeare: England’s Greatest Playwright” 社会組 *Book 5*）、アルフレッド・テニソン（“Two Poems by Alfred Tennyson” (Break, Break, Break) 社会組 *Book 5*）、R.L.スティーヴンソン（“Two Poems by Robert L. Stevenson” (Farewell to the Farm) 社会組 *Book 4*）の作品は見られるが、米国の作品が急激に増え、O. ヘンリー（“After Twenty Years” 社会組 *Book 4*）、ヘミングウェイ（“Old Man at the Bridge” 社会組 *Book 6*）の作品が加わった。“Appointment with Love”（社会組 *Book 6*）は日本の教科書（*Perspective English Communication I* 第一学習社）でも扱われている。その他、スペインの「ドン・キホーテ」（自然組 *Book 4*）が取り上げられている。1971年準拠版には、特にこの頃の政治的背景である「中国」化的な作品は見受けられない。

1980年代後半からの民主化に伴ってか、「社会科学」の《家族・男女・老人問題》や《民族・慣習》が増え、そのため1983年準拠版では「文学」は「社会科学」に次ぎ第2位である。大きな特徴は、1巻に1課程度は《英米詩》を取り扱う傾向がはじまり、この傾向は1995年準拠版、2008年準拠版を経て基本的に現在まで続く。作品は1971年準拠版にも増して米国の作品が占める割合が増えた。この要因として、1979年に「台湾関係法」が発効されて以来の、台湾と米国の緊密な関係が提示できる。作品にはヘミングウェイ（“True Nobility”）、マーク・トウェイン（“A Famous Story of Mark Twain”）、現代詩人のラングストン・ヒューズ（“I Dream a World”）の作品がある。

台湾の教科書で扱われる《英米小説》、《英米詩》には日本の英語教科書（1970年準拠版）で扱われているものと共通するものが少なからず見受けられた。とりわけ「詩」については1983年準拠版の国定教科書のシリーズに日本の教科書からの直接引用がある（“Two Poems” *Book 2*）。作品はエミリー・ディキンソン（“If I Can Stop One Heart from Breaking”）とジェームズ・ステューブンスの作品（“The Snare”）の2編で、1970年準拠版 *New Horizon English Readers (NHER)* 2（東京書籍）から引用されていることが教科書中に明記されている。さらに、同シリーズの *Book 5*（“Two Poems”）でも、日本の同シリーズ1970年準拠版 *NHER* 3と同じ作品であるW. B.イェイツ（“The Lake Isle of Innisfree”）とJ.メイスフィールド “Sea-Fever” の2編が使用されている。台湾の *Book 2* が1989年、*Book 5* が1988年に出版されているのに対し、日本の東京書籍のものは *NHER* 2 が1973年、*NHER* 3 が1974年に出版されている。これは日本の教科書が、台湾の教科書編纂の参考になっていた可能性を示唆するものであろう。

1995年準拠版では、1983年準拠版と同様に「文学」は「社会科学」に次ぎ第2位である。第3次区分においては、1990年代からの民主化に伴ってか、これまで1位であった《英米小説》は「社会科学」の《家族・男女・老人問題》にとって代わられたにもかかわらず、

これまで通り《詩》は多く扱われている（第3位）。歴史的に振り返ると、古くから中国社会では漢文、漢詩の素養が社会人として重要視されてきた。これと詩を重視する関係については後述する。作品はこれまでの米国偏重から、再び英国や他の地域からの作品が増え始めたことは留意すべき点であろう。米国では E.ディキンソン（“Emily Dickinson and Her Poems”, *Far East English Readers (FEER)* 3), マーク・トウェイン（“The Happy Whitewasher” *FEER* 4), R.フロスト（“The Poems of Robert Frost” *San Min English Readers (SMER)* 1) がある。英国では W. ワーズワース（“I Wandered Lonely as a Cloud” *Lung Teng English Readers (LTER)* 3), シェイクスピア（ソネット）, メリー・シェリー（“The Story of Frankenstein” *LTER* 5), モーム（“The Luncheon” *FEER* 3) がある。フランスではモーパッサン（“The Necklace” *SMER* 6), そして、ガストン・ルルー（“The Phantom of the Opera” *SMER* 1), その他、ギリシャ神話、中国寓話、ロシア小説（トルストイ “How Much Land Does a Man Need” *FEER* 2) が扱われている。

2008 年準拠版では「文学」の扱いは第1位である。1990 年代の「国際化」・「本土化（台湾化）」の動きに伴って、他の分野がバランスよく取り上げられるようになる中、さらに文学重視傾向が強まっていることは注目に値する。第3次区分の《詩》がこれまで同様に重きが置かれ、1年生から3年生にわたって一層段階的、計画的に指導されている。《詩》については、2008 年準拠版では小説と同数取り上げられている。英国をはじめ米国の代表的詩人の作品（C.ロゼッティ, A.E. ハウスマン, R.フロスト, E.ディキンソン, エリザベス・ビショップ）を体系的に取り上げ、その基本から技巧、鑑賞、そして創作まで細かく指導している。2008 年準拠版では名作にこだわらず現代のものも取り上げられ多様化している。

《小説》については、英国ではシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」などの文学作品が扱われており、アメリカの O. ヘンリーの短編（「二十年後」）は 1971 年 1995 年準拠版をはじめ、これまでもたびたび取り上げられてきた。2008 年準拠版では、1995 年準拠版に見られないブラジルや英国の新しい作家（パウロ・コエーリョ, ダレン・シャン）なども現れている。「オペラ座の怪人」, 「レ・ミゼラブル」などフランスの作品もまた多いが、これは 1995 年準拠版に共通するものである。

英米詩については、日本の高校英語教科書（1978年学習指導要領準拠版）で扱われた最頻出の詩人と比較すると興味深いものがある。すなわち、日本では1位にR.フロスト、続く2位はW.ワーズワース, W. ブレイク, C.ロゼッティの名が挙げられており、その他, A.テニソン, E. ハウスマン, H.W.ロングフェロー, E.ディキンソンにも言及がある（西前, 1985）。これらの多くが、前述の台湾の教科書で頻出する作家と一致する。勿論、これらいずれもが英米文学史上の代表的な作家であり、さらには日本の英語教科書、そして台湾および中国の教科書は米国や英国の教科書の影響を受けているのであるから、いわば当然のことであるとの指摘もあろう。しかしながら、それを考慮に入れてもなお、数ある作品の中で常に日本と台湾の教科書に共通して登場する作家・作品があることは否めず、次項からはそれについて考察する。

#### 4. 台湾の教科書で取り扱われる文学教材に影響する要因分析

台湾の英語教科書で扱われている文学作品の選択に関わる要因は何であろうか。戦後台湾の英語教育は、それまでの日本の統治時代（1895年～1945年）の英語教育や文化からの影響はないであろうか。1945年に台湾は「祖国」中華民国に返還される。その後は中華民国からの教育体制が開始される中、国語政策等が進められるが、果たして英語教育に関してはどうであったか。また、1950年～1960年代以降、台湾に多元的に関わってきた米国の影響はどうであろうか。これらについて、以下の3点から調査を行い総合的に分析する。1) 日本統治下における教育・文化的背景と中華民国からの教育体制 2) 台湾と戦後日本および中国の教科書で扱われる文学作品・作者の比較、そして 3) 台湾師範大学の教授陣、加えて現役の高等学校教員の方々への質問紙・聞き取り調査である。

まず、戦前に台湾の英語教育で用いられていた日本の英語教科書と、中国大陸出版の英語教科書の題材内容調査を行い、台湾の1948年～2008年準拠版と共通している文学作品、作者を調査する。次は、第3項で示したように、台湾の1983年準拠版教科書には日本の1970年準拠版教科書からの引用が明記されており、そのほかにも共通の題材がみられることから、*New Horizon*（東京書籍）を含めた3社の1970年準拠版教科書と、中国大陸出版の英語教科書について上記と同様な調査を行う。1970年代の中国の教科書について竹中（1977）は、「内容には言語とイデオロギーを同時に教えようとした初期のソ連のものの中国版的なものであり、英米人の書いた文章を含まず、中国人の書いた中国関係のものばかりである」（p.38）と述べている。文化大革命終結後、1990年代からの本格的な教育課程改革を経て、2001年には新たな教育課程基準の試行と導入が始まった（科学技術振興機構中国総合研究交流センター, 2013）。そこで中国大陸の教科書は、高等学校用の2003年準拠版教科書を中心にその前後（1999年～2004年）に出版された教科書を調査することにした。

最後は質問紙・聞き取り調査である。前述（2 [2]）のように、日本の英語教科書から文学作品が急激に減少するのは1990年代はじめからである。同時期の台湾でも、1990年代後半からは国際化、グローバル化に伴う第3期、第4期の英語政策が打ち出され、英語教育の大きな転換期でもあった。実際、1995年公布の「課程標準」が、2005年の「課程暫行綱要」を経て、2008年に公布された「課程綱要」の「目標」では、「英語による論理的思考、分析、判断および整合・創造力の育成」が新たに明記される。さらに「言語能力」の項では、「聴く・話す・読む・書くの総合応用能力」が新たに追加され、コミュニケーション能力に重点が置かれるのは日本と同様である。ところが、台湾の文学重視は2008年準拠版以降も変わらないことが調査結果から明確となった。これはいかなる理由によるものかを、戦後台湾の英語教育を牽引し、教科書作成に携わり、教科書編纂や「課程綱要」作成に関わった教授陣への聞き取り調査により明確にする。加えて、現場の教員の考え方を探る。これら教授陣には米国の学位取得者も多い。そこで、質問紙・聞き取り調査を行い、アメリカからの影響を明らかにすることを試み、題材内容の選択に関わる要因を社会文化的・歴史的側面から探る。これは、量的な調査分析での限界を埋めるために必要な調査であると考えられる。

### (1) 台湾の教科書における日本統治下と中華民国の教育・文化的影響

「文学」において、戦後台湾の英語教科書で時代を通して扱われている題材のいくつかは日本の教科書と同様のものがある。共通する作品や作者の例としては、早期のものではシェイクスピアの作品、A.テニソンや W.ワーズワースの詩、マーク・トウェインの作品、以降は R.フロストなどの詩人、O. ヘンリーの「20 年後」、「賢者の贈り物」などである。その要因として、日本統治時代の教育や文化が戦後の英語教科書に影響を及ぼしている可能性について明らかにすることを試みた。台湾で日本統治時代、第二次大戦前まで使用されていた英語教科書の一つは、その当時日本でも代表的教科書であった三省堂出版の神田乃武による *The King's Crown Readers* である（相川，2005）。そこで、この全 5 巻（1926）<sup>4)</sup> で扱われている文学作品の作者が、台湾の高校英語教科書（1948 年準拠版～2008 年準拠版）で扱われている文学作品の作者と一致するものを調査した（表 5-4、図 5-3 参照）。

同様に、戦後中華民国からの教育体制が開始される中、中華民国（大陸）からの文学作品の影響がどの程度あるかを探るため、戦前の中国大陸で出版された教科書（計 4 巻 1933-1941）<sup>5)</sup> で扱われている文学教材の作品・作者を調査し、台湾の教科書の文学教材との一致を調査した（表 5-4、図 5-3 参照）。はじめは作品を調査したが、結果が煩雑で傾向をつかめないことから、作品の作者に絞り調査をすることにした。また、分母は基本的には文学を扱う課数と一致するが、1 課に異なる作者の作品がある場合は作者の数に従った。

表 5-4：日本統治時代および戦前中国英語教科書（*The King's Crown Readers*）と戦後台湾英語教科書との文学作品の作者の一致

	1948	1971	1983	1995	2008	平均
<i>The King's Crown Readers</i> 1-5（数）	5/37	6/32	2/20	10/40	4/42	27/171
<i>The King's Crown Readers</i> 1-5（%）	13.5	18.8	10	25	9.5	15.7 %
戦前中国英語教科書（数）	9/37	7/32	2/20	18/40	10/42	46/171
戦前中国英語教科書（%）	24.3	21.9	10	45	23.8	26.9 %

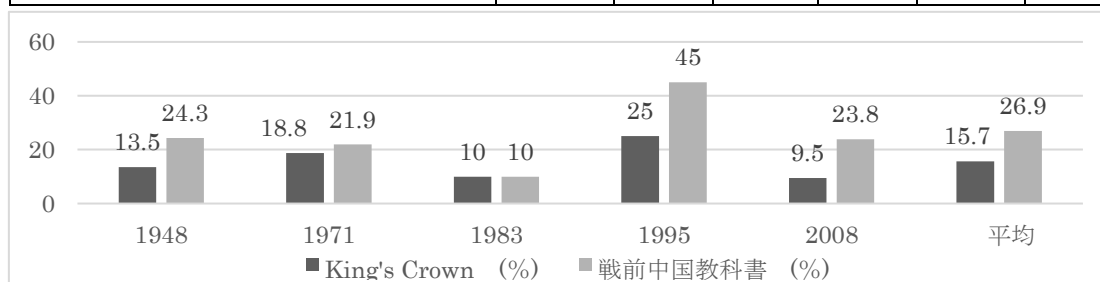


図 5-3： *The King's Crown Readers* と戦前中国教科書と戦後台湾英語教科書との文学作品の作者の一致

*King's Crown* と中国戦前教科書のいずれも、その大半が英国そして米国の著名人の散文や詩、それについての伝記や逸話を中心にするものである。台湾の 1948 年準拠版は中でも最もイギリス文学を中心とした作品が多いシリーズであるが、*King's Crown* と戦前中国英語教科書に共通して扱われているディケンズやシェイクスピアの作品は 1948 年には現れ

ず、1971 年以降に現れているなど、これらとの一致には多少のずれがみられる。これについては今後調査すべき課題の一つである。

*King's Crown* と戦前中国の英語教科書の両者とも、台湾の準拠版教科書との文学作品の一致については同様の曲線を描いている。すなわち、*King's Crown* と戦前中国の英語教科書ともに 1983 年に一致が少なくなり、1995 年に多くなり、再び 2008 年では減る。1983 年は国立編訳館主編の国定教科書で、調査対象は全 6 巻（84 課）であり、全体数が少ないことに伴い文学作品の数自体が少ないことに原因がある可能性がある。いずれにしても、この調査からは日本の統治時代の教育や文化の影響について否定はできないが、これがことさら大きいとは明言できず、むしろ本土中国からの影響の大きさが読み取れる。これは、戦後から 1970 年代まで続く、中華民国政府こそが中国全土の唯一の合法政府であるという主張に基づいた、台湾の国民党政権の政治体制と大きくかかわっていることが推測される。1980 年代後半からの民主主義体制への移行後も、その傾向が変わらないことについては後述する。

一方、戦前の日本と中国の英語教科書では、扱われている文学作品やその作者の一致が多い（A. テニソンや W. ワーズワースの詩、シェイクスピアやロングフェローの作品など）ことが明らかとなった。

## （2）台湾と戦後日本および中国の教科書で扱われる文学作品・作者の比較

台湾の英語教科書の文学作品では、上述のように日本の教科書（1970 年準拠版）からの直接の引用があった。この *New Horizon English Readers*（東京書籍）の他の課との一致はどうか。また、同じ 1970 年準拠版の他 2 種の教科書 *The Crown English Readers*（三省堂）、*New Vision English Readers*（開隆堂）を追加し、計 9 巻<sup>6)</sup> を調査した。結果は以下になる（表 5-5、図 5-4 参照）。台湾の 1971 年と 1983 年準拠版において、日本との一致が急激に増え（1971 年 25%、1983 年 35%）、1995 年（32.5%）2008 年（23.8%）と減少はするものの、一致する傾向が継続的にみられる。

一致する作者・作品は、英米作品ではシェイクスピア、コナン・ドイル（「シャーロック・ホームズ」）、O. ヘンリーがあり、ヘミングウェイにおいては作品は異なるが日本・台湾の双方で複数扱われていた。詩では E. ディキンソンなど前述の他、W. B. イェイツ（“The Lake Isle of Innisfree”）がある。その他、英国の C. ロゼッティや米国の R. フロストの作品も複数扱われている。教科書会社による違いがあり、本編の課で詩の扱いがあるのは *New Horizon English Readers*（東京書籍）のみで、*The Crown English Readers*（三省堂）は文学作品は多いが詩の扱いはみられなかった。開隆堂の *New Vision English Readers* では、巻末 Appendix にて上述の英米の詩が載せられていた。全体的に一致する作品には共通点があり、定番の英米の作品と現代の米国作家のものが多く、人生の機微や自然の美しさが謳われ、若者向けの文学作品が選ばれている。

1971 年準拠版から 1983 年準拠版にかけて急激に日本の教科書との共通の作者・作品が



増加するのは着目できよう（表 5-5、図 5-4 参照）。1995 年、2008 年にかけては中国との共通の作者も増えてくるのは、台湾の「民主化」、「本土化（台湾化）」に伴った社会的な背景が影響しているものと思われる。台湾の 1983 年準拠版以降の教科書にアメリカの作家・作品が多くなるのは、1970 年準拠版の日本の教科書と共通した傾向である。

一方、日本の英語教科書 2003 年準拠版の先行研究（小川他、2007）では文学を扱う割合が全体の 3%にとどまり、内容も夏目漱石の作品など自国の文化を外に発信するという内容への変化もみられる。これ以降の日本の英語教科書における文学離れは言及に及ばないが、台湾では 1995 年、2008 年準拠版に至る現在まで、日本で 1970 年代に取り扱われていたものと同様の作家の文学作品が今もなお扱われているということになる。これはすなわち、台湾の 1995 年、2008 年準拠版ではもはや日本の同年の教科書との一致は少なく、台湾の独自性の強い教科書が編纂されていることが示唆される。

表 5-5：戦後日本および中国の英語教科書と戦後台湾英語教科書との文学作品の作者の一致

	1948 年	1971 年	1983 年	1995 年	2008 年	平均
日本 1970 年準拠版教科書 3 社 9 巻（数）	1/37	8/32	7/20	13/40	10/42	39/171
日本 1970 年準拠版教科書 3 社 9 巻（%）	2.7%	25.0%	35.0%	32.5%	23.8%	22.8%
中国 1999-2004 年出版教科書 3 社 17 巻（数）	2/37	1/32	1/20	11/40	4/42	19/171
中国 1999-2004 年出版教科書 3 社 17 巻（%）	5.4%	3.1%	5.0%	27.5%	9.5%	11.1%

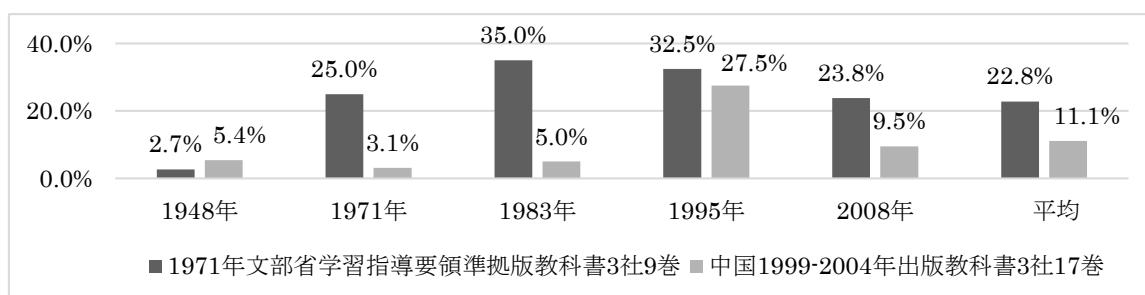


図 5-4：戦後日本および中国の英語教科書と戦後台湾英語教科書の文学作品の作者の一致

次に戦後中国大陸出版(1999 年-2004 年)の教科書計 17 巻<sup>7)</sup>との比較をする。これについては筆者が共著の先行研究（小川他、2007）の中国の教科書調査を使用し、本研究のために文学に特化してさらに調査したものである。1948 年準拠版から 1983 年準拠版では台湾と一致する作品や作者は少ないが、1995 年準拠版になると 27.5%に上る。2008 年準拠版では少し下がり 9.5%が一致しており、全体の台湾と一致する文学作品の作者の平均は 11.1%となる。日本が 22.8%であることと比較すると低い（表 5-5、図 5-4 参照）とはいえ、本土中国からの影響もまた考慮すべき数値であろう。中国の教科書で注目すべきは詩の扱いが全くないことである。さらに、1999 年-2004 年出版の中国の英語教科書の題材内容の中で「文

学」を扱う割合は 10.7%（全体で 5 位）で台湾（1995 年準拠版 18.9%，全体で 2 位）には及ばない。以上に鑑みると、「文学」についての扱い方に差があることもまた明らかとなった。すなわち、古くから漢文、漢詩、文学的教養に重きを置く古来中国社会での伝統は、むしろ台湾の方で継承され、1966 年からおよそ 10 年続いた文化大革命以降、実用主義となった中国では、教科書の題材内容においては、「社会科学」が第 1 位（21.4%）である点は日本や台湾とは共通しているが、「自然科学」（第 2 位；15.7%）、「技術」（第 4 位；11.3%）が上位を占めており（小川他，2007），自然科学や技術・産業を重視する国策が、教科書の題材にも顕著に反映されていると言えよう。両国ともに、2001 年に WTO に加盟し、それぞれが国際貿易に必要な英語力の養成に着手しているものの、このような差異が出ていることは興味深い。

台湾の英語教科書と日中両国の文学作品の一致の推移からは、1971 年準拠版から 1983 年準拠版教科書にかけて明らかに日本の教科書と共有するものが増えてきている。一致する作品の特徴が英米の古典、現代の小説や詩を取り扱い、とりわけ米国の作品が多くなってきていることから、台湾と日本が同様に米国との政治的、社会的な関係の強まりという共通点を有する背景が指摘されよう。さらに、前述した台湾の 1983 年「課程標準」準拠版教科書における日本の教科書からの複数の直接引用から考慮すると、当時の日本の英語教科書が影響した可能性も否めない。

### （3）質問紙・聞き取り調査

台湾師範大学で英語教育を主導し、教科書編纂や 2005 年「課程暫行綱要」および 2008 年「課程綱要」作成に携わった教授陣、加えて現役の高等学校教員の方々への質問紙・聞き取り調査から、題材内容の選択にかかわる要因を考察する。まず、高級中学（高等学校）の教科書を中心に台湾の英語教科書の編纂に長きにおよび関わってこられた方との聞き取り調査<sup>8), 9)</sup>では以下のことが明らかとなった。

#### 〔教科書編纂のポイント：なぜ文学が多く扱われてきたのか〕

シリーズで数期編纂した *FEER*（1995-2008 年準拠版）では、文学作品については古典・近代と現代小説がバランスよく配置できるように考慮し、一卷に詩を扱う課を一つは入れるように配慮した。言語教育として詩によって言葉の美しさと同時に、自然の美しさや人間の情など人間性を育むことに重きを置いた。題材内容の選択のポイントは、生徒にとって面白く（interesting）、実用的（practical）であることで、ユーモアやジョークのセンスを養うことから短編を入れた。面白く実用的という文言は「課程標準」および「課程綱要」の教材概要とも一致する。

### 〔2008 年「課程綱要」の変革：論理的思考と文学〕

2008 年「課程綱要」の変革に伴い、論理的思考が重視される中、文学作品の扱い（特に詩）は少なくなる傾向にある。しかし、文学作品そのものは論理的思考を育てる教材として有効である。そのためには教員の指導が重要なため、教員指導書作成を慎重に行い、どのように文学作品を扱うかを教員へ指導した。

### 〔文学作品の選択における諸外国からの影響〕

日本の戦前・戦後の文学作品との共通点については、特に意識したことはない（現在国立台湾師範大学で教鞭を執り、教科書作成に携わっている方からも同様な回答を得た）<sup>9)</sup>。中国や日本の教科書も参考にするが、特に特定の国に影響されるということではなく、スタンダードなものが一致したということであろうか。アメリカの English as a Second Language (ESL) 教授法やその教材使用には多少影響は受けているであろう。

「課程暫行綱要」（2005）および「課程綱要」（2008）作成に携わった教授との質問紙・聞き取り調査<sup>10)</sup>は以下のようにまとめられる。

### 〔文学重視の今後の動向〕

*FEER* は 1990 年代後半から主流となった教科書で、他の教科書会社はこれを手本としてきたといえる。文学作品の重要性は「課程標準」、「課程綱要」でも指摘されている。しかし、「課程綱要」（2008）の変革に伴い、入試も含め生徒へ親切（“more friendly”）な題材内容が好まれるようになっており、文学（難解な理解を要求するもの、長編詩等）の扱いは少なくなるかもしれない。教科書で教えているにもかかわらず、最近の大学入試で文学の取り扱いがないことの矛盾点からも文学の比重について考慮すべき点があるかもしれない。

### 〔なぜ文学作品を含め全体に米国の作品が多いのか〕

米国の作品が多いことについては、台湾ではアメリカ英語が好まれ、米国の作品が入手しやすい。また、台湾にあるアメリカ・カナダの出版社で教科書へ作品を書きおろす人材が確保できる関係もあるだろう。

最後に、現場の高校で実際に教鞭を執っている英語教員 3 名との質問紙・聞き取り調査では以下のことが判明した<sup>11)</sup>。

### 〔文学作品を教室で取り扱うこと〕

聞き取り調査を行った教員からは、文学作品を授業で扱うことで、言葉、人間性、論理的思考を育てると回答している。詩の指導には教師用指導書が明確で役に立つとの意見があった。

### 〔2008 年「課程綱要」変革後の文学作品重視の動向〕

2008 年「課程綱要」以降、論理的思考の養成と生徒への負荷を減らす教育という観点から、これまでの伝統的な文学重視、とりわけ詩の扱いを減らす動きがあり、教科書は実際に変化してきている。三民書局の新刊の教科書では詩の扱いが減っていることも事実である。しかし、現場の教員からは文学教材を求める声があり、高校生に必要な人生訓、友情、恋愛、自然美などを文学を通して学ぶ有効性を感じていることもまた事実であるのが明らかとなった。

### 5. 台湾の高校英語教科書の題材内容「文学」に影響する要因

台湾における日本統治時代（1895 年～1945 年）の英語教育や文化が、その後の台湾の英語教科書の文学作品の選択に与える影響については、戦前の日本と中国の教科書の題材内容との比較調査からは否定はされないが、特に影響があるとは明言できず、むしろ台湾への本土中国からの影響が継続して存在することがうかがわれた。これは、台湾の国民党政権の当時の政治体制と大きくかかわっていることが推測される。しかしながら、民主主義へ移行した 1995 年準拠版以降にもその傾向が続いており、この場合は、高校生にふさわしい良質の文学作品が一致したとの見方ができよう。

日本の 1970 年準拠版教科書における文学作品・作者と台湾の教科書との一致では、台湾の 1971, 1983, 1995 年準拠版で一致が多く、両国ともアメリカ作品を多く扱っていることから、両国のアメリカとの関係、すなわち、政治・社会的背景が大きな要因として考えられる。聞き取り調査も含め総合的に考慮すると、教科書編纂における日本の影響というより、日本、台湾のそれぞれ両国が、アメリカと社会的・政治的関係が深いという背景による一致とみるべきであろう。

質問紙・聞き取り調査からは、1950 年～1960 年代以降、台湾に多元的に関わってきたアメリカの影響は現在まで継続しており、台湾の社会的背景からもアメリカ作品が扱われる傾向にあり、同時にアメリカで行われている ESL の指導法や教材なども台湾の教科書の作成に反映していることがわかった。

文学作品、とりわけ詩の扱いが多い理由は、台湾の漢文化の継承による漢詩を重んじる社会的歴史的な背景はもとより、教科書編者の共通した傾向として、詩や小説により、言語教育として言葉の美しさを学び、人間性を高めることに重きを置いていたことが明らかになった。

また、2008 年「課程綱要」がこれまでの「課程標準」と大きく変化したことや、その大きな柱である論理的思考の育成という課題に向け、詩を扱う数は少なくなったものの、文学作品の数の大きな変化に結び付かなかったのは、教科書編者が論理的思考を育むためにどのような文学作品をどのように扱うかを教師用指導書で分かりやすく解説していることも要因であるようである。とりわけ、文学作品を論理的思考力育成のための重要な教材として、教科書編纂者と現場の教員が認識していることは注目できよう。台湾の高校英語教員は積

極的に文学作品を教室で取り扱うことを支持し、特に詩は難解なものであっても指導に大きな問題は感じてはいないことが分かった<sup>14)</sup> (Chen Hong-Wen, 2003)。現場の教員もその哲学に共鳴し、理解し指導することができており、現場の教員との良好な関係がその要因として挙げられる。

### まとめと今後の課題

台湾は1948年から2008年度準拠版に至るまで、変わらず「文学」を重視する傾向にある。大学入試との兼ね合いや2008年「課程綱要」の大きな変化に伴い、論理的思考を育む教材のあり方などの問題に対処しながらも、台湾の英語教育は「実用英語を重視し、かつ文学的素養の人間教育を重んじ、これらを両輪としている」ことは、同様の問題を抱える日本の英語教育を考える上で見逃すことができないものである。なかでも、文学教材を論理的思考、分析力、判断力、創造力の育成に有効であるとの指摘については、今後引き続き指導書研究と授業観察を経ながら、研究する予定である。

台湾の英語教科書における文学作品とその作者の選択には、古くは英国の英語教育、日本、中国、そして米国からの歴史的、社会的な様々な要因が重要かつ多元的に影響していることが明らかとなった。これらの要因に直接・間接的に関与するのは、教科書編者や「課程標準」および「課程綱要」作成者の教科書編纂における統一された見識であることが伺われた。また、これら教科書編者の共通した見識は現場の教員にも受け継がれ、一致した理解のもとに支えられている様子がうかがわれた。聞き取り調査についてはその実施範囲は決して広いものではないが、戦後台湾の英語教育を牽引してきた国立台湾師範大学で、1990年代からの教育改革と教科書制作に関わってきた教育者の方々と、高校の現場で指導にあたっている卒業生を対象としていることは意味があると考えられる。

最後に、台湾の文学重視の傾向においては変化の兆しが見え隠れするのも事実である。今まで常にトップのシェア率を誇っていた *FEER* は最近では三民書局に追い上げられ、その三民書局の最新版シリーズ(2014-2017)では文学作品、とりわけ詩の取り扱いが減る傾向がある。遠東図書出版の最新版シリーズ(2015-2017)でも程度の差はあるが同様のことが認められる。今後どのようにこの傾向が変化するのか、文学重視や詩を重んずる傾向がいか

## 第2節 台湾の英語教科書で取り扱われる文学教材が培う学力

### —1995年「課程標準」、2008年「課程綱要」準拠版教科書研究から—

台湾で英語教育が小学校5年生から必修化されたのは2001年で、2005年には小学校3年生からに早まった。2008年公布の「普通高級中学課程綱要」の「[英文] 課程綱要」の「目標」の項には、「英語による論理的思考、分析、判断および整合・創造力の育成」が盛り込まれ、「言語能力」の項には、従来の4技能の他、「聴く・話す・読む・書く」の総合的運用能力」が5つ目に追加された。その準拠版審定（検定）教科書では思考力育成に重きが置かれ、内容重視の教授法（Content-based instruction; CBI）が数シリーズで導入され始めた。

5章1節の研究の結論として明らかになったのは、どの年代においても「文学」的素養に比重を置いた人間教育を重んじることは変わらず、「文学」を論理的思考力の育成のための重要な教材として活用していることである。

本節では、コミュニケーション活動へとシフトした1995年「課程標準」準拠版の教科書と、論理的思考力の育成の文言が「目標」に追加され、明確な形で思考力の重視と「4技能の総合的運用能力」の育成が打ち立てられた2008年「課程綱要」準拠版教科書を取り上げ、その中で扱われている文学作品に着目する。そして、それらの文学教材を「培う学力」という観点から調査分析し、実際に生徒のどのような学力を育むように設計され、どのような「言語活動」と指導方法が採られているかを明らかにすることを試みる。これらを考察し、解明することで、台湾の英語教育で「文学」が長きに渡り重視される要因を明らかにする。

#### 1. 1995年「課程標準」および2008年「課程綱要」

##### —「論理的思考・判断力および創造力」と「4技能統合」—

高級中学英語教育における教育の変革はまず、1995年改訂の「課程標準」にその兆しが現れ、「目標」の欄に「思考方法の訓練」の文言が記載される。これは1994年改訂「國民中学課程標準」の全教科における基本理念に「創造力・論理的思考・価値判断の能力を啓発し、...」（山崎，2009，p.159）が明記されたことから、次の段階である高校英語に組み込まれたと判断できる。さらに「学習方法と態度」では、「英語によるコミュニケーション能力を高める」が記載され、「コミュニケーション力」の文言が明記され始めた。

続く「普通高級中学課程暫行綱要」（2005年）を経て、2008年改訂の「普通高級中学課程綱要」の「[英文] 課程綱要」では、上記の二項目が明確に打ち出されることとなる。「教育目標」の項には「英語による論理的思考、分析、判断および整合・創造力の育成」の文言が新たに加わった。「言語能力」の項には、従来の4技能の他、「聴く・話す・読む・書く」の総合的運用能力」が5つ目に追加された。これらの変化がいかに「本文」および練習問題、タスク等に反映されているかが注目される。

## 2. 研究方法

### (1) 本研究の調査対象教科書と文学に関係する課数

調査教科書と文学教材に関係する課数について説明する。1990年代半ばから始まった教育改革、特に1999年の「教育基本法」の制定により、教育の民主化、自由化が進み、これを受けて教科書も国定教科書に替って、国立編訳館の審定を経た民間の出版社が出版した教科書が使用されるようになった。高級中学の教科書はこれに先駆けて1989年には審定制となり、2002年に国民中学（日本の中学校に相当）もこれに続いた。以上により、調査の対象となった1995年準拠版、2008年準拠版教科書は教育省の審査を受けた審定（検定）教科書である<sup>12)</sup>。台湾の英語教科書は、日本のように「コミュニケーション英語」、「英語表現」（2022年からは「論理・表現」）に分かれておらず、すべて一種類の教科書にまとめられている。B5判サイズの教科書を1年間で2巻学習し、3年間で6巻学習するのが標準である。2008年準拠版は内容が基礎編と発展編に分かれ、第3巻目からこの方式が採用されている。

今回の調査対象としたものは、1995年、2008年準拠版ともに、台湾の高校で最も幅広く使用されている3社の審定（検定）教科書、*Far East English Readers (FEER)*、*Lung Teng English Readers (LTER)*、そして*San Min English Readers (SMER)*である。各6巻からなり1995年、2008年準拠版の3社のもの各18巻を合わせて36巻である。2008年準拠版については、その他よく使用されている*FEER* 乙版がある。そこで、このシリーズ全6巻を追加した合計42巻を調査対象とした。調査課数の合計は489課となる。

このうち文学に関係した課があるのは以下になる。各教科書とも全6巻を対象とし、1995年「課程標準」準拠版については*FEER* (1999-2003) 計15課、*LTER* (2001-2003) 計14課、*SMER* (2004-2005) 計11課である。2008年「課程綱要」準拠版については、*FEER* (2009-2012) 計14課、*FEER* 乙 (2010-2012) 計14課、*LTER* (2010-2012) 計15課、*SMER* (2010-2012) 計10課であった。これを合計すると、調査教科書は42巻、文学教材を扱う課は93課となる<sup>13)</sup>。

次に、本研究で調査した文学教材を扱う各課の主な構成は、「本文」とその前後の「練習問題」、「クイズ」、「タスク」、「プロジェクト」などである。なお、台湾では、2018年に「課程綱要」が改訂され、準拠版教科書は2019年9月より順次1年生から出版されているが、本研究開始時ではまだ1年生用の2巻のみ出版され、2、3年生用は2008年準拠版が使用されていた。このため、本研究では1995年準拠版、2008年準拠版を調査対象とした。

### (2) 分析・分類の基本姿勢

教科書の文学教材によってどのような学力を育てようとしているのか。台湾の高等学校の審定（検定）教科書では、その冒頭部に「編纂大意」が書かれており、当該教科書の編纂の詳細、目標、各セクションの目標や使用法が書かれている。例えば、2008年準拠版*FEER* (乙) の“Thinking Corner”というセクションについては、「批判的・創造的思考を含んだ問

題で生徒の思考力と表現能力を育成する」との記述がある（日本語訳、下線ともに筆者による）。そこで各教科書の「編纂大意」の記載と各教科書シリーズ（7 種）の各課の構成を見ることにより、どのような学力を培うことを目標としているかを検討した。ここで検討したものはあくまでも培う学力の設計であり、評価ではないということを申し添えたい。さらに田中（2006）にて項目を確認した。

以上のように、各教科書シリーズ（7 種）の各課の構成を見ることにより、目指す学力をリストアップした。今回の調査では音声が入手できず、したがって、“Conversation & Listening”というようなセクションは基本的に調査の対象から除外した。

各教科書の各課の構成（セクション）と各々の発問やタスクなどが目的とする学力を分類したものが表 5-6 である。右に上げた項目は各セクションが培う学力となる。すなわち、「知識」、「内容理解・把握」、「論理的・批判的思考力」、「語彙力」、「文法」、「修辞」、「文章構成力」、「創造力」などである。

表 5-6:1995 年「課程標準」2008 年「課程綱要」準拠版 調査対象教科書各課の構成

1995 <i>Far East English Readers</i>	1995 <i>Lung Teng English Readers</i>	1995 <i>San Min English Readers</i>	2008 <i>Far East English Readers</i>	2008 <i>Far East English Readers (Z)</i>	2008 <i>Lung Teng English Readers</i>	2008 <i>San Min English Readers</i>	培う学力
Pre-reading Questions	Pre-reading Activity	Warm-up	Ready to Go	Getting Started	Warm-up	Before You Read	知識・論理的批判的思考力
Reading	Reading Selection	Reading	Reading	Reading	Reading Selection	Reading	知識
			Critical Thinking				論理的批判的思考力
Comprehension check 1. Find the main idea 2. Multiple Choice (TF)	Comprehension Check 1. Multiple Choice 2. Comprehension Questions	Post-reading 1. Find the main idea 2. Multiple Choice	Comprehension Check 1. Find the main idea 2. Multiple Choice (TF)	Comprehension Check 1. Find the main idea 2. Multiple Choice (TF)	Comprehension Check 1. Find the main idea 2. Multiple Choice (TF)	After You Read Comprehension Check1. Find the main idea 2. Multiple Choice (TF)	内容理解 内容把握
3.Comprehension Questions	3. Questions for Discussion	3. Topics for Discussion	Reader's Compass Thinking Zone	3. Thinking Corner	3. Thinking Further about the Topic	3. Questions for Discussion	論理的・批判的思考力
Vocabulary, Idioms and Phrases	Vocabulary, Idioms and Phrases	Vocabulary, Idioms and Phrases Word File	Vocabulary Idioms and Phrases	Vocabulary Idioms and Phrases Word Power	Vocabulary Idioms and Phrases Word Power	Words in Use Vocabulary, Idioms and Phrases Word File	語彙力
Discussion							論理的・批判的思考力
Grammar Focus	Post-reading Activities	Sentence Patterns (Grammar)	Grammar Focus	Grammar Focus	Patterns in Action (Grammar)	Patterns in Use (Grammar)	文法・修辞
Language Use	Conversation Practice	Expansion	Chat Room	Language Use	Language Use	Beyond the Text (+Listening)	文法・要約 論理的思考 知識・修辞 文章構成力
Conversation & Listening	Listening Comprehension	Conversation & Listening	Listening	Listening	Listening Practice		リスニング力
	Patterns in Action (Grammar)		Activity Time				文法・論理的思考力
Pronunciation	Word Study & Collocations						発音・語彙力
	Writing Corner	Writing Practice	Writing Corner	Writing	Writing Corner	Writing Hands on	創造力・文章構成力

これらの中から本研究では、①文学教材が育む学力という観点で特徴的なもの、②台湾が1995 年以降重点を置いている「論理的・批判的思考力」、③「文章構成力」、「創造力」、そして台湾で特徴的なものとして④「修辞に関わる知識・技法」の4 項目を調査分析することとした。



### 3. 文学教材が培う学力

#### (1) 取り扱われている文学教材（作品）と英語教育における有効性

調査対象となる 7 種の教科書シリーズで、共通して取り上げられている主な文学作品を整理する（表 5-7 参照）。まず、小説・物語・寓話（作品と作者）では以下になる。米国の作品（「クリスマスの贈り物」、「二十年後」、「自動車を待つ間」〔O. ヘンリー〕、「トム・ソーヤの冒険」〔M. トウェイン〕など）や、イギリスの作品（「ランチョン」〔S. モーム〕、「フランケンシュタイン」〔M. シェリー〕、「ガリバー旅行記」〔J. スイフト〕など）を中心に、フランス文学（「首飾り」〔モーパッサン〕、「レ・ミゼラブル」〔V. ユーゴー〕、「オペラ座の怪人」〔G. ルルー〕など）、そしてギリシャ神話などが取り上げられている。これらは、日本の英語教科書でも 1970 年代、1980 年代までは取り上げられたなじみ深い作品が多く、青少年向けの倫理観・社会的問題、生き方などを考えさせる作品である。

作品のほとんどが簡易版（retold）になっており、原文のままではなかった。これは「課程標準」と「課程綱要」による「本文」の長さや語彙力の制限のためと思われる。一例をあげると、「自動車を待つ間」では、原作では女性主人公の描写で、“The girl consulted a tiny watch set...”と書かれているのが、高校 1 年後期の教科書（1995, *LTER2* C8, p.130）では“The girl looked at her watch...”に書き換えられている。

表 5-7: 1995 年「課程標準」2008 年「課程綱要」準拠版教科書で主に取り上げられる  
小説・物語

アメリカ	
O. Henry	<i>The Gift of the Magi; The Last Leaf;</i> <i>After 20 Years; While the Auto Waits</i>
Mark Twain	<i>The Adventures of Huckleberry Finn;</i> <i>The Adventure of Tom Sawyer</i>
Tennessee Williams	<i>The Glass Menagerie</i>
イギリス	
William Somerset Maugham	<i>The Luncheon</i>
William Shakespeare	<i>Romeo and Juliet</i>
Jane Austen	<i>Pride and Prejudice</i>
Mary Shelly	<i>Frankenstein</i>
Oscar Wilde	<i>The Happy Prince</i>
Jonathan Swift	<i>Gulliver's Travels</i>
Sir Arthur Conan Doyle	<i>The Adventures of Sherlock Homes</i>
フランス	
Guy de Maupassant	<i>The Necklace</i>
Gaston Leroux	<i>The Phantom of the Opera</i>
Victor Hugo	<i>Les Misérables</i>
他、ギリシャ神話、中国寓話、ロシア小説（トルストイ <i>How Much Land Does a Man Need?</i> ）など	

表 5-8: 1995 年「課程標準」2008 年準「課程綱要」準拠版教科書で主に取り上げられる  
詩・散文の作者

アメリカの作者	イギリスの作者	日本の作者（2008 年準拠版）
Emily Dickinson	Alfred Tennyson	Yosa Buson
Henry W. Longfellow	Elizabeth B. Browning	Matsuo Basho
A. E. Houseman	William Blake	
Robert Frost	William Butler Yeats	
Elizabeth Bishop	William Wordsworth	
Linda Pastan	William Shakespeare	
Edgar Allan Poe	Christina Georgina Rossetti	

詩・散文 については、作品が多くあるのでここでは作者を上げる（表 5-8 参照）。アメリカの R. フロスト、E. ディッキンソン、H. W. ロングフェローは複数の教科書会社、また複数の学年で数多く取り上げられている。自然の美しさ、厳しさ、生き方などを詠う作品が多い。イギリスでは、A. テニソン、シェイクスピア、E. ブラウニング、など、若者に向けて人生や愛を考える作品が多く、高校生に多くのメッセージを投げかける作品である。中にはシェイクスピアのソネットなど技巧的には高度なものも含まれている。2008 年準拠版では、複数の教科書会社で日本の俳句を取り上げるなど英詩に限らず幅広い作品を扱う傾向がみられた。

英語教育を通しての知的滋養を考慮すると、これら取り扱われている古典的な名作には一つの流れがあることに気が付く。すなわち、社会的問題が反映されていたり、哲学的な命題を含むことである。これらの教材による学習（経験）を繰り返すことで、語学ばかりでなく、思考力を高め、分析的思考力を培うことが可能である。そして、これらが思慮深く生きるための教養と人生の指針につながるという考え方は、人格主義的な教養教育に基づく読書観と言ってよい（折川，2020，p36）。このような立場は、1995 年「課程標準」では「題材内容の選択」の項で、「人生の意義を啓発する」と記載されており、2008 年「課程綱要」には「生徒の人文教養を高める」材料選びが記載されていることにも現れている。すなわち、台湾の教科書における文学教材の選択に教養教育が反映されていることが推察される。

例えば、以下はロシアの国語教育の例であり、一国を取り上げる危険性はあるものの、国語教育、そして、英語教育を考える上で、日本でも議論されていることと共通性があるので取り上げたい。現在のロシアの公教育における国語教育・文学教育の研究から折川（2020）は、「優れた作品は高次の考察ポイントを数多く抱えている。そして、それらとしっかり対峙しなければ深い理解は得られないという指摘である」と、ロシアの教科書会社の編集長であるクラソフスカヤの言を借り、これは「作品の質と考察の要求水準は連動しているという意味と換言できるであろう」と続けている（p.42）。

さらにここで考慮すべき点は、優れた文学作品を教材として使用するためには学習者の語彙力もある程度の高さが要求されることである。台湾の中高合わせた語彙数の多さも、文

学作品重視を可能にする重要な要因として指摘できる。台湾で定められている中高合わせた語彙数は、戦後一貫して 4000 語程度以上を維持しており、2008 年からは学年ごとの縛りもなくなり、レベルによってはさらに高い語彙力（4500 語～7000 語）を養成する動きがある。すなわち、ある程度高度な語彙力と内容を備えた作品が選択可能であるという背景も見えてくる。

1960 年代のイギリスの語学教育改革に端を発し、1980 年以降英語圏、非英語圏を問わず普及して台湾でも広まった Communicative Language Teaching (CLT) (高橋, 2015; Richards and Rodgers, 2001:154) は、様々な方法論のある中、コミュニケーション能力育成を中心に掲げ、4 技能を向上させる指導法である。1980 年以降のイギリスでのコミュニケーション言語教育 (Communicative Language Teaching: CLT) の広がりに伴い、多くの研究者がコミュニケーション重視の指導の中で文学を敬遠するのではなく、それに沿う形で文学教材の有効性を提示しようと試みてきた。その一つともなる英語教育における文学教材の必要性を英米の外国語教育から見た興味深い指摘 (高橋, 2015) がある。まず、CLT が文学の意義を見直す言動力の一つになったとの示唆である。CLT の特色は「オーセンティック教材」とタスクの活用である。Long (1986) は文学を「オーセンティック」教材として、「本物の言語活動 (genuine language activities) をもたらすものとし、それゆえ、CLT に基づいた授業を行う上で文学が有益であると主張している。さらに、アメリカでは Schultz (2002) が“critical thinking”や“interactive ways of teaching”が授業に導入されるようになった影響で文学教材が見直されるようになったと指摘している (高橋, 2015)。台湾の 2008 年の「課程綱要」では、CLT から派生したアプローチによる“Task-based”な活動を「教育方法」の項で記載している。それを受け、2008 年「課程綱要」準拠版教科書で最も代表的教科書のうち 2 シリーズ (*FEER* と *FEER* 乙) の両「編纂大意」では、CLT と、CLT から派生したといわれる CBI (Rodgers, 2001) を編纂の基礎となる指導法として明記している。

「実用的」な英語が注目される中、斎藤 (2003, 2009) は英語教育における「文学教材」の不可欠性を説き、同時に、教室での文学作品を用いるための方法論の提示の必要性を述べている。

## (2) 論理的・批判的思考力

「論理的・批判的思考力」を育むために、どのような教材を使用し、どのように指導されているのであろうか。近年、教科書のリーディング指導において深い読みを促す「発問」が着目されている (Been, 1975; 深澤, 2010; 田中他, 2011)。Been (1975) は、読解発問を事実発問、推論発問、評価発問の 3 つのタイプに分けた。まず、事実発問とは、テキストに書かれた情報や事柄を読み取らせる発問、次の推論発問とは、テキストには書かれていない事柄や内容をテキスト情報と読者の背景知識から推測させる発問とした。そして、評価発問とは、テキストに書かれた情報や事柄に対する読者の考えなどを促す発問とした。事実発問

は読解の基本であることは言うまでもない。しかし、推論発問と評価発問は、生徒から異なる解釈や考え方を引き出す特徴があり、学習者にとっての認知レベルも高次のものとなり、アウトプットの表現力を育てる面でも重要な発問と言われている（田中他, 2011）。

教科書のセクションのタイトル（表 5-6 参照）としても見受けられる“critical thinking”の定義については、これらの「発問」と重なる点が多い。米国で 1980 年代に発達した“critical thinking”の定義は様々ある中、多くの研究者は「批判的思考の重要な側面は、情報を効果的、かつ適切に収集、評価、および利用する能力である」（Beyer, 1985; Iakovos, 2011, p.82 で引用）については合意するということから上記の「発問」と一致する。

では、「小説・物語」と「詩・散文」に分けて具体的に見ていく。「論理的・批判的思考力」を育む発問やタスクは 1995 年、2008 年準拠版ともに、「本文」の後の内容理解・把握という、ストーリーの展開や詳細な理解を確認する発問（事実発問）の後で出されている。セクションとしては、1995 年準拠版では、“Topics for Discussion”（1995, *SMER*）, “Agree or Disagree”（1995, *LTER*）など、ディスカッション活動で使用する発問として与えられている場合が多い。2008 年準拠版では、その他、“Critical Reading”, “Thinking Zone”（2008, *FEER*）“Thinking Corner”（2008, *FEER* 乙）, “Thinking Further about the Topic”（*LTER*）など、思考力や批判的思考を考慮したタイトルが目立つ。これらのセクションでは、単なる内容理解にとどまらず、深い思考に関わる発問や言語活動が、個人やグループ活動で課せられている。調査対象のすべての教科書では、内容把握の後にディスカッションのための発問が上記のようなセクションの名称で設定されており、それらは「推論発問」と「評価発問」の範疇となっている（表 5-6 参照）。さらに、複数の教科書で“Agree or Disagree”, “Thinking Zone”などの活動が設定されている。2008 年準拠版においては、「基礎編」と「発展編」に分かれての編纂となるが、*SMER* では、3 巻（2 年生用）以降の“Questions for Discussion”の 2 問のうち 1 問と、*LTER* の 3 巻以降の“Thinking Further about the Topic”が「発展編」に入る以外はすべて「基礎編」であった。すなわち、これらの指導が特別なものではなく、主流として指導されていることがわかる。

具体的な発問では以下のものがある。「フランケンシュタイン」では、「もしあなたがフランケンシュタインなら、女性のモンスターを創ったか、理由を添えて話し合いなさい」“If you were Frankenstein, would you create a female monster for the monster? Why or why not? Share your thoughts with your classmates.”（2008, *SMER2* U9: Frankenstein, p.169）, そして、「フランケンシュタインとモンスターのどちらが同情（sympathy）に値すると思うか」“In your opinion, who deserves more sympathy? The monster or Dr. Frankenstein?”（1995, *LTER5* L7: Frankenstein, p.147）など、発問に対して自分で考えたり、グループで話し合ったりという設問がある。

同種のものとしては、イソップ寓話の「酸っぱい葡萄」では、「物語にある‘酸っぱい葡萄’とは何か、自分の‘酸っぱい葡萄’の経験を話し合いなさい”“What are ‘sour grapes’? Share your ‘sour grapes’ experience with your classmates.”（1995, *SMER3* U4: Aesop’s Fables,

p.67), さらに O. ヘンリーの「二十年後」では、「もし、あなたの親友や家族が罪を犯したら、警察に届けますか、それはどうしてですか」“If a good friend or a family member of yours committed a crime, would you report him or her to the police? Why or why not?”

(2008, *LTER2*L10: After Twenty Years, p.179) などがある。「酸っぱい葡萄」では、例えば、キツネの行動を考える上で自分の同様の経験を踏まえると、それが弱点を正当化することなのか、あるいは、きっぱり諦めることの大切さを知ることなのか、両面からの考えを具体的に筋道を立てて思考することができるわけである。すなわち、自分の経験を参照して考えたり、身近なものとして応用したりすることは、テキストに書かれていない事柄や内容をテキストの情報と読者の背景知識から推測させる問題であり、田中（2011）の「推論発問」や「評価発問」と結びつく。このように倫理的・哲学的にも複雑で高度な思考を伴う発問が組み入れられているが、発問は生徒の日常から引き出す工夫がされている。

また、タスクと組み合わせ、さらに深く考えるための足場掛け (scaffolding) を用意した発問がたびたび見られる。例えば、O. ヘンリーの「自動車を待つ間」では「どうして人は真実の自分を偽るのか」“Why do you think people lie about who they really are?” と、この作品のテーマとはいえ、一見抽象的な発問がある。しかしこの発問に答える前段階で、足場掛けとなる補足質問を用意し、二人の主人公の性格や生き方について深い思考を促す活動が用意されている。ここでは、「愛は信頼から成り立つ」、「人生は舞台上で私たちはみな俳優だ」などのいくつかの項目があり、主人公二人はそれぞれの項目に賛成するか反対するかを考える (“What would they think? According to what you have learned from the story, decide whether the young woman and the young man would agree or disagree to each of the following statements?” 1. Proper rules of behavior are important. ... 4. Life is but a play, and we are all actors on the stage. ... 7. Love is built upon trust. [1995, *LTER2* L8 : O. Henry While the Auto Waits, p.132])。このように、発問だけを生徒に投げるのではなく、ヒントを用意しながら生徒の思考を誘導し、最後は自分で考える工夫がされている。

「詩・散文」についても、「論理的・批判的思考力」を育む発問やタスクは、「小説・物語」と同様のセクションでなされている。1995 年準拠版と 2008 年準拠版とは発問の内容には大きな差は認められなかった。しかし全体的に 2008 年準拠版の方が、よりヒントや思考の誘導をする補足質問が用意されたものが多い。例えば、ロングフェローの“Loss and Gain”という同じ作品を取り上げ、1995 年準拠版では、「ロングフェローによると、失ったものと得たものを測ることは可能か」“According to Longfellow, is it possible to measure loss and gain?” (1995, *FEER6* L3: Poems of Wisdom, p.52) と発問だけが出されている。一方、2008 年準拠版では以下のように“loss”と“gain”のそれぞれについていくつかの例が出されており、それらを結び付けることによって理解を深める活動が用意されている。「ロングフェローによると、失うことは実際には得ることかもしれない。次の損失 (1,2,3...) と利益 (A,B,C...) を比較し、結び付けなさい。そして、隠された喜びを見つけた自分の体験を共有してみよう」“According to Longfellow, loss might actually gain, and defeat might be

victory in disguise! Try matching up the following losses and gains, and then share your own experience of discovering a blessing in disguise in your life. (2008, *FEER 乙 6L3: Poems of Wisdom*, p.55) とあり, 「例えば以下が起こったとき...1. あなたは風邪を引いた 2. 道に迷った 3. 学校で授業の単位を落とした 4. ガールフレンド/ボーイフレンドと別れた, すなわちこれらは以下を意味することもあるのです」と“loss”の例が上げられ, 続いて「(A) あなたはより良い誰かを見つける自由を得た。(B) 学校を休んで身体を休められる。(C) 授業を再受講し, さらに学ぶ機会を得られる。(D) 新しいルートを発見する機会を得る」と“gain”の例がある(“When this happens...1.You have a bad cold. 2.You’ve lost your way. 3.You failed a class in school. 4.You broke up with your girlfriend / boyfriend. That means... (A)You are now free to find someone better. (B)You can take a day off school and get some rest. (C)You can retake the course and have a chance to learn the subject even better. (D) You have the opportunity to discover a new route.”)。前者(1-4)と後者(A-D)を合わせることでこれらを考え, 友達とシェアする構成である。これら「評価発問」の範疇となる高度な発問には, 以上のような足場掛けがなされている。

その他, クリスティーナ・ロセッティの詩を音読して, そこからメンタルピクチャーを描いてみるというもの(“What is the mental picture you have when reading this poem? What other scenes about wind can you think of?” [2008 *FEER2 L10: Images of Nature; Who Has Seen the Wind?* Christina Georgina Rossetti, p.218])がある。このように, 詩を鑑賞する基礎を経験させたり, 身近な話題を使用したり, 生徒のこれまでの経験と結び付けながら考える構成になっている。

以上のように, 詩や作者の生き方などから, 人生や哲学的なことに関わる発問, 愛や普遍的な問いに関するもの, 問題解決型の発問がなされている。このような発問が可能であるのは, 「詩」ならではの点である。

ここで「学力」と「言語活動」の関係を整理する。「論理的・批判的思考力」をどのような「言語活動」で育成しようとしているかをみると, 身近な話題や生徒の経験と結び付けた具体的な発問を, ペアまたはグループディスカッションによって培おうとしていることが分かる。とりわけ, 「読む」と「話す」の活動が同一の教材に基づいて行われていることが明らかとなった。タスクによる足場掛けの工夫があり, CLT, そして深い思考に働きかける発問や議論による論理・批判的思考力の育成に重きを置いた CBI の指導法(Grabe & Stoller, 1997)に基づいていることが指摘できる。

「小説・物語」, 「詩・散文」とともに, 2008 年準拠版は, 論理的・批判的思考力の養成に着目したものがより多く認められた。これは 2008 年「課程綱要」に「英語による論理的思考, 分析, 判断および整合・創造力の育成」が記載されたことが大きな要因であろう。

### (3) 文章構成力・表現力

日本では現在、ライティング力育成もまた課題の一つとなっている。台湾の教科書では、文学教材を用いてどのように「文章構成力・表現力」を指導しているのであろうか。まず、「小説・物語」から具体的に見ていく。「文章構成力・表現力」を育む発問やタスクは1995年、2008年準拠版ともに、「本文」の後の内容理解、ディスカッション、さらに語彙、文法の説明などの後に置かれている場合が多い。セクションとしては“Writing Corner” (1995, *LTER*; 2008, *FEER*; 2008, *LTER*) , “Activity Time” (2008, *FEER*) などがあり、表現力や文章構成力育成を目的としたタスクが数多く用意されている。さらに“Writing Practice” (1995, *SMER*) , “Reader’s Compass” (2008, *FEER*) が特徴的で、「本文」の内容や全体の構成を整理・理解し文章構成力を培う工夫がみられる。2008年準拠版の調査対象教科書については、これらのセクションはすべて「基礎編」で扱われている。ライティングの指導は表0-1 (p.12) の通り、1995年準拠版 *FEER* を除いてすべての調査対象教科書に設定されている。

1995年準拠版の「小説・物語」においては、具体的活動として、トピックセンテンスを見つける、要約をするという基礎的なこと (“Underline the topic sentences of the following paragraphs.”, “Write the summary of the reading.” [1995, *SMER*]) から、ショート・エッセイを書かせるもの (“What do you think about the story? Write a paragraph of 120-150 words to express your ideas.” [1995, *SMER*]) まである。ショート・エッセイについては、とりわけ1995年準拠版の *SMER* (“Writing Practice”) で取り上げられており、エッセイ・ライティングの指導で注目できる特徴として以下がある。例えば “Gulliver’s Travels” からは、生徒に「このストーリーについてどう思いますか」という発問を課すだけでなく、順序立てて「この物語が好きか嫌いか、その理由は？」, 「物語のどこに賛成/反対するか」, 「何を学んだか」などの発問 (“Do you like it? Give your reasons. Which part impressed you the most? Which point in the story do you agree or disagree with? What have you learned from it?” [1995, *SMER* 5 U4, p.99]) を与え、それらに答えながら構成を考えるよう工夫されている点である。別の課 (モーパッサンの「首飾り: La Parure」) では、同じ発問 (「あなたはこのストーリーについてどのように思いますか」 “What do you think about the story? Write a paragraph of 120-150 words to express your ideas.” [1995, *SMER* 6 U4, p.85]) であっても、パラグラフ・ライティングにおける別の書き方を指導している。「まず、自分の考えを要約することから始めなさい。そして順次、説明していきなさい」 “Be sure to begin with a summary of your ideas and explain them in the remainder of the paragraph.” と書き進めるガイドが与えられており、さらに、使える英語の表現がリストとして上げられている (“The following are useful for expressing personal ideas and opinions: I agree/disagree that..., In my opinion/view..., As far as I’m concerned,...”)。重要なのは、本文の内容を共有しながらライティングの指導をしていることである。ヒントを与えながらステップを進めている。

2008 年準拠版では、“Reader’s Compass” (*FEER*) が各「本文」のすぐ後にある。これは「本文」(文学教材)のパラグラフの構成を穴埋め方式で理解確認するセクションである。具体的には以下のように、パラグラフ毎に、登場人物、場面、出来事に着目して確認するもの(“To get a better picture of this reading, go through it again and fill in the blanks with proper words or phrases. Scene1: Characters; Location; Event, Scene2: Characters; Location; Event, Scene3: Characters; Location; Event” [2008, *FEER2* L3 After 20 years, p.56]) がある。

“Activity Time”や“Language in Use”では、学習した文章構成力の定着や応用などを目的としたものがある。例を載せたり、使える英語表現を提示したりしながら、言語活動を生徒自ら積極的にさせる工夫がされている。

「詩・散文」についても、「小説・物語」と同様のセクションで「文章構成力・表現力」について指導されている。例えば、“Writing”では、ロバート・フロストの作品を読んだある生徒の感想が載せられている。その中にある不要な文章を削除することによって、トピックセンテンスによって導かれた“main idea”を支える「展開文 (supporting sentences)」を理解するように以下のように指導している。「この課では、ロバート・フロストの 2 つの詩を読みました。次の段落で無関係な文を削ると、書き手がロバート・フロストの詩から何を学んだかがわかります」“In this lesson, you have read two poems by Robert Frost. Now cross out the irrelevant sentences in the following paragraph, and you will see what the writer had learned from Robert Frost’s poems. (1995, *FEER5* L3: Robert Frost and his Poems, p.68) と、一見難易度が高そうなものがある。しかし、このタスクの前のセクションでは、詩のトピックやイメージなどの理解を促す活動が用意されており、同じ作品を生徒が共有し、その延長線上にあることで、教室での学習が効果的に行われるのである。

「小説・物語」と「詩・散文」を教材にして「文章構成力・表現力」を指導するには、まず、作品を読むことから始まり、次に受動的理解だけでなく、自分で練習し、産出する構成になっている。「本文」で学んだ文学教材を使用しながら、「本文」のパラグラフやエッセイの構成を学び、作品の鑑賞をし、さらには作品を自分の経験と結びつけるという形でライティングの課題が出されている。このように見ていくと「文章構成力・表現力」を培うための「言語活動」は、足場掛けを多く用意することで、生徒がよりスムーズに「読む」と「書く」を統合した活動が行えるように設計されていることが明らかとなった。

#### (4) 創造力

「創造力」に関しては、2008 年「課程綱要」でその養成に重点が置かれているためか、2008 年準拠版教科書で如実に「創造力」養成の発問・タスクが認められた。「小説・物語」, 「詩・散文」とともに, “Writing Corner” (2008, *LTER*), “Writing” (2008, *FEER* 乙), “Thinking Corner” (2008, *FEER* 乙), “Beyond the text” (これは「発展編」になる) (2008, *SMER*) のセクションで扱われており、ライティング、スピーチ (プレゼンテーション) など 4 技能



統合の言語活動を通して広く扱われ、学習形態は協働学習 (cooperative learning) が主である。これらのセクションは調査対象教科書のすべてにそれぞれ設定されている (表 5-6 参照)。

「小説・物語」では、「本文」で扱った小説について以下のようなタスクがある。「本文」で扱った小説の、あいまいな結末について、自分たちでその先を創作する。4, 5 人のグループになって、話し合いながら話を創作し、それを 3 分間スピーチでクラスの前で披露するというものである。例えば、「フランケンシュタインが亡くなった後、モンスターに何が起こるか想像したことがありますか? 4 人または 5 人のグループで作業しましょう。各グループでフランケンシュタインの物語のエンディングを作成しましょう。各グループが作成するエンディングは、現実的、ユーモラス、またはクレイジーにさえなる可能性があります。次に、クラスの前で 3 分間のプレゼンテーションを行いましょう」“Have you ever imagined what happened to the monster after Frankenstein died? Work in groups of 4 or 5. Each group is going to create an ending of you own for the story Frankenstein. The ending each group creates can be realistic, humorous, or even crazy. Then, make a three-minute presentation in front of the class.” [2008 *SMER2U9: Frankenstein*, p.180] 下線は筆者) というものである。そこには、現実的で、ユーモアがあつて、クレイジーなものであつてもかまわない、という考えるヒントが付いている。同様のものには、話の結末を変えてストーリーを作るというものがある (“The story ends with Sally’s death. Write a different ending for the story and read it to your classmates.” [2008, *FEER 乙 5 L5: Information Please*, p.99])。グループワークとプレゼンテーションにつなぐ活動は「課程綱要」に記載された「4 技能統合の活動」と一致する。

また、扱った「本文」と同様のストーリー展開の 3 枚の絵を見て、ストーリーを作ったりするなどの課題がある。台湾の大学入試 (共通テスト) では 30% に「ライティング」が課されており、4 コマの絵からストーリーを作成するというものが度々出題されている。その影響もあつてか、教科書にも同様のライティング課題が見受けられる。以下は「トム・ソーヤ」の読後課題である。単に「3 枚の絵からストーリーを作りなさい」という発問ではなく、下線のように、テンプレートやガイドがあるものが多い。すなわち、「一連の絵に基づいてストーリーを作成するように求められたら、まず絵に描かれた登場人物を紹介し、次に彼らが何をしているかを説明します。想像力を使ってストーリーに詳細を追加しなさい」“Picture Composition 4: Writing a story based on a series of pictures: When you are asked to write a story according to a series of pictures, you can begin by introducing the people in the picture and then go on to describe what they are doing. Use your imagination to add details to our story.” [*FEER 乙 4 L4: The Happy Whitewasher*, p.85 下線は筆者]) と、基本となる書き方の指導がみられる。

「詩・散文」においても同様に、「詩を創作する」という大きな課題がすぐに出されるわけではない。例えば、「E. ディッキンソンの詩の中の‘hope’を使って、自分の‘hope’について

の詩を作る」というものがある。詩の創作に入る前に、「形式」についてのガイドが出され、穴埋め式の以下の問題が用意されている。「この詩でエミリー・ディキンソンは希望が何であるかを定義しています。では、この希望という詩の独自の定義を書きなさい。まず、与えられたフォームを守りながら、次の発問に答えなさい。A. 希望とは何ですか？ B. 次にこれらを並べ替えて、詩的な方法で提示しなさい。可能であれば、韻を入れなさい。C. 最後にグループで、声に出して詩を共有しましょう」“In the poem “Hope Is the Thing with Feathers,” Emily Dickinson gives a definition of what hope is. Now write your own definition poem of “Hope.” First, answer the following question, observing the given format. A. What is hope? Hope is \_\_\_\_\_because\_\_\_\_\_. (1... 2. Hope is oxygen because it’s something we can’t live without. 3. Hope is the moon because it watches over us all through the night. 4. ...)

B. Next, rearrange your answers and present them in a poetic way. Make your poem rhyme if possible. C. Finally. Get into small groups and share your poems by reading it aloud.” (2008, *FEEL* 乙 3L 6: Emily Dickinson and Her Poems, p.106-107, 下線は筆者) というものである。個人で詩を創作した後は、小さなグループになってお互いの詩を詠んで披露し合うように音声の学習や鑑賞もできるように設定されている。

以上のように、「創作」は苦手意識を持つ生徒も多いところであるが、台湾の教科書では、「創作しなさい」という課題を与えたままにせず、生徒が具体的なヒントやガイドを得ながら考える段階を踏む指導法となっているおり、それら足場掛け (scaffolding) が生徒の思考・創作活動を手助けするといえよう。言葉や音の美しさを味わう工夫がされていることも指摘したい。

使用される「言語活動」は自分の判断力・創造力を働かせての (サポート力の少ない) 個人・グループ活動といえよう。これらの「創造」における活動は CLIL の教育活動と通じており興味深い。すなわち、CLIL の基本原理の「思考」における教育活動の設計として「授業の後半ではグループで問題解決型のプロジェクトを行う (「創造」といった高次思考力を駆使するタスクに組み込ませること」が提案されている (渡部他, 2011, p.8)。台湾の教科書では CBI が使用されており、この CBI が基本的に CLIL と同一視されるものであること (渡部他, 2011, p.3), そして CBI では 4 技能を統合したタスクを協働学習を通して行い、知識、言語力、思考力を育成することが主軸であること (Grabe & Stoller, 1997) から、これらの活動の理論的裏付けが見えてくる。

## (5) 修辞の知識と技能

戦後の高等学校英語教科書のレベルで、英語の「詩・散文」の修辞に関わる知識・技能を、台湾ほど詳しく指導しているものは、おそらく日本においては無いであろう。取り上げる作品の数、そして、それらの詩の鑑賞、および比喻、音韻、形式という修辞の知識と技法の指導内容の深さ・広さにおいて、台湾の教科書は突出している。一方、1970 年、80 年代まで

の日本の高校英語教科書では、「詩・散文」が扱われ、その作品・作者は、台湾の英語教科書で扱われているものと多くが共通することもまた事実である。

分類については、比喩や音韻・形式など、修辞に関わる知識・技能の分類法は専門書により異なる（武田，2011；志子田，2017）。本研究では以下の4つ（①比喩の技法：直喩・隠喩・心象，②内容に関する技法：反語，誇張法，控えめな表現，③韻律・響きに関する技法，④形式に関する技法）のカテゴリーに分類して述べていく。

### 1) 比喩に関する技法：直喩・隠喩・心象

1995年準拠版，2008年準拠版ともに，特に多く扱われているのは，比喩に関する技法である。Similes・Metaphors/Imageryは，英詩では鑑賞，創作の心臓部である（武田，2011；志子田，2017）。これらは英語の修辞学においても古くから重視されていた技巧であり（増田，1914；Lakoff，1987），台湾の英語教科書ではその指導が充実している。

多くの教科書では1，2年生から直喩・隠喩（Similes/Metaphors）の指導が始まる。ここでは，2008年準拠版教科書から“My Love Is Like an Ocean”を例に挙げる（*LTER2 L1: Love in the Eyes of Poets: Metaphors and Similes in Poetry*, p.15）。「本文」では，「Similesとはlikeやasを入れて比喩するもので，Metaphorsは入れないもの」という説明があり，現代詩人のRob Thompsonの“My Love Is like an Ocean”の紹介がある。内容理解，語彙，文法の学習後の“Language in Use”では，いくつかの文章が用意されており，どちらが隠喩でどちらが直喩かを選ぶ問題がある。それに続く活動では，いくつかの例があり（“Love is like a bar of dark chocolate. That tastes both bitter and sweet. Love is beautiful rainbow. That comes only after the rain.”），その後，自分で穴埋めをして作る構成になっており，（“Love is like a cloud in the sky. That comes fast and goes easily. Love is like \_\_\_\_\_. That \_\_\_\_\_.”）これらを並べると詩になることが提示されている。以上のように，教科書の多くのセクションを使い，繰り返し比喩についての知識と技巧が述べられ，さらに理解するのみではなく，自分で練習，そして作成する構成が注目される。

2008年準拠版では，直喩・隠喩（Similes/Metaphors），心象（Imagery），象徴（Symbol）の他，明示的（Denotation）と暗示的（Connotation）なども指導されており，その種類も1995年準拠版とほぼ同様である。1995年準拠版では，古典的作品がそのほとんどであったのに対し，2008年準拠版では現代詩人も多く扱われ，さらに日本の俳句（与謝蕪村，松尾芭蕉）を扱うなど，英詩に限らず扱う幅の広がりが見られる。

### 2) 内容に関する技法：反語，誇張法，控えめな表現

1995年準拠版では，内容に関する技法としては，アイロニー（Irony），誇張法（Overstatement），控えめな表現（Understatement）などがある。これらは“Language Use”（*FEER*）や“Language in Use”（*LTER*）など修辞を扱うセクションで説明され，練習問題が出されていることが多い。例えば，「日常の会話と同じで，言葉で表現しているこ

とと、実際に思っていることが違うことがある」という「本文」の説明で始まる *FEER3*L9 では、以下のように例をいくつか出しながらか理解を深めさせている (“Type: Irony; How it works: Saying one thing but meaning the opposite; Examples: He is A GIANT of three feet four inches. Type: Overstatement; How it works: Emphasizing a point with exaggeration; Examples: He runs FASTER THAN LIGHTNING. Type: Understatement; How to works: Implying more than what is said to achieve a greater effect; Examples: That scandal did draw A BIT of attention. [1995*FEER3* L9: Emily Dickinson and her Poems, p. 157])。2008 年準拠版でも 1995 年と同様の内容が取り上げられているものの、指導の手順はさらに丁寧になっている。

### 3) 韻律・響きに関する技法

1995 年準拠版では、音韻 (rhyme), 響き (sound), 韻律 (rhythm) については、その多くが 1 年生の教科書から指導され 3 年生まで続いている。音については、リスニングや音読などを通して体得させるタスクが用意されている。また、自分で練習する問題が見られる (“Read the words in each line and circle the one which doesn’t rhyme with the others. 1. gold, cold, told, fond, hold. 1995, *LTER1* L10, p. 174)。とりわけロバート・フロストの詩はどの学年や出版社に限らず繰り返し扱われている (Rhymes/ Meter/ Patterns/ Images /Theme, 1995, *LTER1* L10: How to Read a Poem: The Sound of a Poem; 1995 *FEER 5* L3: Robert Frost and His Poems)。

2008 年準拠版では、「5.5.1 比喩」と同様に、扱う詩は英米の古典的作品ばかりでなく、英国童謡の “Humpty Dumpty” から米国の現代作家シェル・シルヴァスタイン (Rhyme: A Poem for the Young at Heart (2008 *SMER1* U12) までと裾野が広がっている。指導法は “Word Power” のセクションで Full Rhyme, Half Rhyme, Vowel Rhyme など、Rhyme の基礎を理解し、続く “Language in Use” で実際にいくつかの詩の四行連を読み取る練習がある (*LTER1* L6: Rhyming Fun in Poetry, p. 95, 100-101)。穴埋め問題からステップアップしていくなど説明や練習が丁寧になっている。

### 4) 形式に関する技法

1995 年準拠版においては、シェイクスピアの詩や散文 (prose) の鑑賞や技巧についての知識の指導がある。*LTER6*C8 の「本文」は、「シェイクスピアは詩以外でもたくさんの散文 (prose) を残している」という文章で始まり (1995 *LTER6* L8: Shakespeare in Love: How to Read a Sonnet), 続く叙事詩 (epic) や叙情詩 (lyric) の説明の後、14 行詩ソネットの説明に入り、シェイクスピアのソネット (Shakespearean sonnet) を紹介する。内容は愛の詩を鑑賞し、弱強五歩格 (Iambic pentameter) の説明がある。同じ課の “A look at the language” のセクションでは、この弱強五歩格 (Iambic Pentameter) を他の例で説明し、 “Your turn!” では練習問題が用意されている (Below are some lines of well-known English

poetry. Check those which use iambs as the basic metrical foot. (1) Break, break, break, On thy cold gray stones, O Sea! p.181)。一つの詩を味わうだけでなく、他の詩の中に学んだ例を見つけ出す活動に進んでおり、内容はかなり高度である。

2008 年準拠版では、音節 (syllables)、歩格 (meter) など基本的なものが中心となり、指導は具体例が多く出され、繰り返し丁寧に教えられている。弱強五歩格 (Iambic pentameter) については、用語が「本文」中で使用されたにすぎず (In William's Words 2008, *FEER6L4*), 1995 年準拠版のように深い理解を求めるものではない。一つの詩を総合的に扱うもの (Number of syllables/ No. of feet/ Meter [tetrameter 〈4 歩格〉] and [trimeter 〈3 歩格〉])/Alliteration [頭韻法]/Imagery; Sing with the Poets, *FEER4 L11*) もある。全体的に詩をより良く鑑賞することに重点が置かれている。

#### 4. 「文学教材」が培う学力とその指導法

「論理的・批判的思考力」は、ディスカッションという言語活動を通して、身近なものや体験に基づいた「発問」や足場掛け (scaffolding) のある「タスク」によって深い思考に積み上げられ、培われている。人生、生き方、現代に通じる問題、とりわけ詩においては、普遍的な問題など (「推論発問」および「評価発問」の範疇となる) が取り上げられ、繰り返し言語活動をすることによって、議論を深める工夫がされており、この考え方は CBI, そして CLIL の教育活動に通じるものである。

「文章構成力・表現力」は、多くが、“Writing”活動につながっている。系統立てて理解させ→実際に書く、の順に進み、このとき、構成と書き方を多角的に指導し、例文やピクチャーなどのサポートがある。「本文」の内容を用いて、ライティングの指導をしていることも有効な方法として挙げられる。

「創造力」については、ライティング活動につなげるものが多いが、「文章構成力」よりサポートが少なく、自分の判断力や創造力が求められる。小説の最後を変えて物語を書くように促したり、本文と同じような話の展開の 4 枚の絵を見て、ストーリーを作ったりするなどの課題がある。また、本文の小説のキャラクターを使って、他の出来事が起こったらどのように対応するかを考えるものなどがある。個人やグループでディスカッション、そしてプレゼンテーションなどに発展させるものがある。

台湾の教科書では「オーセンティック教材」とタスクの活用をその特徴とする CLT の指導法に則り、Task-based な活動が設計され、文学教材が総合的な英語力の伸長に不可欠なものとして取り扱われていることが示唆された。その基盤には CLT を用いた授業では文学教材が有益であるとの理論があることが指摘できる。同時に教科書全体が CBI, CLIL 教育活動の設計に通じており、深い思考に働きかける言語活動を協働学習と組み合わせており、「読む」と「話す」、さらには「書く」、そして、「プレゼンテーション」の活動 (「聴く」も含める 4 技能の統合) が同じ教材を基に段階を追って行われていることが明らかとなった。

台湾の英語教科書では、詩における修辞のレベルが高い理由として、言語としての美しさ

に重きを置いており、中国語との関連、漢詩を重んじる社会的・歴史的背景などの、台湾独特の教育哲学が見受けられる。1995 年準拠版の方が 2008 年準拠版より詳しく詩の技巧についての説明、練習、そしてタスクが用意されている。詩の修辞に関する知識・技法の指導は、2008 年準拠版では全体的に理解・鑑賞にとどまり、専門的知識や理解を目的とするより、それら知識を得ることによって、詩をより良く鑑賞することに重点が置かれている。

台湾の教科書で取り上げられている文学題材は青少年に必要な興味をそそる文学作品である。古典的名作は高次の考察ポイントを数多く抱えていることから、丁寧に対峙する必要がある。そこから、生き方、人生、倫理、恋愛などを考察し、その経験が思考力・批判力を培う。ここでの特徴は、文学教材ならではの観点の広さを利用して指導されている点と、小説・詩ともに理解と練習の積み上げ型指導がなされていることである。

### まとめと今後の課題

本節では、教科書を中心に研究を進めたが、勿論、教科書研究だけでなく、実際にそれらが使われている現場を観察することは必須である。これまでに筆者は本研究対象となった 3 種類の教科書が使用されている各 3 校の授業を参与観察した。訪問した高校は進学校で、教員からはよく練られたヒントなど適切なガイドがあり、生徒もよく予習をして、発問・タスクに活発に臨んでいた。今後はさらに幅広いレベルの授業観察とともに、生徒の反応を考察する必要がある。

台湾の 2008 年準拠版教科書では、同じ準拠版でも比較的頻繁に改訂が行われているため、年々文学教材を扱う課数を減らしている教科書会社も認められた（平井，2019b）。また、2018 年改訂「十二年國民基本教育課程綱要」準拠版では、その傾向がさらに認められ、詩を扱う課数が少ない教科書会社が認められるのも事実であり、今後も教科書の採用状況の確認をしながら、調査研究を進めたい。

台湾の英語教科書の中で取り上げられる文学教材と、それに伴う発問・タスクなどの設計は、CLT、そして CBI、CLIL の基本原理を礎にしており、現在日本の英語教育における「思考力・判断力・表現力」の育成が課題とされる中、文学教材を再度見直す示唆の一つとなりうるのではないか。これらの設計を日本の英語教育の中で求められる「論理的思考・批判的思考力」、「創造力」、「文章構成力（リーディング力とライティング力）」を培うために応用はできないものであろうか。日本の英語教科書は実用英語一辺倒の傾向を強め、文学作品、とりわけ詩の取り扱いがほとんど見られないのが現状である。本章で明らかとなった具体的な発問やタスクなどの指導法を日本の高校英語教科書にどう応用するかは、今後の課題としたい。

## 本章の小結

5章1節では、台湾の高等学校英語教科書で重視されている「文学」において、取り扱われている文学作品とその作者の特徴を時代の変遷とともに捉え、その要因を明らかにすることを試みた。戒厳令下では、文学教材は英米の作品を中心に扱われていることが確認された。解除後は、台湾の作品やヨーロッパ、アジア・南米も含め幅広く扱われるようになっていく。「文学重視」、とりわけ詩を重んじる傾向は常に変わず、古くは中国古来の文化や言葉の美しさを重んじる背景に由来し、文学作品とその作者の選択には、英国の英語教育、戦前戦後の日本、中国からの影響が混在し、そして70年代からは米国の作品が多く扱われ、歴史的、社会的な様々な要因が多角的に影響していることが明らかとなった。中でも、1980年代までの日本の英語教科書で扱われていた小説・詩における多くの作品が共通していること、転用されていることが示唆された。現在に至るまで文学を一貫して重視する理由は、台湾の漢文化の継承による漢詩を重んじる社会的背景と教科書編者の共通した傾向として言葉の美しさと人間性を高めることに重きを置くことが明らかになった。

2節では、「文学教材」が実際にどのように指導され、生徒のいかなる学力を培っているのかを、教科書の練習問題や活動の中で具体的にどのように指導されているかを調査分析することで明らかにすることを試みた。その結果、1995年準拠版以降の台湾の英語教科書の理論的背景として、「オーセンティック教材」とタスクの活用をその特徴とする Communicative Language Teaching (CLT) の指導法に則り、Task-based な活動が設計され、文学教材が総合的な英語力の伸長に不可欠なものとして取り扱われていることが明らかとなった。2008年準拠版教科書からは、教科書全体が CBI, CLIL 教育活動の設計に通じており、論理的な深い思考に働きかける言語活動を協働学習と組み合わせている。同じ教材を基に段階を追って指導され、実践力養成と「論理的思考」、「文章構成力」、「創造力」を培っていることが明らかとなった。これらは「課程綱要」とそれら準拠版教科書の「編纂大意」の記述からも裏付けられた。

台湾の教科書で扱われている文学題材は青少年に必要な興味をそそる文学作品である。古典的名作には高次の考察ポイントが数多くあり、そこから、生き方、人生、倫理、恋愛などを考察し、その経験が生徒の思考力・批判力を培う。戒厳令解除後には、英語教育をとおりして、生徒の自ら考える力を養うことの重要性が「課程綱要」に明確に記載されているのをはじめ、教科書編者からの強いメッセージも教科書の「編纂大意」から認められた。

### 〈注〉

- 1) 本調査では、NDC 新刊 9 版 (1995) を、1995 年準拠版教科書の題材内容分析調査に用い、1948 年、1971 年、1983 年、そして 2008 年準拠版教科書には NDC 新刊 10 版 (2015) を用いた。これは筆者が研究を進めた時期と一致する。なお、10 版には 9 版には収められていない新たな用語 (例えば情報や IT 関係、環境など) が加わっている。

- 2) これについては先行研究（平井，2017a）に詳しい。第3次区分まで分類するとどのような内容を扱うかが明確にされ、実用英語が多く扱われていると判断された。
- 3) 当時、米国の出版物や映画、ポップソングなど米国の思想や文化など輸入されたものが、台湾の重要なサブカルチャーの一つとなっていた（林照真，2003）。
- 4) 戦前の台湾で使用されていた日本の英語教科書については以下の表を参照されたい。

**表 5-9 戦前日本の教科書一覧（*The King's Crown Readers*1-5）**

教科書	出版社	出版年	題材数
<i>The King's Crown Readers 1</i>	三省堂	1926	43
<i>The King's Crown Readers 2</i>	三省堂	1926	47
<i>The King's Crown Readers 3</i>	三省堂	1926	41
<i>The King's Crown Readers 4</i>	三省堂	1926	40
<i>The King's Crown Readers 5</i>	三省堂	1926	28
合計			199

- 5) 戦前の中国本土の英語教科書については以下の表を参照されたい。

**表 5-10: 戦前中国英語教科書一覧**

	No	出版年	主編者	出版社	課数
世界高中英文選	2	1933	黄梁就明	世界書局(上海)	53
高中英語読本	2	1941	林漢達	世界書局(上海)	50
高中英語読本	1	1941	李儒勉	中華書局	45
高中英語読本	5	1941	李儒勉	中華書局	20

- 6) 戦後日本の英語教科書については以下の表を参照されたい。

**表 5-11：戦後日本の英語教科書（1970 年「学習指導要領」準拠版）一覧**

教科書	出版社	出版年	課数
<i>New Horizon English Readers 1</i>	東京書籍	1977	13
<i>New Horizon English Readers 2</i>	東京書籍	1975	11
<i>New Horizon English Readers 3</i>	東京書籍	1977	12
<i>The Crown English Readers 1</i>	三省堂	1975	14
<i>The Crown English Readers 2</i>	三省堂	1976	14
<i>The Crown English Readers 3</i>	三省堂	1977	14
<i>New Vision English Readers 1</i>	開隆堂	1975	14 付 3
<i>New Vision English Readers 2</i>	開隆堂	1976	12 付 1
<i>New Vision English Readers 3</i>	開隆堂	1976	10 付 4

- 7) 戦後中国の教科書については以下を参照されたい。

**表 5-12：戦後中国の教科書（中国 2001 年「課程標準」準拠版教科書）一覧**

教科書	出版社	出版年	題材数
<i>Senior English for China 1A</i>	人民教育出版社	2003	12
<i>Senior English for China 1B</i>	人民教育出版社	2004	10
<i>Senior English for China 2A</i>	人民教育出版社	2001	12
<i>Senior English for China 2B</i>	人民教育出版社	2001	12
<i>Senior English for China 3</i>	人民教育出版社	2002	24



<i>New Century Senior English 1-1</i>	上海外語教育出版社	2001	10
<i>New Century Senior English 1-2</i>	上海外語教育出版社	2002	10
<i>New Century Senior English 2-1</i>	上海外語教育出版社	2002	10
<i>New Century Senior English 2-2</i>	上海外語教育出版社	2003	10
<i>New Century Senior English 3-1</i>	上海外語教育出版社	2003	8
<i>New Century Senior English 3-2</i>	上海外語教育出版社	2004	8
<i>Oxford English S1A</i>	上海教育出版社	1999	6
<i>Oxford English S1B</i>	上海教育出版社	1999	6
<i>Oxford English S2A</i>	上海教育出版社	2000	6
<i>Oxford English S2B</i>	上海教育出版社	2000	6
<i>Oxford English S3A</i>	上海教育出版社	2001	5
<i>Oxford English S3B</i>	上海教育出版社	2001	4
合計			159

(小川他, 2007)

- 8) 2014 年 3 月 3 日～6 日に筆者が行った国立台湾師範大学英語学系の元教授との聞き取り調査の結果による。
- 9) 2017 年 1 月 3 日～5 日に筆者が行った国立台湾師範大学英語学系の元教授および教員との聞き取り調査による。事前事後のメールによる質問紙調査を含める。
- 10) 2004 年 3 月に台湾師範大学で聞き取り調査をさせていただいてからは、主に 2006 年～2007 年にかけての複数回のメールでの質問と回答による。
- 11) 2014 年 3 月に学校訪問をし、授業観察をさせていただいた以下の高等学校教員各校 1 名計 3 名の方への聞き取り調査、およびその後のメールでの質問と回答による。国立台湾師範大学附属高級中学教員、台北市立中山女子高級中学教員、台北市立成功高級中学教員（このうち 1 名は教員歴 15 年以上のベテランの教員、他 2 名は教員歴が 5 年～8 年の方であった）
- 12) 台湾の高級中学（高等学校）の英語の教科書は、1983 年「課程標準」準拠版のみが国立編譯館主編国定教科書で、それ以前も審定（検定）制の教科書であった。
- 13) 本研究で扱った文学作品の数は、3 章で言及した先行研究（2017a;2019b）での NDC 調査による文学作品の数と必ずしも一致しない。それは、本研究では NDC による文学作品の分類法（例えばギリシャ神話は「哲学」に分類し「文学」に入れない等）に従わない部分があったからである。

## 第6章 高校英語教科書の題材内容の分析と考察

### —「政治・社会的題材重視」の観点から—

本章では、台湾の英語教科書の二つ目の柱である「政治・社会的題材重視」の観点から分析を進める。一般に英語教科書は、社会科や国語の教科書と比べて政治・社会的内容から遠い所にあると考えられている。事実、これまで日本の英語教科書でもこうしたバランスが考慮されてきた。しかしながら戦後台湾の英語教科書においては、第3章で論じたように、政治・社会的題材が、時代によって違いがあるものの数多く取り上げられている。では、これら政治・社会的題材はどの程度、どのように扱われてきたのか、それをさらに深く考察するのが本章の主たる研究目的である。

第1節では、台湾の戒厳令下の英語教科書にどのような形となって具象化されているのかを、そして第2節では、戒厳令解除後の1990年代の英語教科書ではそれらがどのように変容されるのかを、第2章と第3章で明らかとなったキーワードを基に政治的・歴史的経緯を踏まえつつ明らかにしていく。第3節では、台湾の英語教科書が、各課の「本文」を使用して、具体的にどのような学力を培っているかを実証的に調査分析する。今回はそれらを国際的認知レベルの指標として使用されているブルームの改訂版タキソノミー（2001）を使用し分類する。これらの結果を日本の高等学校英語教科書における先行研究と比較検討することにより、日本の高校英語教科書のへの具体的な応用を明らかにすることを試みる。

### 第1節 戒厳令下の英語教科書における政治的影響の考察

#### —「課程標準」（1971年）準拠版英語教科書の題材内容研究から

ここで取り上げるのは1971年の「課程標準」準拠版教科書である。その理由は1971年「課程標準」は以下の三点において注目されるからである。まず1点目は、台湾において1968年は「九年国民教育」が始まった重要な節目の年である。義務教育段階の教科書が国定化し、教育の一元化が打ち立てられたのがこの時期で、小中学校の国民教育に続いて高等学校の「課程標準」が改訂されたのが1971年である。この頃、台湾の国民党政権では「中国」化の政策がとられていた。この最も強力な経路の一つであったのが学校教育である。学校教育という制度的同化の推進は、言語的同化（「国語普及」）とアイデンティティの同化（「中国意識」の注入）を達成することであった（若林，2001，p.110）。すなわち、小中学校に続く高等学校の教育ではどうであったかを明らかにするには、1971年「課程標準」準拠版教科書が鍵となる。さらに、1970年代から1980年代は戒厳令解除前の極めて政変の大きな時代でもあった。この時期の政治的な動きがどのように英語の教科書に反映しているかを分析する意義は大きい。2点目は、高等学校英語教科書が国定教科書として国立編譯館主編となるのは1971年の次に改訂される1983年「課程標準」準拠版である。1995年準拠版以降現在まで

は、国立編譯館が審定する審定（検定）教科書となっているが、1971年までの審定は1995年以降に比較すると緩く編纂が比較的自由にできた（楊，2011）<sup>1)</sup>。すなわち、1971年準拠版の教科書は、国定化される前の比較的自由度の高い編纂ができた最後の教科書ということになる。このような教科書が、当時の政治的状況から考慮してどのようなものであったかは極めて興味深い。3点目は、この時期の英語教育は初期の頃のようなエリート教育ではなく、中学では3年間の必修科目として広く一般に普及することになるからである。

以上により本章では、台湾の1971年「課程標準」準拠版英語教科書の題材内容を質的に分析し、政治的影響がどのように現れているのか、加えてその要因を明らかにすることを試みる。

### 1. 戒嚴令下の英語教育とその背景

国民政府が台湾に遷移した直後の1940年代は戦後の混乱期で、国語教育に力を注がねばならず、英語教育までは手が及ばなかったのが実情である。1950年代に入ると米国冷戦時代の攻略的政策の影響を受けるようになり、台湾は米国の傘に護られ、同時に米軍の支援を行うようになった。その結果、台湾政府からの米国への留学生派遣が始まり、留学生たちは帰国後政府機関や学術機関で活躍した。このように英語はエリート教育として最も重要な言語として取り扱われたのである。続く1960年代後半からの経済の発展と1968年の「九年国民教育」の実施により、英語教育は徐々に定着し、中学校1年から少なくとも3年間は教育部編本教科書による教育を正式に実施するに至った。

### 2. 1971年(民国60年)「課程標準」

1971年「課程標準」において、教科書編纂の指針となる最重要部である「教材概要」はいかなるものか。これは学年ごとにまとめられているものの、第1～3学年までほぼ同様の内容が記されている。教材の選択は「原則として近代の英米作品を使用し、文学的意味合いがあるか、科学系や趣味に関する叙述、描写、説明、議論」を薦めている。さらに、「国家民族の面において参考に充分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う」（「特別注意在国家民族方面足資借鑑及富有激励性之文字。」下線は筆者による）ことが示されている。ここでいう「国家・民族」は「英語圏（英米）の国家・民族の特徴を理解することを意味することと、中国〔中華〕の民族的文化的特徴を英語で表現するという意味の両義的に解釈される。すなわち前者は英米のクリスマスの紹介に相当し、後者は中国の旧正月について英語で書かれたものを指す。この両義的解釈については後述（第5項）する。

### 3. 1971年「課程標準」準拠版教科書：調査対象教科書と調査課数

1971年（民国60年）「課程標準」は戦後3度目の公布となる。李振清（2012, p.35）によれば、1970年代から英語教科書が専門性を備えた研究者によって編纂され始めた。中でも遠東図書の教科書は、国立台湾師範大学の梁実秋が主編者で、当時、台湾各地の中学、高

校で広く使用された最も主要な教科書であった。遠東図書は 1950 年に台湾で設立された。そこで、国家教育研究院の教科書図書館の蔵書を調査したところ、調査対象全巻が入手可能であった。

1971 年「課程標準」準拠版の遠東図書の総合英語の教科書は「自然組（系）」と「社会組（系）」に分かれての編纂である。調査ではこの『遠東英文読本』を、高校 1 年生用の「自然組」、社会組」共通教科書である *Book 1*, *Book 2* の 2 巻、高校 2, 3 年生の「自然組（系）」用教科書 *Book 3-6* の 4 巻、社会組（系）」用の教科書 *Book 3-6* の 4 巻の合計 10 巻を調査した（表 6-1 参照）。1 年生用の教科書 2 巻はそれぞれ 15 課からなっており、「自然組」、社会組」とともに 2 年生以上の *Book 3* から *Book 6* については各 14 課からなり、合計 142 課となる。出版年は 1973 年～85 年である（第 3 章第 4 節、表 3-8）参照）。なお、本研究の教科書の出版年がこのようにシリーズ内で異なるのは、台湾では教科書の 1 シリーズが一斉に出版される日本とは異なり、年毎に順次出版されたり、改版がたびたび行われたりする傾向があるからである。

本章では、この他、正中書局出版の教科書 4 巻 *An English Reader for Senior Schools* (*Book 2, 4, 5, 6*) (1983～84) について調査した。各巻 14 課からなり、各課がパート 1, 2 から構成されているので、合計 56 課（112 パート）から成る。編者は国立台湾大学教授の顔元叔である。本シリーズでは「自然組」、社会組」の区別がない。正中書局の本教科書シリーズにおいては、国家教育研究院教科書図書館の蔵書に *Book 1, 3* を見つけることはできなかった。なお、当時のシェア率を示す資料の発見には至らなかった。正中書局のものを選んだ理由は、71 年「課程標準」準拠版では遠東図書からのものを除くと、正中書局の教科書が他社に比べ比較的体系的に入手ができたことによる。英語教育研究が盛んになり、教科書が広く普及され始めた当時、最も主要であった遠東図書の教科書はいかなるものであったのか。一方、教科書会社によつての差異を調査するため、正中書局の教科書を調査することとした。

表 6-1:1971 年（民国 60 年）「課程標準」準拠版調査教科書と章数

教科書	出版社	出版年	章数
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 2</i>	正中書局	1983*	14
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 4</i>	正中書局	1984*	14
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 5</i>	正中書局	1984*	14
<i>An English Readers for Senior Middle Schools 6</i>	正中書局	1984*	14
計 4			計 56

\*これらの教科書については、出版年が次に改訂された 1983 年を過ぎているが、1971 年「課程標準」準拠版である。

#### 4. 英語教科書 2 シリーズの題材内容の質的特色

##### (1) 遠東図書の教科書

1971 年「課程標準」準拠版の教科書で扱われている遠東図書の教科書の題材内容について、その特徴を挙げると以下ようになる。まず、「自然組」、「社会組」の両方に共通する点として、全体 172 課 (*Book 1, 2* が重なるため) のうち 31 課にあたる 18% が個人伝記で占められている。とりわけ米国人 (ベンジャミン・フランクリンやヘレン・ケラーなど) のものが多く取り上げられている (“A Great Citizen” *Book 1*), (“The Story of Helen Keller”, *Book 3* 「自然組」、「社会組」共通)。その他は英国 (ニュートン) やヨーロッパ圏 (マルコ・ポーロ、コペルニクスなど) のもので、登場人物は日本でもなじみのあるものが多い。「自然組」では〈個人伝記〉は 16 課で、このうち、9 課が米国、3 課が英国である。「社会組」では全体で 15 課扱われている〈個人伝記〉のうち、9 課が米国、1 課が英国であり、英語圏からの偉人という観点で見たとき、圧倒的に米国人が多く登場している。

歴史的偉人のみならず、国別に題材内容をみると、米国を扱っているものが非常に多い。「自然組」で全 86 課のうち 18 課が米国を扱っており、全体の 20.9% に値する。また、「社会組」では全 86 課のうち 20 課となり、全体の 23.3% となる。上記のように歴史上の人物として米国人が頻繁に登場し、題材内容を国別にみた場合の米国が占める割合の多さは、政治経済的な観点から、戦後台湾が米国との接点を多くもつことが理由と考えられる。

本章について直接かかわりのある政治についてはどうであろうか。政治を取り扱っているものは *Book 2* (1973 年出版) (自然組、社会組共通) で扱われている “First Steps in Democracy” がある。これは古代ギリシャの民主主義の政治形態を示したものである。その他、アメリカの国家と個人の考え方について論じたもの (*Book 5*, 自然組 [1979 年出版]・社会組 [1985 年] “Individual Liberty”), また、リンカーンの伝記がある (*Book 2*, 自然組・社会組共通 “From Log Cabin to the White House”). 以上のように「政治的」なものは見受けられなかった。政治を扱う課数は全 172 課のうち 4 課であった。このうち 2 課は「自然組」、「社会組」で同じものが扱われている。

中国 (China) を取り上げたものは、古代中国からの偉大な文化や建造物などについて言及されたものや儒教の教えと孔子について書かれたものがある。また、貿易を扱う課があり、古く中国 (Mainland China) のシルクロードに言及し、現代の台湾 (Republic of China) と日本との貿易について書かれたものがあつた。しかしながら、台湾を単独で扱うものはなかった。国別に中国を扱っている数を見ていくと、「自然組」が 2 課、「社会組」が 2 課となるが、そのうち 1 課は同じもので、全体の 2.3% である。中国を扱ったものが、中国 3000 年の歴史を重んじ、儒教を説くことは、「伝統的中華文化」と一致するものである。

## (2) 正中書局の教科書

### 1) 正中書局の教科書の特徴

正中書局の教科書の題材内容について、その特徴を挙げると以下ようになる。全体的には中国を扱うもの、そして「政治的」なものが多い。調査対象の4巻の教科書のうち中国を扱ったもの全112パートのうち19パート(17.0%)を占めている。

1983年出版の *Book 2* で取り上げられている題材内容からみると、国防・軍事や政治が多く扱われている。同様に、伝記では孫文が取り上げられており、政治的な題材が多く扱われている。以下、第1課のパート2の “Our Anti-Japanese War” と第8課パート2 “One China Under San Min Chu I” を取り上げる。まず、第1課のパート1では、“Our War of Resistance against Japanese aggression has laid a solid foundation for national regeneration.” で始まる本文は蒋介石の1938年12月の演説からの抜粋であり、日中戦時下の時代背景も稀である。次のパート2の以下の本文は留意すべき内容であろう。

Lesson1 Part2 の本文 (pp.12-14) “(前略) From 1937 to 1945, we fought Japan for eight years. (中略) In December 1937, three hundred thousand Chinese civilians were put to the sword by them within three days in Nanking. (中略)

Now, they tell their youngsters in textbooks that the Japanese aggression against China was only an ‘advance,’ and that the Nanking Massacre was only the inevitable result of military operations. These are brazen lies and represent a shameless distortion of history. If the Japanese do not appreciate the nobility of forgiveness, vigilance and strength must be exercised to deal with liars. History must be remembered; otherwise, history may repeat itself with all its ugliness.” (下線は筆者による、以下同様)

〈日本語訳〉

「(前略) 1937年から1945年までの8年間我々は日本と戦った。(中略) 1937年12月には南京で3日間で30万人の中国の民間人が日本人の剣で殺された。(中略)

現代において、日本人は教科書で自分の子供たちに中国に対する日本の「侵略」は単なる「進出」であっただけで、南京虐殺が軍事作戦上避けられない結果であったと言っている。これらは厚かましい嘘であり、歴史の恥知らずな歪みを表している。もし日本人が、中国人が日本人に与えた許しという高貴さを認めないならば、用心しながらも力で不正直者に対処しなければならない。歴史は記憶されていなければならない。さもなければ、歴史のすべての醜さが再び繰り返されるであろう。」

この教科書が出版される1年前、つまり、この教科書が編纂された時期と思われる1982年には日中関係においてある大きな摩擦が2つ起きている。一つは1982年には第1次教科書問題が持ち上がった。この年、文部省が教科書検定において、中国大陆への「侵略 (aggression)」という記述を「侵入」, 「進出 (advance)」に改めるように検定意見が付き

れたとの報道に、中国は歴史的事実の改ざんであるとして、日本に正式に抗議を申し立てた（下線は筆者による）。次に、昭和 57 年（1982 年）8 月 15 日付『人民日報』には、中国が日本の閣僚の靖国神社参拝に非常に強い反発し、日中友好関係にとって極めて有害であると社説が掲載された（濱川,2012）。1982 年にはこのように大きな 2 つの出来事が重なったわけである。日本に対する激しい批判と捉えられるこの教科書本文の内容は、上記の歴史的事実と一致するところである。本文ではパート 1 が 1938 年の蒋介石の抗日のスピーチで、それに続くこのパート 2 では、日中戦争について「侵略 (aggression)」と「進出 (advance)」の記載についての他、南京大虐殺と蒋介石の「徳を以て怨みに報いる」にも言及している。

次に第 8 課パート 2 “One China Under San Min Chu I”の本文 (pp.126-128) の内容の抜粋は以下のようになる。

“San Min Chu I or the Three Principles of the People were created by our national father, Dr. Sun Yat-sen, and supplemented by the late President Chiang Kai-shek.” で始まる本文は以下に続く。(中略) “Our Mainland has been under communist rule for over thirty years. But communism is not right for the Chinese and China. (中略) Therefore, the Three Principles of the People are the only solution for China, while communism is a dead end. For the sake of all Chinese, China Mainland must accept the Three Principles of the People. Upon this condition, China will be united as one nation. Let us cry out with confidence and courage: ‘One China under San Min Chu I!’” (下線は筆者による、以下同様)

〈日本語訳〉

「三民主義は私達の国父である孫逸仙博士により作成され、蒋介石故総統によりその補完がなされた。(中略) 私達の大陸中国は 30 年間共産主義の支配下にある。しかし、共産主義は中国や中国人に適切ではない。(中略) したがって、三民主義こそが中国の唯一の解決策である一方、共産主義は袋小路である。すべての中国人のために中国本土は三民主義を受け入れなければならない。この条件において中国は一つの国家として統一されるのである。「三民主義のもとの一つの中国！」と自信と勇気をもって声を上げよう。」

この教科書が出版される 2 年前の 1981 年に国民党第 12 回大会で、「三民主義による中国統一」案が採択されている。これは、台湾はもはや中国の「政党政府」という地位ではなく、「三民主義による中国統一」を統一的大陸政策のスローガンとするものである。山崎 (2009, p.164) は、台湾の「公民教育」の研究において、「三民主義とは、まさに〔中国〕化教育の核心をなすものであり、」(p.164) と記している。以上のような歴史的背景のある時代に、三民主義についてのこのような題材内容が高等学校の英語教科書に掲載されたわけである。以上のように考えると、先の「抗日」の例と同様に、本内容が教科書の本文で扱われたのは、当時の社会的な問題が英語の教科書に反映した一例と示唆される。同様に、前述 (1 (1)) の公民教育の内容を形成してきた四要素（伝統的中華文化、三民主義思想、反

共教育、民主的な憲政の推進と発展)における「三民主義思想」の反映、すなわち教育の国民化(「中国」化)の一例と言えよう。台湾では、教科書は同じ「課程標準」に準拠して何度も改編出版される傾向にある。すなわち、教科書は準拠する「課程標準」ばかりでなく、編纂された数年間の社会的出来事の影響を受けることが示唆される。

## 2) 1971 年「課程標準」準拠版正中書局の英語教科書(1983 出版)の政治的題材内容とその要因

上記のような正中書局の教科書にみられる政治的な題材内容(本文)の選択にはいかなる理由があるのかを次の3つの観点: 1) この教科書が1983年という年度に出版されたことに要因があるか、2) 出版社によるものか、あるいは3) 教科書の編者(編著者・主編者)によるものか、から明らかにすることを試みた。

まず、1) については表 6-2 を参照されたい。正中書局から出版された前述の *Book 2* をはじめ、*Book 4, 5, 6* の教科書で扱われている政治的な内容、あるいは「中国」に関する題材内容が挙げられている。*Book 2* では最も多く 7 課が扱われている。*Book 2* は 1983 年出版であるが、1984 年出版の *Book 4, 5, 6* でもそれぞれ 3, 2, 5 課が取り扱われており、83 年出版のみが特例であるわけではないようである。題材内容は、*Book 2* の「抗日」だけは特例であるが、どの教科書も内容的には大差なく、公教育を形成する四要素の「三民主義思想」、「反共」、そして儒教の教えを中心に「伝統的中華文化」に分類できるものが多い。

さらに、これを他の出版社で 1983 年付近に出版されたもの(1982 年～1984 年)ではどうかを確認するため以下の調査をした(表 6-3 参照)。国家教育研究院の教科書図書館で入手可能であった葉公超・陳祖文編著(英文: 社会組 *Book 5*, 1983)の世界書局、楊景邁編著(英文 *Book 5*, 1983)の復興書局、張致祥・江漢蘭・李志浦編著(社会組 *Book 4*, 1983; 社会組 *Book 5*, 1984)の環球書、そして、陳永昭編著、楊景邁校訂(英文 *Book 2*, 1983)の東華書局から出版されている英語教科書について調査した。これら 5 巻の教科書で中国を扱っていたものは、世界書局出版の 1 巻で 1 課取り上げていた。内容はチャイニーズ・アメリカンの物理学者を取り上げたもので、人物の生き方を描いたものであった。1983 年出版で特別に政治的な内容、あるいは「中国」に関する題材内容が取り上げたものはなく、第 1 次教科書問題を取り上げたものもなかった。以上から、1982 年～1984 年の出版年と関係性は示されなかった(表 6-3 参照)。

表 6-2: 正中書局 1971 年「課程標準」準拠版の英語教科書からの中国・政治関係の課の抜粋

英文 <i>Book 2</i> (1983 出版) 顔元叔 編著 国立台湾大学)
Lesson 1 Part 1: War Between Justice and Force (戦争・抗日)〈国防・軍事〉 Part 2: Our Anti-Japanese War (戦争・抗日)〈国防・軍事〉
Lesson 2 Part 2: Dr. Sun Yat-Sen (孫文)〈伝記〉
Lesson 3 Part 2: The Chinese New Year (中華文化)〈風俗習慣・民族〉
Lesson 4 Part 2: Spring in Taiwan (台湾の春)〈地球科学〉
Lesson 5 Part 2 Tu Fu (杜甫: 中国の唐代の詩人)〈中国文学〉
Lesson 8 Part 2 One China Under San Min Chu (三民主義・反共)〈政治〉



<b>英文 Book 4(1984) 顔元叔 編著 (国立台湾大学)</b>
Lesson 1 Part1: Chinese Classics in Translation 〈中国哲学〉 Lesson 4 Part2: The Mid-Autumn Festival (自然・文化) 〈風俗習慣・民族〉 Lesson 6 Part2: The Rainy Season of 1982 (台北の雨季) 〈気候〉 Lesson 7 Part1: The Chinese (中華文化) 〈風俗習慣・民族〉
<b>英文 Book 5(1984) 顔元叔 編著 国立台湾大学)</b>
Lesson 1 Part1: Chinese Classics in English Translation (中国文学) Lesson 5 Part2: The Chung Cheng Memorial Hall (蒋介石・三民主義・反共) 〈政治〉
<b>英文 Book 6(1984) 顔元叔 編著 (国立台湾大学)</b>
Lesson 1 Part1: Two Wills (孫文と蒋介石) 〈政治〉 Part2: The Lotus Pond (蓮の花と中華文化) 〈風俗習慣〉 Lesson 2 Part 1: China Eternal (中華文化のすばらしさ) 〈風俗習慣・民族〉 Lesson 7 Part1: The Yangtze River (長江) 〈自然〉 Lesson 7 Part 2: Chinese Hospitality (儒教の教えのすばらしさ) 〈先秦思想〉 Lesson 10 Part 2: The Dragon-Boat Festival (Ch'u Yuan) 屈原チューユアン(B.C 343-289) 中国の詩人(中華文化) Lesson 14 Part2: Our Notional Government (中央政府) 〈政治〉

表 6-3 : 正中書局以外の出版社からの同年の英語教科書の抜粋 (1983-84 年出版)

<b>英文：社会学組 Book 5 (1984*) 葉公超編著；陳祖文編著；世界書局</b>
Lesson 5 Dr. Wu Chien-shiung (吳健雄) Chinese-American 物理学者「歴史」〈伝記〉
<b>英文：社会学組 Book 5 (1984*) 張致祥編著；江漢蘭編著；李志浦編著；環球書局</b>
中国・台湾に関する題材はなし
<b>英文：Book 5 (1983) 楊景邁 編著；復興書局</b>
中国・台湾に関する題材はなし
<b>英文：社会学組 Book 4 (1983*) 張致祥 編著；江漢蘭 編著；李志浦 編著；環球書</b>
中国・台湾に関する題材はなし
<b>英文 Book 2 (1983*) 陳永昭編著；楊景邁 校訂；東華書局</b>
中国・台湾に関する題材はなし
<b>英文：社会学組 Book 5 (1983*) 葉公超 編著；陳祖文 編著；世界書局</b>
Lesson 14 Good Citizenship

\*これらの教科書については、出版年が次に改訂された 1983 年を過ぎているが、1971 年「課程標準」準拠版である。

では、2) 出版社によるものであろうか。あるいは 3) 編著者・主編者によるものか。まず出版社については、正中書局は 1931 年に南京（南京は当時の国民党政府の首都である）で陳立夫によって設立され、教科書や参考書の出版を中心に発展した。1947 年に台湾政府が新聞処と編譯館を設立して出版事業の管理を始め、中華書局、世界書局などの大陸の出版社が台湾に拠点を設置したが、正中書局も 1949 年に台北市に本部を持った。正中書局の設立者である陳立夫は、中国国民党内派閥の一つである CC 系の指導者である。陳立夫は 1925 年に米国留学から帰国すると、孫文が設立した黄埔軍官学校校長弁室機要秘書（当時の校長は蒋介石）となり、蒋介石の補佐をしている。CC 系の具体的な主張は三民主義、国民党、蒋介石を絶対視するものである。陳立夫は 1950 年に米国に渡り、以降は政治にかかわっていないとはいえないものの、以上の点は前述の正中書局の教科書で取り上げられている内容と

一致するものである。

次に正中書局のこのシリーズの編者はどのような人物であったか。編者の顔元叔は南京に生まれ、国立台湾大学外国学系を卒業した。米国留学後に母校国立台湾大学外国学系教授を務めた。同時にエッセイストとしても定評があり、正中書局の編集長を務めていた。中国ナショナリストとして知られ、その父親は孫文が1924年設立し、蒋介石が初代校長を務めた黄埔軍官学校の第一期生である。以上から、前述の教科書の内容にある、三民主義、孫文・蒋介石をたたえる内容との一致がみられる。

編者が要因として関係しているかを調べるために、国家教育研究院の教科書図書館で入手可能な正中書局出版の1971年準拠版の他の編者グループのもので入手可能なものを調査すると、顔元叔編著シリーズの前に出版された朱立民主編のシリーズのうち7巻（英文 *Book 2* 1982；社会組 *Book 4* 1979；*Book 4* 1981；*Book 5* 1982；*Book 6* 1981；自然組 *Book 5* 1979；*Book 6* 1980）について調査ができた。朱立民は同じく国立台湾大学で教鞭を執っている。本シリーズは文法事項を重視傾向ではあるものの顔元叔編著ものと同様に総合英語の教科書である。内容は欧米の題材を中心とした極めてオーソドックスなもので、中国について扱ったものは皆無であった。朱立民は、遠東図書の主編者である梁実秋と双肩となって60年代から70年代にかけて英語教科書を編纂した英千里の流れの汲む教授である。この調査から見る限りは、正中書局出版のものでも、主編者・編著者が異なれば同じ大学系列でありながら、三民主義や反共といったものを取り扱う傾向はみられない。以上のことに鑑みると、前述のような背景を持つ正中書局において、顔元叔が編著者であることが重なり、三民主義、反共、抗日といった内容を題材とした教科書の出版が実現したということが示唆される。

## 5. 1971年「課程標準」準拠版教科書に見られる二つの特徴

1968年の「九年国民教育」の開始を機に実現した義務教育に伴う国定教科書制度は、教育の量的発展を制度的に保障すると同時に、教育の質的充実の軌跡を制限する諸刃の剣であった（山崎 2009, p.31）。前述（1（1））ように、「量」は国民党による権威主義的統治のもとで、広く教育が拡大しアジアでも屈指の発展を遂げることであり、「質」においては日本統治時代から根本的な変化が見られず、行政の中央集権制と制度の一元性、内容における国家/党イデオロギー色の強さといった要素に特徴づけられてきた。とりわけ、この時代の教育の政治化、道徳化、イデオロギー化の問題は、台湾の研究者（林玉体, 1987；陳伯璋, 1988）の指摘するところである（山崎, 2009, pp.36-41）。権威主義体制下において「愛国」の教育が行われ、それは“Learning to be Chinese”[「中国」人になるために学ぶ]の過程であった（山崎 2009, p.114）。このような中、公民教育の内容を形成してきたのは「四つの要素」、すなわち、伝統的中華文化、儒教思想、三民主義的思想、反共教育、そして、1987年以降の民主的な憲政の推進と発展であった。同時にこの時期は、米国の庇護のもと、1960年代の農地改革をはじめに、それに続く70年代、80年代の高度経済成長を遂げていく。

以上のことを踏まえ 1971 年準拠版の教科書の題材内容に鑑みると、その特徴は二点にまとめることができる。まず、遠東図書の題材内容分析からは一点、米国との関係による題材内容の影響が挙げられる。遠東図書の題材内容分類では、政治を扱うものが全 172 課のうちわずか 4 課であり、内容にも政治的な意図がないものであった。一方、「中国」を扱った本文の内容は、歴史を重んじ、儒教を説くという方向性がみられ、「伝統的中華文化」と一致する。儒教思想については漢文化古来の教えとして、戦後台湾の社会、政治、そしてイデオロキーの発達を支えた一つであり、経済発達の大きな要因との指摘がある (Sun Chen, 1994)。しかしながら、遠東図書では中国よりむしろ米国との政治・経済、社会的影響が認められ、米国を扱ったものが課数としては圧倒的に多いことがその特徴であった。1950 年代に入り東西冷戦が東アジアにも波及する中、朝鮮戦争勃発を機に、以後米国の傘に護られて台湾は経済成長を遂げる事となる。1970 年代以降の外交的逆境はあるものの、依然、民間レベルでの関係は維持されるという歴史的背景がある。70 年代から 80 年代にかけての高度経済成長の過程も含め、米国との政治経済の結びつきなどの影響が、教科書の題材内容の選択に影響を与えていることが認められた。「課程標準」との一致から見ると、1971 年「課程標準」の「英語圏（英米）の国家・民族の特徴を理解することを意味することと、中国の民族的文化的特徴を英語で表現するのに十分な教材」という文言の両義的解釈のうち、「英語圏」の国家・民族の特徴を重視したものと考えられる。

次に、正中書局の題材内容の調査からは一点、国民党政権による「国民化」、すなわち、「中国」化政策の影響が指摘できる。正中書局の教科書では 1982 年の「教科書問題」を反映した「抗日」に関する題材や、「三民主義」についての題材、「蒋介石のスピーチ」などがあった。これは、歴史や地理といった「社会科」の教科書に見られる思想統一を目的とする教育が、英語の教科書にも現れている顕著な例といえよう。これら社会的・政治的背景の教科書編纂への影響は、教科書が作成されている当該年に起こった社会的・政治的な出来事が影響することが示唆された。また、1971 年「課程標準」の「英語圏（英米）の国家・民族の特徴を理解することを意味することと、中国〔中華〕の民族的文化的特徴を英語で表現するのに十分な教材」という文言の両義的解釈であるが、ここでは「中国」の民族的文化的特徴に重きを置いたものとみられる。さらに留意すべき点は、1971 年準拠版は、出版社や主編者・編著者によって題材の選び方に違いが認められ、当時は教科書編纂がある程度自由に行われていたことが確認された。

正中書局の教科書の上記のような題材内容を見ると、英語教育は「政治的」でないとの通念を超え、一部の教科書では、時代によっては政治性が強化されていることが明らかとなった。その要因としては以下が挙げられる。台湾のこの頃の政治状況を見ると、1970 年 2 月にニクソン・ドクトリンの発表があり、米中接近が起これ、1971 年 10 月の国連脱退に続く。そして、1979 年の米台国交断絶に至る。同様に、1972 年には日台断交が行われ、台湾は国際的に孤立状態となり、苦しい時代を迎える。その中、1975 年に蒋介石が亡くなり、嚴家鎧を橋渡しとして、蔣経国時代に入る。教育では、1968 年に「九年国民教育」が開始

し、「統編成（国定教科書）」が始まり、教育の国民化が強化される。蔣経国時代を迎え、美麗島事件が1979年に起こり、民主化の流れが起こる中、蔣経国は蒋介石の「大陸反抗」ではなく「台湾防衛」へと舵取りをし、李登輝の登用など本省人に門戸を開けるなど、政治体制に変化がみられる。その中で最も大きな出来事の一つは1981年3月の国民党第12大会での「三民主義による中国統一」案を採択し、これが統一的な大陸政策のスローガンとなる。

「国民党」以外を意味する「党外人士」が民主化運動を推進し、それに対し体制エリートが全面弾圧を試み、結果的には失敗に帰する（若林, 1992, pp.198-229）。そのような政治、社会情勢の中、1983年準拠版からの国定教科書決定を前に、蒋介石の強い支持者であった大陸出身の顔元叔が編著者である正中書局出版の教科書の題材内容選択にそれが現れた。すなわち、上記のような社会的変化が、英語教科書に現れた「政治性」の一因という一つの見解が提示される。

本章においては、1971年準拠版の英語教科書には、公民教育の内容を形成していた「伝統的中華文化」、「三民主義思想」、「反共」と一致する傾向が認められ、Winckler (1994)が指摘するように、1970年から1980年代前半の台湾においては高等学校の英語教育の一部において制度的同化の推進を図っていたことが示唆される。その他、70年代から80年代にかけての高度経済成長の過程も含め、米国との政治経済の結びつきなどの影響も、教科書の題材内容の選択に影響を与えていることが認められた。これらの社会的・政治的背景の教科書編纂への影響は、教科書が作成されている当該年に起こった社会的・政治的な出来事が影響することが示唆された。

## おわりに

本章は、台湾で1971年に改訂された「課程標準」準拠版の高等学校3年間の英語教科書の2シリーズ（1973年-1985年）で扱われている題材内容を質的に調査分析した。その結果、台湾のこの時代の英語教科書に「政治的」影響が色濃く現れているものがあることが明らかとなった。その要因としては、政治的背景やイデオロギー的要因が関与していることが示唆された。また、当時の教科書編纂においては、出版社、主編者・編著者によって題材の選び方に違いがあることもまた明確となった。

## 第2節 戒厳令解除後の教科書題材内容の変化

台湾では1987年に戒厳令が解除され、急速に民主化・自由化・国際化が進むこととなる。これを受け、教育においては戒厳令解除後には、公教育での「歴史」、「地理」などの社会系教科の教科書では、「民主化」、「本土化（台湾化）」など明らかな変化が見られることが指摘されている（山崎, 2009）。これらの社会系教科書に現れた変化は、英語の教科書にどの程度、どのように認められるだろうか。第3章では、戒厳令解除後の英語教科書にこれらの題

材が散見することが確認された。そこで本節ではそれらがどのような特徴となって英語教科書の題材内容に現れているのかを考察する。また、この変化がその後の台湾英語教育に与える影響は何であるかを明確にする。

2003年に公布された「国民中小九年一貫教育課程綱要」では、その「十大基本能力」で、「10.独立した思考と問題解決」の育成が挙げられている。しかしながら、それは「課程綱要」に至って新たに設定された「目標」ではなく、早くも1994年改訂「国民中学課程標準」の「総綱が掲げる目標」に「創造力、論理的思考と価値判断の能力を啓発し、問題を解決し社会の変遷に適応する能力と知識を増進する…」と記載されている。これを受けて、次の段階である高校における1995年「高級中学課程標準」（高級中学は日本の高校に相当）の英語では、目標に「思考方法の訓練」が記載された。これは時期的には戒厳令解除以降、初めての改訂となったナショナルカリキュラムにおける変化となる。したがって、1995年以降の「論理的思考力の育成」の記載が「民主化」「自由化」に伴う社会の変化とどのように関係するかについても併せて検討していく。

## 1. 研究の背景

戒厳令は1949年に台湾全土に敷かれた。これにより、第二次大戦終結以降に中国大陆より台湾に來た蒋介石率いる国民党による一党独裁の権威主義的政治が始まることとなる。国民教育では、「国民化（中国化）」教育を目指すこととなる。その後30年余はこのような体制が続くこととなるが、1980年代になると国民党一党支配に抗する声が社会の中から社会的権利の要求となって上がってくる。政府の側では、蒋介石の息子である蒋経国が1984年に総統に就任した時に、本省人である李登輝を副総統に就任させ、本省人の登用を拡大する。蒋経国は外交面での行き詰まりもあり、外からと内からの圧力の中、体制の変更を余儀なくすることとなる。そして、ついに1987年には戒厳令解除に至るのである。翌年1988年に蒋経国が亡くなると、李登輝が後継総統に就任し、世にいう李登輝時代へ入っていく。以上のように、38年間続いた戒厳令が1987年に解除されたのを機に、上からの改革、下からの運動が一致するわけである（山崎，2009）。こうして急速に始まる民主化・自由化を基調とする社会改革は教育分野にも及ぶこととなる。

1990年代の教育改革の中でも注目に値するのは1994年4月に5万人を超える市民が教育改革を求めて台北市街に集まったことである。ここでは、教育問題においては四大アピール（1. 少人数制クラスと学校の小規模化 2. 高校・大学の偏らない設置 3. 教育の「現代化」の促進 4. 教育基本法の制定）がなされた。この中でも「教育基本法」の制定は、教育の民主化の「法化」を意味するものとして最も重要なものであった（篠原，2017）。そして、ついに1999年6月に「教育基本法」が制定されるに至る。これを機に台湾の教育を巡る環境は、急速にこれまでの「中華民族・中華国家」、「三民主義」、「反共」といったことから、「自由化」、「民主化」の流れをたどる（赤松・若松，2016）。この中で最も大きな変化は「台湾は中国の一部である」という政治的主張が後退したことであった。そして代わりに、

台湾の歴史、地理、言語、文化（先住民）がナショナルカリキュラムに組み入れられていき、いわゆる教育の「本土化（台湾化）」がなされていく。すなわち、戒厳令解除後の「課程標準」が戒厳令下のものとの最大の相違点として、民主化原則、郷土課程、認識台湾が取り上げられ、「脱権威化」、「本土化（台湾化）」が顕著であるといわれる（山崎，2009）。

言語教育を見ると、2001 年小学校での英語教育開始と同時に各エスニック・グループの言語（「閩南語」、「客家語」および原住民族の諸言語）の教育が開始される。このように「国語」、「社会」の教科内容と教科書は変化していく中で、英語教育ではどうであろうか。本章では戒厳令解除後の「課程標準（綱要）」準拠版教科書を調査し分析することとした。

1980 年代にはすでに社会改革が始まっていたことから、1983 年に改編された高級中学「課程標準」準拠版教科書の内容の変化は注目される。1993 年から 2009 年は教育の民主化下の台湾教育法制変革期といわれ（篠原，2017）、1995 年の高級中学「課程標準」準拠版教科書がここに位置する。2009 年から現在においては台湾教育法制完備・成熟期といわれており（篠原，2017）、ここに位置するのは、2008 年の高級中学「課程綱要」準拠版教科書となる。これらのことを考慮しながら、それぞれの特徴を確認する。

本節では 1948 年「課程標準」から 2008 年「課程綱要」までを、「中国」化と「本土化（台湾化）」、「民主化」に着目して考察し、さらに 1983 年、1995 年「課程標準」準拠版教科書と 2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容を「本土化」、「民主化」に重きを置いて分析をする。そして、題材内容にどのような変化があり、具体的にそれらの題材によって、生徒のどのような学力を培おうとしているのかを調査分析し、それがその後の台湾英語教育に与えた影響を考察する。

## 2. 本研究の目的と方法

本研究では、以下の点を明らかにすることを試みる。

1. 戒厳令解除後の高級中学英語教科書の題材内容には「民主化」、「本土化（台湾化）」が影響しているであろうか。
2. 影響があるならば題材内容のどこに、どのような特徴をなしているのか。
3. そして、それらの特徴がその後の台湾英語教育にどのような影響を与えているか。
4. さらに、これらの変化に論理的・批判的育成への流れが読み取れるであろうか。

研究方法は以下の 3 つの方法から探っていく。

1. 戒厳令が解除された 1987 年より少し前の「課程標準」（1983 年）から、「課程標準」（1995 年）、そして「課程綱要」（2008 年）の「英語」に関する「教材概要」の記載が、これまでの「課程標準」と比較して、「中国」化、「本土化（台湾化）」、「民主化」の観点において、どのように変化したかを検討する。
2. 1983 年「課程標準」、1995 年「課程標準」と 2008 年「課程綱要」準拠版教科書各々の「編纂大意」（各教科書のはじめにある本書の目的や使用方法についての記載）に書かれた文言を、これまでのものと比較検討する。これは、3. の計量的・質的調査の裏付けのために行う。

3. 最後に、1995 年「課程標準」と 2008 年「課程綱要」準拠版教科書の各々題材内容を量的・質的に調査分析する。計量的調査だけでは拾いきれない部分を確認するため、「本文」の内容についても、どのような内容を扱っているのか、文章のスタンスやメッセージは何かなどを調査する。

### 3. 「中国」化, 「本土化 (台湾化)」 「民主化」の観点における「課程標準」と「課程綱要」

#### (1) 1948 年「課程標準」、1962 年「課程標準」、1971 年「課程標準」

ここでは「目標」と、どのような題材を扱うかの判断基準となる「教材の概要」に着目した。まず 1948 年「課程標準」の「目標」では、(5)英米民族史跡の記載から愛国思想を誘発し、国際理解を促すとある（訳ならびに下線は筆者による、以下同様）。「教材の概要」では「短編文の選択は、原則として近代文を扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか科学系やそのほか趣味に関する叙述、描写、説明、議論」を薦めている。以上のように英語学習を通して、西欧諸国の文化の理解や国際理解を目指すという日本でも共通する目的以外に、愛国思想を育てることが明記されている。

続く 1962 年改訂版「目標」では、(4)英語の民族文化を学ぶ関心を啓発するとある。1971 年改訂版の「目標」は同じく (3)英語の民族文化を学ぶ関心を啓発するとある。

「教材の概要」では、1971 年「課程標準」は、微細な変更を除き、ほぼ 1962 年「課程標準」と同様の記載である。とりわけ文頭部分は継続して以下の文言が記載されている。「短編文の選択は原則として近代の英米作品を使用し、文学的意味合いがあるか、科学系や趣味に関する叙述、描写、説明、議論」を薦めている。さらに、「国家民族の面において参考に十分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う」（「特別注意在国家民族方面足資借鑑及富有激励性之文字。」）（訳ならびに下線は筆者による、以下同様）。

以上のように、1962 年、1971 年「課程標準」においても、英語教育を通して、国家民族における参考になる文章を用いるようにと、当時の国家権力による教育への圧力がうかがわれる。

#### (2) 1983 年、1995 年「課程標準」と 2008 年「課程綱要」

##### 1983 年「課程標準」

戒厳令が解除されたのは 1987 年であるが、1980 年代から民主化の波は始まっていた。

1983 年「課程標準」の「目的」では、「(前部省略) (4)生徒の国際業務や科学技術を学ぶ興味を啓発し、民族文化の交流を促進し、理想の世界を発展させる」とある（日本語訳と下線は筆者による。以下同様）。下線部には国際化、民主化の流れが汲み取れるものである。

「教材の概要」の内容においては、「生徒の生活背景や心身の成長段階を考慮し、特に人生の意義を導いたり、民族意識を喚起したり、民主的な風土および科学探求精神を養わなければならない」（喚起民族意識、培養民主風土および科学求知精神）とある。1971 年「課程標準」までと同様な「民族意識」という記載がありながら、「民主的な風土」を記載していることは着目され、すでに「民主化」が反映していることが示唆される。

### 1995 年「課程標準」

戒厳令解除後の 1995 年「課程標準」「目標」では、「(前部略)(4)国際情勢, 新しい科学技術や知識および外国文化に対する理解を促進し, 自国と外国の文化及び世界の趨勢を熟知することを期待する」とある。1983 年「課程標準」での記載内容の中でさらに国際化が強調され, これまでであった「民族意識」という文言が消えたことは大きな変化である。

「教材の概要」では、「五. 教科書本文の内容:教科書本文の材料選びは多様化させるべきで, 趣味性, 実用性および生活性に依拠する。内容は生徒の生活背景と心理知能の発展に配慮すべきで, さらに人生の意義を啓発し, 民主的な風格および科学を探究する精神を育成することを特に重視すべきである」とある。続いて、「Ⅱ. 編纂の方式 二, 教科書本文 教科書本文の材料選びは多様化させるべきで, 温かな小品, ユーモラスな短文, 文学名著, 自国および外国の文化・風俗・習慣の紹介, 科学技術, 環境保護および生態保護, 自らを励ます短文, 運動, 休閑娯楽, 社交儀礼, 旅行, 食事, 衣服, 住居, 交通, 物語, 手紙, 使用説明書, 詩歌, 寸劇, 英語ニュース, 広告などを含むことができる」とあり, 環境保護や生態保護など具体的に示してある点が注目される。これについては後述する。

このように、「民主的な風格のある」ものを取り上げるようにと明記され, そこにはもはや「民族主義」の文言は見られない。列挙された具体的な項目も, 自国および外国の文化・風俗・習慣の紹介, 科学技術, 環境保護および生態保護のように, 「民主化」を表すものとなっている。

### 2008 年「課程綱要」

2008 年「課程綱要」では, さらに広く「民主化」の背景が見て取れるものである。

「目的」では「(2) 英語による論理的な思考, 分析, 判断および整合・創造の能力を育成する。(4) 英語学習への興味と積極的な学習態度を育て, 各領域の知識を積極的に吸収し, 人文社会・科学技術の知識と才能を高める。(5) 多元的な文化に対する理解と尊重を促進し, 国際的視野及び世界の永遠の発展という観念を養成する」の記載がある。

「教材の概要」では、「5, 本文の内容:本文の材料選びは多様化すべきであり, 知識性, 趣味性, 実用性および啓発性に配慮を加えるべきである。内容は生徒のその他の領域における学習と結びつけて, 科学の発展, 社会の変動および世界情勢に合わせて, 各種の新しい知識を紹介することによって, 学生の知能を高める。また, 生徒の生活背景と心理知能の発展に合わせるべきであり, 生命教育, 男女平等の教育, 法治教育, 人権教育, 環境保護の教育, 海洋教育, 多元的文化, 消費者保護の教育, 生涯計画などと相関連する話題を取り入れ, 生徒の人文教養を高め, 生命の尊重および世界の永遠の発展という観念を深く取り入れることを期待する」とあり, 生命教育, 男女平等, 人権教育など, 具体的な項目が多々挙げられ, 民主化に関係した人権や法治国家など, 様々な項目を取り上げており, 大きな変化といえる。



### (3) 課程標準と課程綱要の「目標」と「教材概要」の特徴とその分析

一般的には、外国語教育である「英語」教育は、「社会」や「国語」とは違い、個人を国家の構成員として政治的・文化的に社会化することが如実に反映しない教科であると思われる。しかしながら、以上のように、1948 年「課程標準」から 1962 年「課程標準」、そして 1968 年の教育改革を間に挟み、1971 年「課程標準」を通して、「愛国主義」と「民族意識」を育むことが英語教材を通してなされることが、その「目標」として記載され、具体的に教材選択にも言及していることが明らかとなった。

一方、戒厳令解除前後の 1983 年「課程標準」は、これまでの「民族意識」に「民主的」が加わり、教育の方向性に変化が現れたことがわかる。さらに、1995 年「課程標準」になると、「民族意識」は削除され、代わりに「民主的」がキーワードとなる。教材選択については、これまでの「文学作品」、「科学技術の新知識」、「国際情勢」に、さらに「環境保護」・「生態保護」が具体的に加わる。台湾の教科書では 1995 年と比較的早い時期から「環境・生態系問題」に関する題材が多く扱われてきた理由が「課程標準」にあることが明らかとなった。なぜ、「環境・生態系問題」が「民主化」とともに強調されるかについては後述する。

2008 年「課程綱要」では、教材選択に「生命教育」、「男女平等の教育」、「法治教育」、「人権教育」、そして、「多元的文化」が具体的に挙げられ、「民主主義」、「自由主義」、「社会的権利要求」、そして「本土化(台湾化)」の影響が反映されていることが指摘される。なお、「目的」には 4 技能の育成とともに「論理的思考・分析・判断等の能力」の育成が明記されている。

## 4. 教科書の「編纂大意」記載の変化

台湾の教科書では、どの時代、どの教科書会社のものにも、初めのページに「編纂大意」の記載があり、編纂者による編纂の目的と構成、そして使用方法などが細かに記載されている。ここでは、各時代の定評のある教科書シリーズの「編纂大意」に着目する。

### (1) 1948 年「課程標準」準拠版（復興書局）

1948 年「課程標準」準拠版教科書としては、この時代最も定評のある沈亦珍らが編著し、1951 年から復興書局が出版した「高中英文」を使用した（第 1 章第 3 節参照）。この「編纂大意」には、「三. 本書はできるだけ新しいものを取り入れている。題材内容は青少年の生活修養に有益なもの、および、愛国思想をもたらせるような文章から選択している。多岐にわたる文体を選んでいる。」との記載がある。このように、青少年の生活修養と愛国思想を英語教科書から指導するという、「課程標準」の教育の「国民化」といえる文言が「編纂大意」に示されている。

### (2) 1962 年「課程標準」準拠版（世界書局・英千里編著、正中書局・趙麗蓮編著）

1962 年「課程標準」準拠版については、当時定評のあった英千里編の世界書局出版の「英氏高中英語」と、当時、放送英語番組でも活躍していた趙麗蓮編著の正中書局出版の 2 シリ

ーズを調査する（第1章第3節参照）。これは、同じ1962年「課程標準」に準拠しているにもかかわらず、2社のものの記載が大きく異なるためである。

まず、英千里編世界書局出版の教科書シリーズの「編纂大意」には以下の記載がある。「五. 本書は言語学に基づいて、生徒が英語を学習する目的に沿って教材を実用的な必要性に応じて選択している。一般的に中国人の英語学習の目的は、知識を吸収するための新しい道具として学ぶ。故に英語学習の第一の目的は読解力の養成である。その読み物としては、現代の英語作品が最も適している。したがって、本書の英文は現代の英文作品から選ぶのが原則である」。「課程標準」にある、「民族意識」の文言は取り入れられておらず、英語学習を言語学習と捉え、英語を知識を吸収するための道具」としてとらえ、そのために現在の英文作品から選ぶとあり、政治・社会的な記載は認められない。

一方、同じ1962年「課程標準」準拠版の趙麗蓮編著の正中書局出版は以下のような文言が目される。「本書は中国固有の道徳・民族文化を基にして、そこに西洋の風俗・習慣・礼儀などを加え、生活と教育を通して生徒に話すこと、書くことの中から自由に使える運用力をつけるようにする」というように、英語教育から、中国固有の道徳と民族文化を基礎にして、それにさらに、西洋の風俗習慣を学ぶことを目的に編纂された教科書であるとの記載があり、正中書局の教科書の場合は、「課程標準」記載の民族意識と教育の「国民化」が認められる。このように、教科書会社、教科書編者によって違いがみられる。

### (3) 1971年「課程標準」準拠版（遠東図書、正中書局）

1971「課程標準」準拠版についても、1962年「課程標準」準拠版と同じ理由から、異なる教科書会社の2シリーズを取り上げる。まず、この時代最も定評のあった梁実秋教授が主編を務めた遠東図書からのものである。「編纂大意」の記載は以下になる。「二. 本書の各課の本文は現代の英米の作品から選んでいる。多様な型の文章を集めている。文章については、簡単で実用的なものから入り、生徒に基礎力がつくようにしてある。内容については文芸、科学、伝記、愛国の事柄などを扱い、生徒の興味をそそり、同時に西洋文化を紹介することを目標とする」このように、愛国の事柄を扱うという題材内容の選択ではあるが、同時に生徒の興味をそそるもの、西洋文化を紹介するものと、英語教育における異文化理解をその目標としていることが認められる。

一方、顔元叔編の正中書局出版のシリーズでは、「三. 「読解文選」と「模範作文」の内容は、往々にしていかにして現代中国人になるかという趣旨のものが多く、その観念における英語の表現方式で、生徒が日常的に用いるのに必要なものが載せてある」。との記載があり、英語教育は、現代中国人を育てる手段として存在するかのよう文言には、ナショナリズムを感じるものがある。1971年準拠版もまた、教科書会社によってそのトーンの違いが出ていることが示唆される。

#### (4) 1983 年「課程標準」準拠版（国立編譯館主編）

戦後台湾で唯一の国定教科書として、国立編譯館主編、出版されたシリーズの「編纂大意」では、「四. 本文の部分は近代の平均的実用的な英文を主にしている。その内容については、生活の意義、文学的意味、科学的色彩があり、および多方面で渡る興味深い文章を含んでいる」とある。1983 年「課程標準」に則してか、「愛国精神」にかかわる記載がなく、「民族意識」を匂わす記載がない。戒厳令解除前の国定教科書ではあるが、これは前述の 1983 年改訂「課程標準」の内容と一致するものである。

#### (5) 1995 年「課程標準」準拠版（遠東図書、龍騰文化、三民書局）

1995 年以降は、再び国定教科書から民間出版社による教科書の審定制に戻る。1971 年「課程標準」準拠版以前にはなされていなかった内容に関する審定が入るようになった。そこで、その差異を検討するため、代表的な（採択率の高い）教科書会社の 3 シリーズについて調査することとした。

まず、当時最も定評があった遠東図書から出版された「高中英文」の「編纂大意」である。ここでは、「本文は実際の生活に使用できるよう、実用性や知識および趣味性（興味）のあるものを選んである。内容は生徒の生活背景や心や知識の発達に及んでいる。多様性のある文体を用いて、そこには各種テーマとコミュニケーション能力の育成を目指している。毎巻ごとに、本文は各種のテーマと文体のバランスを考えて構成されている。各巻にできるだけ、詩歌、文学の名著、科学技術の新しい知識、環境保全生態に関するもの、自国や外国（中外）の文化の紹介、天気、実用的な知識、運動・レジャー、口語のコミュニケーションの技巧、作文の技巧、ユーモアの短編、および、人を感動させる物語を含んでいる」とある。「課程標準」に追従し、これまでの文学作品、科学技術の新知識に加え、「環境保全」が入っていることが注目できる。

次に龍騰文化では以下のようにになっている。「選択すべき教材は古典と現代文から、厳格なものから軽い文章、科学の事実や人間性の善、芸術的な美を含め、英語を学習すると同時に人間的素質を向上させる効果のあるものを選ぶ」とある。人間的素質の向上というように、台湾の民主主義教育に見られる「人間教育」の観点(篠原, 2017)が垣間見られ興味深い。

当時の教科書シェア率が 2, 3 位を競っていた三民書局出版のシリーズは以下のようになる。「三, I 本書においては、主題は実用的で、いろいろな状況を背景にし、生徒にさらなる学習の機会を提供している。そして、独立し、系統だった方式で構成されている」とある。具体的な教材としては、「文化風俗、現代の科学技術、自然環境、伝記、文学素養、心の温まる話」などがあげられ、とりわけ遠東図書との大きな違いは見受けられない。いずれにしてもこの 2 シリーズからは、戒厳令解除後ならではの、民主的概念がうかがわれる。

## (6) 2008 年「課程綱要」準拠版（遠東図書、龍騰文化、三民書局）

2008 年「課程綱要」準拠版では、第 1 位から 3 位のシェア率の教科書は、1995 年「課程標準」準拠版と同様の教科書会社のシリーズとなった。2008 年では、より具体的に「民主化」にかかわる項目の記載がある。

遠東図書では、知識性や趣味性実用性、啓発性を兼ねたものである。内容は、生徒の興味を引き、生活背景と心や知能の発達にあわせたものとなっている。並びにジェンダー教育、人権教育、環境教育、生命教育などに関係したテーマを含む。生徒の人文・素養を高めるなど、文章の形態やテーマをバランスよく載せる配慮となっている。具体的には「詩歌、文学作品、科学技術の新しい知識、環境生態、台湾や外国の文化の紹介、人物に特化したもの（伝記）、実用知識、スポーツ・レジャー、ユーモアがある短文や心温まる故事など」の記載がある。

龍騰文化では、「本書においては、人間関係、科学技術の新知識、文学の小作品、詩歌の鑑賞や分析、伝記およびその他、知識・文化性、趣味性のある古典・現代の文章、厳格・柔らかい文章、科学の事実、人間性の善や芸術の美、生徒の英語の能力を高めるだけでなく、人間性や気質を養い育てる」との記載があり、それぞれの項目で一段と民主化が浮き彫りにされている。

三民書局では、「三、II 本書は「課程綱要」（教材の概要）に則している。多様化し、生活基本を育成し、文化的認識、国際的視野を発展させる。四、C 各課本文「本文の内容は青少年問題、生命教育、文化風俗、科学知識、伝記などのテーマで文学作品や知識性、趣味性実用性に富んだものを使用」とある。

## 5. 1995 年「課程標準」、2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容調査

### (1) 対象教科書と研究の方法

調査対象となる教科書は 3 章の「編纂大意」を調査した採択率の高い 3 社の教科書シリーズとした（表 6-5 参照）。

表 6-5: 1995 年「課程標準」、2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容調査

年	1995 年（民国 84 年）「課程標準」準拠版			2008 年（民国 97 年）「課程綱要」準拠版		
出版社	遠東図書	6	1999-2003	遠東図書	6	2011-2013
	龍騰文化	6	2001-2003	龍騰文化	6	2010-2012
	三民書局	6	2004-2005	三民書局	6	2011-2012
		18 巻	212 課		18 巻	206 課

調査方法は、題材内容を量的・質的の両方で行う。量的調査では民主化・本土化（台湾化）に関わる題材内容を、戒厳令解除以前の「課程標準」と比較し、解除後の「課程標準」と「課程綱要」および、各準拠版教科書の「編纂大意」に具体的に記載された項目を中心に以下のものを抽出し、分類・比較した。その結果、以下の項目が挙がった。1. 「台湾先住民」2. 「台

湾文化・風土・民族」3.「人権・障がい者・福祉」4「人権（性差）」5.「人権（人種・法治国家）」6.「子どもの問題・生命教育」7.「環境問題」8.「未来・倫理」

## (2) 題材内容（本文）の量的調査：結果と考察

1995 年，2008 年「課程標準（綱要）」準拠版教科書準拠版教科書の題材内容を上記の 8 つの項目で分類すると以下のようなになる（表 6-6，図 6-1 参照）。

まず，1995 年準拠版教科書では，「環境問題」が 12 課となり 1 位で，「人権（障がい・福祉）」（11 課）が小差で続く。次に「未来社会」（6 課），台湾の文化（5 課），「人権（人種・法治国家）」（5 課），「子供の問題」（5 課）がそれに続く。一方，2008 年準拠版教科書では，「台湾文化」，「先住民文化」が多く扱われ（合計 14 課），次に「環境問題」（12 課），「人権（障がい・福祉）」（9 課），「子供の問題」（5 課），「未来社会」（5 課）「人権（人種・法治国家）」（3 課）が続く。

表 6-6：1995 年「課程標準」，2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容

「民主化」「本土化(台湾化)」に関する題材	1995 年「課程標準」準拠版教科書(課数)	2008 年準「課程綱要」準拠版教科書(課数) (
台湾先住民	1	2
台湾文化・地域・民族	5	12
人権（障害者・福祉）	11	9
人権（性差）	2	2
人権（人種・法治国家）	5	3
子供の問題・生命教育	5	5
環境問題	12	12
未来社会・倫理	6	5
合計	47	50

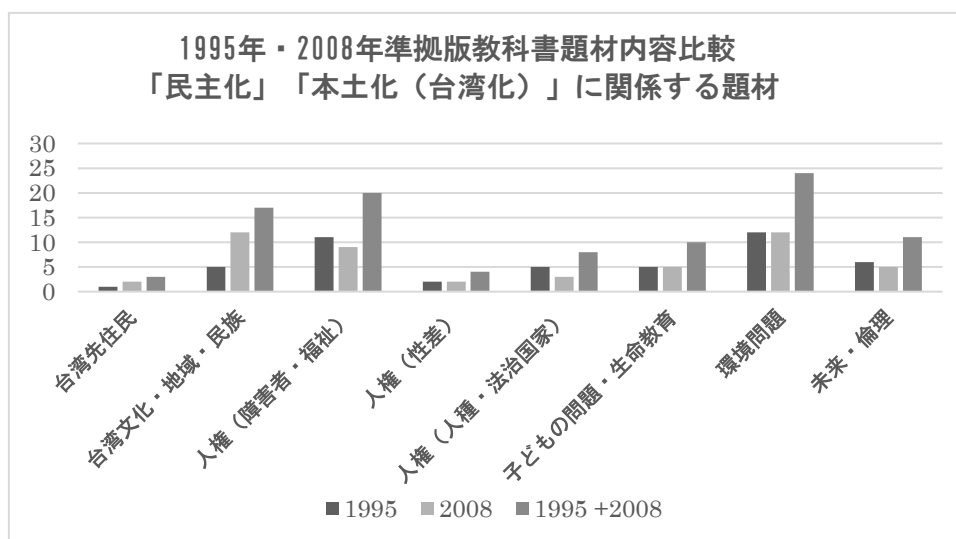


図 6-1：1995 年「課程標準」，2008 年「課程綱要」準拠版教科書の題材内容

### (3) 題材内容（本文）の質的調査：結果と考察

#### 1995 年「課程標準」準拠版教科書

1995 年準拠版では環境問題が最も多く扱われ、福祉、未来社会・倫理と続く。「課程標準」や「編纂大意」に記されていたことがそのまま数に反映されている。環境問題については、具体的にはゴミ問題、汚染によるカエルの奇形やグローバル化に関わる産業発展による環境汚染など、基礎的な問題から最近の情報を紹介し、解決策を生徒に考えさせるものとなっている (*Far East English Readers Book6* [以降 *FEER 6*] Lesson 7 [以降 L7] “A Fable for Tomorrow”, *Lung Teng English Readers Book 2* [以降 *LTER 2*] L5 “Our Global Village”, *LTER 6* “Friends of Frogs”, *LTER 4* L3 “Biosphere II”, *Sun Min English Readers Book 1* [以降 *SMER 1*] Unit [以降 U11] “Think Before You Throw”, *SMER 4* U4 “Water: Where Has It All Gone?”)。

台湾では、第二次大戦後の急速な経済発展のため、産業公害・環境破壊が住民を悩ませてきた。しかしながら、国民党政権下で正当化され、声を発することはできないままであった。これが戒厳令解除後、自由化・民主化が進むことにより、環境保護運動が発生し、ある意味、政治的自由の拡大と民主化の進展に貢献することとなる (寺尾, 2015)。

その他、未来社会・倫理を扱うものもあり、遺伝子組み換え食品、種の絶滅とクローン (*SMER 2* U12 “Someone Help! I’m Extinct!”, *SMER 3* U6 Genetic Engineering”)などが扱われている。教科書の出版がおおよそ 20 年前 (1999 年～2005 年)になるので、これらのトピックが高校の教科書で扱われていることは注目できる。

次に多いのは、人権問題 (障がい・福祉・性差) で、福祉や障がい者を取り上げたもので、ヘレン・ケラー、マザーテレサといった偉人を取り上げる手法を長く踏襲している一方、現代の問題である老人介護や生まれつき盲目の青年の手記から障がいを考えるものまでさまざまである。キング牧師のスピーチは 3 社すべてで使用されており、民主化がうかがえる。民主化が浮き彫りにされるものでは、9.11 (2001 年にアメリカで起こった同時多発テロ事件) の追悼式で NY の知事がリンカーンの演説を引用し、生命の尊さ、法治国家、人権、を提唱したもの (*LTER 6* L7 “The Gettysburg Address: A Speech That Will Live Forever”), 偉人としてフランクリンの多彩さとアメリカ独立宣言作成のことを扱った課 (*LTER 6* L9 “Benjamin Franklin: The First American”)がある。

その他、ある日、母親が家事をしなくなったことから考える女性の権利や家族の在り方などがある (*LTER 4* L11 “From Junk to Love”, *LTER 5* L1 “Memories of a Special Summer Visit”, *LTER 5* L8 “I Have a Dream”, *LTER 6* L5 “I Want a Wife”, *LTER 6* L6 “I’m Mother to My Mother: When the Child Becomes the Parents”, *SMER 4* U9 “Super Man” *SMER 5* U5 “Darkness at Noon”)。これらの問題には台湾の多民族国家としての権利の擁護が映し出されている。

その他、生命教育として子供の問題があり、子供と肥満、受験戦争の厳しい台湾の現状を映し出すような、有効な時間の使い方を取り上げたものもある (*LTER 5* “Who Needs

Exercises”, *LTER 1 L6* “Lose Weight While Watching TV”, *SMER 1 U1* “Can We Help You?”, *SMER 5 U2*). 一方、独創的な考え方の子供をどう伸ばすか (*SMER 5 U2* “Angel on a Pin”) というトピックも扱われていることは興味深い。

1983 年準拠版教科書でわずかに取り扱われ始めた「台湾」については、さらにその数が増し、台湾の先住民文化（陶芸）・台湾文化の紹介が扱われている。具体的には先住民の陶芸、台北市、台湾の伝統的な街 (*FEER 4 L12* “The Legend of the Taiwan Clay Pot”, *FEER 5 L11* “Cultural Treasure of Taiwan”, *LTER 2 L2* Taipei-A City of Many Faces”) がある。この傾向は「本土化（台湾化）」が示唆される。

### 2008 年「課程綱要」準拠版「教科書」

2008 年準拠版は、1995 年準拠版に続き「課程標準」や「編纂大意」に則しており、「台湾の先住民」、「台湾の歴史・文化」に関するものが著しく増えた。これまで中国 3 千年の歴史であったものが、台湾 400 年の歴史に焦点が当てられ、台湾の先住民の伝説や工芸を取り上げたり、台湾の世界に誇れる文化や地方の美しい自然、整備された都市などを紹介しているものが多く扱われている (*SMER 2 U11* “The Long-Haired Spirits and the Thao”, *SMER 4 U3* “The Tao: People of the Sea”, *FEER 3 L5* “Yummy's Blog”, *SMER 1 U11* “Dancing to Nobody's Turn”台湾のダンス, *LTER 4 L2* “The Formosa That You May Not Know”)。これは、公教育における台湾についての地理や歴史、文化について学ぶ科目である「認識台湾」の教育が英語にも反映していることがわかる。1995 年準拠版でも扱われ始めていたが、その数は 2008 年になると一気に増えるのも注目できる。これは、台湾の他の教科で学ばれているものより、少し時差があるように見受けられる。台湾を扱うものは、先住民文化を含め、1995 年準拠版で 6 課であったものが、2008 年では 14 課（食文化、偉人、都市、美しい地方都市、文化）に上る。そして、中国を扱うものは 1995 年準拠版で 4 課（万里の長城、漢方、寓話、儒教）あるものが、2008 年準拠版では 1 課（中華文化）となる。

環境にかかわるものでは、2008 年では、水問題、絶滅危惧種、サンゴなどの海の生命と環境保全、生物多様性、携帯電話のリサイクルなど多種にわたって扱われ (*FEER 2 L9* “Earth Ride: Water on Earth”, *LTER 2 L3* “Is Your Diet Saving the Earth”, *LERT 3 L12* “The Ocean: Our Fragile Paradise”, *LTER 6 L1* “Cell Phone Recycling and African Gorillas”, *FEER 3 L9* “The Greenhouse Effect and the Women of Guatemala”, *SMER 5 U8* Waste Not, Want Not), 生徒に身近な問題として取り扱われている点が特徴である。例えば、環境問題において台湾の若者が率先して世界に発信している姿や、自分たちの食べているものが地球温暖化にどのように影響しているのかを考えるものなどである。未来社会・倫理についての疑問 (*LTER 4 L9* “Multitasking-Better, Foster, More Efficient?”) など、幅広く最新の情報が入っているところは、すでに 10 年、20 年前の教科書とは思えないものがある。以上のように、環境・福祉・ボランティアは早くから育成を重視しており、2008 年準拠版では、これらの分野で 1980 年代生まれの台湾の若者が、すでに国際的に活躍している姿が紹介さ

れており、早くも教育成果の現れの一つとして示唆されよう。

人種や人権、法治国家に関しては、王道のキング牧師のスピーチは 1995 年、2008 年ともに扱われ、法治国家人権を提唱しているものなど様々なものが取り上げられている。その他、2008 年では、「生命教育」に重点が置かれ、いじめなどの学校生活や家庭での人間関係に関するもの (*FEER2* L2 “Communicating with Parents: An Impossible Mission”, *LTER1* L2 “No Longer Ugly?”, *SMER 5* U10 “Words Can Hurt”) が多いのも特徴である。これは民主化の表れと同時に、台湾で最近若者の自殺者が増えているなどの社会問題も映し出されているものであろう。

#### (4) 「環境問題」と「民主化」・「本土化 (台湾化)」重視の傾向と論理的思考力育成の原点

環境問題は数・内容ともに充実し、この傾向は 1995 年、2008 年準拠版に共通するものである。1980 代から始まった環境保護運動は 1985 年の反デュボン運動は戒厳令解除以前としては極めて大きな社会運動であった(劉, 1993)。これが戒厳令解除を皮切りに反公害運動がピークに達するようになり、かねてより問題であったごみ問題、水問題が明るみになるわけであるが、これらが如実に教科書の題材に反映されていることが指摘できる。環境保護運動という自力救済運動の拡大は政治的自由の拡大として民主化を後押しした(寺尾, 2015)。

しかしながら、2000 年に陳水扁政権になると、政権に取り込まれた環境保護運動団体のため、政権下で環境保護派の意見は通りやすくなり、政権下の 2005、2007 年に CO2 削減を政策にするなど(日本貿易振興機構, 2010)民意が政策に反映する側面も否めない。一方、政権への批判力を失うなど、この意味で両義性があるといえよう。当時、政権から距離を置く環境保護団体の動きが活発になることもまた事実である。

馬政権下では圧倒的な与党優位により、野党弱体化が指摘された。こうした中で再び社会運動が活性化され、2008 年以降では市民社会が野党としての役割を果たす傾向がみられるようになったと指摘されている(赤松・若松, 2016)。その際の代表的政策課題の一つが環境破壊問題といわれ、市民社会・社会運動の動き—逆説的な民主主義の定着との見方がある(呉, 2012)。一方、馬英九政権では 2010 年に環境教育法が公布、翌年 11 年 6 月から実施され、これにより環境教育の普及がなされたわけで、英語の教科書に多数取り上げられるのは、この政策によるものであることは明らかである。

全体的に環境問題、福祉、人権などを重視した題材、台湾の文化、歴史、地理などの題材の扱いから、「民主化」と「本土化 (台湾化)」が顕著に教科書の題材に現れているといえよう。ここには台湾社会特有の市民運動の活発さが指摘できる。これらの活動が教科書の題材内容選択に大きく反映されていることが明確となった。近年の公教育における「課程標準」は、研究者の中では中立的であるとの評価が主流になってきている(福田, 2014)との報告があるが、本研究においては、高級中学の英語の教科書においてもその傾向が認められることが示唆された。

1971 年準拠版までは見られた蒋介石のスピーチ、三民主義は、1995 年準拠版以降は全く



見られず、代わりに前述のような民主主義的なものを扱うことが確認された。さらに、政治を扱うもの自体が少ないことも明らかとなった。この意味では、教科書の中立性や教育の脱政治化が示唆される。これら題材の取り上げ方や「本文」のメッセージには、「民主化」やそれに伴う社会的な権利の要求が、いわば、政治的意向として押し付けられているというようなニュアンスは感じられなかった。しかしながら、自分たちの国が誇れるものあることを生徒に意識させる、または世界に台湾人として発信していく重要性は全体的なメッセージとして感じられるものであった。

教科書会社間の差異については、三民書局は台湾について多く扱い、遠東図書・龍騰文化は環境を重視しているなどの違いはあっても大きな差異は認められなかった。どの会社のものも「課程標準」の記載に則っており、とりわけ、三民書局の「編纂大意」は、題材の選択には「〔課程綱要〕の教材概要に則す」という記載があった。

### 論理的思考力養成の始まりとその要因

以上のことから、戒厳令解除後の英語教科書の題材内容には、人権、民主化、環境保全、福祉、平等など、「民主化」を現す題材、そして、台湾や先住民の歴史、地理、文化、そして、芸術など、「本土化(台湾化)」を扱うものが如実に現れたことが明らかとなった。これらは、先行研究(平井, 2017b)で明らかなように、戒厳令解除後の教科書の中で扱われる言語スキルとして、テーマについての自分の意見を育てたり、論理的に考え、問題解決につなげる言語活動を取り入れていることと同様に、題材内容もまた、自分たちの社会について現状を知り、問題を論理的・批判的に考える問題解決型の題材であることが示唆された。これらはすなわち、1995 年「課程標準」、そして2008 年「課程綱要」に明記されているように、生徒の論理的思考を育て、批判的に物事を見る目を養うことにつながる題材であることが示唆されるものである。

このようにみると、論理的思考力の育成は、単にグローバル化への対応として捉えるのではなく、台湾においては、民主化、自由化の影響とも捉えられることが示唆される。権威主義的体制の中、硬直していた暗記型、詰め込み型の教育(山崎, 2009)が、新しい民主主義という社会の変化に合わせた、個人の資質の変化が現れ、それと一致して発展していったといえるのではないか。

本研究の英語教科書の題材内容の選択からは、また以下のことが示唆される。台湾の英語教科書では、戒厳令解除を機によりやうく勝ち取った民主化が始まり、それは同時に生徒の論理的思考力を培う教育に繋がっているという見解である。これについては、引き続き、英語以外の教科や小中学校での教育の変化を含め、多角的な調査が必要なことは言うまでもなく、今後丁寧に対峙していく所存である。

### まとめと今後の課題

本研究からは、戒厳令解除後の高級中学英語の教科書には「民主化」、「本土化(台湾化)」の影響が認められた。題材内容のどの分野に認められるかについて具体的には、環境問題、人権(障がい・福祉・性差)、台湾特有の文化、先住民、歴史、地理にかかわる内容に表れ

ていることが明らかになった。これらは、基本的には政府からの改革と民意による市民運動が一致したことによって起こり、それが教科書の題材内容に反映していると示唆される。とりわけ教科書で扱われる環境問題はその量と質ともに高く、これは草の根の部分から民主化に貢献してきた意味においても、教科書に現れる「民主化」の明確な証拠となりうるものであろう。そして、そのような当事者意識と問題意識を生徒の中に育てるという意向が教科書の題材内容の選択に反映されていることが指摘された。

最後に、本研究から高級中学の英語の教科書においてある程度示唆された「中立化」、すなわち国家としての成熟がある程度はみられるかという問題である。これを判断するには、教科書が実際にどのように扱われているかを含めた実態調査を行い、慎重な判断が必要であることは言うまでもない。

### 第3節 台湾の英語教科書における指導法と培う力

#### —「社会的題材内容」を例に挙げて—

第6章ではこれまでに、台湾の教科書で扱われている題材内容の中でも、「政治・社会的題材」に焦点を当て考察してきた。教科書の各課の基本的な構成は、題材内容に関係なく一定の構成でなされている。第3節では、第5章第2節「文学教材が培う学力」で確認をした、文学教材がいかに指導され、どのような学力が培われているかを分析したのと同様に、「政治・社会的な題材」がどのように指導されているかを含め調査分析する。

前述のように、台湾では2005年「暫行綱要」、そして、2008年「課程綱要」では論理的思考力の養成を重視している。これについては現在の日本でも同様で、現行の高等学校の英語リーディング指導では、英文テキストの意味・内容理解のみならず、テキストの論理的展開を読み取って次を推測させたり、主題を理解させたり、さらには、テキストの事実や内容についての生徒自身の考えや意見を生徒の経験と結び付けて考えさせ、述べさせる指導がこれまで以上に注目されている。それはこれらの発問が、生徒の思考力・判断力、そして表現力を育て、英語運用能力を実際に使えるための助けとなることが明らかになってきており(Chamot, 2009; Wiggins & McTighe, 2005)、さらには、英語スキルを活用して主体的に課題を解決することは、グローバル社会に対応する英語力養成の一つとして極めて重要な課題(文部科学省, 2013; 2014)といえるからである。

そこで本節では、台湾の高校英語教科書のリーディング・パート(本文)における発問とタスク(活動)の内容を調査・分析し、教科書全体としてどのような指導法を用い、論理・批判力、表現力、創造力を培うことを試みているかを、思考力を伸長するリーディング活動という観点から計量的・質的に考察する。次に具体的な例として、台湾の英語教科書で多く扱われている社会問題、とりわけ「環境保全問題」(第6章第2節)がどのような活動を通して指導されているかを質的に考察する。それを日本の高校英語教科書における同様の先

行研究と比較し、教科書においてはどのような発問とタスクが必要となるかを考察すること、日本の英語教育において応用できる点を明らかにすることを試みる。

## 1. 思考力を育成する「発問」

言語習得段階における思考活動として、読解を基にした思考に働きかける「発問」の重要性が指摘されてきている (Been, 1975; 深澤, 2010; 田中・島田・紺渡, 2011)。まず、読解力発問の分類についての先行研究をみていくと、バレット (T. C. Barrett) の「読解タキソノミー (Barrett's taxonomy of reading comprehension)」(Barrett, 1967; Barrett, 1972; Barrett & Smith, 1974) にさかのぼる。このタキソノミーは 1960 年代後半に提案されて以来、当時アメリカで最も参照された「読解タキソノミー」であるといわれている (Pearson & Johnson, 1978)。バレットはこのタキソノミーの作成段階でブルーム (Bloom, Engelhart, Furst, Hill, & Krathwohl, 1956) のタキソノミーから多くを参照していることもまた注目できる (Pearson, 2009)。バレットは「読みの理解」のカテゴリーを示すに過ぎなかった 1967 年版を、1972 年および 1974 年には各カテゴリーに含まれる活動を明確化した (八田, 2014)。これには (a) 文字通りの認知あるいは再生 (Literal recognition or recall) (b) 推論 (Inference) (c) 評価 (Evaluation) (d) 批評 (Appreciation) がある。

続いて Been (1975) は、読解発問を「事実発問」、「推論発問」、「評価発問」の 3 つのタイプに分けた。まず、「事実発問」とは、テキストに書かれた情報や事柄を読み取らせる発問、次の「推論発問」とは、テキストには書かれていない事柄や内容をテキスト情報と読者の背景知識から推測させる発問とした。そして、「評価発問」とは、テキストに書かれた情報や事柄に対する読者の考えなどを促す発問とした。「事実発問」は読解の基本であることは言うまでもないが、「推論発問」と「評価発問」は、生徒から異なる解釈や考え方を引き出す特徴があり、学習者にとっての認知レベルも高次のものとなり、アウトプットの表現力を育てる面でも重要な発問といわれている (田中・島田・紺渡, 2011)。

日本における英語の読解発問についての先行研究では、まず深澤 (2010) の研究が挙げられよう。これは、平成 19, 20 年版の文部科学省検定済高校英語リーディング教科書 5 種を、タイプ 1「文字通りの理解を求める発問」、タイプ 2「要約や統合により再構成・再解釈を求める発問」、タイプ 3「推論を求める発問」、タイプ 4「評価を求める発問」、タイプ 5「個人的な反応を求める発問」の 5 つのタイプの読解発問に分け、教科書の発問を分析したものである。この結果、タイプ 1 の文字通りの理解を求める問題数の平均が全体の約半数 (50.6%) を占め、推論を求める発問 (タイプ 3) の平均は 10%、評価を求める発問 (タイプ 4) は認められず、その差が大きいことを指摘している。つまり、テキストの内容確認にとどまる、認知レベルとしては低いものが約半数を占め、現在、求められている思考力の伸長に結びつく認知的負荷の比較的高い「推論発問」や「評価発問」がそれほど多くないことがわかる。しかしながら、個人的な反応を引き出すタイプ 5 の発問は全体の 5 分の 1 弱を示すことが明らかにされている。

また、田中・島田・紺渡（2011）は、リーディング指導における「推論発問」の役割とその有効性を提示しており、発問の3つのタイプの中でもとりわけ「推論発問」はテキストの細部、そして全体を読み取らせ、具体的な理解を促し、異なる角度から繰り返し読ませ、テキストの主題の理解につながる深い読みを促す点で重要であることを述べている。田中・辻（2015）では、高校英語教科書（English Communication I）を使用し、1年間を通して「推論発問」、「評価発問」を活用した英語リーディング指導の実践をした結果、これが生徒の英語での読解力と表現力を育成する可能性があることを指摘している。これらの先行研究からも、教科書の英文テキストについての発問のタイプを認知負荷の高さで分け、そのバランスや構成を見ることで「思考力」伸長へのかかわり方が明らかになってくることが分かる。

## 2. 研究の方法、および分析ツール

### (1) 研究の方法

分析の対象となる発問とタスクについての定義をする。これまでの先行研究の多くは、読解力に焦点が置かれた研究であったことから、英文テキストの内容を使用したタスクは含まれていなかった。しかし、実際の教科書では本文についての発問のみならず、タスクを組み合わせた言語活動が多く使用されている。そこで本研究では、思考力伸長を考える上では、どちらの言語活動も重要であることから読解発問と同様にタスクも調査の対象とした。

具体的には、台湾の高校英語教科書の発問・タスクの認知負荷の高さの分析し、その結果を日本の高校英語教科書（English Communication I,II）で行われた同様の先行研究（鈴木・河野・平井,2017）の結果と比較・分析する。同時に、数値だけでは十分に理解できない質的部分については、台湾、日本の教科書で同様のトピック（テーマ）を扱った課を取り上げ、それぞれの課の構成と発問とタスクを検討していく。

### (2) 教科書分析ツール：改訂版タキソノミー

本章の教科書分析は、「思考力」育成のための発問・タスクが含まれているかを分析するという観点から、学習活動の認知的負荷（cognitive demand）を分類、評価する尺度として、改訂版ブルームのタキソノミー（以降、改訂版タキソノミーと記す）（Anderson & Krathwohl, 2001）を使用した。これはブルーム（Bloom, Engelhart, Furst, Hill, & Krathwohl, 1956）のタキソノミーをアンダーソンらが改訂したものであり、CLIL や国際バカロレアなどのプログラムの理論的裏付けともなっている。この改訂版タキソノミーは、認知領域を「知識」“the Knowledge Dimension”と「認知的プロセス」“the Cognitive Dimension”という二つの軸からとらえている。とりわけ「認知的プロセス」を「記憶する（Remember）」、「理解する（Understand）」、「応用する（Apply）」、「分析する（Analyze）」、「評価する（Evaluate）」、「創造する（Create）」の6段階に分け、「認知度」の低いものから順に1から6までを設定し、これらを「6 カテゴリー：6 categories」と称している。ここではこれを「レベル」で表記していく（図 6-2 参照）。改訂版タキソノミーではさらにそれぞれ

のサブカテゴリーも示されている。すなわち 1-Remember では認識や記憶, 2 の Understand の段階は特に詳しく, 解釈, 例証, 分類, 要約, 推論, 比較, 説明の 7 項目に分かれており, 3 の Apply は実行, 実施, 4 の Analyze は差別化, 構造化, 起因, 5 の Evaluate は点検, 批評, 6 の Create は仮説化, 計画, 制作という細部の活動が含まれている。以上のことから, 高度な認知活動を伴う学習は, このタキソノミーでは高いレベルの活動と位置付けられる。

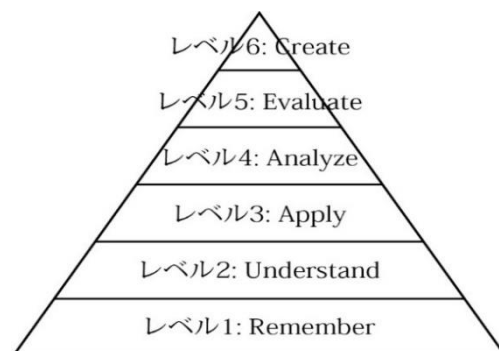


図 6-2: タキソノミーの 6 カテゴリー, Wilson (2016) の図を参照して作成

これを前述の Been の三つの読解力の発問との対応関係をみると, おおよそではあるがその分類の内容から Been の「事実発問」が改訂版タキソノミーのレベル 1「記憶する」にあたり, 「推論問題」はレベル 2「理解する」からレベル 3 の「応用する」に, そして「評価問題」はレベル 4「分析する」からレベル 5「評価する」に対応すると考えられる。なお, 改訂版タキソノミーは読解力の基準ではなく, 学習活動, タスク全体の認知的負荷の高さを 6 段階に分けたものである。一方, Been の 3 つの発問は読解力のタイプであるので, タキソノミーのレベル 6「創造する」は Been の 3 つのタイプの発問の 3 側面内で対応するものはない。本研究では, 読解力ばかりではなく, タスクも調査の対象とし, 思考力の関わりにより焦点を充てることから, この改訂版タキソノミーを使用することにした。

### 3. 台湾の高校英語教科書のリーディング活動の分析

#### (1) 調査教科書と分析範囲

台湾の 2008 年に公布された「普通高級中学課程綱要」に伴い改編された高等学校普通科英語教科書の主要なものは 5 種類あり, その中でも最も採択率の高い教科書が *Far East English Readers*, *San Min English Readers*, そして *Lung Teng English Readers* の 3 種のものである。本研究では, *Far East English Readers (FEER)* の Book 1, 2, 3, 4 の 4 巻 と *San Min English Readers (SMER)* の Book 1, 2, 3, 4 の各 4 巻の 2 シリーズの教科書を計 8 巻使用した。Book 1, 2 は高校 1 年生用であり, Book 3, 4 は 2 年生用のものである (表 6-7 参照)。今回は日本の先行研究に合わせ, 高校 1, 2 年生の教科書を使用した。

表 6-7：調査教科書と課数

教科書	出版社	出版年	課数
<i>Far East English Readers 1</i>	遠東図書公司印行	2011	12
<i>Far East English Readers 2</i>	遠東図書公司印行	2012	12
<i>Far East English Readers 3</i>	遠東図書公司印行	2012	12
<i>Far East English Readers 4</i>	遠東図書公司印行	2013	12
<i>San Min English Readers 1</i>	三民書局	2011	12
<i>San Min English Readers 2</i>	三民書局	2011	12
<i>San Min English Readers 3</i>	三民書局	2012	12
<i>San Min English Readers 4</i>	三民書局	2013	12
合計		8 巻	96 課

台湾の教科書の構成について簡単に記す。教科書の「編纂大意」には「Communicative approach と Content-based instruction (CBI) を基本とする」と明記されている。CBI とは内容重視の教授法をいい、この用語はアメリカで主に使われているが、ヨーロッパで言う CLIL 授業とほぼ一致する（渡部他，2011）。すなわち、外国語である英語を用いて教科の内容を学習することで、言語と内容を同時に学ぶものである。したがって、教科書の題材は多岐におよび、1 課ごとのトピックが社会科学、自然科学、産業、芸術、文学など各種の題材を扱い、新しい情報の提供や問題提起型の文章となっている。すべての指示語は英語で書かれている。リーディング・パッセージ（本文）の語数は 2 社の教科書ともに 420 語から 590 語で大きな差はなく、冊子ナンバーと学年が進むにつれて語彙数が増加していく傾向にあった。これは 2008 年「普通高級中学必修科目〔英文〕課程綱要」に準拠しているものである（第 3 章第 8 節参照）。

さらにそれぞれの教科書の構成を検討すると、「導入」、「本文」、「本文のまとめ」、「発展」という 4 つの段階に分かれている。まず、本文に入る前の「導入」段階では、その課のトピックに関する学習者の知識やこれまでの経験を問うものなど、生徒の学習への興味を喚起する問いが用意されている。次は「本文」理解の段階で、本文の内容についての部分的あるいは全体に関する発問が用意されている。次は「本文のまとめ」の段階で、本文全体を読み終わった後、内容のサマリーを作成するものや、内容に関わる学習者の理解を整理するために事柄や関わる問題について、ペアでディスカッションするなどの活動が用意されている。そして最後は「発展」の段階で、内容と関わる学習者の既修得事項や背景知識を利用した表現活動や、内容をさらに発展させた補足情報や読み物を使用したペア・ワークや問題解決型の活動が共通して使用されている。本調査では、タキシノミーによる認知度の分類が、「導入」、「本文」、「本文のまとめ」そして「発展」の各段階によってどのような配置になっているかを知るために、それぞれの段階に分けた調査を行った。

## (2) 分析方法

前述 (2. (2)) のように、教科書の各課の「本文」に対しての発問とタスクを改訂版タキソノミー、すなわち 1-Remember, 2-Understand, 3-Apply, 4-Analyze, 5-Evaluate, 6-Create の 6 段階のフレームワークを使用し認知度の分類を行った。例えば本文に関して、書かれている内容から事実を確認する発問はレベル 1-Remember に分類され、本文の主題や筆者のメッセージを推察したり、本文の内容を要約したりする活動はレベル 2-Understand となる。発問とタスクは区別せずに数えることとした。なお、本研究では、本文の読みの深さに焦点を置くため、調査の対象としたのは本文に対する読解問題、そして本文に関するタスクである。本文に関わらない文法問題やコラム、発音に関する問題、付録などは分析対象外とした。

分析の手順としては、まず、教科書別に各課の本文についての発問とタスクを、「導入」、「本文」、「本文のまとめ」そして「発展」の別に拾い、それらをタキソノミーによって 6 つのレベルに分けていき、エクセルファイルを使用して表にまとめた。分析上のコメントがある場合は各発問、タスクごとに書き入れた。このエクセルファイルからタキソノミーの 4 段階の構成ごとの集計やレベル別分布などを算出し、コメントは質的分析に使用した。

次に、各教科書の各課の 4 段階の構成—「導入」、「本文」、「本文のまとめ」、「発展」の別に、レベルごとの発問・タスク数を集計し、各教科書の問題数の違いを考慮してその割合の比較をした (図 6-2, 6-4 参照)。最終的には教科書 1 巻ごとのレベル別の集計をおこなった (表 6-8 参照)。このとき、*FEER* のものは 4 巻とも 1 巻の問題総数が 250 問程度であるが、*SMER* のほうは 110 問程度であるので、教科書間の発問・タスクの「レベル」の違いを概観するため、各教科書のタキソノミー・レベル別発問・タスク数の合計を出し、レベル別問題数の割合を比較した (図 6-3, 6-5 参照)。

## 4. 結果と考察

### (1) 台湾の高校英語教科書 2 シリーズ

認知負荷の高さを教科書別に測った結果は以下ようになる (表 6-8, 図 6-3, 6-5 参照)。割合的にはレベル 1 が *FEER* では約半数を占め、*SMER* でも 4 割から 4.5 割を占める。すなわち、テキストの内容を「事実問題」によって確認するものが重視されていることが分かる。レベル 2 では *FEER* と *SMER* とともに 2 割程度を占めており、テキストの理解のみならず、解釈、推論、要約などの活動が用いられている。しかしながら、レベル 3 も *FEER* では 1 割から 2 割、*SMER* では 2 割から 3 割を占め、レベル 2 と同量かそれ以上であり、自分の経験を参照して考えたり、別のケースに応用してみたりという活動が含まれている。とりわけ *SMER* はレベル 3 の全体に占める割合が高い。一方、*FEER* はレベル 4, レベル 6 の割合が若干高いのが特徴で、テキストで扱っている事例の原因などを補足資料からさらに考えたり、解釈したものから新しいものを創造したりする活動がみられる。また、レベル 5, そしてレベル 6 も若干ながら 2 シリーズともに扱われており、テキストにある事

例を評価するなどの活動がみられる。

学年別にみると、どちらの教科書会社のものにも学年によって大きな違いがあるわけではない。しかしながら、学年が上がるとレベル 1, 2 よりレベル 3 以上の割合が高くなっており、認知レベルの高い発問、タスクが若干ずつではあるが全体的に増加していることが指摘できる。

次に 4 段階の構成（「導入」、「本文」、「本文のまとめ」、「発展」）別に結果を見ていくと（図 6-3, 6-5 参照）、以下ようになる。まず「導入」では、*FEER* は、その課のトピックに関する背景知識を問う問題が設定されているため、レベル 1 が多い。一方、*SMER* では、これに加えて、これから学習するテキストに関する発問を、生徒のこれまでの経験を踏まえて尋ねるものなどが先に用意されており、このためレベル 3 以上のものが多くなっている。

「本文」の内容理解問題では、*FEER* と *SMER* を総合するとレベル 1, 2 が大半を占める。テキストに書かれた内容を事実問題によって確認することは読解問題の基礎であることは言うまでもない。「本文のまとめ」ではレベル 3, 4, の発問・タスクが比較的多く使われ、トピックに関しての自分の経験や意見をペア・ワークでディスカッションしたり、補足情報をもとに同様の問題を考えたりという活動が組み込まれている。「発展」活動ではレベル 3 以上、とりわけ 5, 6 など比較的高いレベルのタスクが設定されている。このように、「まとめ」から「発展」活動へ段階を追ってレベル 2 後半からレベル 3, 4 の発問・タスク（解釈・分析・再構築など）が取り入れられている。「本文のまとめ」の段階では、レベル 1 から 6 までのどれかが入っていることも特徴である。

4 段階構成別をさらに学年別にみると、「導入」においては、1 年生ではレベル 1 が大半を占めていたものが、2 年生では 3 割程度に減り、代わってレベル 2 と 3 が 6 割を占めている。このように、学習者の背景知識のみならず、最初にその課のトピックに関する問題（環境問題など）の原因や解決策を自分の経験から考えさせる問題が増えている。「本文」では両学年ともに事実問題によって内容を確認するスタンスで、認知レベルの割合がほとんど変わらないのが注目できる。「本文のまとめ」も学年によっての明確な差は認められない。若干レベル 1, 2 が減少していることが分かる程度である。「発展」では、明らかに 1 年生に比べ 2 年生のほうがレベル 4 の割合が増え、補足情報や読み物によってさらに考えを深める活動が多くなっている。

以上のように、台湾の英語教科書のリーディング・パート（本文）を認知レベルのフレームワークで分類すると、教科書会社によって多少の差は認められるが以下のことが明らかとなった。1) テキストの事実問題を重視しつつも、「導入」では解釈、統合、応用（レベル 2, 3）の活動が、「本文のまとめ」では差別化、構造化などの分析活動（レベル 4）を扱っており、「発展」では評価や仮説を立てたり創造したりする活動（レベル 5, 6）も含まれる。2) 「導入」、「本文」、「本文のまとめ」、「発展」の 4 段階が進むにつれて、認知レベルが高い問題が増えてくる。3) 学年が上がると認知レベルの高い問題が「導入」、「発展」に顕著にみられる。



表 6-8 台湾高等学校英語教科書

発問とタスクのレベル別課数（高校 1 年生用）（教科書間の比較および学年別比較）（高校 2 年生用）

教科 書 レベル	教科書間の比較					教科 書 レベル	教科書間の比較				
	FEER I	FEER II	SMER I	SMER II	全体		FEER III	FEER IV	SMER III	SMER IV	全体
Level 1	141	135	44	46	366	Level 1	129	129	40	44	342
Level 2	49	45	24	26	144	Level 2	47	35	23	20	125
Level 3	30	27	23	28	108	Level 3	40	31	32	24	127
Level 4	27	21	13	6	67	Level 4	30	30	8	14	82
Level 5	1	9	0	0	10	Level 5	0	18	2	3	23
Level 6	9	5	4	2	20	Level 6	8	9	3	3	23
合計	257	242	108	108	715	合計	254	252	108	108	722

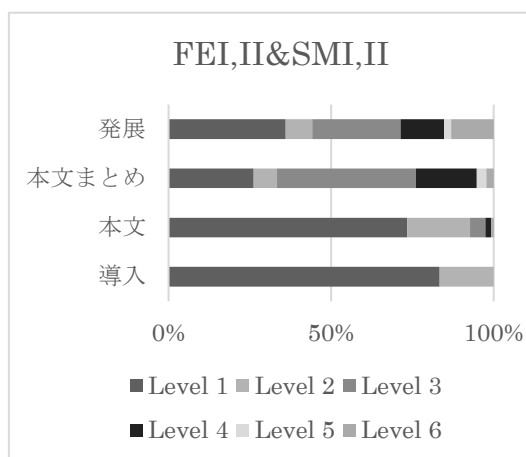


図 6-3: 台湾高等学校英語教科書  
発問とタスクのレベル別割合  
(4 段階別平均) 高校 1 年生用

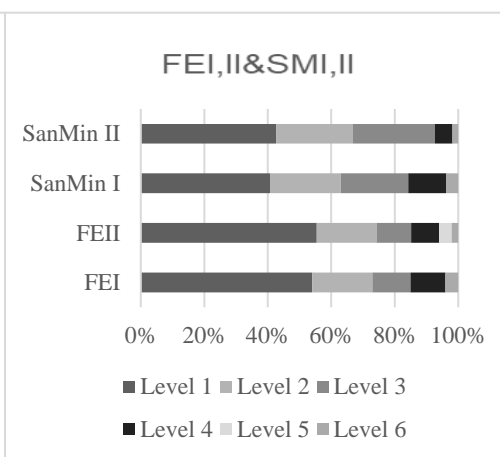


図 6-4: 台湾高等学校英語教科書  
発問とタスクのレベル別割合  
(教科書間の比較) 高校 1 年生用

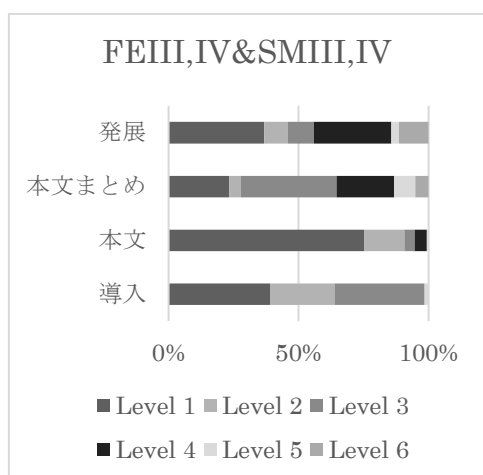


図 6-5: 台湾高等学校英語教科書  
発問とタスクのレベル別割合  
(4 段階別平均) 高校 2 年生用

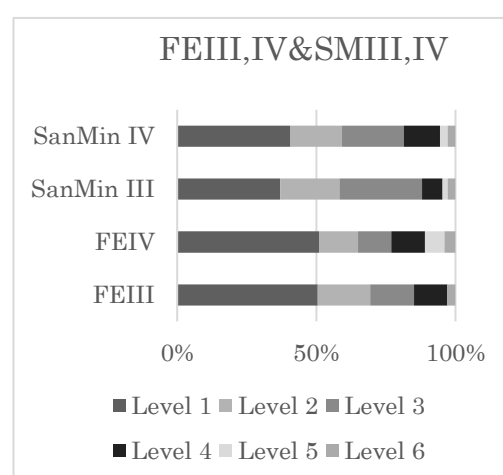


図 6-6: 台湾高等学校英語教科書  
発問とタスクのレベル別割合  
(教科書間比較) 高校 2 年生用

## (2) 日本の高校英語検定教科書（2017年現在）における先行研究との比較

台湾の教科書の特徴に鑑みると、日本の教科書における同様の先行研究と比較することは有益であろう。研究そのものを比較する前に、台湾と日本の高校英語教科書と英語学習時間を具体的に比較してみる（表 6-9 参照）。現行のものは 2018 年に改訂されたものに準拠しているが、これはそれ以前の 2017 年現在のものである。本研究で使用する日本の教科書における先行研究が 2017 年現在のものであることがらそれに準じた比較になる。

台湾の教科書については、前述した採択率の高い 2 社の教科書の平均を使用した。台湾の教科書は 1 年間で前期後期 1 巻ずつ、年間 2 巻の教科書を使用する。それぞれ 12 課で、総ページ数は約 280 ページの教科書である。一方、日本の高校英語教科書については先行研究（鈴木・河野・平井, 2017）で用いられた中・上級レベルの採択率の高い 5 社の教科書の平均を使用した。高校 1 年間の基本となる教科書の使用例は「コミュニケーション英語 I」と「英語表現 I」各 1 巻の教科書計 2 巻である。

対象教科書の「コミュニケーション英語 I, II」は約 10 課で、総ページ数の平均は約 175 ページであり、「英語表現 I」は約 15 - 20 課で、総ページ数の平均は約 120 ページの教科書である（2017 年現在のものである）。台湾と日本の学習時間には大差がないが、台湾の教科書の 1 年間に使用する教科書 2 巻の総ページ数は日本のものの合計の約 1.5 倍である。リーディング・パッセージ（本文）そのものの語数を比較すると台湾のもののほうが日本より少なく、短いものになっており、したがって、発問・タスク、語彙説明、補足リーディングなどを含めた活動が日本より多く設けられている。台湾、日本ともに学年が進むにつれて本文の語数は増加する傾向にある。

表 6-9：台湾と日本の高校英語教科書（対象教科書）および学習時間の比較（2017 現在）

	学習時間	教科書（対象教科書）の 1 巻のページ数と使用巻数			
台湾	4 - 6 時間/週 (実質平均)	1 年間の使用巻数	2 巻	560 ページ	(24 課)
		前期	1 巻	平均約 280 ページ	1 課 約 20-22 ページ×12 課
		後期	1 巻	平均約 280 ページ	1 課 約 20-22 ページ×12 課
		1 課リーディング・パッセージ平均語数約 420-590 語)			
日本	4 - 6 時間/週 (実質平均)	1 年間の使用巻数	2 巻	「コミュニケーション英語」と「英語表現」	
				「コミュニケーション英語 I, II」	平均約 175 ページ 1 課約 10-13 ページ×10 課
				「英語表現 I」	平均約 120 ページ 1 課約 4 - 6 ページ×15-20 課
		1 課 リーディング・パッセージ平均語数約 580-700 語			

日本の高校 1, 2 年生用の英語の教科書である *English Communication I, II* について、リーディング・パート（本文）に関する発問とタスクを改訂版のタキソノミーを分析ツールとして使用し、認知レベル 6 段階に分類した先行研究がある（鈴木・河野・平井, 2017）。

ここで使用された教科書は、調査時に出版されていた中・上級レベルの教科書のなかで採択率が高いもの 5 社のシリーズである。

結果を見ると、どの教科書会社においてもレベル 1, 2 までの発問・タスクが大半を占めていることが明らかである（図 6-8, 6-10 参照）。とりわけ B 社と C 社は全体的に似た傾向を示し、レベル 1, 2 を中心にした発問となっている。レベル 3 以上を比較的多くを扱っているものは A 社で、E 社と D 社がそれに続いている。全体的にレベル 3, 4 の占める割合が低いことが認められた。*English Communication I* と II を比較してみると、高校 1, 2 年生間で認知レベルが若干でも高くなっているという台湾のような傾向は見られず、全体的に *English Communication I* と比較して、II のほうがレベル 2 以上の割合が低くなる。読解力の認知レベルという点においては、レベルが逆戻りしたような印象を受ける。これは、本文が社会問題や科学に関するもの、そして、抽象的問題などを扱うようになり、内容自体の難易度が上がったために発問やタスクがむしろ単純になったと考えられる（鈴木・河野・平井, 2017）。

4 段階の構成別にみていくと、どの段階においてもレベル 1, 2 が共通して多く、台湾の教科書のように、段階によってのすみわけがあることは認められなかった（図 6-7, 6-9 参照）。また、段階別にみた *English Communication I* と II の間の差についても、台湾の教科書に見られたようなそれぞれの段階において若干でも認知度が上がっているというような変化は認められず、「導入」、「本文」、「発展」においてはレベル 1 の割合が増加し、むしろ認知レベルは低くなっている傾向が認められた。しかし、「本文のまとめ」についてはレベル 1 の割合が減少し、代わってレベル 2 以上が増えていた。

以上のように、日本の高校 1, 2 年の英語教科書 *English Communication I, II* では、レベル 2 までの発問・タスクが大半を占めるが、発展活動の 2 割にレベル 3 以上のタスクが設定されている。しかし、「本文のまとめ」から発展活動への橋渡しとなるようなレベル 2 後半（解釈・分析・再構築など）の発問・タスクがないままに、「発展」では自分でインターネットから調べたことをシェアし、評価しあうディスカッション（レベル 3～5）や自分の考えを作文するような活動（レベル 5, 6）が取り入れられていた。この場合、その課のトピックに関して、「他の事例を自分で調べて発表してみよう」という指示のみがあり、その具体的な手だてや英語表現の補助は示されていないものが見られた（鈴木・河野・平井 2017）。

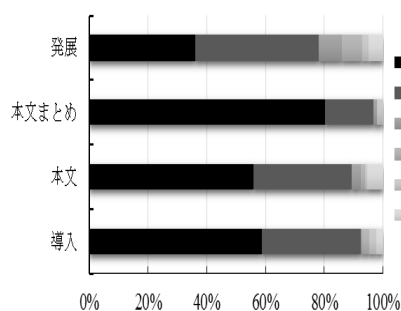


図 6-7 発問とタスクのレベル別割合：4 段階別平均  
*English Communication I*

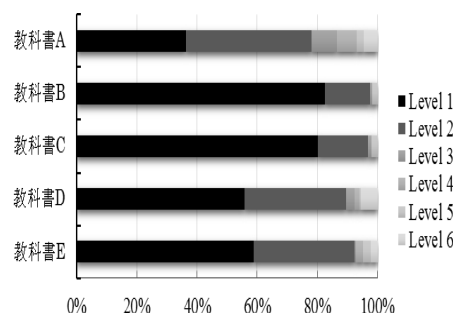


図 6-8 発問とタスクのレベル別割合：教科書間の比較  
*English Communication I*

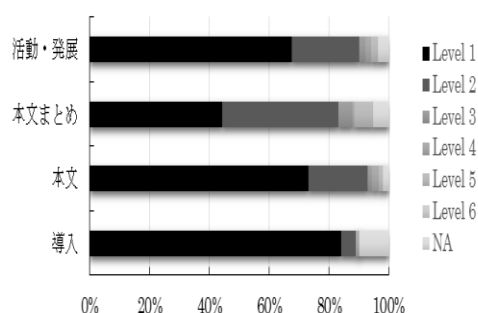


図 6-9 発問とタスクのレベル別割合：  
4 段階別平均  
*English Communication II*

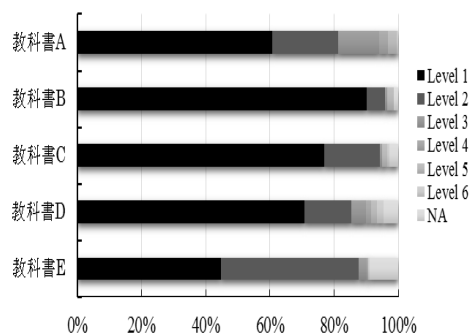


図 6-10 発問とタスクのレベル別割合：  
教科書間の比較  
*English Communication II*

\*図 6-7～6-10：日本の高校英語教科書：発問とタスクのレベル別割合より引用

(鈴木・河野・平井 2017)

改訂版タキソノミーによる台湾の教科書と日本の教科書分析結果を比較し、その特徴をまとめると以下ようになる。1) 台湾、日本ともに発問・タスクのレベルは 1, 2 を中心にしているが、台湾では、それ以上のレベル、とりわけレベル 3, 4 の発問・タスクが比較的多く設定されている。2) 台湾の教科書では、学年上がると「導入」、「発展」においてレベル 3 以上が増える傾向があったが、日本では学年が上がるとむしろ全体的に認知レベルが下がる傾向がみられた。

### (3) 台湾の高校英語教科書における「発問」とタスクの質的分析—社会的題材から

これまで、台湾の教科書のリーディング・パート（本文）における発問とタスクについての量的な分析を行ってきたが、数値だけでは明らかにならない部分を探るために質的な考察が必要であろう。そこで、台湾の教科書の 1 課の構成を見ることから発問やタスクがどのように配置されているかを調査する。

まず、台湾の教科書の 1 課の構成をまとめ、どのように本文にかかわる発問とタスクが設置されているかをまとめると表 6-10 のようになる。ここでは *FEER* を取り上げた。「導入」では、トピックについて身近な問題から考える発問、または、その課のトピックに関する情報提供のあるタスクや発問が見られる。続く「本文」では、“Critical Thinking”と題された本文の内容に関して自分の意見を聞いたり、問題解決を求めたりというレベル 3 以上になる発問が用意されている。その他は、“Comprehension”で内容やメッセージを尋ねる内容確認がある。「本文のまとめ」では、まず、パラグラフ構成に着目した形で要約に関する発問が穴埋め形式で用意されている。続いて、“Thinking Zone”では、内容に関する新しい情報を与えながら、賛成、反対の意見を取り入れ、生徒自身の考えを求める発問が用意されている。次の「発展」では、タスクの形をとるものが多く、新しい情報を交えながら、トピックについてペアやグループで論ずることを促す工夫が見られる。「発展B」では、この課のトピックに関連した補足の読み物がある。これは 200 語から 300 語程度のもので、発問としては、簡単な内容確認問題の後、比較的認知レベルの高い発問が用意されている。

表 6-10：台湾の高校英語教科書の 1 課の構成（例）

テーマ（例）：水の循環と水問題		
目的	活動名	問題形式・内容
「導入」	Ready to Go	トピックと生徒の背景知識を結び付ける TF Questions) 5 問
本文	Reading	CBI の観点で情報を与えて問題提起をする形式 で書かれた文章が多く用いられている
「本文」 文脈の構築	Critical Thinking	本文に関連した生徒の意見を聞く問題
「本文」内容理解	Comprehension Check	本文の主題、内容についての選択問題
「本文のまとめ」	Reader's Compass	パラグラフ構成に従って本文の要旨を作成する
	Thinking Zone	本文の内容について意見を述べる問題
「発展」	Listening	内容に関わるリスニング
「発展B」	Activity Time	内容と生徒の調査結果を結び付けて考える活動
	Reading Plus	テーマに関連した新たな英文(200-300 語)
	Comprehension Check	英文の主題、内容についての選択問題
	Thinking More	英文に関連した調査結果、生徒の意見を聞く問題

台湾の教科書に見られる「導入」、「本文」、「本文のまとめ」、「発展」、「発展B」段階の発問例を検討する。ここでは、前述の調査に用いた *FEER* を例に上げる。政治・社会的な問題としては、第 6 章第 2 節でも明らかとなった台湾の教科書の中で数多く取り上げられている「環境保護問題」を取り上げる。高校 1 年生で扱われている「水の循環と水問題」がトピックの課の場合、本文（460 語程度）では、地球における水の発生と循環、そしてその役割について説明されている。「導入」では、どうして水が発生し、どのように循環するかの図が描かれ、適宜“condensation”, “precipitation”, “transpiration”, “evaporation”等の用

語が書かれている。同時に、現在の生徒たちの水に対する科学的な知識を尋ねる T F 問題が用意されており、例えば、“Much more fresh water is stored on the earth’s surface than underground.”や “The earth is an open system that gets extra matter from everywhere.”などがある。さらに、環境問題に対する生徒自身の意識を問う 5 つの項目があり、自分が “water friendly”かどうかを確認する発問が設定されている。以上のように、「導入」では水に対する用語を習得し、同時にテーマに関する情報を身近なものとして生徒たちに与えられる工夫が見られる。

「本文」の段階では、内容理解問題 (T/F Questions)、そして内容の主題やタイトルをつけるなどの全体的な発問がある。読解問題はその大半はレベル 1 か 2 であるが、各課に 1 題ずつ “Critical Thinking” というコーナーが用意されており、本文の内容についての自分の意見を求める発問がある。ここでは、「あなたは人間にとって水は重要だと思いますか、それはなぜですか」という問いが用意されている。この問いの答えは本文テキストをよく読めば得られるもので、この課に限らず、“Critical Thinking”については本文中にヒントがある場合が多い。

「本文のまとめ」の段階では、まず、要旨作成 (空所補充形式) があり、ここではパラグラフ・リーディングの指導をしながら、本文中から文言を見つけ空所に充てる問題で認知レベルは 1 になる。次に設定された “Thinking Zone” では、水不足に対しての具体的な解決策を記述した 5 文について、「自分が賛成か反対かを判断しよう」という発問がある。これらは本文にはない、新しい情報である。生徒は本文と問題点を示した新たな記述を読むことで、内容および英語表現が与えられ、無理なくディスカッションができるように工夫されている。ここでは、認知レベルが 3, 4 の活動が多く設定されている。

「発展」では、「水問題」から「エネルギー問題」にテーマが広がり、「自家用車を用いず、公共の交通機関を利用する」、「洗濯を毎日する」などのエネルギーの使用状況に関する 20 項目について自分で確認をしたのち、それらについて相手にインタビューするペア・ワークがある。結果「誰が最も “energy conscious” なのかをグループディスカッションしよう」という発問に続いている。活動自体の難易度は決して高くなく、具体的で生徒が取り組みやすい。認知レベルは 4, 5, 6 が設定されている。

「発展 B」の段階では、同テーマの新たな英文 (300 語程度) を読後、「動物園と動物の権利についての具体的な質問に対して自分の意見を書く」という課題がある。環境問題についての討論をさらに広げたものであろうが、多少内容に飛躍があるかもしれない。しかしながら、「発展」までは複数の角度からの情報をもとにしながら、これまでの足場掛けとなる発問・活動を活用し、さらに深い思考へと進む構成になっているのが特徴である。

付け加えると、本教科書が出版されたのは 10 年前の 2021 年である。環境問題への意識の高さがうかがえる。

#### (4) 日本の高校英語教科書で同様なトピックを扱う課との比較

ここで日本の英語教科書で同様のトピックが用いられた課を取り上げ、この課の構成を検討し、どのように本文にかかわる発問とタスクが設置されているかを上記の台湾のものと比較検討する。

「水問題」については日本の教科書でもしばしば取り上げられているが、教科書は前述した先行研究で用いた 5 社のうち「水問題」を扱っている 1 社のものを使用した。(4. (3)) で取り上げた台湾の教科書は高校 1 年生の後期のものであったが、この日本の教科書は、高校 2 年生用の **English Communication II** の後半部に設定されていた。したがって、本文の内容や活動のレベルに差があることはあらかじめ考慮しなければならない。

台湾の教科書と同様に、この教科書の 1 課の構成をまとめ、どのように本文にかかわる発問とタスクが設置されているかをまとめると表 6-11 のようになる。1 課の構成は日本と台湾はほぼ同じものとなっている。「導入」では、トピックについて身近な問題から考える発問があり、この課で扱う新出単語を推量させる問題のあと、テーマに関する情報を写真や図表・マップを用いて提供している。本文の長さは 920 語程度に及ぶ長文で、**English Communication II** の後半部であることを考慮してもやや日本の検定教科書の平均を上回るものである。内容の難易度も高く、多くの情報が盛り込まれている。台湾のものより難易度はかなり高いといえよう。「本文」にあたる発問・活動は見当たらず、「本文のまとめ」として、パラグラフ構成に着目した形で要約する穴埋め形式の問題がある。続いて、「Comprehension」では、内容確認の T/F 問題が 8 問設定されている。次の「発展」では、リスニング問題となっており、「温室効果ガス」についての二人の会話を聞いて内容についての設問に答える選択問題がある。その後、その会話を基にして「温室効果ガス」について **Advantages** と **Disadvantages** を書き出す問題がある。次の「発展 B」では、本文の「水問題」で言及された先進国と発展途上国の間の状況を、再びテーマを「水問題」に戻し、ディベートの指導に発展させ、肯定側と否定側の意見を考えさせる活動となっている。

「導入」は非常に充実しており、とりわけ、後半部で写真や図表によっての情報提供をしているため生徒の興味やテーマに関する理解を深めることができ有益である。また、本文の内容が充実していることからいろいろな発問やタスクなどの活動が期待される。しかしながら、実際に教科書で設定された発問やタスクは数自体も少なく、テキストについての細かな発問はない。「本文のまとめ」では要旨と内容確認をする発問・タスクはあるが、「導入」で与えられた写真やマップと本文の内容を結び付けるような深い理解につながるレベル 2, 3, 4 といった「推量発問」に相当するものが見当たらない。その後、「発展」では、「水問題」を応用する形で「温室効果ガス」についての比較や分析などの活動が用意されている。次に再びテーマは「水問題」に戻り、先の活動を応用させてディベートの指導へと続き、難易度は高いものとなっている。しかし、これらの活動を行うために、その前段階として、テキストの内容を多角的に考えたり、提示されている事実や提案についての生徒自身の考えを引き出したりする発問やタスクが設定されていることがこれらの活動をよりスムーズに

行う鍵となるのではなかろうか。また、本文のテキストは多くの情報が盛り込まれたものではあるが、どうしても着眼点が定まりがちである。別の観点からの情報があればより多角的なタスクが可能であろう。「水問題」を別の国の出来事として捉えており、身近な問題としてとらえるタスクが見受けられないのは少なからず気になる点である。

以上のように、日本、台湾ともに、発問・タスクのパターンとして、内容理解を重視すること、要約をパラグラフ構成から確認するタスクを設けていること、4技能を使いながら活動を進める点が共通している。しかしながら一例ではあるが上述のように、同じ「水」を扱った課でありながら、設定された問題数が台湾に比べて日本は少ない。日本では「発展」で難易度が高いものが設定されているが、その前段階として、テキストの内容を多角的に考え、生徒自身の意見を引き出す発問やタスクが少ないなど、発問・タスクの認知レベルのバランスや構成に違いがあることが明らかとなった。これは先の台湾と日本の教科書における計量的比較の結果と同様のものとなった。

表 6-11: 日本の英語教科書の 1 課の構成例

テーマ (例): 水の循環と水問題		
目的	活動名	問題形式・内容
「導入」	Brainstorming	トピックと生徒の背景知識を結び付ける
	Keyword Checker	本課の新出単語を推量する問題
	Graphic Introduction and Retelling	fresh water の地球全体の割合やその用途などをグラフ・マップなどで説明
本文	Reading	「水問題」が将来にわたって深刻となる理由を述べ、「virtual water」に言及。どのような解決策があるかを提案している
「本文のまとめ」	Comprehension	パラグラフ構成に従って本文の要旨を作成する(語彙を選択肢から選ぶ穴埋め問題)
「本文のまとめ」 内容理解	Comprehension	本文の主題、内容についての選択問題(T/F Questions)
「発展」	Listening Practice	「温室効果ガス」に関わるリスニング
	Communication Activity	「温室効果ガス」にかかわる生徒の意見を促す活動
「発展 B」	Communication Strategy Debate	「水問題」についてのディベート

## 5. 台湾と日本の検定教科書の発問—タスクの特徴と日本の検定教科書への提案

台湾の高等学校の検定教科書には以下の特徴があることが明らかとなった。1) 1 課で読む英文の総量が多く(「本文」は長いわけではない)、発問やタスクの思考レベルがレベル 1 から 6 まで基本的に段階的に上がっている。とりわけレベル 3, 4 の活動の設定が多く、生徒が主体的に考えるプロジェクトへの足場がけがなされている。2) 発問やタスクが生徒の身近な問題から尋ねるものとなっている。3) テーマについて、異なる観点から論じたものを生徒が読めるように、本文以外からの多くの補足情報や関連資料を与える工夫がされている。以上のように、生徒自身の意見(認知負荷が高い)を産出する段階への準備がされ



ているといえよう。とりわけレベル 2 の後半、そしてレベル 3 以上の発問・タスクが多く用意されていることが特徴である。また、このような補足資料は、生徒自身で考え、判断、評価する機会を与えるものであるので、この意味で生徒の自学自習が促せる。

一方、日本の教科書ではリーディング・パッセージ（本文）は非常に吟味された内容の濃いものが多く用意される傾向にある。しかしながら、そのような素材の良いリーディング・パッセージ（本文）に対する発問やタスクの数が少ない傾向にある。また、日本の教科書によくみられる発問のひとつである、「あなたはこの問題をどのように解決しますか。インターネットで調べなさい」というものに答えるには、そもそも教科書の本文だけにすべての角度からの情報を入れることは不可能で、別の観点などから扱った、補足的な情報を与える教材が必要になってくる。本章で使用した教科書の場合は「導入」で各種のグラフやマップを利用し補足情報を提供していたとはいえ、「本文」読後に再度それらを応用した発問やタスクを設定すると、さらに効果的であることはいうまでもない。台湾の教科書では、1 課のページ総数がおよそ日本の約 1.5～2 倍あることからわかるように、これらの情報や補足的観点を 1 巻の教科書の中で提供する工夫がなされている。このため、現場の多くの教員の方が手作りの教材を用意しておられるのが現状である。日本の英語教育における現在の現場の状況や時間配分から判断すると、早急な変革はできないまでも、上記のような一つのリーディング活動を掘り下げて行う授業を、各学期に 1, 2 回程度、取り入れることができれば、思考力・判断力・表現力を育て、英語運用能力を使えるものとして育成することにつながるのではなかろうか。

### まとめにかえて

本節では、台湾の高校英語教科書のリーディング・パート（本文）における発問とタスク（活動）の内容を調査・分析し、教科書全体としてどのような指導法を用い、論理・批判力、表現力、創造力を培うことを試みているかを、思考力を伸長するリーディング活動という観点から計量的・質的に考察した。これによって、台湾の教科書では、文学的題材（第 5 章第 2 節）とともに、社会的題材を扱うものも、教科書では生徒の当事者意識に働きかけるものとなっていることが明らかとなった。そこから批判的なものの見方を養成する構図となっているのである。この当事者意識の重要性のルーツは、これまで論じてきたように（第 6 章第 2 節）、他ならぬ台湾のこれまでの歴史的背景にあることが指摘できる。

さらに、台湾の教科書における以上の調査・分析を、日本の高校英語教科書における同様の先行研究と比較した。結果、台湾と日本のそれぞれの特徴が明瞭となり、教科書における「本文」について、どのような「発問」とタスクが思考力・判断力・創造力を培うために必要なかが明らかとなった。

本研究の結果を一般化するにはさらなる研究が必要なことは言うまでもないが、本節で提示された台湾の教科書の社会的題材内容で扱われている「発問」やタスクに見られる様々な特徴や指導法は一考の価値はあろう。

## 本章の小結

**6章**では、今一つの柱である「政治・社会的題材重視」について分析を進めた。

**1節**では、戒厳令下の教科書として1971年準拠版教科書を複数の主編者と教科書会社のものを取り上げ、台湾の内・外の情勢がとりわけ不安定な1970年代後半から1980年代前半の教科書における政治・社会性がいかに変容しているか、それはどのような要因によるものかを調査分析した。当時の代表的教科書である梁実秋ら主編の「遠東英語教科書」では、欧米中心の異文化理解を基盤とした中立性の高い教材を扱っているものの、その時の国際情勢から極端にアメリカを扱う題材が多いことが特徴であった。一方、国民党の強い支持者でもある顔元叔が編著者である世界書局出版の教科書は、反共、中華文化を扱うもの、抗日のものが扱われていた。どれも強い「政治性」が現れているものがあり、社会系教科の教科書に見られる思想統一を目的とする「国民化」教育が、当時の英語の教科書に現れている顕著な例といえよう。戒厳令解除前までの高校英語の教科書審定は、教科書の編纂形式に限り、内容には触れないものであった。これも以上に述べた教科書による違いを裏付けるものである。

**2節**では戒厳令解除後の教科書題材内容の変化を明らかにすることを試みた。戒厳令解除間近の1983年「課程標準」準拠版教科書からその変化の兆しが出ており、それ以降は台湾の文化、歴史、地理などの題材、そして、環境問題、福祉、人権などを重視した題材が顕著に増加している。中でも中国を扱うものが減り、先住民文化をはじめ台湾についての題材が2008年準拠版に急激に増加する。「本土化」が教科書の題材内容に顕著に表れていることが明らかとなった。

環境問題は数・内容ともに充実し、この傾向は1995年、2008年準拠版に共通するものである。この動向を考慮するに及んで、台湾社会における環境問題に着目した。第二次世界大戦後の急速な産業発展と経済成長の裏側では、産業公害や環境破壊の問題があったが、権威主義体制下では明るみに出せずいた。戒厳令解除を皮切りに反公害運動がピークに達するのである。これらが如実に教科書の題材に反映されている。環境保護運動の拡大は政治的自由の拡大として民主化を後押しし、その後も民主化の過程で環境問題は相互補完的に重要となってくる。1995年準拠版以降、人権、福祉、生命などを重視した題材は一貫して扱われている。以上のように、戒厳令解除後の教科書には「本土化」と同様に「民主化」の影響が如実に現れていることが本研究から明確となった。同時に教科書の中立性や教育の脱政治化が示唆される。これら教科書が準拠している「課程標準（綱要）」における同様の記載から、戒厳令解除後は「課程標準（綱要）」自体が中立性を持っていることが示唆された。

**3節**では、戒厳令解除後の教科書の指導法と培う学力に着目した。1995年準拠版以降の教科書では、環境問題、人権、法治、福祉、生命重視などの「社会的・政治的題材」が扱われている。これらの教材も「文学教材」と同様に、1995年「課程標準」準拠版教科書から

は教授法としては同じ **Task-based** の活動を取り入れ、4 技能統合を主眼としたコミュニケーション力を養成する方式となっている。

そこで、2008 年「課程綱要」準拠版教科書の各課の「本文」に対する発問とタスクをブルーム改訂版タキソノミーによって、認知レベルの分析をした。これにより、具体的にこれらの活動がどのような認知レベルを培うもととなっているのか、どのようなバランスで配置されているかを分析した。事実確認をする基礎的問題の他、分類・推論・比較、それを別の形に応用する、分析する、そして評価する、創造するという課程が順序立てて足場掛けのサポートを入れながら組み入れられていることが明らかとなった。

その裏付けとなる理論的背景は、1980 年代以降のアメリカにおける ESL 教育をベースにした指導法である。さらにこれらの教材は当時者意識をもって自らの問題を考え解決するスタンスになっており、生徒の論理的思考、批判的思考を培う構成となっている。この当事者意識の重要性は、他ならぬ台湾のこれまでの歴史的背景に由来するものである。

最後に、日本の高校英語の検定教科書における同様の先行研究と比較することで、認知力育成の側面から教科書における「発問」とタスクが必要となるかを考察し、日本の英語教育において応用できる点を検討した。

#### 〈注〉

- 1) 2017 年 1 月 3 日～5 日に筆者が行った国立台湾師範大学英語学系の元教授と副教授との聞き取り調査による。事前事後のメールによる質問紙調査でも同様の意見が聞かれた。

## 終章 台湾の英語教科書が示唆するもの

### —「文学性」と「政治・社会性」—

本研究の目的は、教科書研究を中心とした実証的研究を歴史的アプローチと要因分析による総合的な研究を行い、後に「台湾の奇跡」とまで称される経済成長と国際化を成し遂げた戦後台湾の英語教育がいかに形成され変容してきたのか、そこにはどのような要因があるのかを明らかにすることであった。本研究は、戦後から70年間の教科書研究を中心に進め、優れた台湾の英語教育の核心的部分を探求するものであった。台湾は、中国、アメリカ、そして日本という関係する国家との複雑な立ち位置の中で、何を生徒に教え、どのような生きる力を養成しようとしてきたのかを、教科書の題材内容選択と教科書の中で使用されている指導法を分析し明らかにしてきた。ここでは、各章の議論を統合し、戦後台湾の英語教科書と英語教育の変遷を改めて整理し、現在にもたらしたものを確認する。そして現在における台湾の英語教科書の所在を、比較教育学的観点から整理し、研究のまとめとしたい。

### 第1節 英語教科書における題材内容と指導法が意味するもの

本研究で明らかとなったことを、英語教育の在り方について、そして地域研究・比較教育研究の観点からの二つに分けてまとめる。

まず、英語教育の在り方について、教科書の題材内容における文学教材重視の所在についてまとめる。文学教材に関しては、古くは英国の英語教育から始まり、詩を重視する点に関しては、台湾の繁体字も含む漢文化の継承による漢詩を重んじる社会的歴史的な背景はもとより、詩や小説を学ぶことから言葉の美しさを学び、人間性を高めることに重きを置いていたことが明らかになった。続いて戦前戦後の日本、中国からの影響が混在し、さらに70年代からは米国の作品が多く扱われ、歴史的、社会的な様々な要因が多角的に影響していることが確認された。中でも、1980年代までの日本の英語教科書で扱われていた小説・詩における多くの作品が共通していること、転用されていることが示唆された。これらの要因に直接・間接的に関与するのは、教科書編者や「課程標準」および「課程綱要」作成者の教科書編纂における見識であることも明確となった（第2章、第3章参照）。

次にその指導法についてまず重要なのは、文学重視がコミュニケーション重視の英語教育といかなる理由で合致し、文学教材が存続し続けたかということである。1980年代から始まるコミュニケーション重視の英語教育の新しい流れの中においても、台湾はCLTによる、文学教材が総合的な英語力の伸長に不可欠なものであるという理論の裏付けを受けて、文学教材をコミュニケーション育成に反するものとするのではなく、文学教材をあえて使

うことでコミュニケーション力を育成する方向で指導法を開発してきた。台湾に多元的に関わってきた米国の影響は現在まで継続しており、台湾の社会的背景からも米作品が扱われる傾向にある。同時に米国で行われている ESL の指導法や教材なども台湾の教科書の作成に反映していることが確認された（第 5 章第 1 章，第 2 節参照）。

これらの動きは、イギリスから始まる英語教育の新しい流れである CLT の理論から始まり、やがては中国、台湾、日本へ広がるダイナミズムとなったと捉えることができる。中国と日本がコミュニケーション重視の流れの中で、文学教材が減少する中、台湾では文学教材が存続するという、国ごとに違った形で取り入れられ変容してきたのは比較教育学の側面からも興味深い。

歴史的観点からさらに掘り下げると、1994 年の戒厳令解除後に改訂された「国民中小學課程標準」の理念に掲げられている「創造力，論理的思と判断力を啓発し…」の文言の通り，自由と自分で考える力の育成は，これまで戒厳令下における白色テロに代表される大きな犠牲の中でようやく勝ち取った民主主義への強い決意を感じるものである。2008 年準拠版教科書からは，教科書全体が CBI，CLIL の理論に裏付けられており，深い思考に働きかける言語活動を協働学習と組み合わせている。同じ教材を基に段階を追って指導され，これによって実践力養成と「論理的思考」，「文章構成力」，「創造力」を培っていることが確認された。身近な話題から考える「発問」，タスクもその特徴である。そしてこの当事者意識の重要性のルーツは，他ならぬ台湾のこれまでの歴史的背景にあることが指摘された。「課程標準」とそれら準拠版教科書の「編纂大意」の記述からも裏付けられた（第 5 章第 2 章参照）。これが，グローバル社会への対応と繋がって，指導法も発達し，定着していくのである。

次に政治・社会的題材についてまとめたい。政治・社会的題材についても上記のような指導法を用いて，論理的思考力や批判力を育成する教材として用いられている。しかしながら，どの時代も一定の方向性のある題材を扱っている文学教材とは異なり，政治・社会的題材が扱う内容は時代的に異なる。戒厳令下では，英語教科書にもその題材内容および「本文」に「（中華）民族文化」，「三民主義」，「反共」などの理念が入り，「国民化」の影響が見られるものもあった。

戒厳令下の状況として，1971 年準拠版教科書を取り上げ，台湾の内・外の情勢がとりわけ不安定な 1970 年代後半から 1980 年代の教科書における政治性がいかに変動しているか，それはどのような要因によるものかを調査分析した。当時の代表的教科書である梁実秋ら主編の「遠東英語教科書」では，欧米中心の異文化理解を基盤とした中立性の高い教材を扱っているものの，その時の国際情勢から極端にアメリカを扱う題材が多いことが特徴であった。一方，国民党の強い支持者でもある顔元叔が編著者である正中書局出版の教科書は，蒋介石のスピーチに始まり，反共，中華文化を扱うもの，抗日のものが扱われていた。抗日については，中国が主張するいわゆる「南京大虐殺」を巡る 1980 年代の教科書問題も関係している題材もあり，強い「政治性」が現れているものが発見された。これらは社会系教科の教科書に見られる思想統一を目的とする教育が，英語の教科書に現れている顕著な例と

いえるものである。台湾の高校英語の教科書は基本的に審定制である。しかし審定制と言えども、戒厳令解除前までは教科書の編纂形式に限り、内容には触れないものであったこともこれら教科書による違いを裏付けるものである。

一方、戒厳令解除間近の 1983 年「課程標準」準拠版教科書からその変化の兆しが現れ、戒厳令解除以降は台湾の文化、歴史、地理などの題材、そして、環境問題、福祉、人権などを重視した題材が顕著に増加している。中でも中国を扱うものが減り、台湾を扱う題材が姿を見せはじめ、先住民の文化、台湾の伝統的街や都市などの紹介、偉人などの題材が 2008 年準拠版に急激に増加する。以上のように「本土化」、「民主化」が教科書の題材内容に顕著に表れている。

さらに留意すべき点は、1995 年準拠版以降、環境問題についての題材が量・質ともに充実している点である。公害・環境問題の発生とその対策は一国が成熟する上での通過点であろう。台湾の場合は、環境保全運動の拡大が政治的自由の拡大として民主化を後押ししたこととその特徴がある。すなわち、民主化の過程で環境問題は相互補完的に重要視された。これが、続くグローバル社会への対応、地球温暖化問題などと呼応して、現在まで重視されているのである。決して気候変動の対策として突如として育ったものではないことは注目できる。

上記のことを、地域研究的観点に立ち、台湾の教育全体の歴史的観点から英語教育の発展と変容を見ると、以下のことが確認された。まず、「国民化」が英語教科書によって成されていたことが実証された意義は大きい。しかしながら、「国民化」については社会系教科などの教科書とは違い、全てが同じ方向を向いたわけではない。すなわち、英千里や梁実秋に代表されるように、中立性を重んじるものもまた存在した。これは英語の教科書という特性ともいえるもので、教科書編纂者の多くが外国生活を経験していることからの見識などの背景も示唆される。

では、台湾の教育を論ずるにおよび極めて重要なポイントである「量」と「質」の問題についてはどうであろうか。1968 年以降、英語が義務教育の中で台湾の国民に広く学ばれたことは、教育の「量」として他教科と何ら変わりはない。しかし、「質」の面では、社会系教科の教科書のように個人の意見を尊重する機会を失った、暗記一辺倒の授業になったことは、本研究からは示唆されず、むしろ、論理的思考の重視や生徒の意見を聞く設問など、逆の動きがすでに戒厳令下から芽生えていたことが確認された（第 4 章）。これもまた、台湾の教育史を見る上で意味のある検証となるものである。勿論、英語においても暗記は、受験勉強に重点を置いた社会風潮からも、その後も授業の重要な部分となるわけであるし、さらに、教科書が授業中にいかに使用されていたかは、また考慮すべき別の問題であることも確かであろう。しかしながら、教育の基礎となる教科書でこのような動きがすでにあったことは注目できるものである。そして、戒厳令解除後に英語教科書の変容が「民主化」、「本土化（台湾化）」の理念で変容していったことが明らかとなった（第 6 章第 2 節）。

戦後台湾の英語教科書の教材は小説や詩を多く扱い、生徒の人間的豊かさを育て、かつ、

自らの社会への関心と責任を育むように政治・社会的題材を取り入れていることは注目すべき特徴である。文学教材と政治・社会的題材を扱いながら人間教育重視を重んじる「本文」の選択と、それに続く、自分の経験と結びつけ、問題解決を図る発問やタスクの構成、協働学習を通した4技能の統合などの多くの優れた点がある。これらは1995年「課程標準」準拠版教科書以降に顕著にみられる傾向であるが、にわかに最近20年余りで生まれたものではない。各時期の「課程標準（綱要）」が示すように戦後からの長い歴史の中で、社会・文化、政治・経済的な国内外からの情勢を受けた国家政策、戒厳令解除後はそれに市民レベルの影響も加わり育てられ発展してきたものである。同時にそれは多くの優秀な英語教育者たちに担われ、彼らのたゆまぬ努力によってなされたものである。この意味を筆者に気づかせたのは他ならぬ『英氏高中英語』であった。次節では英千里と彼が編纂した『英氏高中英語』の意義とこれがその後の台湾英語教育に与えた影響についてまとめる。

## 第2節 二つの柱の所在と英千里

本研究で扱った戦後台湾の英語教科書における二本の柱である文学教材重視と政治・社会的題材重視の関係性を論じる。教科書の中の二本の柱は別々に存在するわけではない。台湾では教科書編纂には今日に至るまで、編著者・主編者の意向が反映する。そして、この両方の柱の主軸となる部分にかかわる教科書を編纂した人物がいる。本論第4章では英千里編の教科書『英氏高中英語』を取り上げた。英千里は1900年に上海で生まれ、1914年に13歳でヨーロッパ留学し、教育を受けた。英国で学位を取り中国に帰国する。戦後、国民党とともに台湾に移り、国立台湾大学と輔仁大学で優れた人材を育て、後世の基礎となる多くの教科書や辞書を編纂した人物である。

英千里が当時大学で学生へ常に語っていた彼の教育理念は、「学問を深め、徳を磨くこと」であった（第4章参照）。英千里は、哲学・倫理・社会的な問題を内包した題材内容を教科書で扱うことでこれを生徒に伝えたのである。とりわけ多く用いたのが、文学教材と政治的な題材内容であった。1960年代から1980年代の戒厳令解除前までは、英語教科書の中でも教科書によっては「中国」化教育が行われていた。そのような時代背景の中、英千里は教科書の「本文」では事実を伝え、客観性を貫いていた。このような「中立性」は後の教科書の先駆けともいうべきものである。

また、英千里が当時、国立台湾大学の学生に「文学」の講義を通して、単なる暗記ではなく論理的・批判的思考を経験させ、学生に感銘を与えていたことが記録されている。一方、それを自ら編纂した教科書に反映していたのである。2008年「課程綱要」で記載されている「英語教育を通して論理的思考力を育てる」ことを文学教材を通して、権威主義的体制の1960年代に自ら編纂した教科書で実践していたことになる。以上のように、英千里の教育理念と教科書の編纂方式は、台湾英語教科書の現在まで続く礎を作ったといえる。本研究に

より、英千里は、戦後台湾英語教科書の中の主軸である二つの柱を結びつける重要な人物として位置することを示唆したい。台湾の英語教科書の編纂は属人的であり、編著者・主編者の意向が反映されることもまた、その裏付けとなるであろう。

そして、彼らの教えは当時彼らが教鞭を執った国立台湾大学、国立台湾師範大学を中心とした、彼らの教え子たちに着実に受け継がれ、現在へ繋がる。すなわち、「課程綱要」への改訂と教科書の新たな編纂へ続いていくのである。

未曾有の経済成長と国際化を成し遂げた戦後台湾における、英語教育の基盤となる教科書の題材内容は「文学性」という、時代を通して一貫して重視され、取り上げる内容も大きくは変わらないものと、時代によって内容や方向性が変容してきた「政治・社会性」という二つの柱があることが明らかとなった。しかし、どちらの題材にも共通するのは、英語教育を通して生徒の人間的豊かさを育て、かつ、自らの社会への関心と責任を育み、国や世界を愛し、倫理観を重んじる次世代の人間形成への願いがその根底に流れていることである。

これは戦後、台湾に生き、英語教育に携わってきた優れた教育者たちが、自らが家族と離れて生きることを強いられたり、言論や行動の自由と自らの理念の葛藤と闘ったりしながらも、若者たちの教育に尽力し、培ってきたものに他ならない。現在の台湾英語教育の優れた点は、教材や教授法といった技術的側面だけで培われたものではなく、このような台湾の歴史的背景とこれによる教育に向けたより強い目的意識が大きな意味を成すことが判明した。

もともと本研究は英語教育の実践的な側面をアジア周辺諸国から探り、日本に応用する目的から始まった。しかしながら、そのような優れた点の一つ一つの横軸が明確に分離できないのと同様に、縦軸であるそれらが生まれた経緯も決して一つの枠に収まるものではなく、学際的に複数のレベルで繋がっているのである。これらを解明することが他国の英語教育面で優れたものを日本で応用する礎になるのではないか。とりわけその一つの重要なファクターに日本という国自体が関係している台湾においてはなおさらである。これを本研究で解明でき、これによって戦後台湾英語教育を学際的に複数のレベルにまたがる動的分析を通した台湾地域研究と結びつけることができたことで、本研究はある程度の意義が果たせたのではないかと思う。

以上の意味において本研究で明らかとなった台湾の英語教科書の優れた側面を具体的に日本に応用するのは今後の大きな課題である。

### 第3節 台湾の英語教科書から日本の高等学校英語教科書への示唆

本研究により示唆されたことを、ここで章ごとに3点にまとめたい。

まず1点目は、「文学教材」の取り扱いについてである。第3章、第5章第1節で明らかになったのは、教科書で文学教材を取り扱うことがどの時代を通しても多く、詩を多く扱っ



ていることであった。1980年代からのコミュニケーション力養成が主流となった英語教育の中で、教科書においては、文学教材を英語コミュニケーション力と論理的思考力の育成と結びつけた「活動」を用意し、指導されてきたことがとりわけ注目できる。日本の高校英語教科書は、1990年代以降に急速に実用英語へ転換し、これに伴い文学教材が教科書から消えていく。本研究からは、この点の改善を提案できよう。人間性、教養教育としての英語教育の重要性も同時に指摘したい。

次に、「発問」とタスクによる4技能が統合された指導法と「足場掛け(scaffolding)」の工夫である。第5章第2節、そして第6章第3節では、具体的に文学教材と政治・社会的題材を扱った、思考に働きかける「発問」とタスクに見られる特徴を明らかにした。これらの分析を通して、徐々に英語を伝達手段であると同様に思考の手段となるようにするためには、本文の内容理解にとどまらない、推論、評価の発問が必要であり、それを身近な問題から生徒自身に考えさせること、そして多角的な読み物から、原因と結果、比較、仮定、評価をし、自らの問題として解決、創造することの必要さが提示された。それらを、ペア・グループワークで進めること、さらに口頭発表、ライティングで意見をまとめる活動に結びつけることの有効性が示唆された。決して難しい課題が必要なのではなく、生徒に「足場掛け」を用意しながら進めることが重要であることが提示された。

最後は、台湾の教科書では、一課のページ総数がおよそ日本の1.5～2倍あることからわかるように、テーマに関わる情報や補足的観点を一冊の教科書の中で提供する工夫がなされている点である。日本の英語教育における現在の現場の状況や時間配分から判断すると、早急な変革はできないまでも、現在大きな課題となっている、思考力・判断力・表現力を育て、同時に英語運用能力を育成することへの一考とはならないか。

本研究で明らかとなった台湾の教科書の特徴が、そのまま日本の検定教科書編纂に応用できるものではないが、コミュニケーション力重視とはいえ、なお一定の域を超えず、言語スキルに重きを置く現在の日本の検定教科書の今後の可能性として提案するものである。

## 第4節 今後の課題

上記のように明らかになったことがある一方、いまだ確認ができていないことや議論が尽くせなかったことがある。それらは大きく分けて以下の3点となる。

まず1点目は、第3章、そして第4章、そして第5章第1節にあるように、台湾の教科書の題材内容と日本の教科書の題材内容の一致である。これは文学教材で多く見られ、両方に多く採用されている作家、作品も複数あり、台湾の教科書と引用・転載など直接・間接的な関わりの見られる特定の出版社もある。これらの要因分析については、第5章第1節に詳しいが、とりわけ第4章の英千里編『英氏高中英語』と日本の大学書林の英語教科書との影響関係は未解決のままである。これらについては引き続き研究を進める所存である。

次に、本研究では台湾の英語教科書を、戦前・戦後を通して台湾との関わりの深い中国、アメリカ、そして日本の教科書と比較しながら分析を行った。しかしながら、本研究の第6章第2節などでも明白のように、台湾では戒厳令解除後はグローバルな視野で教育改革を進めてきた。この観点からすると、韓国などの隣国をはじめとする他国からの影響を考察することは極めて興味深い課題である。より広い視野の中で台湾の英語教育を位置付ける研究を次に進めていきたい。

最後に、第4章第6節で上げた戦後台湾の初期英語教育に貢献した個人と英語教育との関わりを深く探ることは、これからの台湾の英語教育史研究をさらに深める方向性となるであろう。このとき、日本英語教育史との関わりに一歩踏み込むことにより、別の角度での台湾英語教育史研究が可能ではないかと考える。

## 《謝辞》

台湾での実態調査には多くの方々のご協力をいただき深く感謝申し上げます。お忙しい中、質問紙や聞き取り調査にご協力をいただいた国立台湾師範大学、国立台湾大学の教員の方々、訪ねる度に丁寧でご親切に資料を提示してくださった台湾国家教育研究院教科書図書館の職員の方々、資料検索や貴重な資料の複写作業にご協力いただいた国立台湾師範大学附属図書館、国立台湾大学附属図書館の職員の方々、そして、授業観察や質問紙・聞き取り調査にご協力いただいた国立台湾師範大学附属高級中学、台北市立中山女子高級中学、台北市立成功高級中学、新北市立新店高級中学、台北市立景美女子高級中学の教員の皆様、および生徒の皆様にはとくに感謝を申し上げます。

常に援助してくださった国立台湾師範大学英語学系元主任教授、研究所元所長である施玉恵先生、元主任教授である張武昌先生、そして葉錫南教授には心より感謝を申し上げます。皆様方の温かいご協力と支えがなければ、この研究を全うすることは到底できませんでした。

主査である山崎直也先生には、台湾の政治について歴史的詳細な動きを正確に読み取るように多角度からご指導をいただきました。また、英語教育を社会系学科の教科書と比較する上で、山崎先生の戦後台湾教育における先行研究が本研究の指南となりました。英語教育の枠を超えた研究を模索し、国立台湾師範大学の図書館で関係図書を閲覧していたとき、山崎先生の書かれた『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』と出会ったときの感激は忘れられません。それから私の研究を支えるバイブル的な書籍として常に座右にありました。

大学院入学以来、遠隔授業を余儀なく受講することとなりましたが、副査である江原裕美先生はいつも有効な手段を用いられ、他の修士生の方々をはじめ、博士の学位を取得された卒業生の方も交えた研究交流をふんだんに行って下さったことに感謝申し上げます。研究においてインスパイアされる機会となり、大変勉強になりましたし、楽しい時間でもありました。ご専門の比較教育学の立場からの研究や論文についてのご丁寧なご指導にも心より感謝しております。また、大野雅子先生、塩谷英一郎先生に、口述試験において大変貴重なご助言やコメントをいただきましたことに深く感謝申し上げます。

最後に外部からの副査をお引き受けいただき、長きにわたりご指導いただいた田中正道先生には、これまでいただいたご助言とご指導とお支えに言葉に尽くせぬ感謝を申し上げます。私が学際的研究を目指して「日本英語教育史学会」に入会し、忘れもしない広島での初めての口頭発表後に田中先生から貴重なご助言とご指導をいただきました。それ以来、先生には博士論文への挑戦に始まるご助言から、口頭・論文発表、そして研究について、英語研究の分野における明確で丁寧なご指導をいただきました。厳しいご指導の前後にはいつもウイットと励ましのお言葉を賜ってまいりました。先生にご指導いただけたことは、当時の私にとって救いの手以外の何ものでもありませんでした。4年もの間、学会を通してのご縁によりこれほどのご指導をいただけたのは、まさに先生の崇高な教育者としてのお人柄以

外の何ものでもなく、先生に巡り会えたことに感謝するのみです。

山崎直也先生からは、台湾研究という地域研究の側面からのご指導を、田中正道先生からは英語教育と教科書研究の観点からのご指導をいただき、二つの分野における卓越した指南を得られたことは、研究を独自に発展させる大きな糧となりました。お二人の先生との出会いがなければ、本論文の完成はなかったと思います。

「日本英語教育史学会」に入会させていただいて以来、口頭および論文発表の機会を与えていただき、歴史的視座による英語教育研究に専念されている先生方より客観的示唆を与えていただきましたことに感謝いたします。入会当時から当学会の会長でいらした江利川春雄先生の近現代日本英語教育史と教科書研究に関するご著書から得た知見は本研究の礎となっています。また、学会での口頭・論文発表について、先生から直接、適確なご助言を賜り、いつも励ましのお言葉をいただけたことは、地道な教科書研究の労が無駄ではないことに確信が持て、研究をさらに深めることができました。心よりお礼を申し上げます。

「アジア教育学会」では、中国・台湾・韓国などの教育事情を多角的に学ぶことができ、これにより本研究の視野を広げることができましたことに感謝申し上げます。中でも、阿部洋先生には、教育史研究における第一次資料の緻密な調査の重要性を教えていただきました。

「JACET 東アジア英語教育研究会」では、2005年に台湾と日本、中国の教科書比較研究の共同研究の機会をいただき、本研究の原点となりました。それ以降、台湾英語教育に関する口頭・論文発表の機会をいただきましたことに心よりお礼申し上げます。

個々にお名前を挙げることはできませんが、様々な形でご助言と励ましをいただいた多くの方々に心よりお礼申し上げます。

最後に、現在台湾が直面している国際的問題を思うとき、このような英語教科書で教育を受けた若者がどのように対処していくか、台湾研究に身を置く一人として、若者たちの活躍を静かに祈り擱筆いたします。

## 参考文献

### I. 日本語文献

#### 1. 一次資料（筆者名アルファベット順）

文部科学省（2005）.『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版.

文部科学省（2009）平成 21 年改訂「高等学校学習指導要領」外国語

文部科学省（2013）.『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/1342458.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm)（2017 年 7 月 20 日）.

文部科学省（2014）.『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言から』Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)（2017 年 7 月 20 日）.

日本図書館協会分類委員会（2003）.『日本十進分類法 本表編』（NDC）（新訂 9 版）日本図書館協会.

日本図書館協会分類委員会（2003）.『日本十進分類法 一般補助表・相関索引編』（NDC）（新訂 9 版）日本図書館協会.

日本図書館協会分類委員会（2015）.『日本十進分類法 本表・補助表編』（NDC）（新訂 10 版）日本図書館協会.

日本図書館協会分類委員会（2015）.『日本十進分類法 一般・相関索引・使用法編』（NDC）（新訂 10 版）日本図書館協会.

#### 2. 二次資料（筆者名アルファベット順）

相川真佐夫・林桂子（2004）.「第 4 章 台湾」大谷泰照・林桂子編著『世界の外国語教育政策』東信社.

相川真佐夫（2005）.「台湾における中等教育の英語：日本統治末期と中華民国接收初期に関わる基礎研究」『日本英語教育史研究』第 20 号, 91-109.

相川真佐夫（2015）.「各国・地域の外国語教員養成体制:台湾」大谷泰照編『国際的にみた外国語教員の養成』東信堂.

赤松美和子・若松大祐編（2016）.『台湾を知るための 60 章』明石書店.

青木庸效（1991）.「英語教材の中の題材」『日本英語教育史研究』第 6 号, 87-109.

遠藤栄一（1985）.「第 2 章 英語教育教材論 第 3 節 文化理解のための教材論」片山嘉雄・遠藤栄一・垣田直巳・佐々木昭（編著）『新・英語科教育の研究』大修館書店.

江利川春雄（2004）.「英語教育の 50 年」『英語教育』51, 3, 大修館書店, 27-36.

江利川春雄（2006a）.「黒塗り英語教科書と戦後の教材・題材史」『英語教育』55, 11, 大

- 修館書店, 10-13.
- 江利川春雄 (2006b). 『近代日本の英語科教育史—職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』 東信社.
- 江利川春雄 (2008). 『日本人は英語をどう学んできたか』 研究社.
- 江利川春雄 (2018). 『日本の外国語教育政策史』 ひつじ書房.
- 深澤清治 (2010). 「高等学校英語リーディング教科書分析：推論および自己表現を促す発問を中心に」 『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』 59, 195-202.
- 福田円 (2014). 「中台関係・交流・深化と政治交渉の可能性」 日本記者クラブ 記者ゼミ第12回アジア・中国編 12, 2014年2月6日.
- 呉叡人 (2012). 「社会運動, 民主主義の再定着, 国家統合—市民社会と現代台湾における市民的な庄名リズムの再構築 (2008~2010年) —」 (若畑省二訳), 沼佐紀一郎・佐藤幸人編 『交錯する台湾社会』 アジア経済研究所, 311-365.
- 濱川今日子 (2012). 「日中国交正常化以降の日中関係」 『アジア情報室通報』 10,(3).
- 八田幸恵 (2014). 「発展的な読みの能力の能力を保障する教育目標・評価の課題—1960年代 アメリカにおける「読みの理解のタキシノミー」をめぐる議論の検討を通して—」 全国大学国語教育学会 『国語科教育』 76(0), 47-54.
- 日暮トモ子・石井光夫 (2015). 「台湾の大学入試改革と学力保証」 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』 (1) 23-35.
- 平井清子 (2017a). 「台湾における英語教育の実証的研究—学習指導要領準拠版 (1983年~2008年) 高等学校英語教科書の題材内容の研究から」 『北里大学一般教育紀要』, 22, 67-101.
- 平井清子 (2017b). 「思考力伸長を伴う英語教育のための検定教科書の役割—台湾と日本の高等学校英語教科書の比較から—」 『JACET 東アジア英語教育研究会紀要』 第6号 71-88.
- 平井清子 (2019a). 「戦後台湾英語教育の発展過程の概観」 『北里大学一般教育紀要』 第24号 1-21, 『中国関係論説資料』 第62号掲載予定.
- 平井清子 (2019b). 「戦後台湾の英語教科書における題材内容研究：「文学」の特徴をとらえて」 『日本英語教育史研究』 第34号, 51-80.
- 平井清子 (2019c). 「戦後台湾の英語教科書における政治的影響の考察—『課程標準』(1971年) 準拠版高等学校英語教科書の題材内容研究から」 『アジア教育』 第13巻, 93-105.
- 平井清子 (2021). 「台湾の英語教科書で取り扱われる文学教材が培う学力：1995年「課程標準」, 2008年「課程綱要」準拠版教科書研究から」 『日本英語教育史研究』 第36号, 49-77.
- 井尻秀憲 (2013). 『激流に立つ台湾政治外交史』 ミネルヴァ書房.
- 稲本朗 (1994). 「「抗戦無関論」における梁実秋」 『人文学報』, 東京都立大学人文学部, 153-168.
- 石附 実 (2005). 『比較・国際教育学 (補正版)』 東信社 4.
- 伊藤潔 (1993). 『台湾：四百年の歴史と展望』 中公新書 1144 中央公論社.

- 何承融 (2019). 「台湾住民の国民想像を構築する権力の変容: タオワンに教科書「課程標準」及び「課程綱要」の改定に関する権限以降を中心に」『国際公共政策論集』41, 23-41.
- 科学技術振興機構中国総合研究交流センター (編) (2013). 『中国の初等中等教育の発展と変革』科学技術振興機構中国総合研究交流センター, 61-89.
- 笠谷知代 (1994). 「英語教材の中の文学作品」『日本英語教育史研究』第9号, 77-106.
- 河合忠仁 (2004). 『韓国の英語教育政策—日本の英語教育政策の問題点を探る—』関西大学出版部.
- 河添恵子 (2005). 『アジア英語教育最前線 遅れる日本? 進むアジア!』三修社.
- 木塚雅貴 (2009). 「小学校における「外国語活動」導入から見たニーズと公共性確立の構図」『北海道教育大学紀要. 教育科学編』60, 55-68.
- 増田藤之助 (1914). 『英語修辞学講義』丸善.
- 南精一 (1993). 「英語教科書に現れた英詩について—昭和・平成期を中心に」『日本英語教育史研究』第8号, 1-21.
- 長島啓記 (2014). 『基礎から学ぶ比較教育学』学文社.
- 中川仁 (2009). 『戦後台湾の言語政策—北京語同化政策と多言語主義』東方書店.
- 中村敬・峯村勝 (2004). 『幻の英語教材』三元社, 011-012.
- 日本貿易振興機構海外調査部 (2010). 「台湾, 地球環境問題への真摯な取り組みと萌える環境ビジネス」日本貿易振興機構海外調査部.
- 西前美巳 (1985). 「高校教科書に現れた英米詩」『英語教育』34, 2, 47-49.
- 小川直義・高橋玄一郎 (2003). 「英語 I・II」の題材研究」『九州英語教育学会紀要』第31号, 九州英語教育学会, 59-65.
- 小川直義・山下徹・平井清子・木下正義 (2007). 「日本・中国・台湾における高等学校英語教科書の題材比較研究について」『東アジア英語教育研究会紀要』第2号, 東アジア英語教育研究会, 5-21.
- 小川佳万 (2014). 「台湾の高級中学における「国際教育」の特徴と課題」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』63(1), 177-194.
- 王文純・石崎和宏 (2003). 「教科等の構成と開発に関する調査」国立教育政策研究所編『研究成果報告書』(16) 東京: 国立教育政策研究所.
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓 (編著) (1980). 『英語教育史資料第3巻 英語教科書の変遷』東京法令出版.
- 折川 司 (2020). 「読書の量と質を保証するロシアの文学教育」『言語表現研究』36, 兵庫教育大学言語表現学会, 31-45.
- 尾崎重義 (2009). 「『台湾の国際法上の地位』再論(その2): 21世紀の視点から見て」『国際政治経済学研究』23, 47-61.
- 小篠敏明・中村愛人 (2001). 『明治・大正・昭和初期の英語教科書に関する研究—質的分析と解題』溪水社.
- 小篠敏明・馬本勉・松岡博信・本岡直子 (2002). 「英語教科書 *New National Readers, The*

- Globe Readers, The Standard English Readers* の計量的分析研究」『日本英語教育史研究』第17号, 21-40.
- 小篠敏明・江利川春雄(編著)(2004).『英語教科書の歴史的研究』辞游社.
- 劉得寛(1993).「第5章台湾の環境法と行政制度」野村好弘・作本直行編『発展途上国の環境法:東アジア』アジア経済研究所 203-238.
- 斎藤兆史(編著)(2003).『英語の教え方学び方』東京. 東京大学出版.
- 斎藤兆史・中村哲子(編注)(2009).『*English through Literature*: 文学で学ぶ英語リーディング』研究社.
- 志子田光雄(2017).『英詩理解の基礎知識』金星堂.
- 新保敦子(2010).「現代中国における英語教育と教育格差—少数民族地域における小学校英語の必修化をめぐる」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』21, 39-54.
- 篠原清昭(2017).『台湾における教育の民主化:教育運動による再帰的民主主義』ジダイ社
- 宋益喬(内海清次郎訳)(1998).『青年梁実秋伝 ある新月派評論家の半生』埼玉新聞社.
- 鈴木広子・河野円・平井清子(2017).「PISA型『読解力』養成を目的とした活動の設計—高校英語教科書の分析から—」『JACET 関東支部紀要』4, 36-50.
- 高橋和子(2015).『日本の英語教育における文学教材の可能性』ひつじ書房.
- 武田雅子(2011).「英詩入門:いろいろな詩の技法」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第1号, 大阪樟蔭女子大学.
- 竹中龍範(1977).「中国・台湾の英語教育」『中国地区英語教育学会研究紀要』7巻, 37-41.
- 田辺洵一(1985).『文学教育の構想』明治図書出版.
- 田中正道(監修)野呂忠司・達川奎三・西本有逸(編集)(2006).『これからの英語学力評価のあり方:英語教師支援のために』教育出版.
- 田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(編著)(2011).『推論発問を取り入れた英語リーディング指導:深い読みを促す英語授業』三省堂.
- 田中武夫・辻 智生(2015)「推論発問および評価発問を活用した英語リーディング指導の実践高等学校における1年間の実践事例を通して—」『教育実践学研究』20, 159-171.
- 寺尾忠能(2015).「第8章 台湾の環境保護運動—1980年代以降の民主化・社会化との関係を中心に」重富真一編『社会運動理論の再検討—予備的考察』基礎理論研究会成果報告, アジア経済研究所, 127-141.
- 馬越徹(2007).『比較教育学—越境のレッスン』東信社.
- 若林正丈(1992).『台湾:分裂国家と民主化』東京大学出版会.
- 若林正丈(2001).『台湾:変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房.
- 渡部良典・池田良・和泉伸一(2011).『CLIL 内容言語統合型学習:上智大学外国語教育の新たな挑戦』第1巻 原理と方法, 上智大学出版.
- 山ノ口寿幸(2008).「台湾『国民中学九年一貫課程綱要』策定と七大学習領域の誕生—カリキュラムスタンダードからカリキュラムガイドラインへ—」『国立教育政策研究所紀要』第137集.
- 山崎直也(2001).「九年国民教育政策の研究—戦後台湾教育の二面性の起源に関する考察」



『日本台湾学会報』 (3) 50-69.

山崎直也 (2004). 「第 9 章 教育改革—総統選挙に見る脱権威主義後の課題—」 佐藤幸人, 竹内 孝之編著『陳水扁再選 : 台湾総統選挙と第二期陳政権の課題』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 127-136.

山崎直也 (2009). 『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』 東信社.

山崎直也 (2011). 「台湾における教科書検定制度の定着をめぐる諸問題—2000 年代の揺り戻しの動きに注目して—」『比較教育学研究』第 42 巻, 42-59.

山崎直也 (2013). 「2008 年政権交代後の台湾における教育とナショナル・アイデンティティ」『アジア教育』第 7 巻, 5-16.

山崎直也 (2016). 「馬英九政権の教育政策と二つの「中国」」『海外事情』64 巻 7・8 号, 32-43.

容應萸 (2017). 中国清末における留米学生派遣の断絶と連続 : 容閔と唐國安の事例をふまえて『近代日本研究』34, 425 (46) -433 (38).

## II 外国語文献

### II-1 英語文献

#### 1. 二次資料 (筆署名アルファベット順)

Akyel, A. & Yalcin, E. (1990). Literature in the EFL Class: A study of goal-achievement incongruence. *ELT Journal*, 44(3) 174-180.

Anderson, L., & Krathwohl, D. (Eds.). (2001). *A taxonomy for learning, teaching and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*. New York, NY: Longman.

Appleton, Sheldon (1976). The social and political impact of education in Taiwan. *Asian Survey* 16 (8) 703-720.

Barrett, T. C. (1967). Goals of the reading program. In T. C. Barrett (Eds.) *The evaluation of children's reading achievement*. Newark: Delaware, 13-26.

Barrett, T. C. (1972). *Taxonomy of reading comprehension: Reading 360 monograph*. Lexington, MA: Ginn & Co.

Barrett, T.C., & Smith, R. J. (1974). *Teaching reading in the middle grades*. Addison-Wasley Publishing Company, Inc.

Been, S. (1975). Reading in the foreign language teaching program. *TESOL Quarterly*, 9, 233-242.

Beyer, B. K. (1985). Critical thinking: What is it?, *Social Education*, 49, 270-276

Bloom, B., Engelhart, M., Furst, E., Hill, W., & Krathwohl, D. (1956). *Taxonomy of*

- educational objectives: The classification of educational goals (Handbook I: Cognitive domain)*. New York: David McKay Company.
- Chamot, A. & O'Malley, M. (1986). *A cognitive academic language learning approach: An ESL content-based curriculum*. Maryland: The National Clearinghouse for Bilingual Education.
- Chamot, A. U. (2009). *The CALLA handbook: Implementing the cognitive academic language learning approach*, Second Edition. White Plains, NY: Pearson Education/Longman.
- Chen Hong-Wen (2003). *Investigating senior high school literature teaching by analyzing the literary texts in different new versions of English textbooks*. Unpublished master's thesis, National Taiwan Normal University, Taipei.
- Chen, Su-chiao (2003). *The spread of English in Taiwan* 文鶴出版有限公司: 台北.
- Duff, A. & Maley, A. (2007). *Literature*. 2nd Ed. Oxford: Oxford University Press.
- Grabe, W., & Stoller, F.L. (1997). Content-based instruction: Research foundations. In Snow, M. A. & Brinton, D. M. (Eds.), *The content-based classroom: Perspectives on integrating language and content*. New York: Longman. 5-21.
- Gray, J. (2010). *The construction of English: culture, consumerism and promotion in the E.L.T global coursebook*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Harrell, S., & Huang, Chün-chieh (Eds.) (1994). *Cultural change in postwar Taiwan*, Westview Press.
- Hirvela, A. (1996). Reader-response theory and ELT. *ELT Journal*, 50, 127-134.
- Iakovos, T (2011). Critical and creative thinking in the English language classroom. *International Journal of Humanities and Social Science* Vol. 1 No. 8, 82-86.
- Kramsch, C. & Kramsch, O. (2002). The avatars of literature in language study. *The Modern Language Journal* 84,4: 553-573.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. University of Chicago Press.
- Long, M.(1986). A feeling for language: The multiple values of teaching literature. In Brumfit, C. and Carter, R. (Eds). *Literature and English language teaching*. Oxford: Oxford University Press, 42-59.
- Mikulas, P. & Mikulasova, A. (2016). Historical topic in English language textbooks as a part of cultural literacy. *Slavonic Pedagogical Studies Journal*, 5, 2, 232-243.
- Naji, J. Subramaniam, G. & White, G. (2019). *New approaches to literature for language learning*. London: Palgrave Macmillan.
- Ogawa, N., Kiyonaga, K. et al. (2005). A comparative study of lesson topics in high school textbooks used in Japan, Korea and China, *The Journal of Asia TEFL*

Vol.2, No.4, 67-85.

- Paran, A.(2008). The role of literature in instructed foreign language learning and teaching: An evidence-based survey. *Language Teaching*, 41 (4) 465-496.
- Paulston, R. G. (1993) . Mapping discourse in comparative education text, *Compare, A Journal of Comparative and International Education*, 23, 101-114.
- Pearson, P.D., & Johnson, D.D. (1978). *Teaching reading comprehension*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Pearson, P. D. (2009). The roots of reading comprehension instruction. In S. E. Israel & G. Duffy (Eds.). *Handbook of research on reading comprehension*, (pp.3-31) New York: Routledge.
- Povey, J.F.(1979). The teaching of literature in advanced ESL classes. In Celce Murcia, M., & McIntosh, L.(Eds.), *Teaching English as a second or foreign language*, 162-186.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2001). Approaches and methods in language teaching. Second ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rodgers, T. S. (2001). Language teaching methodology. *ERIC Issue Paper*, ERIC Clearinghouse on Language and Linguistics, Washington, DC.
- Schultz, J. M. (2002). The gordian knot: Language, literature, and critical thinking. In Scott, V.M.&Tucker, H.(Eds). *SLA and literature classroom: Fostering dialogues*. Boston, MA: Heinle & Heinle, 3-31.
- Shih, Yu Hwei, (2001). Evaluation of the MOE primary school English teacher training program. 『英語教學』 Vol. 26 (1) , July, 2001, 81-108.
- Smith, Douglas C. (1997). *Middle education in the middle kingdom: The Chinese junior high school in modern Taiwan*. CT: Praeger Publishers.
- Sun Chen (1994). Investment in education and human resource development in postwar Taiwan. In Harrell, S. ,& Huang, Chün-chieh (Eds.) *Cultural change in postwar Taiwan*, Westview Press. 91-110.
- Wiggins, G. & McTighe, J. (2005). *Understanding by design essential questions*. VA: Association for Supervision and Curriculum Development.
- Wilson, Richard W.(1970). *Learning to be Chinese: The political socialization of children in Taiwan*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Wilson, L. (2016). *The second principle*. Retrieved July 20, 2017 from <http://thesecondprinciple.com/teaching-essentials/beyond-bloom-cognitive-taxonomy-revised/>
- Winckler, Edwin. A. (1994). Cultural policy on postwar Taiwan. In Harrell, S., & Huang, Chün-chieh (Eds.) *Cultural change in postwar Taiwan*, Westview Press. 22-46.

## II-2 中国語文献（筆者名の漢語ピンインをアルファベット順に配列）

### 1. 一次資料

- 教育部（1948）.「修訂高級中学英語課程標準」『修訂中学課程標準』台北：教育部.
- 教育部（1962）.「高級中学外国文「英文」課程標準」『中学課程標準』台北：正中書局印行.
- 教育部（1971）.「高級中学外国文「英文」課程標準」『高級中学課程標準』台北：正中書局印行.
- 教育部（1983）.「高級中学外国文「英文」課程標準」『高級中学課程標準』台北：正中書局印行.
- 教育部（1995）.「國民中学英語課程標準」『國民中学課程標準』台北：教育部.
- 教育部（1996）.「高級中学英文課程標準」『高級中学課程標準』台北：教育部.
- 教育部（2001）.『國民中小學九年一貫課程暫行綱要』台北：教育部
- 教育部（2003）.『中華民國英語文教育政策目標及策略（草案）』教育部英語教育推動委員會.
- 教育部（2003）.「國民中小學九年一貫課程綱要語文學習領域（英語）」『國民中小學九年一貫課程綱要』台北：教育部.
- 教育部（2006）.「普通高級中学必修科目「英文」課程綱要」『普通高級中学課程暫行綱要』台北：教育部.
- 教育部（2009）.「普通高級中学必修科目「英文」課程綱要」『普通高級中学課程綱要』台北：教育部.
- 挑戰 2008 國家發展重點計畫 2002-2007 閱覽日 2017 年 2 月 11 日  
<https://www.teg.org.tw/files/events/2002.05.31.pdf> 行政院經濟建設委員會.
- 挑戰 2008 國家發展重點計畫 2008 ~ 閱覽日 2017 年 2 月 11 日 [http://www.edu.tw/EDU\\_WEB/EDU\\_MGT/SECRETARY/EDU9082001/e2008/index.htm](http://www.edu.tw/EDU_WEB/EDU_MGT/SECRETARY/EDU9082001/e2008/index.htm) 教育部.

### 2. 二次資料（筆者名の漢語ピンインをアルファベット順に配列）

- 陳伯璋（1988）.『意識形態與教育』台北市：師大書苑.
- 陳若曦（2008）.『堅持，無悔：陳若曦七十自述』九歌出版， 67.
- 戴浩一（2011）.「我國外語政策之檢討與展望」『政策建議書』台灣教育省.
- 韓拱辰（1960）.「我認識的英老師」『輔仁』第 2 期，輔仁大學校友會出版， 32.
- 韓拱辰（1970）.「一封無法投遞的信」『輔友生活』第 3，4 期合刊，輔仁大學校友會出版， 11.
- 韓拱辰（1991）.「懷英伯念師恩—追憶英千里教授」『傳記文學』第 59 卷第 3 期，國立台灣大學：台北， 99.
- 韓拱辰（2019）.「三代緣 第二章第二節 教績孔彰，抗日英雄」英千里教授紀念網站，閱覽日 2020 年 4 月 3 日 <https://ying.forex.ntu.edu.tw/detail/38/366>. (URL からはページ

數不明)

- 黃宣範 (1993).『語言, 社會與族群意識—台灣語言社會學的研究』台北: 文鶴出版社.
- 曾憲定 (1960).「我認識的英老師」『輔仁』第 2 期, 輔仁大學校友會出版, 31.
- 李嘉曾 (2003).「我國超常教育先驅者沈亦珍的教育思想與實踐」『東南大學學報』哲社版, 第 02 期, 第 118-121.
- 李振清 (2012).「台灣英語教育的演進與前瞻思維」『台灣教育』674 期, 台灣省教育會, 31-40.
- 林滿秋 (2000).「趙麗蓮」林滿秋等著,『臺灣心女人』臺北: 遠流出版, 36-43.
- 林玉体 (1987).『臺灣教育面貌 40 年』台北市: 自立晚報.
- 林玉体 (2003).『台灣教育史』台北市: 文景書局印行.
- 林照真 (2002).「學英語熱潮中的全方位思索 (上)」『中國時報』2002 年 11 月 12 日.
- 林照真 (2003).「全球化浪潮下台灣英語教學之批判性解讀」世新大學傳播研究所博士班, 此為學生論文.
- 呂溪木・林時機・尹士豪 (2002).『國小英語教學問題事業調查研究報告』監察院教育及文化委員會第三屆第五十次會議討論事項第四案, 185-186.
- 那廉君 (1991).『臺大話當年』群玉堂出版, 11.
- 施玉惠・周中天・陳淑嬌・朱惠美・陳純音・葉錫南 (1999).『國民中小學英語教學之評量模試研究』教育部委託專題研究計畫成果報告, 教育部.
- 施玉惠・張武昌・葉錫南 (2000).『國小英語師資實施評量問卷』教育部委託專題研究計畫成果報告, 教育部.
- 施玉惠 (2002).「台灣九年一貫英語課程之特色以及實施後之省思」『海峽兩岸新世紀小學課程與教材改革學術研討會論文』臺灣教材研究發展學會.
- 孫金銘 (2007).「懷張懷院長」『輔仁往事第二輯』北京輔仁大學校友會出版, 253.
- 王乃珍 (2013).「遙念英先生」, 英千里教授紀念網站, 閱覽日 2021 年 8 月 26 日, <https://ying.forex.ntu.edu.tw/detail/8/75> (URL からはページ数不明)
- 文馨瑩 (1989).「美援與台灣的依賴發展」臺灣大學政治研究所碩士論文, 124-125. 吳錫德 (2002).「法國的語言政策—全球化與多元化的挑戰」閱覽日 2017 年 8 月 16 日. <http://mail.tku.edu.tw/cfshih/ln/paper06.htm>. 80 (URL からはページ数不明)
- 熊健媛・韓拱辰 (2018).「英老師的生平事略」英千里教授紀念網站, 閱覽日 2019 年 3 月 30 日, <https://ying.forex.ntu.edu.tw/>. (URL からはページ数不明, 以下同様).
- 徐代德 (1990).『背德的帝國—美帝國主義發展史話』台北: 人間出版社.
- 楊國揚 (2011).「我國教科書編審制度之演進與發展」『教師天地』第 171 期臺北市教師研習中心發行, 58-62.
- 英千里 (1963).「鐵窗回憶」『傳記文學』第二卷第四期 國立台灣大學: 台北, 13-16.
- 游毓玲 (2008).「英語教育政策對於後期中等教育英語教學影響之調查研究—『95 暫綱』對於高級與高職英語教學之影響」『2008 國際應用英語教學研討會暨工作坊論文集』銘博大學應用英語學系, 689-700. 與

- 游毓玲 (2009). 「英語教育政策對後期中等教育英語教學之調查研究」張武昌主編『臺灣英語教育政策之檢視』文鶴出版有限公司：台北。
- 張武昌 (編) (2003). 「國民中學生基本學力測驗英語雙峰現象暨改進措施」『教育部委託專案 研究報告』國立臺灣師範大學英語學系。
- 張武昌主編 (2009)『臺灣英語教育政策之檢視』文鶴出版有限公司：台北。
- 張秀雄 (1998). 「公民教育的內涵」張秀雄編『公民教育的理論與實施』台北市：師大書苑, 27-58.
- 鄭培凱 (2017). 「懷念英千里老師」英千里教授紀念網站 閱覽日 2019 年 3 月 28 日, <https://ying.forex.ntu.edu.tw/>. (URL からはページ数不明, 以下同様)

### III. 教科書

#### 1. 台灣

##### 1948 年「課程標準」準拠版教科書

- English Readers for Senior High Schools* 1 復興書局印行 1953 (3 版)
- English Readers for Senior High Schools* 2 復興書局印行 1956 (4 版)
- English Readers for Senior High Schools* 3 復興書局印行 1957 (4 版)
- English Readers for Senior High Schools* 4 復興書局印行 1957 (5 版)
- English Readers for Senior High Schools* 5 復興書局印行 1952 (初版)
- English Readers for Senior High Schools* 6 復興書局印行 1954 (再版)

##### 1962 年「課程標準」準拠版教科書調査教科書

- 英氏高中英語 *New Standard English Readers* 1 世界書局 英千里 1963 (初版)
- 英氏高中英語 *New Standard English Readers* 2 世界書局 英千里 1964 (初版)
- 英氏高中英語 *New Standard English Readers* 3 世界書局 英千里 1964 (初版)
- 英氏高中英語 *New Standard English Readers* 4 世界書局 英千里 1968 (初版)
- 英氏高中英語 *New Standard English Readers* 5 世界書局 英千里 1968 (初版)
- 英氏高中英語 *New Standard English Readers* 6 世界書局 英千里 1966 (初版)

##### 1962 年「課程標準」準拠版教科書調査教科書

- 高級中学英文 *English Readers for Senior Middle Schools* 1  
正中書局 趙麗蓮編著 1971 (臺修 3 版)
- 高級中学英文 *English Readers for Senior Middle Schools* 2  
正中書局 趙麗蓮編著 1971 (臺修 1 版)

- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 3  
 正中書局 趙麗蓮編著 1967 (臺修訂 1 版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 4  
 正中書局 趙麗蓮編著 1967 (臺修 1 版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 5  
 正中書局 趙麗蓮編著 1968 (臺 3 版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 6  
 正中書局 趙麗蓮編著 1966 (臺初版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 3  
 正中書局 趙麗蓮編著 1968 (臺修訂 2 版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 4  
 正中書局 趙麗蓮編著 1968 (臺 3 版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 5  
 正中書局 趙麗蓮編著 1968 (臺 5 版)
- 『高級中学英文』 *English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 6  
 正中書局 趙麗蓮編著 1971 (臺修 5 版)

#### 1971 年(民国 60 年)「課程標準」準拠版調查教科書

- Far East English Readers for Senior Middle Schools* 1  
 遠東圖書公司印行 1977 (9 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* 2  
 遠東圖書公司印行 1973 (2 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 3  
 遠東圖書公司印行 1978 (9 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 4  
 遠東圖書公司印行 1985\* (2 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 5  
 遠東圖書公司印行 1979 (9 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (自然組) 6  
 遠東圖書公司印行 1985\* (2 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 3  
 遠東圖書公司印行 1984\* (8 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 4  
 遠東圖書公司印行 1985\* (2 月版)
- Far East English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 5  
 遠東圖書公司印行 1975 (8 月 4 版)

*Far East English Readers for Senior Middle Schools* (社会組) 6

遠東図書公司印行 1985\* (2 月版)

\*1983 年「課程標準」が公布された後の出版であるが、これらは 1971 年「課程標準」準  
拠版である。

**1971 年 (民国 60 年)「課程標準」準拠版調査教科書**

*An English Readers for Senior Middle Schools 2* 正中書局 1983\* (臺初版)

*An English Readers for Senior Middle Schools 4* 正中書局 1984\* (版本不詳)

*An English Readers for Senior Middle Schools 5* 正中書局 1984\* (初版 2 刷)

*An English Readers for Senior Middle Schools 6* 正中書局 1984\* (版本不詳)

\*1983 年「課程標準」が公布された後の出版であるが、これらは 1971 年「課程標準」準  
拠版である。

**1971 年 (民国 60 年)「課程標準」準拠版調査教科書**

『英文』社会学組 *Book 5* 葉公超編著, 陳祖文編著, 世界書局 1984\* (版本不詳)

*New Standard English Readers for Senior High Schools* 高中英文 社会学組 *Book 5*

張致祥編著, 江漢蘭編著, 李志浦編著 環球書局 1984\* (初版)

*Current English Readers for Senior High Schools* (新復興現代高中英文) *Book 5*

楊景邁 編著; 復興書局 1983 (修訂 5 版)

*New Standard English Readers for Senior High Schools* 高中英文 社会学組 *Book 4*

張致祥 編著, 江漢蘭 編著, 李志浦 編著 環球書 1983\* (初版)

*Tung Hua English Readers* 東華英文讀本 *Book 2* 陳永昭編著, 楊景邁 校訂

東華書局 1983\* (新修訂 1 版)

『英文』社会学組 *Book 5* 葉公超 編著, 陳祖文 編著 世界書局 1983\* (版本不詳)

\*1983 年「課程標準」が公布された後の出版であるが、これらは 1971 年「課程標準」準  
拠版である。

**1971 年 (民国 60 年)「課程標準」準拠版調査教科書**

*English Readers* 『英文』 *Book 2* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1982

(版本不詳)

*English Readers* 『英文』社会学組 *Book 4* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1979

(臺修 1 版)

*English Readers* 『英文』社会学組 *Book 4* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1981

(版本不詳)

*English Readers* 『英文』社会学組 *Book 5* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1982

(臺修 3 版)



*English Readers*『英文』社会学組 *Book 6* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1981  
(臺修 2 版)

*English Readers*『英文』自然学組 *Book 5* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1979  
(臺修 2 版)

*English Readers*『英文』自然学組 *Book 6* 朱立民, 陸震來, 黃美序編 正中書局 1980  
(臺修 1 版)

### 1983 年(民国 72 年)「課程標準」準拠版調查教科書

*English Readers for Senior High Schools 1* 国立編譯館主編 1990 (改編本 3 版)

*English Readers for Senior High Schools 2* 国立編譯館主編 1997 (改編本 9 版)

*English Readers for Senior High Schools 3* 国立編譯館主編 1991 (3 版)

*English Readers for Senior High Schools 4* 国立編譯館主編 1992 (3 版)

*English Readers for Senior High Schools 5* 国立編譯館主編 1992 (3 版)

*English Readers for Senior High Schools 6* 国立編譯館主編 1992 (再版)

### 1995 年(民国 84 年)「課程標準」準拠版 調查教科書

*Far East English Readers 1* 遠東圖書公司印行 1999 (版本不詳)

*Far East English Readers 2* 遠東圖書公司印行 2000 (版本不詳)

*Far East English Readers 3* 遠東圖書公司印行 2000 (版本不詳)

*Far East English Readers 4* 遠東圖書公司印行 2001 (版本不詳)

*Far East English Readers 5* 遠東圖書公司印行 2003 (版本不詳)

*Far East English Readers 6* 遠東圖書公司印行 2003 (版本不詳)

### 1995 年(民国 84 年)「課程標準」準拠版 調查教科書

*Lung Teng English Readers 1* 龍騰文化事業公司 2002 (版本不詳)

*Lung Teng English Readers 2* 龍騰文化事業公司 2001 (版本不詳)

*Lung Teng English Readers 3* 龍騰文化事業公司 2001 (版本不詳)

*Lung Teng English Readers 4* 龍騰文化事業公司 2002 (版本不詳)

*Lung Teng English Readers 5* 龍騰文化事業公司 2003 (版本不詳)

*Lung Teng English Readers 6* 龍騰文化事業公司 2003 (版本不詳)

### 1995 年(民国 84 年)「課程標準」準拠版 調查教科書

*San Min English Readers 1* 三民書局 2004 (修正初版 4 刷)

*San Min English Readers 2* 三民書局 2005 (修正初版 3 刷)

<i>San Min English Readers</i>	3	三民書局	2004 (修正初版 2 刷)
<i>San Min English Readers</i>	4	三民書局	2005 (修正初版 2 刷)
<i>San Min English Readers</i>	5	三民書局	2004 (初版 1 刷)
<i>San Min English Readers</i>	6	三民書局	2005 (初版 1 刷)

#### 2005 年「課程暫行綱要」準拋版教科書 調查教科書

<i>New Far East English Readers</i>	1	遠東圖書公司印行	2007 (版本不詳)
<i>New Far East English Readers</i>	2	遠東圖書公司印行	2007 (版本不詳)
<i>New Far East English Readers</i>	3	遠東圖書公司印行	2007 (版本不詳)
<i>New Far East English Readers</i>	4	遠東圖書公司印行	2008 (版本不詳)
<i>New Far East English Readers</i>	5	遠東圖書公司印行	2007 (8 月初版 1 刷)
<i>New Far East English Readers</i>	6	遠東圖書公司印行	2008 (1 月初版 1 刷)

#### 2008 年「課程綱要」準拋版教科書 調查教科書

<i>Far East English Readers</i>	1	遠東圖書公司印行	2011 (初版 2 刷)
<i>Far East English Readers</i>	2	遠東圖書公司印行	2012 (2 月初版 2 刷)
<i>Far East English Readers</i>	3	遠東圖書公司印行	2012 (8 月初版 2 刷)
<i>Far East English Readers</i>	4	遠東圖書公司印行	2013 (2 月初版 2 刷)
<i>Far East English Readers</i>	5	遠東圖書公司印行	2012 (5 月初版)
<i>Far East English Readers</i>	6	遠東圖書公司印行	2012 (9 月初版)

#### 2008 年「課程綱要」準拋版教科書 調查教科書

<i>Lung Teng English Readers</i>	1	龍騰文化事業公司	2010 (版本不詳)
<i>Lung Teng English Readers</i>	2	龍騰文化事業公司	2010 (版本不詳)
<i>Lung Teng English Readers</i>	3	龍騰文化事業公司	2011 (版本不詳)
<i>Lung Teng English Readers</i>	4	龍騰文化事業公司	2010 (版本不詳)
<i>Lung Teng English Readers</i>	5	龍騰文化事業公司	2012 (版本不詳)
<i>Lung Teng English Readers</i>	6	龍騰文化事業公司	2012 (版本不詳)

#### 2008 年「課程綱要」準拋版教科書 調查教科書

<i>San Min English Readers</i>	1	三民書局	2011 (再版)
<i>San Min English Readers</i>	2	三民書局	2011 (初版 1 刷)
<i>San Min English Readers</i>	3	三民書局	2012 (初版 1 刷)
<i>San Min English Readers</i>	4	三民書局	2013 (再版)

*San Min English Readers* 5 三民書局 2012 (初版)

*San Min English Readers* 6 三民書局 2013 (初版)

## 2008 年「課程綱要」準拠版教科書 調査教科書

*Far East English Readers* (乙) 1 遠東図書公司印行 2012 (8 月初版 3 刷)

*Far East English Readers* (乙) 2 遠東図書公司印行 2013 (2 月初版 3 刷)

*Far East English Readers* (乙) 3 遠東図書公司印行 2012 (8 月初版 2 刷)

*Far East English Readers* (乙) 4 遠東図書公司印行 2013 (2 月初版 2 刷)

*Far East English Readers* (乙) 5 遠東図書公司印行 2012 (5 月初版)

*Far East English Readers* (乙) 6 遠東図書公司印行 2012 (9 月初版)

## 2. 中国

### 戦前中国英語教科書

『世界高中英文選 2』 黄梁就明 世界書局 (上海) 1933 (初版)

『高中英語読本 2』 林漢達 世界書局 (上海) 1941 (新 5 版)

『高中英語読本 1』 李儒勉 中華書局 1941 (18 版)

『高中英語読本 5』 李儒勉 中華書局 1941 (4 版)

### 戦後中国の教科書 (中国 2001 年「課程標準」準拠版教科書) 一覧

*Senior English for China* 1A 人民教育出版社 2003 (版本不詳)

*Senior English for China* 1B 人民教育出版社 2004 (版本不詳)

*Senior English for China* 2A 人民教育出版社 2001 (版本不詳)

*Senior English for China* 2B 人民教育出版社 2001 (版本不詳)

*Senior English for China* 3 人民教育出版社 2002 (版本不詳)

*New Century Senior English* 1-1 上海外語教育出版社 2001 (版本不詳)

*New Century Senior English* 1-2 上海外語教育出版社 2002 (版本不詳)

*New Century Senior English* 2-1 上海外語教育出版社 2002 (版本不詳)

*New Century Senior English* 2-2 上海外語教育出版社 2003 (版本不詳)

*New Century Senior English* 3-1 上海外語教育出版社 2003 (版本不詳)

*New Century Senior English* 3-2 上海外語教育出版社 2004 (版本不詳)

*Oxford English* S1A 上海教育出版社 1999 (版本不詳)

*Oxford English* S1B 上海教育出版社 1999 (版本不詳)

*Oxford English* S2A 上海教育出版社 2000 (版本不詳)

*Oxford English* S2B 上海教育出版社 2000 (版本不詳)

*Oxford English* S3A 上海教育出版社 2001 (版本不詳)

*Oxford English* S3B 上海教育出版社 2001 (版本不詳)

### 3. 日本

#### 戦前日本の教科書 *The King's Crown Readers 1-5*

<i>The King's Crown Readers</i>	1	三省堂	1926 (修正 7 版)
<i>The King's Crown Readers</i>	2	三省堂	1926 (修正 7 版)
<i>The King's Crown Readers</i>	3	三省堂	1926 (修正 7 版)
<i>The King's Crown Readers</i>	4	三省堂	1926 (修正 7 版)
<i>The King's Crown Readers</i>	5	三省堂	1926 (修正 7 版)
<i>The King's Crown Readers</i>	6	三省堂	1926 (修正 7 版)

#### 戦後日本の英語教科書一覧

<i>English for High Schools</i>	Book 1	大学書林	1950 (版本不詳)
<i>English for High Schools</i>	Book 2	大学書林	1950 (版本不詳)
<i>English for High Schools</i>	Book 3	大学書林	1950 (版本不詳)
<i>New English for High Schools</i>	Book 1	大学書林	1953 (版本不詳)
<i>New English for High Schools</i>	Book 2	大学書林	1953 (版本不詳)
<i>New English for High Schools</i>	Book 3	大学書林	1953 (版本不詳)
<i>High School English Readers</i>	Book 1	大学書林	1956 (版本不詳)
<i>High School English Readers</i>	Book 2	大学書林	1956 (版本不詳)
<i>High School English Readers</i>	Book 3	大学書林	1956 (版本不詳)

#### 戦後日本の英語教科書 (1970 年「学習指導要領」準拠版) 一覧

<i>New Horizon English Readers</i>	1	東京書籍	1977 年 2 月 10 日発行
<i>New Horizon English Readers</i>	2	東京書籍	1975 年 2 月 10 日発行
<i>New Horizon English Readers</i>	3	東京書籍	1977 年 2 月 10 日発行

#### 戦後日本の英語教科書 (1970 年「学習指導要領」準拠版) 一覧

<i>The Crown English Readers</i>	1	三省堂	1975 年 3 月 30 日 (3 版) 発行
<i>The Crown English Readers</i>	2	三省堂	1976 年 3 月 30 日 (3 版) 発行
<i>The Crown English Readers</i>	3	三省堂	1977 年 3 月 30 日 (3 版) 発行

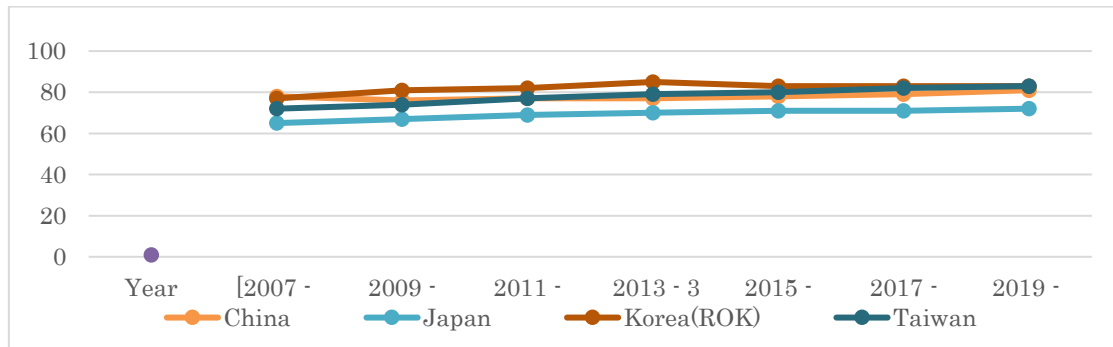
#### 戦後日本の英語教科書 (1970 年「学習指導要領」準拠版) 一覧

<i>New Vision English Readers</i>	1	開隆堂	1975 年 12 月 5 日 (4 版) 発行
<i>New Vision English Readers</i>	2	開隆堂	1976 年 12 月 5 日 (4 版) 発行
<i>New Vision English Readers</i>	3	開隆堂	1976 年 12 月 5 日 (3 版) 発行

## 参考資料

## 【序章】

## 参考資料 1：アジア 4 か国の TOEFL スコアの推移 (2007-2019)



	China	Japan	Korea(ROK)	Taiwan
2007	78	65	77	72
2009	76	67	81	74
2011	77	69	82	77
2013	77	70	85	79
2015	78	71	83	80
2017	79	71	83	82
2019	81	72	83	83

Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Test 2007-2019 より筆者が作成

## 参考資料 2：日本十進分類法 (NDC) 第 3 次分類まで

<b>000 総記</b>	<b>100 哲学</b>	<b>200 歴史</b>	<b>300 社会科学</b>
010 図書館	110 哲学各論	210 日本史	310 政治
020 図書・書誌学	120 東洋思想	220 アジア史・東洋史	320 法律
030 百科事典	130 西洋思想	230 ヨーロッパ史・西洋史	330 経済
040 一般文集・講演集	140 心理学	240 アフリカ史	340 財政
050 逐次刊行物・年鑑	150 倫理学	250 北アメリカ史	350 統計
060 学会・団体・研究調査機関	160 宗教	260 南アメリカ史	360 社会
070 ジャーナリズム・新聞	170 神道	270 オセアニア史	370 教育
080 選書・全集	180 仏教	280 伝記	380 風俗習慣・民俗学
090 貴重書・郷土資料・ その他	190 キリスト教	290 地理・地誌・紀行	390 国防・軍事

<b>400 自然科学</b> 410 数学 420 物理学 430 化学 440 天文学・宇宙学 450 地球科学・地学・地質学 460 生物化学・一般生物学 470 植物学 480 動物学 490 医学・薬学	<b>500 技術（・工学・工業）</b> 510 建設工学・土木工学 520 建築学 530 機械工学・原子力工学 540 電気工学・電子工学 550 海洋工学・船舶工学・兵器 560 金属工学・鉱山工学 570 化学工学 580 製造工学 590 家政学・生活科学	<b>600 産業</b> 610 農業 620 園芸・造園 630 蚕糸業 640 畜産業・獣医学 650 林業 660 水産業 670 商業 680 運輸・交通 690 通信事業	<b>700 芸術</b> 710 彫刻 720 絵画・書道 730 版画 740 写真・印刷 750 工芸 760 音楽・舞踊 770 演劇・映画 780 スポーツ・体育 790 諸芸・娯楽
<b>800 言語</b> 810 日本語 820 中国語 830 英語 840 ドイツ語 850 フランス語 860 スペイン語 870 イタリア語 880 ロシア語 890 その他諸言語	<b>900 文学</b> 910 日本文学 920 中国文学 930 英米文学 940 ドイツ文学 950 フランス文学 960 スペイン文学 970 イタリア文学 980 ロシア文学 990 その他諸文学		

## 【第2章・他】

### 参考資料 3-1: 1948 年 (民国 37 年) 版「課程標準」の「目標」と「教材の概要」 高校英語カリキュラム基準の改訂 (訳は筆者による, 以下同様)

#### 第一 目標:

- (一)、 実用的な一般英語の練習や応用に徹する。
- (二)、 英文の詩や散文で英語の語学トレーニングを増進する。
- (三)、 英語面においては西洋文化への関心を高める。
- (四)、 言語の中から英語圏の国々の風習について概ね理解する。
- (五)、 英米民族史跡の記載の中から愛国思想を誘発し, 国際理解を促進する。

#### 第三 教科書概要:

##### (壹)、 第一学年:

- (一) 短編文の選択: 原則として英米作家の近代文を取り扱い, いずれも文学的な意味合いがあるか, 科学系やその他趣味関連の叙述描写を採用して, それぞれの文章に対して説明や議論を行い, 国家民族の面において参考に充分に値するもので, 激励に富んだ文章にするように特に注意を払う。散文を主とする。詩で使われる言葉は, 必ず散文の慣用により近いものでなければならない (口頭で精読するか筆記で内容に関する問答をして, 要点をまとめ, 言葉以外の意味も補足する)。
- (二) 一般的な応用文書: 手紙, 規則に関する報告書などの種類 (読んで真似をする)。
- (三) 一般的な応用挨拶: 挨拶言葉, 事務用語などの種類 (聴解や口頭による応用練習)。
- (四) 第一, 第二, 第三項の教材資料を展開して得られた体系化した文章や単語, センテンス (応用理解)。
- (五) 第一, 第二, 第三項の教材資料を展開して得られた体系化した文法: 品詞やセンテンス構成の区別変化を含む (応用理解)。
- (六) 第一, 第二, 第三項の教材資料に類似した教材選び: 長編, 短編, 短文または一冊の書籍など適切な題材を使用する。それで扱われている語彙の量は 34% 未満のものが, 次項の教材を補助教材として使用する。必要最低語彙数は第一項の精読用教材の 3 倍とする。(課外読書では口頭または筆記で概ねの内容を問答し, 概要を作成して, 言葉以外の意味も補足する)。
- (七) 一般的な定期刊行物: 新聞雑誌などの種類 (第六項同様)。
- (八) 特別な参考図書の使い方: 同義語反義語字典, 人名地名辞典イディオム辞書, スラング辞書, 分類辞典などの種類の使い方 (応用理解)。
- (九) 外国語文化の実際の意味: 特に英語民族に関するもので, わが民族の精神を

育むことに有益なもの。各教科書内で指摘しやすいもの（理解）。

（十）各種よく見られる一時的な教科書（特殊な学習動機に基づいて使い方を勘案する）。

（貳）、第二学年： 第一学年と同様。

（参）、第三学年： 第一学年と同様。

### 参考資料 3-2: 1962 年（民国 51 年）版「課程標準」の「目標」と「教材の概要」 高校英語カリキュラム基準

#### 第一 目標

壹、実際の生活における英語の練習や応用に徹する。

貳、英文図書を読むための準備を強化する。

参、英語で作文を書いたり翻訳する力を培う。

肆、英語の民族文化を学ぶ関心を啓発する。

#### 第三 教材概要

壹、 第一学年：

一、短編文の選択：原則として英米作家の近代文を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味に関する叙述、描写を採用して、それぞれの文章に対して説明や議論を行い、国家民族の面において参考に十分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う。散文を主とする。

二、一般的な応用文体：手紙、通告などの種類。

三、一般的な応用挨拶の復習：挨拶言葉、事務用語などの種類。

四、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した文章や単語、文型（応用理解）。

五、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した文法（品詞や文型の区別変化を含む）（応用理解）。

六、参考図書の使い方：様々な字典、辞典の使い方。

七、各種相当する臨時教材。

貳、第二学年： 第一学年第一項と同様。

参、第三学年： 第一学年第一項と同様。



参考資料 3-3: 1971 年 (民国 60 年) 版「課程標準」の「目標」と「教材の概要」  
高校外国語 (英語) カリキュラム基準

第一 目標：

- 壹、実際の生活における英語の学習や応用に徹する。
- 貳、英語の読み書き能力を強化し、学術研究の基礎を確立する。
- 参、英語の民族文化を学ぶ関心を啓発する。

第三 教材概要：

壹、第一学年

- 一、短編文の選択は、原則として英米作家の近代文を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味に関する叙述、描写を採用して、それぞれの文章に対して説明や議論を行い、国家民族の面において参考に十分に値するもので、激励に富んだ文章にするように特に注意を払う。散文を主とする。
- 二、手紙、通告などの種類の一般的な応用文体。
- 三、挨拶言葉、事務用語などの種類の一般的な応用挨拶の復習。
- 四、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した文章や単語、文型（応用理解）。
- 五、第一、第二、第三項の教材を展開して得られた体系化した文法（品詞や文型の区別変化を含む）（応用理解）。
- 六、参考図書の使い方：様々な字典、辞典の使い方。
- 七、上記の各種教材は、総合教科書に組み込むことを原則とする。

貳、第二学年： 第一学年第一項と同様。

参、第三学年： 第一学年第一項と同様。

**参考資料 3-4: 1983 年 (民国 72 年) 版「課程標準」の「目標」と「教材の概要」**  
 高校外国語 (英語) カリキュラム基準

第一 目標

壹、聞く、話す、読む、書く、ことから、生徒が実際の生活の中で正しい英語を応用する力を養う。

一、教師の話す英語が理解できる。

二、英語で教師の質問に答えられる。

三、流暢に教科書本文を朗読し、その意味が正確に理解できる。

四、勉強した単語、慣用句、文型、生活習慣、文化背景などを利用して簡潔に口頭と筆記で自分の意思を表現できる。

貳、現代英文読書と鑑賞を指導し、生徒が自主的に課外読書を行うことによって今後研究の基礎を培うように励ます。

參、短文作りや翻訳 (中国語を英語に翻訳) などの方法を利用して、生徒が簡単な英語で作文を書く練習を行う。

肆、生徒の国際業務や科学技術を学ぶ興味を啓発し、民族文化の交流を促進し、理想の世界を発展させる。

第三 教材概要

壹、 第一学年

一、短編文の選択は、原則としてわかりやすい現代英・米作品を取り扱い、いずれも文学的な意味合いがあるか、科学系やその他趣味関連の各文体を採用する。散文をメインとして、対話や物語、短編小説、詩歌、演劇などをサブ内容として取り扱う。内容においては生徒の生活背景や心身の成長段階を考慮し、特に人生の意義を導いたり、民族意識を喚起したり、民主的な風土および科学探求精神を養わなければならない。

二、本文の単語数は各授業では 600 語を超えてはならず、初めて接する知らない語彙は 30 語を超えないことを原則とする。知らない語彙の選択は常用率の高い 5000 語以内のものであることが望ましい。

三、母音、子音、単語の強弱、センテンスの強弱、イントネーションやリズムなどを含め、生徒の発音練習を行い、特に発音の基本練習と間違った発音の修正に力を入れるべきである。

四、生徒が話す・書くことによって基本文型、疑問句、否定句、命令句、感嘆句、動詞

の時制，様態助動詞，受動態と仮設語気などの応用練習を行うとともに，特に口頭による能動的な応用能力に着目すべきである。

五、生徒を訓練させ教科書本文の中の単語，慣用語および文型の使い方になじんでもらうとともに，簡単で分かりやすい英語や英文によって自分の意思を表現できるようにする。

六、挨拶言葉，教室用語など一般的な応用挨拶を復習するとともに，簡単な日常会話の練習を行う。

七、字典，辞典，百科全書など参考図書を応用できるように生徒を指導する。

八、上記の各種教材は，総合教科書に組み込むことを原則とする。

貳、第二学年： 第一学年第一項と同様。

参、第三学年： 第一学年第一項と同様。

### 参考資料 3-5：1995 年（民国 84 年）版「課程標準」の「目標」と「教材の概要」 高校における英語課程の基準

#### 第一 目標

高校における英語課程は，中学校の英語課程を基準にし，さらに生徒の英語能力を高め，将来の進学あるいは就職に備えるためのものである。

言語能力の上達の他に，本課程の目標はさらに正確な学習方法と思考方式の訓練の両方を含み，さらに文化の理解を通して視野の広い世界観を育成することである。

#### 壹、総目標

高校における英語課程は，以下の教育目標を達成すべきである。

- 一、正しく英語を聴く・話す・読む・書く能力を育成し，しかも日常生活の中で実際に応用する。
- 二、効果的な英語学習方法と積極的な学習態度を育成し，将来の独学の基礎を定める。
- 三、英語学習への興味を育て，さらに英語の文学・芸能活動を鑑賞したり，あるいはこれに参加できるようにする。
- 四、国際情勢，新しい科学技術や知識および外国文化に対する理解を促進し，自国と外国の文化および世界の趨勢を熟知することを期待する。

### 第三、教材の要綱

#### 壹、編纂の原則

高校の英語教科書は総合的な教材であり、四種類の言語能力を育てるよう配慮し、聴く・話す・読む・書くという個別の訓練以外に、さらに言語能力の総合的な応用を重視すべきである。漸進、累積、反復という教材の編纂原則に従うため、教材は学年によって順を追って進み、中学校の教材に続くべきである。教材の全体は六冊に分かれ、高校の三学年に使われる。編纂の方法はコミュニケーション型教授法の課程設定を原則とし、教材は活気に満ち、しかも実際の生活での応用と結びつけることを重視する。第一学年は聴く・話す・読む・書くことをいずれも重視する総合的な過程であり、第二、三学年は聴く・話す・読む・書く訓練を続ける以外に、特に読書力の養成を高める。

教材の本文の数、本文の長さ、語彙、文法、本文の内容、練習活動および作文練習は以下の原則に従うべきである。

##### 一、本文の数

各冊は原則的に十から十二課である。異なった水準の生徒の必要に応じるため、編纂する際、各冊において数課を多く編纂することができる。

##### 二、本文の長さ

本文の語数は、第一学年において各課は 600 語を超えず、第二学年において 800 語を超えず、第三学年において 1000 語を越えないことを原則にする。

##### 三、語彙

第一学年の各本文に現れる新語は 30 語を超えないことを原則とし、できるだけ常用率が最も高い五千語の中から選ぶべきである。第二学年の各本文に現れる新語は 40 語を超えないことを原則とし、できるだけ常用率が最も高い六千語の中から選ぶべきである。第三学年の各本文に現れる新語は 50 語を超えないことを原則にし、できるだけ常用率が最も高い七千語の中から選ぶべきである。(語彙の常用率は注 1 の参考書目録を参照することができる。)

以上三学年の教材に現れた新語の量はおよそ 2800 語である。第一学年はおよそ 700 語の新語、第二学年はおよそ 900 語の新語、第三学年はおよそ 1200 語の新語である。

中学校の英語教材と一致させるため、新語の発音は KK 音標で標示する。

##### 四、文法

文法の教材は、基礎的で実用的な観念と構造を主とし、偏った難解なものを避け、さらに本文と密接に歩調を合わせるべきである。中学校と高校の英文法の概念をつなげるため、中学校で学んだ文型と文法の概念を含む基礎文法の本を編纂すべきである。

##### 五、教科書本文の内容

教科書本文の材料選びは多様化させるべきで、趣味性、実用性および生活性に依拠する。内容は生徒の生活背景と心理知能の発展に配慮すべきで、さらに人生の意義を啓発し、民

主的な風格および科学を探究する精神を育成することを特に重視すべきである。

#### 六、練習活動

練習活動は発音，語彙，文法練習および本文の内容と関連する問答，聞き取り，叙述および作文などの練習を含めることができる。またゲーム，歌，寸劇などの活動を行うことができる。

#### 七、作文練習

作文練習はその課の本文，新語，フレーズ，文型を復習することを原則にする。単文の形でも整合の形でも設けることができる。

### 参考資料 3-6: 2005 年 (民国 94 年) 版「暫行綱要」の「目標」と「教材の概要」 普通高校の必須科目である「英語」カリキュラムの概要

#### 壹、目標

普通高校の必修科目である「英語」カリキュラムは，小中学校九年一貫カリキュラムの英語教育の延長線上にあるが，その目標は生徒の英語力を向上させ，将来の進学や就職に備えるためである。カリキュラムの目標においても，効果的な読書方法と論理的思考のトレーニングを含んでおり，文化的理解を通して広い世界観を育てることを目標としている。

- 一、実生活のコミュニケーションに生かせる正しい英語を聴く，話す，読む，書く，能力を高める。
- 二、効果的な英語の学習方法と正しい学習姿勢を育て，生涯学習の基礎となる自己学習能力を強化する。
- 三、英語学習への興味を促し，人文社会や科学技術に関する知性を高める。
- 四、国際問題や異文化への理解を深め，尊い命と持続可能な地球の発展への思いを心に奥深く根付かせる。

#### 肆、教材概要

普通高校の必修科目である「英語」カリキュラムは 24 単位となっている。

##### 一、編纂の原則

高校の英語教科書は包括的な教材として，聴く，話す，読む，書く，4つの言語能力を同時に育て，これらの能力を総合的に活用することに重点を置くべきである。また漸進式，蓄積式，反復式を重ねる教材編集の基本要件を満たすには，学年ごとに徐々に教材の難易度を上げ，小中学校九年一貫カリキュラムの教材と整合性を持たせる必要がある。教材は全 6 冊で構成され，高校 3 年間にわたって使用する。内容の編集にあたっては多様なテーマを取り入れ，生き生きとした活発なアクティビティデザインを通し

て、リアルな生活シーンでの応用と整合性を持たせるべきである。第一学年は、ヒアリング、スピーキング、リーディング、ライティングを同時に重視した総合的なカリキュラムとなっている。第二学年、第三学年は継続してヒアリング、スピーキング、リーディング、ライティングの練習に加え、さらに読書と作文能力の育成に力を入れなければならない。

教材のテキスト本数や本文の長さ、語彙、文法、本文内容、練習作業はいずれも次の基本要件に準拠しなければならない。

(一) 課数

基本的に一卷は 10 課から 12 課から構成され、編集時には各教科書の課題数を若干増やしたりして、異なるレベルの生徒のニーズを応えるようにデザインすることもできる。

(二) 各課本文の長さ

編集者はテキストのスタイルに応じて柔軟に題材を選ぶことができ、語数には特に上限や下限を設けない。

(三) 語彙

教科書に載せる新しい単語はできるだけ使用頻度が最も高い 7000 語を選んで、単語の出現度合に応じて徐々に教えることができる。一冊当たり各課本文の中に出現する単語は数に若干のばらつきがあっても、基本的には最多で 600 語を超えてはならない。

(四) 文法

文法の教材は、小中学校九年一貫カリキュラムで学んだ基本文型や文法的な概念をベースに、さらにその難易度と範囲に重みをつけ、生徒がより複雑な語句の構造を理解することができるように手助けをし、生徒の読み書き能力を高めなければならない。

(五) 各課本文の内容

各課本文の題材を選定するにあたっては、知識度や面白さ、実用性、啓発性を同時に考慮すべきである。内容は生徒の生活背景や心の発達度合いに応じて、倫理教育や男女平等教育、法治教育、人権教育、環境教育、消費者保護、生涯プランニングなどの関連テーマをテキストの中に取り入れ、生徒の人文教養を高めるだけでなく、尊い命と持続可能な地球の発展への思いを心に奥深く根付かせなければならない。

(六) 練習作業

練習作業には語彙、文法練習、各課本文に関わる質問回答、リスニング、スピーキングおよびライティングなどの練習を取り入れるほか、ゲームや歌、ロールプレイなどのアクティビティもデザインすることができる。

## 参考資料 3-7: 2008 年 (民国 97 年) 版「課程綱要」の「目標」と「教材の概要」 普通高校における必修科目「英語」課程の要綱

### 壹、課程目標

普通高校における必修科目である英語課程は、小中学校九年一貫カリキュラムの英語教育に続いて、生徒の英語能力を高め、将来の進学あるいは就職に備えるためのものである。課程の目標は学習方法と論理的思考訓練および興味を持たせることを含み、さらに文化の理解を通して視野の広い世界観を育成することである。

普通高校における英語課程は、以下の教育目標を達成すべきである。

- 一、英語を聴く・話す・読む・書く能力を高め、実生活での交流に応用する。
- 二、英語による論理的な思考、分析、判断および整合・創造の能力を育成する。
- 三、効果的な英語学習方法を構築し、生徒の独学能力を高め、生涯学習の基礎を定める。
- 四、英語学習への興味と積極的な学習態度を育て、各領域の知識を積極的に吸収し、人文社会・科学技術の知識と才能を高める。
- 五、多元的な文化に対する理解と尊重を促進し、国際的視野および世界の永遠の発展という観念を養成する。

### 肆、教材の要綱

#### 一、編纂の原則

高校の英語教科書は総合的な教材であり、聴く・話す・読む・書くという四種類の言語能力を育てよう配慮すべきであり、しかも四種類の能力の総合的な応用を重視すべきである。漸進、累積、反復という教材の編纂原則に従うため、教材は学年によって順を追って進み、9年間一貫した中学校・小学校課程の教材に続くべきである。教材の全体は六冊に分かれ、高校の三学年に使われる。内容の編纂は多元的な主題を取り入れるべきで、すなわち活気に満ちた活動の設計や実際の生活での応用と結びつけることである。第一学年は聴く・話す・読む・書くことをいずれも重視する総合的な過程であり、第二、三学年は聴く・話す・読む・書く訓練を続ける以外に、さらに読書力と創作力の養成を高めるべきである。

#### (一) 基礎および進級教材の難度の区別

生徒の異なったレベルに応じて、教材は高校二年生から A, B 二版に分け、しかも A は B に含まれる。両者の主な違いは、A 版は難度がある程度低い「基礎教材」のみを含むが、B 版は「基礎教材」以外に、さらに難度が高く、挑戦性が高い「進級教材」をも含む。基礎と進級教材の難度の区別について、以下 4 項目の基準で定める。

1. テキストの難度：主題の深さ（生活化或いは専門化の程度）、語彙の難度（単語の頻

度の高低、単語の長さ、新語の多さなど)、文型・文法の難度(文の構造の複雑さ、常用性など)、情報処理量(読む内容の長さおよび複雑さ、聞き取り材料のスピードの速さなど)が含まれる。

2. 活動の難度: 聴く、話す、読む、書くという技能の項目が多ければ多いほど、或いは運用能力に対する要求が高ければ高いほど、挑戦性が高くなる。また、正解の範囲が広ければ広いほど、難度が高くなる。答えの正確度に対する要求が高ければ高いほど、難度が高くなる。
3. プロログの程度: プロログ或いは補助(例えば聴き取り或いは閲読活動の前に提供した重要な語彙、背景知識の紹介など)が多ければ多いほど、練習活動がやりやすくなり、基礎教材としてより適合している。
4. 認知の段階: 基礎教材は主に理解・応用・基本的な思考能力を育成し、進級教材は分析・判断および創造能力の訓練を重視するのである。

基礎教材はすべての生徒が必ず学ばなければならないものである。もし単独に使うなら、A版教材にすべきである。進級教材は基礎教材に基づいて、さらに深め、広げたものであり、基礎教材と進級教材を合わせてB版となる。編纂するときに、進級教材を独立した一冊にすることができし、また基礎教材と合わせて、教材の数課或いは各ユニットの終わりに取り入れることもできる。基礎・進級を合わせて一冊にする場合には、分けて教えやすくするために、必ず明確に標示しなければならない。

## (二) 教材の編纂の原則

教材の本文の数、本文の長さ、語彙、文法、本文の内容および練習活動は以下の原則に符合すべきである。

### 1. 本文の数

基礎教材の各冊は原則的に十から十二課くらいにする。高校二年、三年の教材については、A、B版に分けて教える必要があることを考慮すべきである。編纂する際、各冊は元々制定した基礎教材がA、B二版を共用する以外に、難度の高い進級教材を数課多く編纂することができる。或いは、異なった水準の生徒の必要に応じるため、各課の基礎教材に対して進級教材を加えて編纂し、または独立した一冊を発行し、B版として教学の内容を深め、広めることもできる。

### 2. 本文の長さ

編集者は文体によって適当に処理することができ、文字数は下限と上限を新たに設けないことにする。

### 3. 語彙

教材の中の新字はできるだけ常用率が最も高い七千語の中から選び、語彙の頻度の高低に従い順を追って次第に進める。ある程度頻度の高い単語を優先的に採用する。原則的には高校一年および二年、三年の基礎教材は常用率が最も高い4500語を優先的に選んで



使用し、進級教材は常用率が 4500 から 7000 までのものを適当に選んで使用する。

各冊の本文に出た新語の数は多少違っていても、原則的に基礎教材の各冊の新語の総数は 600 語を超えないようにする。高校二年、三年の B 版の教育は、基礎と進級の教材を同時に使用する。原則的にはこの二種類の教材を合わせて計算し、各冊の新字の総数は 700 語を超えないようにする。

#### 4. 文法

文法の教材は、中小学校の一貫した課程で学んだ基本的な文型と文法に接続すべきであり、またそれらをさらに深め、広めていく。それによって生徒が比較的複雑な語句の構造を理解することおよび生徒の閲読と構文の力を増進することを助ける。文型の構造や文法がある程度複雑なもの、或いは書く、話すときにあまり使わないものについて、生徒がそれらをただ理解すればいいので、各課の文法のポイントにする必要がない。ある程度よく使われる重要な文型の構造については、生徒がマスターすべきであり、交流する際に応用できるためには、文法のポイントに入れて、しかも各課で適当な説明と練習を提供すべきである。

教材の各課で文法をポイントに入れて紹介するかどうかは、実際の必要に応じて行うべきである。もし本文の中で重要かつ新しい文型或いは文法がなければ、無理に入れる必要がない。

#### 5. 本文の内容

本文の材料選びは多様化すべきであり、知識性、趣味性、実用性および啓発性に配慮を加えるべきである。内容は生徒のその他の領域における学習と結びつけて、科学の発展、社会の変動および世界情勢に合わせて、各種の新しい知識を紹介することによって、生徒の知能を高める。また、生徒の生活背景と心理知能の発展に合わせるべきであり、生命教育、男女平等の教育、法治教育、人権教育、環境保護の教育、海洋教育、多元的文化、消費者保護の教育、生涯計画などと相関連する話題を取り入れ、生徒の人文教養を高め、生命の尊重および世界の永遠の発展という観念を深く取り入れることを期待する。

#### 6. 練習活動

練習活動は語彙、文法練習、本文の内容と関連する閲読、聞き取り、会話および文章書きなどの練習を含めることができる。意義を与えることおよび雰囲気を作ることに力を入れるべきであり、ゲーム、歌、お芝居などの活動を設けることができる。

**【第3章・他】**

参考資料 4-1: 1948 年（民国 37 年）版 教科書の表紙と扉のページの写真  
（復興書局）（第3章第2節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-2: 1962 年（民国 51 年）「課程標準準拠版教科書の写真（世界書局）  
（『英氏高中英語』1968 年出版（初版）Book5 表紙と扉のページ）  
（第3章第3節）（第4章）

4-2-1: 1962 年（民国 51 年）「課程標準準拠版教科書の写真（世界書局）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-2-2: 1962 年（民國 51 年）版 教科書 Book 5 の写真（正中書局）  
（『高級中学英文』1967 年出版（臺一版）（Book 2 表紙）（第 3 章第 3 節）（第 4 章）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-3: 1971 年（民國 60 年）「課程標準」準拠版教科書の写真  
（遠東図書，正中書局，東華書局）（第 3 章第 4 節）（第 6 章第 1 節）

参考資料 4-3-1: 1971 年「課程標準」準拠版教科書 遠東図書（梁実秋主編）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-3-2: 『英文』正中書局出版（朱立民主編）と『高中英文』環球書局出版  
張致祥，江漢蘭，李志浦編著（第 6 章第 1 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-3-3: 『東華英文読本』 『高級中学英文』 正中書局  
東華書局 楊景邁校訂 陳水昭編著 顔元叔編著 (第 6 章第 1 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-4: 1983 年 (民国 72 年)「課程標準」準拠版 教科書の写真 (国立編譯館)  
(表紙と奥付け) (第 3 章第 5 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-5:

1995 年「課程標準」準拠版教科書の写真 (遠東図書, 三民書局, 龍騰文化) (遠東図書)  
(表紙と扉のページ) (第 3 章第 6 節, 第 5 章第 1 節, 第 2 節, 第 6 章第 2 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

1995 年「課程標準」準拠版教科書 三民書局（表紙と扉のページ）  
（第 3 章第 6 節，第 5 章第 1 節，第 2 節，第 6 章第 2 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

1995 年「課程標準」準拠版教科書 龍騰文化（表紙と扉のページ）  
（第 3 章第 6 節，第 5 章第 1 節，第 2 節，第 6 章第 2 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 4-6：2005 年（民国 94 年）「暫行綱要」準拠版 教科書の写真  
（遠東図書）（表紙と扉のページ）（第 3 章第 7 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

**参考資料 4-7：2008 年（民国 97 年）「課程綱要」準拠版 教科書の写真**

（第 3 章第 8 節，第 5 章第 1 節，第 2 節，第 6 節第 2 節，第 3 節）

（遠東図書，三民書局，龍騰文化，遠東図書（乙）版）（表紙と扉のページ）

遠東図書

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

**2008 年「課程標準」準拠版教科書 三民書局（表紙と扉のページ）**

（第 3 章第 8 節，第 5 章第 1 節，第 2 節，第 6 節第 2 節，第 3 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

**2008 年「課程綱要」準拠版教科書 龍騰文化（表紙と扉のページ）**

（第 3 章第 8 節，第 5 章第 1 節，第 2 節，第 6 節第 2 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

2008 年「課程綱要」準拠版教科書 遠東図書乙版（表紙と扉のページ）  
（第 5 章第 2 節，第 6 章第 2 節）

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

#### 【第 4 章】

参考資料 5: 1962 年（民国 51 年）「課程標準」準拠版教科書

参考資料 5-1: 『英氏高中英語』Book 1 1963 年（初版）（表紙と奥付け）写真

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

**参考資料 5-2: 『英氏高中英語』より Baggy Pants の本文① (第 4 章第 3 節)**

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

**『英氏高中英語』より Baggy Pants の本文② (第 4 章第 3 節)**

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。



参考資料 5-3: 『英氏高中英語』より **A Historical Kidnaping** の本文①  
(第 4 章第 3 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

『英氏高中英語』より **A Historical Kidnaping** の本文② (第 4 章第 3 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 5-4: 『英氏高中英語』と大学書林教科書の（引用）箇所の写真

参考資料 5-4-1: 1962 年「課程標準」準拠版 英氏高中英語 *Book I*(1963 )

Lesson 5 “Our Vision of Things” (本文 pp.41-42) (第 4 章第 3 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

左ページ上部←のように，大学書林からの引用であることが明記されている。

参考資料 5-4-2: 大学書林と “*High School English Readers*” *Book1* 1956 年

オリジナルと思われるもの L8 “Our Vision of Things” (本文 pp.31-32)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 5-4-3: 1962 年「課程標準」準拠版 英氏高中英語 Book I (1963 )

Lesson 8 “COAL” (本文 pp.69-70) (第 4 章第 3 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 5-4-4①: *New English for High Schools Book 1* 大学書林 1953

(第 4 章第 3 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

参考資料 5-4-4②: (第 4 章第 3 節)

*New English for High Schools Book 1* 大学書林 1953 年 (昭和 28 年) (本文 pp.23-24)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

本文の→の部分からの抜粋となって、この文章と同じものが『英氏高中英語』に使用されている。

## 【第 5 章】

### 参考資料 6-1: King's English (三省堂) (表紙と奥付け) 写真 (第 5 章第 1 節)

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

### 参考資料 6-2: 台湾教科書タスクの写真 (第 5 章第 2 節)

「文学教材が培う学力 小説」 1995/2008 1) 論理的・批判的思考力

①Agree or Disagree:

②Thinking Zone :

(LT2 L8 : While the Auto Waits) p.132 (FE2 L 3: After Twenty Years)p.57

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

①小説のキャラクターを読み取り、それがそれぞれの項目に当てはまるかどうかを見るものの Agree disagree の言語活動があつて、その上で Questions for Discussion の質問を考えさせるプロセスを踏んでいる。

②深い思考を必要とする質問に対し、まず、自分に当てはめどう思うかを具体的に書かれた項目を使い、言語活動をしながら深めていく。

(Why do you think people lie about who they really are?)

**参考資料 6-3: 台湾教科書タスクの写真 (第 5 章第 2 節)**

「文学教材が培う学力 詩」 1)論理的・批判的思考力

①Thinking Zone

②Thinking Corner

2008 FE6 L 4 In William's Words)p.94

2008 FE 乙 6 L 3:Poems of Wisdom)p.55

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

①②詩の中の大きなメッセージも身近な事柄から理解するよう誘導されている。

**参考資料 6-4: 台湾教科書タスクの写真 (第 5 章第 2 節)**

「文学教材が培う学力 小説」1995 2) 文章構成力・表現力

SM5U4 Gulliver's Travels: A voyage to Lilliput p.99

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

“What do you think about the story?” について具体的に何を書くかの誘導がある。

**参考資料 6-5: 台湾教科書タスクの写真（第 5 章第 2 節）**

「文学教材が培う学力 詩」 2) 文章構成力・表現力

**FE5 L 3: Robert Frost and his Poems p.68**

パラグラフ・ライティングの指導—まずは例を読むことから

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

本文のテキストの内容を使ってライティング指導

ロバート・フロストの詩を読み、ある生徒がその感想を書いたと想定。

不自然な文章を見つけてそれを取り除くと論理的な展開のライティングになる。(日本ではライティングは別の教科書を使用し、Reading 教材との接続がないものが多い)。

**参考資料 6-6: 台湾教科書タスクの写真（第 5 章第 2 節）**

「文学教材が培う学力:小説」 3. 創造力 グループ活動

**2008 SM2 U9 : Frankenstein p.180**

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき、電子版では写真を削除させていただきました。

“imagine” , “create” などが出てきて、想像力・創造力を培う意図が見られる  
活動はグループワークからプレゼンテーションへ

**参考資料 6-7: 台湾教科書タスクの写真 (第 5 章第 2 節)**

「文学教材が培う学力」 2008 4) 修辞に関わる知識・技能

① 比喩の技法：直喩・隠喩・心象

**LT2 L 1 Love in the Eyes of Poets : Metaphors and Similes in Poetry p.15**

著作権と公衆送信権などの考慮に基づき，電子版では写真を削除させていただきました。

Similes 直喩 like, as あり      1 Similes 2. Metaphors

Metaphors 隠喩 なし

身近な題材から，まずは理解し，例を使って自分で創作する。

**参考資料 7-1: 1948 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」(第 6 卷)**  
**(復興書局印行: 沈亦珍・程璟編著)** (訳は筆者による, 以下同様)

- 一. 本書は民国 37 年 12 月教育部修正公布の「修訂中学課程標準」の編纂に基づいたものである。編纂は、全書 6 冊で、高校 3 年間の英語科の授業に用いるものである。
- 二. 本書の内容および分量は教育部が現在打ち出している教育の新しいシステムに合わせ、並びに一般的な中学(高級中学)の実情に合わせている。(1 冊で) 1 学期の学習に相応しいものになっている。
- 三. 本書はなるべく新しいものを取り入れている。内容の選択には青少年の生活修養に有益なもの、および、愛国思想をもたらせる現代文から選んでいる。文体は多様な文体を選んでいる。
- 四. 本書の英文の難易度と文章の長さは学年が上がるごとに増している。それぞれ 16 編あり、平均して 1 週間に 1 遍進む換算になっているが、それにこだわらず、教師が前後自由に進んでも構わない。
- 五. 本書はわかりやすい英訳の注釈をつけている。3 冊目から注釈の分量は多くなる。特に語彙の意義について深く掘り下げ、熟語の運用、および特殊な句法の説明に力を入れている。生徒が本文を正確に理解することに力を入れる一方、これを使って、今後の学習の参考にすることができるように配慮されている。
- 六. 本書の各冊の注釈は、その中の各語彙や熟語の出てくる順になっている。調べたり読んだりするときに便利のように配慮されている。
- 七. 本書の単語は難易度にかかわらず、本文に注釈を加えている。しかし、別の意味があるものを書くには限りがあるので、生徒は自ら辞書で調べて誤解がないようにしないとイケない。
- 八. 本書の各冊の練習は口頭練習と筆記の練習の二部構成になっている。前者は本文についての質問であり、後者は方式の変換に注意を払っている。学習者の興味に応じて適合し、書く能力を育成する。

**参考資料 7-2: 1962 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」**  
**(世界書局: 英千里編著・正中書局: 趙麗蓮編著)**

**1962 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」世界書局: 英千里編著 (第 1 卷)**

- 一. 本書は民国 51 年(1962 年)に公布された「修訂(高級)中学課程標準」の中の「高中英語科各規程」の編纂に基づいて作られている。
- 二. 本書は 6 冊からなっている。高級中学とそれに準じる 3 学年の各学期、合計 6 学期で使用する。



三. 本書は第1冊から5冊までは14課、第6冊は12課からなる。

各課は以下の構成になっている

I. 課文 (Reading), その後には以下のものがついている。

- (a) 本文中の語彙のリスト
- (b) 本文中の語彙, 慣用句の注釈
- (c) 本文中の文法・文型の注釈

II. 文法と作文の指導

III. 練習問題

四. 本書は筆者の著作である『新標準教科書初中英語読本』とリンクしており, この教科書と一貫して使用することを言語学的には意図している。しかし, 生徒が中学のとき別の教科書を使用していて, 高校で初めてこの教科書を使用しても言語学的に欠けているところを補うように作られている。

五. 本書は言語学の手法に基づいて, 生徒が英語を学習する目的に沿って教材を実用的な必要性に応じて選択している。一般的に中国人の英語学習の目的は, 知識を吸収するための新しい道具として学ぶ。故に英語学習の第一の目的は読解力の養成である。その読み物としては, 現代の英語作品が最も適している。したがって, 本書の英文は現代の英文作品から選ぶのが原則である。また, 生徒に英語を使って話したり書いたりすることも配慮している。

六. 本書は言語学の手法に基づいて, 新しい語彙を知るときは主な意味を知ることでは十分ではなく, 最も重要なのは, その語が文章の中で他の単語との関係と文章の中で示す意味を理解することである。これはつまり, その文脈における用語の意味を大事にすることで, 文脈の中の語彙 (Vocabulary in Context) が重要で, 本書では, この文脈の中の語彙 (Vocabulary in Context) を重要視し本文中の意義 (Textual Meaning) を中国語で注釈をしている。また, 用語リスト (glossary) を巻末につけてある。

七. 本書は言語学の手法に基づいている。本文の注釈は, すなわち, 本文が中国語で学ぶ知識の深さ・浅さに合わせて書いたものとなっており, 本書の課ごとの語彙, 慣用句, 文法, 文型の注釈に難易度と有無が反映している。中国語での身に着けているものとの相違で配慮されている。

八. 言語学の専門家は文法と作文指導は本文から切り離して単独で教えるべきではないと主張している。それに沿うのは当然ながら, 2, 3 年英語を学習して基礎を持っている初級の場合, 気ままに学習した文法の知識がバラバラになっているものをきちんと整理し, 系統立てて復習すると古いものから新しいものを学ぶことができる。本書はどの課も本文の後ろに必ず第二段階の部分として, 文法と作文が用意されている。この原則に則って, 例えば, 英語の否定文の構造について, 動詞のあとに **not** をつけるもの (He is not my friend.), 名詞の前に **no** をつけるもの (He drinks no wine.), 形容詞の前に

un をつけるもの (He was unable to come.) などの形式である。中学のような初歩の学習でも、高校では、英語の否定文を種類かどれだけあるかを学ぶ必要がある。また、文の強弱の区別、用法の条件などを一通り理解する必要がある。

- 九. 本書には練習問題がついている。本文の内容についての問題と、文法と作文についての練習問題がある。
- 十. 本書は 1 冊ごとに巻末に用語リスト (glossary) と文法重要事項の索引 (Index of Grammar Subjects) がある。
- 十一. 本書には教員用の指導書が提供されている。

### 1962 年「課程標準」準拠版教科書 正中書局：趙麗蓮編著 (第 2 巻)

- 一. 本書は民国 51 年 (1962 年) に公布された「修訂 (高級) 中学課程標準」に基づいて編纂されている。生徒の読むこと、書くこと、および、翻訳の能力を養成できるように全書 6 冊、每学期 1 冊で、高校レベルでの使用に適している。
- 二. 本書は中国固有の道德・民族文化を基にして、そこに西洋の風俗・習慣・礼儀などを加え、生活と教育を通して生徒に話すこと、書くことを通して自由に使える運用力をつけるようにする。
- 三. 本書は有名な詩歌、文学、演説、科学常識などの文章を集め、生徒が興味を持ち、生徒の生活、知能を高めるようになっている。
- 四. 本書は語法においては、機械的なシステムの指導ではなく、本文を使用して練習をして臨機応変に教える。簡単などころからだんだん難しくなり、一方で反復練習をしながら本物の英語を学べるようしている。そして、読んでいくうちに熟知して慣れてきたら、自然に上手になることが目的である。
- 五. 本書は新語 3200 語を使用している。採用語彙は一般的生活で使用する語彙・語句を使用し、生活であまり使用しない難解なものは避け、生徒が興味を失うのを避ける。
- 六. 本書の中の各復習をするときには、習った本文を文法に合わせて反復練習をするようにした。教師は授業時間に何を教えるのかを選ぶことができるし、要点を解釈し書かせることもできる。
- 七. 本書は巻末には学習補習 (Study Aids) があり、各課の語彙と内容についての練習問題がついている。それを授業の後や宿題としてできる。
- 八. 本書は米国の最新の外国語教授法に基づいている。教授資料は指導書に詳しく書いてある。

参考資料 7-3: 1971 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」  
(遠東図書: 梁実秋主編・正中書局: 顔元叔編著)

1971 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」遠東図書: 梁実秋主編 (第 1 卷)

- 一. 本書は民国 60 年 2 月教育部修正公布の「高級中学英文課程標準」の編纂に基づいたものである。編纂は、全書 10 冊で、一学年 2 冊、每学期 1 冊である。自然科学組と社会科学組に分かれており、1 年生は共通 2 冊、2 年生 3 年生は自然・社会各 2 冊ずつで計 10 冊となる。
- 二. 本書の各課の本文は現代の英米の作品から選んである。いろいろな形態の文章を集めている。文章については、簡単で実用的なものから入り、生徒に基礎力がつくようにしてある。内容については文芸、科学、伝記、愛国の事柄などを扱い、生徒の興味をそそり、同時に西洋文化を紹介することを目的とする。
- 三. 各課、本文の前に語彙や熟語のリストがあり、例文もある。生徒は授業の前にこれらの予習をして授業に臨むと半分の労力で倍の効果を得ることができる。
- 四. 各課の新しい単語にも発音記号を使用する。Kenyon and Knott の *A Pronouncing Dictionary of American English* と Daniel Jones の *Everyman's English Pronouncing Dictionary* (1964 年第 12 版) を使用する。
- 五. 各課には、どの語彙にも言い換え練習があり (Substitution)、生徒の理解が困難な文型の学習を助けるようになっている。句型練習 (Pattern Practice) があり、生徒に口頭反復練習できるようにさせる。それで英語の基本文型の用法をマスターさせる。語彙学習 (Word Study) では、生徒の英文の文型と単語など変化に熟知させるようになっている。練習 (Exercises) は生徒に書く練習をさせる。
- 六. 本書の各冊には教師用指導書があり、教師の参考となるものとなっている。

1971 年「課程標準」準拠版教科書 正中書局: 顔元叔編著 (第 2 卷)

- 一、本書は民国 60 年 2 月教育部修正公布の最新の「高級中学英文課程標準」に基づき編纂したものである。編纂は、全書 6 冊で、毎冊 14 課あり、高校 3 年間の英語科の授業に用いるにふさわしいものである。
- 二、本書はどの課も 2 つのパートから成っている。「閲覧文選」と「模範作文」で、前者は多岐の英語を読むことを強化し、後者はよい英語を書くことを強化する。
- 三、「読解文選」と「模範作文」の内容は、往々にしていかにして現代中国人になるかという趣旨のものが多く、その観念における英語の表現方式で、生徒が日常的に用いるのに必要なものが載せてある。すなわち本書の編纂は英語表現の応用能力に重きを置いている。
- 四、各課の練習は 3 つの目的がある。まず一つは発音を強化する。教師と生徒のどちらも発音重視を認識する必要がある。教師は生徒に毎課の本文を自分に続けて音読させる。生

徒は自分だけのときも大きな声で音読する。第二は、作文を書かせることである。中国語から英語に訳す、および自由に文を書かせ、生徒の書く能力を育成する。各訳文を相互につなげて短文が書けるようにする。4, 5, 6 冊目では完成した文章を書かせるようになっている。第三の目的は、文法の活用を強化することである。本文の文法練習は、突破方式を採用している。これは中国の生徒が最も難しい文法の課題を選んで、それを練習し反復して強化するというものである。

- 五、語彙は、第 1, 2 冊目は中国語で解説をしているが、第 3 冊目以降は英語で解説している。徐々に難易度が高くなる効果的学習法を取っている。本書の語彙から英文を作る方法としては、例文はこの時、この場所、人情、物事に合わせ書かれているものが大半で、実用的なつくりになっている。
- 六、本書はその他に完成された教科書用の指導書が付いていて、毎課の文法、句法、文の意味解釈、文章作成法について十分に分析して鑑賞に値するように書かれている。どの課も練習については、参考になる解釈と解答が付いている、この点が答えだけを掲載している他の指導書と違うところで、教えるときにとても参考になる。
- 七、本書の執筆においては、完全を目指したものの、時間や能力において限界があり、漏れたり間違えたりというところがあるかもしれない。内外の専門家・学者や教師の方々からのご鞭撻をお願いします。

#### 参考資料 7-4: 1983 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」(国立編譯館主編) (第 6 卷)

- 一、本書は 1983 年 7 月教育部修正公布の「高級中学英文課程標準」に基づいたものである。並びに 88 年（77 年）に第 1 冊から改編された。
- 二、本書は 6 冊からなり、高校 3 年間の英語科の授業に用いる内容で、毎冊 14 課あり、1 学期に 1 冊使用する。
- 三、本書は毎課、「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」の 4 技能の言語能力を訓練する。各課のすべての活動は平均してこの課の本文をテーマとしてデザインされている。すなわち、総合的な 1 冊の教科書となっている。
- 四、本文の部分は近代の平均的実用的な英文を主にしている。その内容については、生活の意義、文学的意味、科学的色彩があり、および多方面にわたる興味深い文章を含んでいる。
- 五、採用している発音記号は、米国の言語学者の J.S. Kenyon と A. Knott が編纂した『米  
国英語発音辞典(*A Pronouncing Dictionary of American English*)』の表記に則っている。  
いわゆる KK 標記と言われるものである。
- 六、新出の単語はできる限り易しいものから難しいものの順にし、英語の注釈を付け、さらに中国語の訳を付けている。新語の順番は本文に出てきた順になっている。常用語の 5000 語を超える場合は星印\*が付いている。常用語の単語および関連する語句については英

語の例文が付けてある。

七、本文の中に出てくる比較的複雑な文章については簡単な英文の注釈が付いている。

八、本文の後についている練習問題（**Questions on the Reading**）は大部分が内容理解問題で（**Comprehension Questions**），目標は正確に本文の内容を理解したかを測るものなので，本文の内容に基づいて解答しなければならない。一部は応用問題である（**Application Questions**）。目標は正確に学んだことのある教材を使って実際へ応用できるかどうか，そのためには実際の状況に応用できるかどうかを測れる問題が出されている。討論問題（**Questions for Discussion**）は討論して，それを発展させて書くことができるような問題になっている。口頭問題から討論問題に進み，本文やその他の資料を見ないで問題に答えられるようにする。

九、口頭練習は本文中で使用した表現を練習するほかに，本文の内容と関係がある会話を練習する。この部分の練習は書くことの練習に発展させる。

十、毎課の最後の練習（**Exercises**）は筆記の問題となっており，特別統合された練習になるように心掛けている。そのため，作文，翻訳，センテンスを完成する練習，さらに，1フレーズの中に穴埋め，作文などをさせるようになっている。部分的な書く練習は，まず，話す練習を先に行い，さらに書く作業をするようになっている。

十一、口頭練習と書く練習の中に「\*」のマークがあれば，それは比較的難しい問題であるので，教員が自由に選択して進める。

十二、本書にはカセット・テープと教員指導書がついており，指導書にはどの課にも教えるポイントや順序がついていて，教員が参考にできるように詳しく説明されている。

### 参考資料 7-5: 1995 年「課程標準」準拠版教科書「編纂大意」 (遠東図書) (第 1 巻)

一、本書は 1995 年教育部修正公布の「高級中学英文課程標準」の編纂に基づいたものである。本書は 6 冊からなり，毎冊 12 課から成る。教師は生徒のレベル，需要や興味に合わせて 10 課を選び，後の 2 課は課外学習や休暇中の学習のものである。

二、本書は **Communication Syllabus** の設計された総合的教材である。「聴く」，「話す」，「読む」，「書く」の言語能力を育成するだけでなく，さらに，各種活動と環境に応じた練習が設計され，生徒の学習への興味と実際のコミュニケーション能力を育成する。

三、本文は実際の生活に使用できるよう，実用性や知識および趣味性（興味のあるもの）のあるものを選んである。内容は生徒の生活背景や心や知識の発展に及んでいる。多様な文体を用いて，そこには各種テーマとコミュニケーション能力の育成を目指している。

- 四、毎冊ごとに、本文は各種のテーマと文体のバランスを考えて構成されている。各札に出きるだけ、詩歌、文学の名著、科学技術の新しい知識、環境保全生態に関するもの、自国や外国の文化の紹介、天気、実用的な知識、運動・レジャー、口語のコミュニケーションの技巧、作文の技巧、ユーモアの短編、および、人を感動させる物語を含んでいる。
- 五、全教材は生徒の読む技巧を育成するように系統立てて紹介されている。まず、1, 2 冊目の文章の大意が理解できるように、3, 4 冊目はスキミング、スキャン読みができるように、文の意味を推測する訓練が用意され、5, 6 冊目では臨機応変に活用できるように作られている。
- 六、全冊は系統立てて生徒の語彙力、応用力を増強するように構成されている。本書の「言語応用」の欄では、多くの語彙および応用力を育成する活動のほか、それぞれ新しい新語を使った英文の中に自然で生き生きした表現を使っている。教師指導書では、新単語の語源や用法および、**collocation** などのリストが資料としてある。
- 七、本書はカラー版で、各課に生き生きとしたリアルな挿絵がついている。これらで高校生の学習の興味を高め、内容や練習問題への理解を高めている。
- 八、本書で用いられた語彙は生徒のレベルにあわせている。例文はできるだけ常用の 5,000 語の範囲内で出している。並びに毎冊の索引で、常用語の範囲を表すようにしている。
- 九、本書の編纂は以下のようになっている。
- 毎冊は目次から始まり、その目次には各課のテーマ、本文のカテゴリー、文法の要点、言語応用、コミュニケーション能力および発音練習などの順序になっており、毎課の構成は下記のようにになっている。
1. 状況の挿絵：毎課の本文の前にテーマと関係した挿絵が書かれている。本文の前に **Pre-reading** があり、本文に入る前のウォーミング・アップになっており、生徒を本文に誘導する。
  2. 本文：生徒のレベルに語彙の難易度を合わせている。各課の本文の後には **Main Ideas, Comprehension Check, Discussion** の 3 種類の問題がある。はじめのものと読む技巧を訓練し、次は生徒の本文の理解度を問うもの、最後は推理や討論、および表現力能力を訓練する。
  3. **Vocabulary, Idioms and Phrases**：新出単語およびイディオムの注釈はすべて本文の意味から出ており、英文の解説や注釈はわかりやすいものになっている。例文はなるべく自然で意義のあるものになっている。**Words for production** と **Words for recognition** は、前者は発音、注釈、例文があり、後者は発音と注釈のみである。使用している発音標記は **KK** 標記である。
  4. **Grammar Focus**：この課の常用文法、句形の紹介をする。これは多様性のある練習活動をして、生徒の文型を活用するのに慣れさせる。

5. **Discussion** : 各課に 2, 3 問の思考, 論述性のある問題, もしくは経験をシェアする問題がある。それをグループ討論できるようにしている。生徒の英語での思考や口述表現能力を育成し, さらに書く練習へのウォーミング・アップになっている。
6. **Language Use** : 本文のテーマ, あるいはカテゴリーに関係した語彙群を紹介したり, コミュニケーション力や言語応用力, 並びに状況での活用ができるように設計されている。生徒が日常生活の中で延長して使用できるように, テキストと生活の橋渡しの役割をしている。この部分の活動は豊富で, 面白く作られている。謎々や早口言葉, 祝祭日のイベント, 詩や押韻, 童謡, パソコン・科学技術用語, 言葉のシステム, 電話の応対, 標語の知識, 広告の分類, メッセージ, 手紙の書き方を含む。
7. **Conversation** : 会話の内容は本文の内容と関係している。そのうえ生徒の生活経験と関係したものになっている。生徒が練習し, 日常生活で利用する機会のあるものに配慮されている。
8. **Listening** : 聴く練習の内容は本文の内容に関係したものとなっており, コミュニケーション能力に関係したものとなっている。各課の活動の方法はそれぞれ変化があり, 生徒が異なる状況で使用できるように学べるよう配慮している。
9. 発音練習では, 第 1 冊から第 4 冊までそれぞれ平均して発音練習がある。母音, 子音, 重音, 連音, リズム, および語調などを系統的に復習と練習をさせる。それによって正確な発音を習得させる。第 1 冊は重点的に母音練習と母音の比較をさせる。
10. 格言, 謎々, 笑い話では, 毎課の最後に空欄を設けて記入できるようになっている。そこに 1, 2 個の格言や謎々や笑い話を入れて生徒の学習への興味を高める。
11. 付録では, ローマ字発音, 自習用カードがついている。本書では, 3 種類のローマ字の発音記号をつけている。3 種とは, 注音記号第二式, **Wade-Giles**, そして中国語のピンインである。現在台湾人の人名, 地名, ストリートの名称の発音の種類は多くて一致していない。教育部の民国 75 年 (1986 年) が公布した国語 (第一版) では, 注音第二式を採用しているが, 使用している人は多くない。大陸および国際間では中国語のピンインを使用しているものが多い。外国雑誌, *TIME* や *NEWSWEEK* では, 人名, 地名の多数が中国語ピンインを採用している。現在, パソコンの中国語のローマ字ピンイン入力法は, 中国のピンインを採用している。(つまり漢音)。早期の台湾が使用しているピンイン (発音記号) は主に **Wade-Giles** 式に基づいている。目下私たちが見かけるストリートの名前や地名はほとんどみんな **Wade-Giles** 式に沿っている。新しく編集された中学の英語のテキストの地名は, 新聞局が作った英語の発音方式で表記している。その他, 原則的に国語の注音第二式を採用している。本書は基本的に国民中学からの方法にのっとっている。その方法を受け継いで人名は中国語注音第二式を採用している。しかし, もし本書の中に出てきた人物にすでに特定の発音方法があればそれを尊重している。教師は異なる発音方式があることを生徒に紹

介してしてもよい。

十、本書は教科書以外にさらに他の以下のような資料を備えている。

1. 練習帳：生徒が授業の後、各自で練習するのに用いる。
2. 教師指導書：教師の要点や活動のアドバイス、本文、および文化的背景の資料が詳しく説明されており、授業の参考になる。
3. カセット・テープ：本文、会話、リスニングおよび発音練習に使用できるように備えられている。
4. 基本文法：基礎的・実用的な文法のシステムを含み、中学で出てくる文型、そして文法を含み、中学から高校への橋渡しとして使用できる。
5. 基本語彙：国民中学の必修と選択英語で学んだ語彙を含んでいる。中学で習得した語彙の復習をし、中学での習得事項から高校につなげる。
6. 課外読書用教材：各種の種類、テーマ・レベルの系列授業以外の読書を提供する。各種ことに生徒の講読の興味を育成し個人で本を読む能力と多読の習得につなげる。
7. 高校英語で評価の基準を決める技巧と参考となるテストの作り方：  
教師に評価の基準を決める方法と良い試験の作成方法についてアドバイスし、模範を提供する。「聴解力」を試験するためのカセット・テープがついている。
8. 大学入学試験の新しい傾向と問題分析：  
大学統一試験の発展の傾向と並びに大学別の試験を分析する。  
試験の出し方、良い問題としてはどのような内容のものを出すか、正確で有効さを強化し、学習成果を出すようにアドバイスする。

十一、本書の編集には十分な注意をしたが、何か不備があればご指摘ください。

#### 参考資料 7-6: 2005 年「課程綱要」準拠版教科書「編纂大意」 (遠東図書: *NEW Far East English Readers*) (第 1 巻)

一、本シリーズ教材は、中華民国教育部が 2005 年に修正・公布した、「普通高等学校英語課程暫定要綱」に基づいて編集・完成したものである。全部で 6 冊あり、高校 3 年生の学習に供する。

二、本教材の編集および練習作業の設計は、コミュニケーション式教授法 (Communicative approach) を採り、また内容重視の教授法 (Content-based instruction) と融合させている。教育の目標は、生徒の聴く・話す・読む・書くという言語のコミュニケーション能力を養成し、また知的で興味を引き啓発的な文章を選び、練習作業を通じて、生徒の学習意欲や人文・社会・科学技術に関する知識を高めることである。

三、本書の編集の枠組みおよび各課の特徴を、以下に述べる。

全体は 2 つの部分に分かれており、第 1 部分は読解および関連作業、第 2 部分は会話で



ある。

(一) 読解 (Reading) および関連作業

- 1, 各課本文に入る前の作業 (Getting Started) : 各課の本文の前に一枚の場面, あるいは主題と関連する絵や図が数枚置かれ, その下に選択問題, 組み合わせの問題あるいはオープン形式の問答があり, その課の主題を提示し, ウォーミング・アップとして生徒を本文へ導く。
- 2, 各課本文 (Reading) : 本文として選ばれた題材は多様であり, また知的で興味を引き実用的・啓発的であるよう配慮している。内容は生徒の興味・生活背景や心理・知能の発達状況に合わせ, さらにジェンダー教育・人権教育・環境教育・生命教育など関連するテーマを取り入れて, 生徒の人文的素養を高めることを図る。各冊は各種の主題と表現形式のバランスに配慮し, 文章はできるだけ詩歌・文学作品や科学技術の新知識, 環境保護や生態系, 国内外文化の紹介, そして人物紹介・実用知識・スポーツ・レジャー, 更にユーモラスな短文や感動的な物語など, 広範囲のものを選んで取り入れる。各冊の文章の選択は, 生徒のレベルに合わせて順を追って進むようにする。
- 3, 読解練習 (Comprehension Check) : 各課の後に, 読解練習が二つ設けられている。一つ目は生徒が本文の主旨 (Main idea) をいかに把握したか, 二つ目は本文の内容をいかに理解したかを確かめるものである。
- 4, 課題討論 (Discussion) : 各課に思考問題・論述問題あるいは経験を分かち合う問題が 2, 3 個設けられており, グループ討論形式を採ることができる。それによって生徒の英語による思考力・口頭表現力を訓練し, また作文練習のウォーミング・アップ活動とすることもできる。
- 5, 語彙と短文 (Vocabulary, Idioms and Phrases) : 新出単語やフレーズの注釈はその課で使われる意味を主とし, 英文の注釈には分かりやすい単語を用い, 自然で有意義な例文で説明する。語彙は「応用語彙」(Words for Production) と「認識語彙」(Words for Recognition) に分かれている。前者は音標・注釈に例文を付し, 後者は音標と注釈のみを示す。新出単語の音標には, KK 音標を採る。
- 6, 語彙の増加 (Word Power) : このセクションの目的は, 生徒の語彙量を増やし, 語彙の応用能力を高めることである。その内容は, 語彙のコロケーション (Collocation), 関連語彙, 単語の構造および字源などの形で示す。
- 7, 文法の要点 (Grammar Focus) : その課に現れた重要な文法・文型を紹介し, 様々な練習活動を通じて, 生徒が文型を自由に運用できるようになるのを助ける。
- 8, 言語の応用 (Language Use) : 本文の主題や性質によって, 関連するコミュニケーション機能や言葉の応用を紹介し, 複数の場面の絵や図を示し, 生徒により多くの相互練習の機会を持たせ, 学んだことを日常生活の中で応用し, 教科書英語と生活英語とを関連づけさせる。
- 9, 聞き取り練習 (Listening) : 聞き取り練習の内容は, 本文の主題あるいは本文と関連

するコミュニケーション機能と関連する。練習方式は各課によって変化があり、それによって生徒に様々な聞き取りの類型に触れさせる。

10, 作文練習 (Writing) : 本教科書の各冊には、全て作文練習が設けられている。最初は単文を、後に段落や文章を書くように順を追って進む。第 1 冊目は主に文型を把握し、単文を書くことに重点を置く。第 2 冊目は文の組み合わせや展開を練習し、第 3 冊目では段落、第 4 冊目では文章、第 5 冊目では様々な体裁の文章、第 6 冊目では応用文をそれぞれ書く。読解と作文の関係を強めるために、各セクションの例文や練習は、大部分テキストあるいはテキストの主題と関連する内容から選んである。

11, 格言、名言、謎々、笑話 (Proverbs, Quotations, Riddles & Jokes) : 各課の終りに余白があれば、格言、名言、謎々、笑話をつか二つ書き添え、生徒の勉強に対する興味を高める。

## (二) 会話 (Conversation) :

本教材の会話の部分は、九年一貫制課程のコミュニケーション式生活英語会話に引き続き、生徒と密接な関係がある学校生活に重点を移し、生徒が校内で英会話を行なうために必要な常用語彙・慣用句や素材を提供する。本教材の会話の主題は第 1, 2 冊目の「キャンパス生活英語：台湾篇」、第 3 冊～第 6 冊目までの「キャンパス生活英語：米国篇」に分かれている。各課の会話内容は、連続的な興味深い物語で示されている。高校 1 年目はアメリカの交換留学生 Wendy が台湾に来て高校に入学し、台湾の生徒たちと様々な形で交流するのを描いている。高校 2, 3 年目は台湾の生徒 Stella の、アメリカでの学校生活が描かれている。本教材の会話教育の主旨は、以下の 2 点である。一つは、生徒が高校のキャンパス英語に慣れ、学習したことをすぐに毎日の生活コミュニケーションの中で、応用できるようにすることである。もう一つは、文化の学習である。会話の各課には、重要な文化の主題が含まれている。教員指導書も、主題と関連するアメリカ文化に関する補充資料を提供し、それによって異文化教育に役立つようにしてある。

四、本書は教科書以外に、以下の関連資料を備えている。

- 1, ワークブック : 生徒が授業後、自習・練習に使用するために提供する。
- 2, 教師用指導書 : 各課の教育目標、教授法のアドバイス、各課の教育のヒント、そして補充資料や各課本文の背景、更に参考資料や課外読用の文章を含み、教師の参考のために提供する。
- 3, 録音テープ (CD) : 本文・会話など単元の聞き取りおよび発音練習のために提供する。
- 4, コンピュータ連動 DVD : 各種のメディア連動練習に供し、教師の教育と生徒の独学に備える。

五、本書の編集・校正には可能なかぎり万全を期しているが、不十分な点があれば、識者各位のご指摘を仰ぎたい。

### 参考資料 7-7:

#### 2008 年「課程綱要」準拠版教科書「編纂大意」(三民書局) (第 1 卷)

一、本書は民国 97 年(2008 年)1 月修正發布された「普通高級中学必修科目「英文」課程綱要」に従って編纂されている。

二、本書は 6 冊の構成で、毎冊 12 課あり、高校 3 年間の上期、下期各 1 冊ずつで終了する構成となっている。一学期を 4 期に分け、毎週 4 コマ分の学習になる。第 3 冊目からは本書の基礎教材と、さらに深く広く発展した B 版という基礎教材に追加した教材の方式をとる。また、長年海外で施行されてきたプロジェクト活動を入れて、生徒をグループに分けて、または個人で、生徒自身によって学習資料を集めて整理して発表する学習法を採っている。このような英語学習によって、英語を日常生活の中で使用できるようにする。

三、本書の主たる目的は生徒の「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」力を養い、世界の人とのコミュニケーションの道具としての英語力をつけることである。読解のテーマは厳選し、聴解の内容を設計し、並びに「書く」基本原則を紹介する。そこから期待することは、生徒がそれを通して生活に近い題材を取り入れて、その多様なテーマから自分の「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」の能力を累積していく他、生活の基本的な学習をし、文化を学び、国際的な視野を育てることである。

本書の設計は読解と口語聴解力の二大部分の練習を含む。各部分は独立したシステムがあり、その上、内容面の難易度は順序だてて徐々に進む方式をとっている、本書の最大の革新的な部分は以下のことである。

毎冊ごとに 12 課を 3 つの部分に分けている。第 2 の 4 課は一つ目のものより難しく、第 3 の 4 課は二つ目のものよりさらに難しくなっている、同じまとまりの中の難易度の順序は以下のことによって決まる。たとえば本文の教材の難易度と生徒の理解度、新用語彙と既修得語彙の難易度とその量、文型の難易度である。毎 4 課で一つのまとまりになって反復練習を順序だてて少しずつ進んでいく以外に、高校の定期試験のスケジュールに合わせてある。毎回の試験が終わった後の初めての課(5, 9 課)は興味深く面白い内容になっている。それが新たなまとまりの始まりとなっている。毎回のまとまりの最後の課(4, 8, 12)は、教師の指導の助けとなり、生徒の学習のバランスをとるようになっている。

- I. 本書のその他の特徴は以下である。まず、(Reading Task)があつて、英文の読解の基礎となる技巧(skimming, scanning など)最初に例文を示して、本文を読む前の重要な準備となる。それで生徒の基礎的英文の読解能力を早めに育成し強化する。この方法は専門用語がもたらす学習への恐怖や拒否感を緩和させ、生徒が本文を読む前の読解の技術をつけるのを助ける。
- II. 本書の第 1, 第 2 冊中の「読解」の部分の「句形練習」(Pattern in Use)は(「課程

綱要」の)「教材の概要」の(二)教材編選原則要求に合わせてある。一方、中学で学習した文法の句形や概念の整理をし、融合するように組み入れる。その目的は小学校中学校の9年間に学んだことを生徒の中で復習させるのを助けること、並びに生徒に初めて高校の英語教材に接したときの恐怖感を緩和させる。一方で本書は高校の学習や学ぶべき基礎文法および句形の概念が備わっており、それを身に着けさせるのを助ける。

- III. 本書の「読解」部分の「作文練習」(Writing Hands-on)は、作文を書く要点とシステムを順序立てて少しずつ進むようになっている、生徒は簡単なものから難しいものへ作文が書けるように、概念と技巧を学ぶ。本セクションの内容は詳しく、豊富で、それは独立した文の紹介や修飾語や標語符号の使用法、主題の認識、段落の資ステム、用語や語彙の使い方、文章のつながり、文体の紹介段落の書き方がすべてその中に入っている。徐々に進む方式は6冊すべてに採用させている。
- VI. 今までの教科書では、付属していた会話教材のすべては各課の中に組み込まれていた。並びに本文やそれに関する内容とその課の会話は密接に関係していた。しかし、これは編集の幅に限界があり、生徒に日常会話能力を増進させることが難しく、生徒が学習の動機を持つのに障害となり、教員も教える時間や場所、設備などにも限界があり、話す力、聴く力を育成にするのは難しい。その他、口語英語と書く英語は違うので、使用するときの環境や場所に大きな違いがある。そこで、「話す・聴く英語」の課の編集をして、言語使用機能を導入し、実用的生活のテーマに則した多種多様な生き生きとした情景を合わせて生徒にさらに有効で系統立てた「話す、聴く」能力を育てる。「自ら学ぶ方法」でさらに教員は柔軟に時間を調整して有効に目標を達成できるようにする。

#### 四、本書の各課の内容、特に重要な点について

##### I. 読解 (Reading)

###### A. 読解前活動 (Before You Read)

毎課の最初のページにあり、絵と Warm-up の問題で構成されている。絵は生き生きとした活発な漫画や写真で本文の内容を伝える、そして生徒に学習的な雰囲気を作り生徒がその内容について興味を持つようにしている。Warm-up は本文の内容および主題を生徒に予測させるように導くものであり、生徒が自分で表現したり、思考したり、互いに討論したりできる能力を導く配慮してある。

###### B. 読解問題 (Reading Task)

毎課本文の最初の部分にあり、生徒が本文を読解する前に基本的な読解の技法と読むときに必要な注意させるべきことが書かれている。「読後問題」では、最初の質問で本文で提示される内容や主題を、次の質問で生徒がその内容と本文の技巧を確実に把握しているかを確認する内容になっている。

### C. 本文 (Reading)

本文の題材内容は、青少年問題、生命教育、文化習慣、科学の知識、伝記・現代の人物に特化したものを主題にしている。毎冊ごとに一つ文学作品がある。それによって知識、趣味、実用性、啓発性、文学性を養う。それを次第に難しくなる方式と循環式（復習する方式）によって編纂してある。

### D. 読解後 (After You Read)

生徒が本文の趣旨と文意をどの程度理解したかを測る。それには「読解確認」(Comprehension Check), 「討論の問題」(Questions for Discussion)の両方の活動がある。「読解確認」のはじめの問題は「読解問題」(Reading Task)に対して出されていて、読解の能力を強化する。その他の問いは生徒がキーワードを把握しているか主題の語句を把握しているか練習する。さらに進んで文意の重点を掘り下げ、文意が正しく伝達されているか情報をさがす。「問題討論」では二問あって、それぞれ二つのレベルに分けられる。そのうち一つは読解を通して知識を吸収し、内化しその後で討論して自分の考えを述べるようにする。生徒が本文に対する理解をさらに深め、並びに生徒の表現力を育成する。次の問題は、生徒の実際の生活に関係した問題を討論しあって、生徒が自分を顧みることを目的としており、生徒に創意工夫させることを要求する。そして本文以外の答えを提供し、生徒に資料を調べて自分でそれらを整理してその後クラスメート自分の調べたことの心得や習得したものをシェアする。また、生徒に今持っている情報を総合的かつ評価したのち、今後起こりうる発展を予測させる。以上のような教科書の設計を通して、生徒に読解の他、生徒の思考、論理的思考、表現力、判断、そして創造力を育成する。

### E. 語彙, イディオム, 慣用句

以下の三つの部分を含む。

- (1) 語彙は「応用語彙」と「認識語彙」の2つに分かれている。「応用語彙」は英語で注釈や解説をしている。並びに例文を載せている。例文の前には項目符号を使用している。英文の解釈と例文を分けて生徒に読みやすくしてある。「認識語彙」は生徒が本文に対する理解を深める補助をしている。語彙は文中に出た順になっている。どの字も KK 表記を用いている。並びに品詞も載せている。いくつかの語句の重要単語の品詞を載せている。生徒が他の種類にも触れられるように、変化および、重要単語が入っている。
- (2) イディオムと慣用語は英語の解説並びに状況が明らかで生き生きとした例文を載せている。
- (3) Word File : 本文の語彙やイディオム, 慣用句を補助する目的で本文と関係した慣用句あるいは成語, 本文中の語彙の Collocation も載せている。英文の構

文の方法や Prefix Suffix などの運用を載せ、生徒に語彙の補充をする。教員は教える環境や時間により柔軟に選択し、このセクションを使用する。

#### F. 句形練習

練習を通して生徒に重要な語法のシステムを認識させる。さらに進んで文法の知識を増加させる。それで生徒の語学能力を上げる。練習は「単語式」と「状況式」の両方で行い、生徒に生き生きした状況を使い、練習がつまらないものにならないようにする。

#### G. 発展式活動

本文の主題を基礎として、口語的な活動とリスニング練習をする。生徒が有効にその課のテーマについて復習できるようにし、「話す」、「聴く」機会をそれらの活動の中でその課で学んだものを応用できるようにする。「発展式活動」のテーマは分析と帰納と整合の三つのポイントで学んだことから生徒が主題を基にしてさらに拡大してその上で資料を調べたり、関係する書籍を読んだり、その後それについて、生徒同士が意見交換をしたりする。

#### H. 書く練習

書くこと概念と事項を系統立てて紹介する。それにより、難しくてなかなかできない練習問題を補う。しっかり順序だてて勉強できるだけでなく、Writing に対する恐怖心を排除する工夫をしている。

毎課の練習はできるだけ使用する語を本文に則したものにして、書く方法を学ぶだけでなく、書くという概念と技巧を本文に出てきたものと呼応して紹介して学習効果を高める。その設計は教育部の「課程綱要」に則る。学習したことのある語彙を再度使用することで復習と再確認の目的を達成できる。

### II. 口語とリスニングの訓練

各冊ごとに 6 つの課を含む。どの課も一つの主題があり、毎課に以下のものを含む。

#### A. 会話

2 つの会話から構成される。主題は同じものであるが、別のシーンを用いている。

#### B. 口語練習

内容は「実用用語」および「練習」の二つの部分を含む。学習強化をし、並びに会話单元の中の「実用用語」を応用させる。

#### C. リスニング練習

一つか二つの練習を含む。それぞれ「単語式」と「情境式」の練習がある。その

内容は会話の主題あるいは重点を設定して、そして生徒にその対話の基本情報を把握できるように訓練して、同時に英語の発音をと語彙と語調に慣れさせる。

五、本書の付録には、「教員指導書」、「練習帳」および録音教材、PC に使用できる教材がある。「指導書」は各課で教えること。目的について、指導方法についてのアドバイスおよび、各課の詳しい解説がついている。並びに本文の練習内容の参考となる解答およびその他参考になる練習など、教える上で参考になることが提供されている。

六、本書の編纂には全員で何度も検討を重ね、それぞれの仕事を協力し作成したものである。英語を教えることは大変なことであるが、教材の編集にも労力と時間が必要で、そのような思いを尽くしたものである。しかし間違いもあるかもしれないので、専門家の方々、現場の方々のご指摘をいただければ幸いである。

## 【第5章・他】

### 参考資料 8: 実態調査報告書

#### 参考資料 8-1: 2014 年台北市実態調査（学校訪問と授業観察）

##### 1. 訪問校と授業観察の詳細

##### 1.1 訪問校: 台北市立成功高級中学

訪問日: 2014年 3月4日（火）11:00-12:00

見学した授業:

Textbook: Lung Teng English Readers II (2008年「課程要綱」準拠版)

Text: Lesson 3 “Is Your Diet Saving the Earth?”

生徒の学年と1クラスの人数: 10 年生（高校1 年生） 男子41 名

##### 1.2 訪問校: 台北市立中山女子高級中学

訪問日: 2014年 3月4日（火）16:10-17:00

見学した授業:

Textbook: *San Ming English Reader, Book 4* (2008年「課程要綱」準拠版)

Text: Lesson 4 “The magic Bean”

生徒の学年と1クラスの人数: 11 年生（高校2 年生） 女子40 名

##### 1.3 訪問校: 国立台湾師範大学附属高級中学

訪問日: 2014年 3月5日（水）9:10-10:00, 10:10-11:00

見学した授業:

Textbook: *Far East English Reader (乙) Book 2* (2008年「課程要綱」準拠版)

Text: Lesson 3 “Something Old, Something New”

生徒の学年と1クラスの人数: 10 年生（高校1 年生）男女合わせて40名

教科書については、同じ学校でも学年によって採択する教科書が異なることもあるとのことで、概してその学年の英語の教員が決めることのことであった。授業は50 分授業で、一般に普通教室で行われ、どの学校も各教室にプロジェクターとPC が接続されており、パワーポイントや動画、音声と結びつけた授業をするのが一般的とのことである。授業では、全ての学校で英語のみを使用するのが基本ということであった。また、授業形態は、教員からの全体への講義形式の教授の後はグループ活動を中心した、コミュニケーション・アプローチ、統合的活動が行われていた。

##### 2. 授業観察

ここでは、第6章 第3節で言及した Content-basedが顕著な形で授業に反映していた台北市立成功高級中学の授業を取り上げ、その詳細を述べる。



## 2.1 台北市立成功高級中学（高校1 年生）

教室は、教師と生徒が対面する形で机やイスが並べられていたが、すでにグループが作られており、教員主導の説明と生徒たちのグループ活動がバランスよく取り入れられて授業が進められていた。参与観察をした授業を含む課“Is Your Diet Saving the Earth?”の全体の授業進度は以下のとおりである。

参与観察をした時間は、“Is Your Diet Saving the Earth?”の3 回目の授業となり、先の2 回で生徒たちは”Vocabulary”を学び、前時には簡単な単語の試験を受けていた。本時は本文のリーディングの授業となっており、次回は文法，“Activities”に2.5～3 時間ほどかけ、1課を5 時間ほどで完了するとのことであった。

### 《今回の参与観察》

グループ別の机ではないが、生徒は6 人ほどのグループに分かれ、話し合いをして答え、グループごとに正答を競いながら、授業が進められていた。

- ① 前回の復習（単語）テスト（5 分）を行い、その後、友達と交換して答えを確認。
- ② 本日の授業 Lesson 3
- ③ まず本文を先生が音読する p.40
- ④ 内容についての確認

T: We need to think about saving the earth. Have you ever seen “An Inconvenient Truth” by Al Gore, the former vice president in the US?

その後、内容についての教員から発問があった。

時々中国語を混ぜながら、生徒との問答によって答えを確認していく。

パワーポイントを使いながら進めていく。

- ⑤ 次にこの章の用語の定義の確認をする

グループで話し合ってから英語で各自が答える。多くの生徒は英語で予習してきている。パワーポイントには以下の設問が書いてある。

Q1. What is global warming?

Q2. What is the greenhouse effect?

Q3. Where does the term “greenhouse effect” come from?

Q4. What are greenhouse gases?

- ⑥ これらの設問に生徒が挙手して英語で答える。

教員は時々返答に詰まっている生徒に対し、中国語や英語でヒントを与えながら答えさせている。

教員が追加として、以下の関係した用語の説明をパワーポイントを使用して行う。

Abnormal conditions, Drought, Flood, Iceberg Melting etc.

- ⑦ 教員から「皆さん、理解が深まりましたが、最後にこの設問にはどのように答えるでしょうか」との前置きがあり、次の発問がある。生徒はまずグループで考え、挙手して答えを確認。

Q1. What should we do to slow down and eventually stop global warming? Think about what you yourself, your family, the community you live in, corporations, and the government can do to address the climate crisis?

生徒が挙手で答える。センテンスになっていない解答が多いとはいえ、活発に発言されていた。

S1: Eating local foods.

S2: Use and support public transportation.

Eat Less meat.

S3: Reuse, recycle things.

S4: Eating seasonal foods.

S4: Use hybrid cars.

S:5 Plant trees.

- ⑧ 最後にまとめのワークシートをする。本文が書かれており、穴埋めで用語や熟語の意味を書くもの。

まず、グループで話し合い、挙手して答え、確認する。

## 2-2. 授業観察についての全体のコメント：

教員からの発問が“critical thinking”を意識したもので、生徒との問答によって答えを出していくところが、生徒の思考をサポートする手法として注目できる。最後の設問 “What should we do to slow down and eventually stop global warming?” までに、地球温暖化に関係した用語の確認と原因・影響を確認した上での積み上げができており、その意味で “scaffolding（足場作り）” ができている。その他、グループディスカッションは中国語で行われていたが、予習は英語でなされており、皆、活発に話し合っていた。生徒の発音はおおむね良く、教員の英語の聞き取りもよくできているようであった。生徒がよく授業に参加し、大変楽しそうに授業を受けていたのが印象的であった。教員からの発問、生徒同士のインタラクションを重視した授業であった。

教員は参与観察した授業では、「地元産で、季節のものを消費し、肉の消費を減らすなど、食に気をつけることで地球温暖化に貢献できる」と結んでいた。ここからも明らかな

ように、この授業は2014年に行われていたものであるが、環境問題に対してすでに社会がある程度の成熟しているのうかがえる授業であった。

見学した授業はどれも、各章のはじめでは、新出単語の意味から読解に至るまで、教員が細かな質問をすることからはじめ、十分なインプットをしている。日本と比較すると新出単語が多く、2008年「課程綱要」改訂後にさらに単語数が増加し、高校3年間で2800語であったのが、改訂後は3600語へ増加している。単語や用語の指導に重点を置いているのはこれが所以であろう。また、2008年「課程綱要」では、「論理的思考を運用」という文言が目標のみならず、随所に加わり、単に覚えるだけでない、「判断力や分析力を養う」ことに重きが置かれるようになったのは大きな変革といえる。これは、教員との面談でも教員側からたびたび指摘されており、それが授業の中でも反映していた。

また、詳細は紙面の関係から述べられないが、国立台湾師範大学附属高級中学での、ウエディングを教材として扱った授業では、イギリスからはロイヤルウエディングの動画を、アメリカからはTVドラマの“Friends”から関係した場面を出し、内容理解、聞き取り、異文化理解として使用していた。以前のパイロットスタディでは、題材がアメリカに傾倒している結果を得たが、今回は幅広い英語の教材をオーセンティックということに配慮して使用されているのが印象的であった。

### 3. 教員への質問紙調査・面接調査とその結果

授業は、全て英語で行われる授業と、中国語と英語の両方が使われる授業が行われているということであった。1課に5時間をかけて指導するのが一般的であり、「課程綱要」に改訂後は、教員の采配に任されることも多くなり、教科書の教材をすべてしているわけではなく、教員が選んで行うことも多く、文法やライティングに関しては、独自の教材を使用することも多いようである。このため、教員のための教科書指導書も改訂後は細くなり、指導がしやすい工夫がなされているとのことであった。

どの教員も改訂後は、「論理的思考力の養成」に留意し、その指導に時間をかけているとのことで、加えて語彙力を重視しているとのことであった。ライティング指導も重視され、これは、大学入学試験に筆記の英作文が2割から3割を占めるためであると考えられる。書く能力をブレイン・ストーミングの説明などを系統立てて指導し、このような方面から育成する重要性についてはすでに指摘されているとおりであり(Swain, M. 1985), 四技能の指導が留意されていることがうかがえた。

「文学」については、台湾では2008年「課程綱要」改訂前後で、重視される傾向に変化はなく、どの教員の方も、言語教育という観点からは必須のものであるという意見が聞かれた。言語の美しさを知るためには、詩を扱うこともまたこの所以からであるとのことであった。文学はまた論理的思考の養成においても理想的な題材であるとの意見があり、教科書研究からの文学作品の比率の大きさは、現場でも支持を得ていることが明らかとなった。

参与観察した授業では、様々な言語活動で英語を使って思考し、自己表現することが求められていた。このような授業を行うためには、教員は英語力と指導力の両方の実力が必要なことは言うまでもない。教員教育の必要性も十分考慮されるべきである。面談をした教員は、研修制度があり、多くの時間を割いているとのことであった。教員教育については、これからさらに調査を深めていきたい項目である。

#### 4. まとめ

英語でものを考え、論理的思考に働きかける教材の構成や指導法は、これからますます日本の英語教育に必要となるものであろう。まず、教員からの考えさせる「発問」については考慮の価値が十分にあるものである。さらに、内容重視の教授法（CBI）、コミュニケーション・アプローチ、統合的アプローチが用いられ、特に他教科との連携をあげ、「言語と専門知識の両方を英語学習によって学ぶ」という姿勢は評価できるものである。

### 参考資料8-2: 2004年台北市実態調査（学校訪問と授業観察）

#### 訪問校と授業観察の詳細

##### 1. 訪問校: 新北市立新店高級中学

訪問日: 2004年 3月29日(月)

Textbook: *Far East Readers Book IV* (1995年「課程標準」準拠版教科書)

Text: Lesson 8 “Tornadoes”

生徒の学年と1クラスの人数: 10年生(高校1年生) 男女合わせて41名

##### 2. 訪問校: 台北市立景美女子高級中

訪問日: 2004年 3月30日(火)

Textbook: *San Ming English Reader, Book 2* (1995)

Text: Unit 5 “The Diving Lesson” (1995年「課程標準」準拠版教科書)

生徒の学年と1クラスの人数: 10年生(高校1年生) 女子40名

### 参考資料 8-3: 2014年教員への質問紙調査および聞き取り調査

#### 2014年台北市実態調査

*To Senior High School English Teachers* 質問紙調査と聞き取り調査(重要なものを抜粋)

実施日: 2014年2月から4月

協力者: 以下の高校に勤務の英語教員2名

台北市立成功高級中學  
國立台灣師範大學附屬高級中學

(回答については原文のまま)

Q1. What differences, between the old and new versions of MOE guidelines, are most apparent and/or most significant to you?

Teacher1: The new MOE guidelines promote teacher's independence as far as the choice of the teaching material is concerned. Instead of following one textbook only, the teacher is encouraged to gather and edit his/her teaching material catered to the needs of his/her students. Also, the cultivation of critical thinking is highlighted in the new MOE guidelines. It is therefore important that the teachers involve the students in discussions that bring out logical conclusions.

Teacher B: Based on the curriculum guideline, the element of critical thinking is added.

Q2. Unsurprisingly, the MOE guidelines are followed to a considerable degree in the textbooks but individual variations and changes are clearly also apparent. What differences, between the old and new textbook versions, are most apparent and/or most significant to you?

Teacher1: Quite obviously, the pre-reading and post-reading activities have been revised and upgraded to meet the criteria required by the new guidelines.

Q3. Which parts (Reading, Dialog, Vocabulary, etc) of each chapter do you spend the most time on, in completing each chapter?

Teacher1: Time allotment of my 5-period lesson plan for each unit is as follows: warm-up (1 period), reading (1 period), vocabulary (1 period), follow-up (1 period), and evaluation (1 period). Quite evenly distributed, I suppose.

Teacher B: Normally, I will spend my time as follows. Vocabulary: 2 hours, Reading: 1 hour, Grammar: 0.5~1 hour (depending on the difficulty level), Activity or supplementary information of the lesson: 1 hour.

Q4. Do you think there are any issues or aspects of the current textbooks that could be improved? Please provide details, if possible.

Teacher1: The reading text may not be as current as it should be. For example, "It's a New World Record" in Book 3 has to be updated every year to stay current. However, as the new MOE guidelines place a premium emphasis

on the teacher's independence, the teacher's adaptation and expansion of the material is essential to the success of his/her teaching. (FR)

Teacher B: The arrangement of grammar and patterns is not very systematic. Sometimes, the text itself includes some important patterns; however, the patterns chosen to present in the grammar focus part are relatively easy. In addition, compared with Sanming Reader, the Lungtung Reader includes fewer classic literary works. (LT)

Q.5 My research finding, on the textbooks in Taiwan, suggest that, in Taiwan, practical English functions, including common writing skills, are emphasized. However, these Taiwanese textbooks also increase the breadth of students' intellectual exposure to English by focusing on literature classics, particularly poetry. And according to my research on the new versions of textbooks, this tendency to emphasize literature, is continuing. What do you think about this tendency? Will this be propagated in future editions?

Teacher1: Classic literary works are enduring, and with proper guidance can be fully appreciated by second language learners. The English textbooks used in Taiwan include a wide variety of topics to expose students to different aspects of the English language and its culture. In my opinion, to help students understand western culture, classic literary works should remain part of the text.

Teacher B: Actually, the introduction of poetry is mentioned in every version and in every volume but it's not the innovation of the new curriculum. I think the phenomenon started maybe from 10~15 years ago (even when I was a senior high school student).

The selection of literary works is included in every version of textbooks but their emphasis may be slightly different. (For me, I think Lungteng has relatively fewer literary works presented.)

As for the writing instruction, since students care SAT test more, they also play a lot of attention to how to write essays. Therefore, normally in our school, teachers of the 11<sup>th</sup>-grade will start the writing instruction. However, we won't use the writing corner presented in the textbook.

## 参考資料 8-4: 2004 年教員への質問紙調査および聞き取り調査

2004 年新店市, 台北市実態調査

*To Senior High School English Teachers* 質問紙調査と聞き取り調査 (重要なものを抜粋)

実施日: 2004 年 2 月から 4 月

協力者: 以下の高校に勤務の英語教員 3 名

新北市立新店高級中学

台北市立景美女子高級中学

(回答については原文のまま)

Q1. Which parts of each chapter do you think are the most important?

(Reading, Dialog, Vocabulary, etc.)

Teacher C: I think the reading part is the soul of each chapter.

Teacher D: I think the reading part is the most important.

Teacher E: Reading, Grammar Focus, and Language Use.

Q2. Do you use any other materials such as handouts or supplemental reading materials other than the textbook?

Teacher C: Yes, I use other supplemental materials and readers.

Teacher D: Yes, all the ten graders in our school are required to subscribe *Live ABC*, an English-learning magazine. And students are asked to listen to the radio program of *Live ABC* every day.

Teacher E: Yes.

Q3. Do you have a teachers' manual for the textbook? If so, how much do you use it?

Teacher C: Yes, there is a teachers' manual for the textbook. More than often, I take it as reference only, and I design syllabus and integrated activities to match the needs of students and teaching goal.

Teacher D: Yes. I think the teachers' manual for *San-Ming English Reader* offers inspiring suggestions and useful supplementary articles, so usually I would read it carefully.

Teacher E: Yes. I use it for every lesson to get ready for my teaching.

Q4. Do you make individual teaching plans or do all classes use the same teaching plans or syllabus?

Teacher C: I will make both individual and whole class teaching plan for the syllabus.

Teacher E: Basically, all classes use the same teaching plans or syllabus. But the class activities may vary a little because each class has a different atmosphere.

Q5. Do you think there are any problems in the current textbook? If so, please elaborate.

Teacher C: Nowadays, we have textbooks designed more human touch than before. Communicative approach and integrated curriculum are hard for teachers. The teaching delivery is a big problem and the challenge is great. We need more in-service training.

Teacher D: I am quite satisfied with the current textbook. The topics are interesting and the activities are well-designed. For me, there is only problem: the grammar patterns are not introduced systematically enough. Sometimes the more difficult patterns are put before the easier ones. And sometimes two lessons may have too similar grammar focuses.

Teacher E: I guess so. There are no perfect textbooks after all. There are occasional mistakes in the textbook, and some activities can be modified to suit the teacher's need.

Q6. Are there any differences between what you teach in this school and what you were taught when you were a senior high school student? How about curricula and/or textbooks?

Teacher C: In my senior high days, my teacher focused on grammar translation and in the class, we did not have any interactive activities. The teaching was very teacher-centered. Now, I prefer to give students chances to learn by themselves under the guidance and support of the instructor.

Teacher D: The textbooks I used when I was a senior high is different from those I'm using now in topics and activities. The textbooks we are using include more stories, practical English and trendy topics. The curriculums in the past put more emphasis on reading and writing, but now we are placing more and more emphasis on enhancing students' speaking and listening abilities.

Teacher E: I would say the way I teach my students is very far apart from the way I was taught as a high school student. My high school teacher uses the grammar-translation approach, while I try to make the class as communicative as possible.



The school curriculum has somewhat changed in class hours and elective courses, and the textbooks are totally different.

## 参考資料 8-5: 教科書編纂に携わった教育者との質問紙調査および聞き取り調査

参考資料 8-5-1: 施玉恵元教授との聞き取り調査（重要なものを抜粋）

（調査は英語で行われ、筆者が日本語に訳した。）

日時：2014 年 3 月 5 日から 2017 年 2 月

**Q1.** 編纂に携わっておられる教科書をはじめ、台湾の高校英語の教科書には文学教材が多く取り扱われていますが、どうしてでしょうか。

A: 言葉の美しさを知ってほしいからです。そのため、必ず一冊に一課は詩をいれているのです。また、必ず知ってほしい普遍的なものを英語で理解するために文学教材は必要です。例えば、“Three Days to See”（ヘレン・ヘラー），“I Have a Dream”（キング牧師）は新版にも入れているとりわけ素晴らしい作品です。

**Q2.** 文学教材を教えるのは大変だと思いますが、教科書にどのような工夫をされていますか。

文学教材は指導が重要です。教科書には日常との連携、生徒の経験とつなぐ工夫をしています。また、教員のために、指導書を充実させました。指導書は教科書 1 冊につき 2 冊作成しています。とりわけ、Critical Thinking を指導するために教員に様々なヒントを用意する必要がありました。これは本当に大変で、昼夜、指導書のことを考えていました。

**Q3.** ご自身が編纂された教科書について、特に気を付けたところがありますか。

A: *Far East English Readers* の 1995 年「課程標準」準拠版には、自分の哲学を入れて編纂したといえるでしょう。とりわけ、言語（how to speak etc.）のセクションは当時、画期的なものでした。教室での英語どのように日常生活に繋げるか、そして、どのように生徒に臆せず発話させるかが課題でした。そのために多くの言語活動を段階的に入れるようにしました。

2005 年「暫行綱要」、2008 年「課程綱要」準拠版では、「読解」と「会話」に分けて編纂したことから、それらの活動を「会話」のセクションに入れています。これも画期的なことでした。

**Q4. 2008 年「課程綱要」準拠版では新しい言語活動が多く採用されていますが，構成として工夫されたことはありますか。**

A：様々な種類のアクティビティがありますが，4 時間では限りがあるので，必要なものを使えばよいのです。ただし，教科書は 4 時間以上の分量を用意する必要があります。

**Q5. 2008 年「課程綱要」準拠版では，Writing Corner（書く指導）で文法を扱っていますが，その目的は何でしょうか。**

A：ただパラグラフ・ライティングを教えるのではなく，どうしたらよい文章を書いていくか，という点にフォーカスして文法を入れながらという手法に変更しました。

**Q6. 2008 年「課程綱要」準拠版教科書に自然科学系の題材内容が増えましたが，その理由は何でしょうか**

A：「課程標準」に則して，CBI を取り入れると自然科学系などの題材は必要です。個人的にはそれらの内容はすぐに古くなるので扱いにくいのですが。動物，医療などはよいのですが，技術的なものはすぐに内容が古くなってしまいます。しかし，分野のバランスが必要であることから，新しいバージョンではなる不均衡のないバランスで様々な分野のトピックを扱うようにしました。実は，News を扱ったという声があるのですが，News 教材はすぐに古くなってしまい，教科書を出版する頃には歴史となっているのです。

**Q7. 2008 年「課程綱要」準拠版教科書が前バージョンと違う特徴は何でしょうか。**

A：新しい教科書では，どのように文学教材を使うのか，どのように Critical thinking を養うかといったことを細かく教員の指導書にふんだんに取り入れています。

**Q8. 現在の教科書会社の教科書の特徴などをお教えてください。**

A：現在，人気が出てきたのは，三民書局のものでしょう。テキストは内容ばかりではなく，売れる売れないはその会社の力量や方針にもよるのです。遠東図書は 1995 年～2010 年代までは最も人気が高かったのですが，英語の教科書に出版の焦点を当てていたので，会社自体に勢いがなくなりました。一方，他の会社では，最初の *Far East English Readers* から様々なことを学び，さらに良いものを作っていたのです。

**Q9. 高校生の英語の教科書に必要なものは何だと思われますか。**

A: 英語の教科書に必要なものは、ユーモア、ジョークも必要で、このようなセンスを高校生から磨く必要があります。教科書で忘れてはならないのは, Interesting, Practical, そして Beautiful であることです。

#### 参考資料 8-5-2: 張武昌元教授との聞き取り調査

以下は、国立台湾師範大学の元教授との質問紙調査より得た回答である。

日時：2004 年～2010 年 （重要なものを抜粋，回答については原文のまま）

#### 教科書の文学教材，「課程綱要」，大学入試（JCEE）について

After all, the exam setters would have to consider the high anxiety situation the test takers are facing in taking the JCEE. In fact, the curriculum guidelines dictate that works of literature should be introduced to high school students. But appreciation of literary works at moments of high anxiety may not seem plausible, and the general tendency of making the reading selections in JCEE English tests "easier" and "more friendly" to the test takers. These factors might make the reductions of the inclusion of poems and literary pieces (considering the length, too) less likely.

#### 3 種類の教科書について

Because some kind of strength of Far East, it has been more popular than others in the past, the late of 1990's and the 2000's.

#### 台湾の英語教科書でアメリカ文学が使用される理由について

The focus on American issues perhaps is a matter of course mainly because American English is favored in Taiwan and many of the textbook articles are either extracted from works by American authors or written by Americans/Canadians residing in Taiwan who serve as language/content editor for the book companies.